

浜松市民文芸

59



浜 松 市

平成26年 浜松文芸館の催事と講座

(内容等については一部変更されることがありますので、浜松文芸館にご確認ください)

●講座

講座名	講師	開催時	受講料円
文章教室Ⅰ	たかはたけいこ	4/20,5/18,6/15,7/20(全4回) ①13:00～14:30②15:00～16:30	2000
川柳入門講座	今田久帆	4/27,5/25,6/22,7/27,8/24(全5回)	9:30～11:30 2500
短歌入門講座	野島光世	6/1,8,15,22,29(全5回)	10:00～12:00 2500
声であらわす文学作品	堤腰和余	6/3,7/1,8/5,9/2,10/7,11/11(全6回)	13:30～15:30 3000
手渡そう、読書の楽しさ 〈夜間講座〉	井口恭子	①6/6 ②6/13	18:30～20:00 各500
宮沢賢治童話を楽しむ講座	村上節子	6/12,19,26(全3回)	10:00～12:00 1500
俳句入門講座(前期)	九鬼あきゑ	6/7,14,21,7/5,12(全5回)	13:30～15:30 2500
夏休み絵本づくり講座	井口恭子	7/26	13:30～16:00 500
10歳からの少年 少女俳句入門講座	九鬼あきゑ	8/5,7,8(全3回)	10:00～11:30 500
夏休み額縁を作ろう講座	書繪堂(株)他	8/6	13:00～16:00 500
文章教室Ⅱ	たかはたけいこ	8/24,9/21,10/19,11/16(全4回) ①13:00～14:30②15:00～16:30	2000
大人のための絵 本づくり講座	井口恭子	9/4,11,25,10/23,11/6,20(全6回)	10:00～12:00 3000 (別途材料費)
文学講座	松平和久	9/5,12,19,26,10/3,10(全6回)	9:30～11:30 3000 (別途テキスト代780)
現代詩入門講座	埋田昇二	9/6,13,20,27,10/4(全5回)	10:00～12:00 2500
うら打ち入門講座	近藤敏夫	9/6,7	13:00～16:00 1000 (別途材料費)
文学と歴史講座	折金紀男	9/14,21,28,10/5,12(全5回)	9:30～11:30 2500
俳句入門講座(後期)	笹瀬節子	10/11,18,25,11/8,15(全5回)	13:30～15:30 2500
自由律俳句入門講座	鶴田育久	10/8,15,22(全3回)	9:30～11:30 1500
切り絵教室	上嶋裕志	11/22,29,12/6,13,20(全5回)	13:30～15:30 2500 (別途材料費)
文学散歩	和久田雅之	①11/14 事前講義 ②11/21 現地見学	10:00～11:30 9:00～16:30 セットで 5000
文章教室Ⅲ	たかはたけいこ	12/21,1/18,2/15,3/15(全4回) ①13:00～14:30②15:00～16:30	2000

●収蔵展 企画展

特別収蔵展「自筆から見る浜松ゆかりの文人たちⅡ」 3月21日(金)～7月21日(月)
 企画展「秋山鐵夫の絵と詩で紡ぐ癒しの空間」 8月2日(土)～11月3日(月)
 11月5日(水)以降については計画中

●講演会

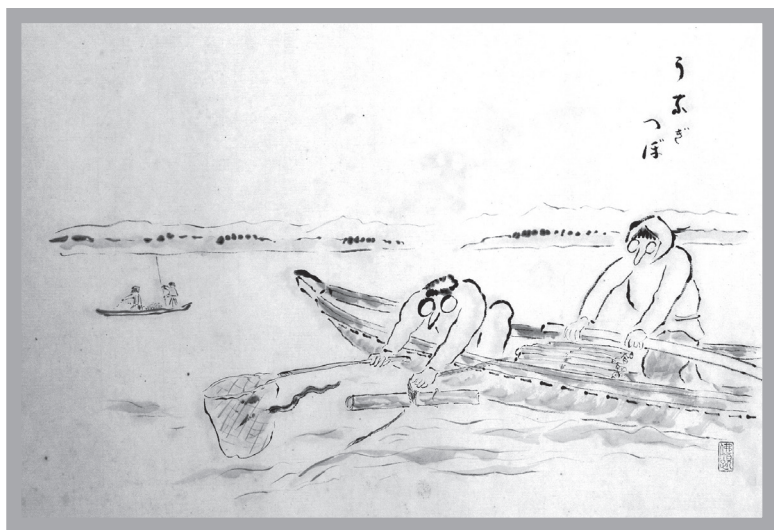
「自分史を書こう」 たかはたけいこ 8月31日(日)13:30～15:30 500円

●朗読会

「藤沢周平を読む」 堤腰和余 10月26日(日)14:00～15:00 500円

浜松市民文芸

第 59 集



(山根七郎治 画)

浜 松 市

選 者	
小 説	竹腰 幸夫
児 童 文 学	柳 本 宗 春
評 論	那 須 田 稔
随 筆	中 西 美 沙 子
詩	たかはたけいこ
短 歌	埋 田 昇 二
定 型 俳 句	村 木 道 彦
自 由 律 俳 句	九 鬼 あ き ゑ
川 柳	鶴 田 育 久
	今 田 久 帆

☆ 表紙絵

安 延 雅 子

平成25年度浜松市芸術祭「第61回市展」にて
芸術祭大賞受賞作品 工芸部門

題「新緑」

この作品は紬糸やまとこを楊梅やまももで染め、媒染で色調を変え、経糸の緑と緯糸の浮織りで新緑の感じをだしました。絹糸は細くて繊細で、丁寧な扱いが必要です。手織りを習い始めて五年で、二枚目のこの着物を一年かけて織り上げました。

「浜松市民文芸」第59集 市民文芸賞受賞者

部門	受賞者	部門	受賞者
小 説 児童文学 評論 随筆 詩 短歌	海原 悠 竹中 敬 水野 昭 河島 憲代 住吉 玲子 中谷 節三 犬塚 賢治郎 西尾 わさ 坂本 多恵 北野 幸子 松野 タエ 竹内 としみ 赤堀 進 松浦 ふみ子 石渡 論 石原 新一郎 柳 光子 大庭 拓郎	定型俳句 自由律俳句 川柳	澤木 幸子 石橋 朝子 松本 重延 伊藤 久子 山本 ふさ子 野中美美子 岩崎 芳子 大村 千鶴子 森下 昌彦 大田 勝子 木俣 史朗 宮司 もと 河村 かずみ 小島 保行 竹平 和枝 馬淵 征稍 久保 静子

目次

小説

市民文芸賞

鬼の涙	海原 悠	10
四度目の死―小西行長伝	竹中 敬明	27
空き家探し	水野 昭	43

入選

下部物語	阿部 敏広	60
大江戸弓始末	生田 基行	77
蛸が鳴く	伊藤 昭一	93
砂漣	白井 聖郎	103

入選

ラーフラの唄	のいり	120
評	竹腰 幸夫	136
選評	柳本 宗春	137

児童文学

市民文芸賞

ぼく、いま日本晴れ!	河島 憲代	138
夕焼けの島のツォイ	住吉 玲子	149

入選

カサブランカのかおり	宮島ひでこ	159
白バラが咲いた日	生崎 美雪	165
選評	那須田 稔	177

評論

市民文芸賞

華山とキーン氏	中谷 節三	178
選評	中西美沙子	189

随筆

市民文芸賞

もべつと	犬塚賢治郎	191
免許証返納	西尾 わさ	192
花も嵐も	坂本 多恵	194

入選

あんとときのおばあちゃん	石橋 朝子	196
鳥の街	三原 遥子	197
お疲れさま	久野 悦郎	200
念書	中津川 久子	202
本音	石山 武	203
農業でよかった	森上不二男	206
繋がれた命、そして	井上 盛	208
少年時代の追憶	角替 昭	211
ソ連兵がやって来た	水川 彰	213
昔ものがたり	新谷三江子	215
梅干し	大庭 拓郎	219
選評	たかはたけいこ	217

詩

市民文芸賞

源じいさん	北野 幸子	222
八十路	松野タダエ	223
ある願望の果てに	竹内としみ	225

入選

背中	麻	226
偶感・時	浅井 常義	227
ウインドウ	石黒 實	227
ザリゴンの歌	大庭 拓郎	229
Mへ捧げた葬送歌	白井 聖郎	230
死者たちの言葉を超えて	すずきとしやす	231
歩いてきた	高柳 龍夫	232
問われている	辻上 隆明	234
ジパン	長浜フミ子	235
錨のマーク	中村 弘枝	236
胎児の目で見つづける	の い り	237
鏡	早川奈美江	238
二合瓶のうた	深田千代子	238
天使の贈り物	優 秘	239
選評	埋田 昇二	241

短歌

市民文芸賞

赤堀 進	松浦ふみ子	石渡 諭
石原新一郎	柳 光子	大庭 拓郎

入選

幸田 松江	柴田 修	のぶ 恵
伊熊 保子	近藤 茂樹	坂東 茂子
すずきとしやす	寺田 久子	織田 恵子
鈴木 壽子	浜 美乃里	能勢 明代
仲村 正男	清水 紫津	中山 和
岡部 政治	小池 薫	福田美津子
北野 幸子	河合 和子	野沢 久子
江間 治子	高畑かづ子	内田 一郎
清水 孜郎	宮澤 秀子	知久とみゑ
岩城 悦子	長浜フミ子	柿澤 妙子
新谷三江子	和久田俊文	柴田千賀子
青海 まち	岡本 久榮	袴田 雅夫
伊藤 米子	山口 久代	小笠原靖子
手塚 みよ	中村 淳子	村木 幸子
戸田田鶴子	高橋 幸	太田 静子
幸田健太郎	袴田 成子	井浪マリエ
平野 旭	増田 しま	前田 徳男
あ ひ る	内山 敏子	しおくろう
内藤 雅子	中村 弘枝	鳥井美代子

選	富永さか江	宮本 恵司	今駒 隆次
評	荻 恵子	恩田 恭子	鈴木 和子
田中 健二	伊藤 友治	森脇 幸子	山田 文好
...	古谷聡一郎	けいこつび	半田 恒子
...	高橋 紘一	小林 和子	内山 文久
...	高山 紀恵	角替 三枝	畔柳 晴康
...	飯尾八重子	川上 とよ	内山 智康
...	宮地 政子	鶴見 佳子	新田えいみ
...	吉野 正子	河合 秀雄	杉山 勝治
...	安藤 圭子	金取ミチ子	大石みつ江
...	松野タエ	鈴木 芳子	鴫多 健
...	江川 冬子	倉見 藤子	脇本 淳子
...	木下美美子	前田 道夫	岡本 蓉子
...	北島 はな	伊藤 美代	太田あき子
...	寺田 陽子	平井 要子	平野 早苗
...	太田 初恵	石川 晋	白井 忠宏
...	水嶋 洋子	竹内オリエ	森 安次
...	藤田 淑子	森上 壽子	飯田 裕子
...	渥美 進	寒風澤 毅	村木 道彦

259

定型俳句

市民文芸賞

入選

澤木 幸子	石橋 朝子	松本 重延
伊藤 久子	山本ふさ子	野中芙美子
岩崎 芳子	大村千鶴子	森下 昌彦
大田 勝子		
澤木 幸子	石橋 朝子	松本 重延
伊藤 久子	山本ふさ子	鈴木 千寿
和久田りつ子	鈴木 智子	鈴木 浩子
伊藤サト江	白井 宜子	坪井いち子
安間あい子	刑部 末松	野中芙美子
岩崎 芳子	大村千鶴子	森下 昌彦
大田 勝子	赤堀 進	浅井 裕子
飯田 裕子	池谷 静子	石塚 茂雄
伊藤しずゑ	今駒 隆次	岩城 悦子
岩崎 陽子	右崎 容子	大倉 照二
大平 悦子	岡本 久榮	小楠恵津子
小野 一子	小野田みさ子	梶村 初代
加茂 隆司	齊藤あい子	坂田 松枝
佐藤 政晴	しおくろう	柴田 弘子
柴田ミドリ	清水よ志江	新村あや子
鈴木 節子	鈴木由紀子	高橋ひさ子
高林 佑治	高柳とき子	竹下 勝子

田中美保子 名倉 栄梨 能勢亜沙里 伴 周子 松江佐千子 水谷 まさ 宮本 みつ 横原光草子 渡辺きぬ代 伊藤アツ子 岩崎 良一 太田しげり 勝又 容子 加茂 桂一 川上 とよ 川瀬まさゑ 切畠 正子 畔柳 晴康 佐久間優子 小 百 合 白井 忠宏 鈴木 章子 鈴木 利江 高橋 順子 竹田たみ子

徳田 五男 西尾 わさ 野田 俊枝 藤田 節子 松村 智美 宮澤 秀子 山田 泰久 吉野 民子 飯尾八重子 伊藤 俊夫 梅原 栄子 織田紀江子 加藤 和子 河合 秀雄 川島 泰子 北野 幸子 金原はるゑ 斉藤 てる 佐野 朋旦 島村やす子 不知 火 鈴木 和子 平 幸子 高山 紀恵 竹田 道廣

中津川久子 二橋 記久 浜 美乃里 藤本 幸子 松本 緑 宮本 恵司 山本 兵子 和田 有彦 伊熊 保子 井浪マリエ 太田沙知子 勝田 洋子 金取ミチ子 川合 泰子 川瀬 慶子 北村 友秀 倉見 藤子 斉藤三重子 佐原智洲子 下位 満雄 新村ふみ子 鈴木 恵子 高橋 紘一 竹内オリエ 竹平 和枝

田中 安夫 鶴見 佳子 鳥井美代子 中村 節子 中山 志げ 野嶋 薫子 野又 恵子 長谷川絹代 平野 旭 藤田 淑子 本榎 優子 松本憲資郎 松本みつ子 森 明子 谷野 重夫 山崎 暁子 山田 知明 和久田しづ江 あひる 内山 あき 太田 静子 岡本美智子 加藤 新恵 新村八千代 高山 功

辻村 栄市 手塚 みよ 内藤 雅子 中村 弘枝 西尾 淳子 野末 法子 袴田香代子 浜名水月 平野 道子 星宮伸みつ 前田 徳勇 松本 賢蔵 村井 みよ 八木 裕子 山口 久江 山下 宏 山本晏規子 和久田俊文 あべこうき 内山 敏子 太田千代子 岡本 蓉子 柴田 修 新村 幸 田中ハツエ

黒葛原千恵子 寺田 久子 中村 寿 長浜フミ子 錦織 祥山 野末 初江 橋本まさや 林田 昭子 深田千代子 堀口 英子 松野タダエ 松本 尚子 村松津也子 八木 若代 山口 英男 山下美恵子 横田 照 渥美 進 池野 春子 大木たけの 大屋 智代 小川 恵子 清水 孜郎 鈴木 信一 時久シヅ子

自由律俳句

市民文芸賞

入選

生田 基行 飯田 邦弘 飯田 裕子
 伊藤 重雄 伊藤千代子 さちえ
 周東 利信 竹内オリエ 中谷 則子
 中津川久子 浜 美乃里 藤本ち江子
 宮本 卓郎 いちご 岩本多津子
 太田 静子 大庭 拓郎 加藤美恵子
 香代子 川上 とよ 木俣 史朗
 倉見 藤子 畔柳 晴康 柴田 修
 鈴木 章子 鈴木 好 戸田田鶴子
 戸田 幸良 錦織 祥山 橋本まさや
 松野タダエ 宮司 もと 宮地 政子
 石田 珠柳 石田はま子 岩城 悦子

選評

宮地 政子
 晴 詩
 野田 正次
 名倉みつゑ
 永井 真澄
 天 竜子

戸田 幸良
 中原 まさ
 の いり
 浜名湖人
 水野 健一
 九鬼あきゑ

292

川柳

市民文芸賞

入選

浅井 常義 高橋 博 田中 恵子
 中田 俊次 馬淵よし子 石田 珠柳
 内山 敏子 畔柳 晴康 柴田 修
 鈴木 覚 鈴木千代見 鈴木 均
 竹山恵一郎 為永 義郎 辻村 栄市
 鶴見芙佐子 中津川久子 堀内まさ江
 松野タダエ 山口 英男 山田とく子
 伊熊 靖子 金取ミチ子 木村 民江
 倉見 藤子 小島 保行 小林まさを
 佐野つとめ 高山 紀恵 滝田 玲子

選評

嘉山 春夫 河村かずみ
 鈴木あい子 鈴木 恭子
 鶴 市 手塚 全代
 鴫多 健 内藤 雅子
 中村 淳子 の いり
 原川 泰弘 山内久美子
 若山 輝子 横山タカ子

鶴田 育久

301

角替 昭	手塚 美譽	戸塚 忠道
長浜フミ子	中村 楨次	のぶ 恵
馬淵 征稍	宮澤 秀子	宮地 政子
村松津也子	守屋三千夫	山下 宏
赤堀 進	アトム	飯田 裕子
伊熊 保子	岩城 悦子	太田 静子
太田 初恵	岡本 蒼子	小野 和
斉藤三重子	白井 忠宏	高橋 紘一
高柳 龍夫	竹内オリエ	竹川美智子
竹平 和枝	寺田 久子	錫多 健
戸田田鶴子	戸田 幸良	豊田由美子
内藤 雅子	永井 真澄	仲川 昌一
中村 弘枝	野末 法子	浜 美乃里
浜名湖人	平野 旭	道
夢 聡	森 三步	山口百合子
和久田俊文		

選 評 …………… 今田 久帆 …… 312

「浜松市民文芸」第60集作品募集要項…………… 313

作品掲載については、清書原稿のままを原則としました。
掲載順については、市民文芸賞受賞作品は選考順、入選作
品は選考順または五十音順としました。

第59集の作品応募状況

部門	作品点数	部門	作品点数
小説	一七	短歌	五七八
児童文学	七	定型俳句	一、〇七二
評論	二	自由律俳句	二八七
随筆	三六	川柳	三八五
詩	二七	計	二、四一一

小説

「市民文芸賞」

鬼の涙

海原 悠

長篠の戦

武田勝頼の気合は漲みなぎっている。

元亀四年（天正元年 一五七三）、信玄亡き後、早くも秋から暮れの間、武田の騎馬軍団がしばしば遠江に押し出してきた。九月に、二俣・犬居・光明・天方・只来などの武田の征服した城々に仕置きしおき（砦・保塁を築き、守備兵を置き、統治をすること）をした。また、家康の掛川城の縄張り、地理を巡検し、その帰りに諏訪原城を築いた。暮れには、信玄進攻のときには降伏しなかった久野、掛川に押し出して放火し、天竜川を越えて浜松へも軍を進め、馬込川を隔てて足輕に荒らさせている。

天正二年（一五七四）五月三日には甲府を出馬し、四日に遠州小山、六日に相良、七日には東海道の大要衝、小笠原と八

郎長忠ながただが立て籠もる高天神城へ押し寄せた。そしてついに、信玄ですら落とすことの出来なかったこの城を開かせた。

一方、徳川家康は、もう一つの要衝である奥三河の奪還を目指して戦っている。

三河、遠江、信濃が接近する要の地域である。田峯城の菅沼、長篠城の菅沼、作手城の奥平は山家三方衆といわれ、家康が遠江に進攻するときに今川氏から徳川氏に従ったが、元亀三年、信玄の三・遠江攻めの際から武田氏に従うようになっていた。

天正元年（一五七三）七月、作手の奥平の案内で長篠城を攻めた。そして九月には長篠城を手にいれ、ここに奥平貞能・貞昌さだまさをいれた。奥平氏は作手だけでなく田峯・長篠及

び三千貫の土地を与えられた。天正三年（一五七五）二月二十八日、家康は奥平貞昌を守将とし、城の修理をしてより堅固な城とした。将兵は奥平家の手勢約二百五十、家康から派遣された二百五十で約五百人とした。また、信長からの兵糧も分け与えられた。ここを何としても武田に渡すことは出来ない。

武田勝頼は忙しい。

奥平氏の長篠入城を聞くと、天正三年（一五七五）五月、一万五千の大軍を率いて甲府を發ち三河に攻め込んだ。とんば返りの素早い行動である。武田の騎馬軍団は疾風のごとく奔り、怒涛の勢いで奔った。

東海道の高天神城を落とし、奥三河の要、長篠城を落とせば、遠江は包み込むように手に入り、東三河は征したのも同じである。信長との最終決戦が控えてはいるが、突破すれば父の悲願だった都はすぐそこにある。なんとしてもこの戦いに勝たねばならなかった。

勝頼は大軍の一部を長篠城の周辺に止めると、主力は二連木城、吉田城（豊橋）を攻めて放火した。威勢を示したあとに引き返して、再び長篠城を取り囲んだ。

天下を征する長篠の合戦の幕開きである。

長篠城の運命は、家康の運命ともいえる戦いであるから、家康は信長に援軍を求めた。信長は出陣を決意して充分に準

備すると、五月十三日に岐阜を出発した。実に三万の兵を率いての出陣であった。この戦いには、信長にも覚悟があった。駿府、遠江、三河と拡張主義を続ける武田軍の勢いを諷め、早いうちに叩いておく必要があった。家康の八千と連合して戦えば、武田の騎馬軍団といえども臆することはない。それに、信長には試してみたい秘策がある。何処まで鉄砲が戦に通用するか。この戦法が確立すれば天下は我が手に入る。

長篠城は武田軍の猛烈な攻撃によって落城がせまっていた。奥平貞昌は信玄の死後武田方から再び徳川に従ったので、降伏しても許されるはずはなかった。降伏すれば奥平一族は全員誅殺されるであろう。城を死守するしかない立場におかれていた。

長篠城は寒狭川（豊川）と宇連川（大野川）に囲まれて守りの堅い城であったが、武田軍は幾重にも城を取り巻き日夜猛攻を加えた。一方、徳川軍の酒井忠次の部隊が密かに武田軍の背後を大きく迂回し、奇襲すべく夜陰にまぎれて動いていた。

武田勝頼は長篠城の北の医王寺山に本陣を構え、織田信長は西側の極楽寺山を本陣とし、徳川家康は彈正山に陣を張っていた。

徳川家康の軍営には本陣を囲んで陣屋が設営されて、周囲には陣幕を廻し、外側は柵をもうけてあった。五月二十日も夜を向かえ、外は雨で風がやや強く荒れ気味であった。篝火

が焚かれて、音をたてて弾けている。

本多作左衛門重次（しげつぐ）の陣小屋（新城市大宮）は、家康の本営の前になつていて、大きな旗が全軍を鼓舞するように翻っている。足軽などの陣小屋では酒を飲む者や、博打を打つ者の声がしていた。生死の境の戦を前にして、刹那的、享樂的になる者が多い。静かにしてはともおられなかった。

作左衛門は、高力清長、大須賀康高などといっしょにいた。

「酒井忠次殿は、今ごろどのあたりでござろう」

「成功を祈るうではないか。いずれにしろ明日は戦局が動く、我らの戦うときよ。明日こそは武田の騎馬の前に躍りこんで、この胴太貫（どうたぬき）（刀身厚く、重い戦国の刀）で馬の素っ首叩き斬ってやる」作左衛門重次が氣負いこんでいう。

酒井忠次の奇襲作戦というのは、夜陰に紛れて設楽原から大きく迂回し、舟着山を回り、松山峠を越えて天神山に至る。武田軍は自然の要害として鳶ヶ巣山に陣を張っていた。その背後に回って奇襲をかけることである。一の谷の戦いにおける義経の鴨越（ひよこしづえ）の奇襲に似ている。

「いやいや、殿に戦略があらひのようじゃ。信長様の発案で築かれた三重の馬防柵に、秘策が隠されている。いずれにしても明日になればわかることよ」

「明日はいよいよ決戦になるかも知れず、今宵のうちに妻へ手紙でも書いておこうではないか。作左殿、お前様どうなさる。お仙坊は可愛い盛りであろう」

高力清長が、続けてそういった。

本多作左衛門重次は、素焼きの湯飲みの酒を口元で止めた。「ううう」と唸って清長を見て、ニヤリとはにかみ赤くなつた。

「明日は死ぬるか生くるかの戦いだ。後に憂いを残さない為にも書いておくのが武人のたしなみでもござるぞ」

「そうでござる、そうでござる」大須賀康高が大きくうなずいた。

「わしのような無骨物が、妻へ手紙などは」

と、作左衛門はいったものの、妻の濃（の）の顔が臉に浮かんだ。同時に、仙千代の元氣な笑顔が浮かんだ。

「おてがらお立てなされて、ぶじにお帰りますいますように、仙は祈っております」

妻の濃から教えられた言葉をそのままにたどたどしくいつて、作左衛門を送り出した。

作左衛門は直言家で、相手が誰であろうが、たとえ家康であつても、正しいと思うことは歯に衣着せざいいいたいことをずばりという。風貌も赤ら顔で目のつり上がったこわい顔をしているが、性根のやさしい男であることを高力清長はよく知っている。

高力清長と大須賀康高は、灯を手元に引き寄せ和紙を広げて、筆先をなめて手紙を書く準備をした。作左衛門も茶碗酒を一息で空けるとそれにならい、怖い顔をしてしばらくじつと一点を睨んだ。集中するときの作左衛門はいつもこうである。

いつきに筆を走らせた。

一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ 作左

戦の後ろにあつて、妻の成さねばならない事を、簡潔に完璧に言い切っている。些細なことにとらわれず、骨太で無駄がなく要件を満たしている。一本調子の口調がさわやかで、文章として美しい。作左衛門らしい手紙であつた。しかも、言葉の奥にこまやかな愛と主人として威厳が示されている。

お仙とは作左衛門が四十三歳の晩年に、浜松で授かつた一人の男の子で、数え年四歳で可愛い盛りであつた。姉が三人、妹が一人いた。火の用心はいうまでもなく、木と紙の家屋は細心の注意がいる。馬は兵器、運搬、農作業にも、またその糞は糞とまぜて肥料とした。戦国の世では、人馬一体の存在で欠かせないものである。

ふと、作左衛門の手紙を覗き見た高力清長が感嘆の声を上げた。

「作左衛門殿、見事でござる」

この短文は永く伝えられ、いまでも世人に好まれ知れ渡っている。本多作左衛門重次を知らない者も、この短文を知っている者は多い。

手紙の伝達手段は、戦国の世にも伝馬が利用されている。戦場からも馬が奔った。長篠から吉田（豊橋）まで川沿いに

南下して西は岡崎、東は浜松へ届けられた。

いつの世も、人は絆によって生きている。手紙に勇気をもらい、生をつないだ。ときにそれは食物よりも尊い。

太平洋戦争末期の硫黄島でもそうだった。制海権、制空権を米軍に奪われた硫黄島へは、もはや武器も食料も補充が出来なかつた。夜間に無灯火で飛行機を飛ばして、米軍のレーダーをかくぐり、島に手紙が届けられた。それを兵隊は最後の生きるふすがとした。

3・11の東北大地震の津波のときも貯金通帳や現金ではなく、真つ先に持ち出されたものは携帯電話だったという。

人は、人との関係によって生きているし、それ無しでは生きられない。

天正三年（一五七五）五月二十一日、辰の刻（午前八時頃）酒井忠次隊の奇襲が、武田軍の拠点に鉄砲数百挺を浴びせかけて始まつた。同じ頃、設楽原でも戦いが始まつている。

織田・徳川軍は連吾川に沿って馬坊柵を延々と築いていた。

武田勝頼は、山形昌景、馬場信春、武田信廉など百戦錬磨の武将とともに、巧みな騎馬さばきで怒涛のごとく襲いかかつてきた。

作左衛門は、武田の騎馬の中に躍りこんだ。勇んで走ってきた先頭の騎馬の前に、作左衛門は両手を広げて立ちはだかつた。騎乗の武士が刀を振り上げた。馬に蹴倒されるかと思われるほど接近した瞬間、作左衛門の胴太貫が左から右に大

大きく振られて、馬の脚を切った。馬は悲鳴をあげて立ち上がり、昨夜の雨でぬれた地面に、前足から突っ込むようにくずれる。騎乗の武士が転げ落ちて、体勢を立て直そうと刀を上げたところを、作左衛門は胴太貫で突き倒し、馬乗りになった。

「本多作左衛門重次、お命頂戴仕る」名乗りを上げて首をとった。

続いて乗り込んできた騎乗の武士が、作左衛門に槍を繰り出した。穂先が右目をかすめて血しぶきがあがる。作左衛門は、その槍を気丈夫にもつかんで立ち上がる。泥まみれになったの壮絶な戦闘であった。

重次敵七八騎の中に駈入、組討して首を得たり。(略) 重次戦って創かぶること七箇所、また、右の目を害なわる。(寛政重修諸家譜)

徳川軍も大久保忠世・忠佐兄弟の采配で、敵が攻めてくれば退き、敵が退けば出て敵を引き寄せた。そして、火縄銃が火を噴いた。三千の火縄銃が馬坊柵に沿って三段に構えられ、間断なく次々に火を噴く。山形昌景、馬場信春をはじめ多くの将兵が弾に当たって討ち死にした。勝頼は退却を余儀なくされた。

信長は大量の火縄銃を巧みに使って、勝敗を一日で決し、従来からの戦術に大きな変化をもたらした。武田氏の勢力は

これより次第に衰え、織田氏の覇権は絶対的なものになり、この戦いが戦国の分岐点となった。

鬼作左

本多作左衛門重次は、享禄二年(一五二九)宮地郷に本多重正の次男として生まれた。幼名は八藏、後に作十郎重次、作左衛門重次と称した。父の重正は大平村に屋敷を賜り、移り住んで、松平清康、広忠(家康の父)の二人に仕えた。

徳川家譜代の家臣は、その時代によって松平郷譜代、安祥譜代、岡崎譜代に分ける。

作左衛門は最も早く、松平に服属した松平郷譜代に属する。

松平家が岡崎に拠点を移してから、その家臣の多くは、岡崎の乙川(菅生川)沿いの欠町、洞町、大平町に所領が与えられて、その地の土豪になった。

家康の家臣として著名な本多の本多忠勝(洞町)・本多広孝(土井町)・本多重次(大平町)・本多正信(小川町)などが住んでいた。

徳川家康は永禄四年(一五六二)には西三河をほぼ平定し、七年までの間に東三河も制覇して、三河一国の統一を成し遂げた。この間、永禄六年に発生した三河一向一揆は、反徳川の国衆・一族庶家・直臣を含んで徳川氏の統一政策に反抗した。家康はこれと徹底的に戦い、門徒組織と土豪・名主の抵

抗勢力を押しつぶした。そして一族・譜代からなる一層強い家臣団を組織した。

一方、領民の生活に目をむけ、暮らしを安定させる必要があった。

永禄八年（一五六五）三月七日、本多（作左衛門）重次、高力清長、天野康景の三人を岡崎（三河）三奉行に取り立て、領内の民政を担当させた。

家康の初めての行政人事で、三河の支配体制を固めるための措置であつた。普通、奉行職は一人で担当するが、家康は三人の月番として一ヶ月で交代させ、力量を競い合わせた。家康の人事の特徴は、任命者を必ず複数にすることにある。

以後、老中職、若年寄、江戸町奉行職など枢要な職に適用されている。少ない重要な職を、少しでも多くの部下に配分する、これが家臣操縦の核心であつた。

三奉行は軍務を分担し、加えて行政や民間の訴訟の政務、徳川軍団維持の兵糧、軍夫の確保などにあたつた。以後、職務の内容は領国の拡大とともに変容する。

作左衛門は暇さえあれば、岡崎の村々を巡回した。徒のこともあれば、馬で遠くへ行くこともある。稲の作付けを見たり、その出来具合を検分したりする。途中、庄屋や代官所に立ち寄り、お茶を飲みながら雑談して、農民の暮らしの他、さまざまな情報を手に入れる。現場の声はいつも新鮮で、今まで思いつかなかった農民の思いが、手をつかむように分か

る。

作左衛門が、庄屋の話に眼を吊り上げて怖い顔をして黙って聞いている。別に怒っているわけではない。真剣に聞くときの作左衛門はいつもこうである。

「ところでお奉行殿」と青野村の庄屋はいつものにこにこ顔で、作左衛門にいった。

「うっ、なにか」

「こんなことを申しあげていいのかどうか悩みますが」

「何でもお話くだされ。今日は、茶を飲みに来ただけの作左でござるゆえ」

「あ、はい」

人懐っこい顔が、どうしたものかと庭に眼をそらせて迷っている。

「こんな顔ゆえ、話にくいのであらう。それでも赤子のときは可愛かった、と母親がいいおつたが、困つたものよ」

作左衛門は、右手で頬をピシヤリとたたき、両手の人差し指で目じりを下げてみせた。

庄屋は思わずのけぞって笑い、顔の前で手を振つた。

「いえ、いえ、そうではございません。お奉行様のお仕事なれば、差し出がましいかと」

「ほう、なんでござらう。お教えくだされ。作左、聞く耳をちゃんと二つ持っておりますでな」

「あ、はい」

庄屋の話は、領主の「お触れ」を領民に伝える「高札」の

ことだった。

「高札」は、お城の前、代官所の前、ときには村々の人の行き来する辻にも立てた。

高札は漢字が多く、しかも硬い文章が多くて、いろは文字さえ満足に読み書きできない農民には読めなかった。それで、新しい「お触れ」がでて領民に伝わるのが遅く、なかなか徹底できなかった。農民は庄屋に訊いたり、口伝えで聞いたりして、やっと知ることなのであった。

作左衛門は怖い顔をして庄屋の話を聞いている。頬のあたりに赤みがさした。

ぼーん、と膝をたたいた。

「庄屋との、いい話を聞かせてくれました。その通りでござる。気付きませなんだ。そんな話が聞きたくて、作左は村々を回っておりまする」

作左衛門は奉行所に帰ると、配下の者に高札を一本引き抜いて持ってこさせた。

領民誰もが読めるように書き直した。すべて平仮名文字にして、簡条書きにした。

これではまるで子供のかな手本で、権威がおちて品格もない、と反対する者が多かったが、作左衛門は「お触れ」は読めなくては守りようがない、この一点で押し切った。

定

一 しん・でんのかいはつは、すぐさまあやまりなく、しようやにとどけおくこと

一 たのみずは、みなひとしくわけ、あらそいあれば、すぐにおぎようにとどけること

一 のう・まいは、あやまりなく、ちたいたくおさめること

そして、書き直したお触れの終わりに、こう書いた。

まもらぬと、さくざが、おこるぞ

重次性剛適にして、怒おほし。ときに人これを稱して鬼作左という。(寛政重修諸家譜)

作左衛門は直情径行の直言家で、妥協しない厳しい性格であつたが、領民の世情にも通じていた。

おんな

家康は、はじめてお万を抱いたとき、これが、おんな、か。

おんなどとはこのようなものであったのか、と思った。このようにあたたくやわらかなものが、おんなであったのか。からだのどこもが、まるくしなやかでしっとりとしている。しずかに抱いていくとなにごともこばまず、からだを開いてつみこみ、からだからだがいつのまにかひとつになつてゐる。忘我のうちに、恍惚とした歓喜にわが身をゆつたりとゆだねていてみると、やがてからだの奥から宙にむかつて閃光がほとばしり、あっ、と声が出そうになったときには、はてている。

このように、言葉を交わすことなく自然にひとつになり、われを忘れるようなことはいままでになかった。初めての経験だった。女は男の対極にあるのではなく、わが身のうちにある、ぬめぬめとしてつややかな生きものであったのか。これが、おんな、か。

数カ月後、同じ岡崎城で、家康が厠から出て渡り廊下を歩き居間に戻ろうとしたとき、庭の左手の暗がりから宿直の作左衛門が現れた。ここへ家康は岐阜城へ行く途中に立ち寄っている。いつものことだが、正妻の築山御前の居間にも律儀に顔だけは出す。あの夜の出来事があってからは、目的が少し違う。知らぬ顔をしてそれとはなしにお万を探していた。このたびは近くに見当たらないので、どうしたのかと思っていたが、築山にも訊くことが出来ずにいた。

あのときからのくらくらいたつだろうか。あの一夜の一瞬が

忘れられなかった。

「殿」作左衛門はいきなり暗がりから話しかけた。

「おお、作左殿であったか、お役目ご苦労であります」

十三歳年上の作左衛門を家康は「作左殿」と呼んだ。

「殿、すこしよろしいか」いつもの怖い顔である。意見するときの作左衛門は妙に恭しい。

「いいとも、なんでござろう」

「殿、顔に書いてありますぞ」いきなりそういった。

家康は、作左衛門の鋭い大きな眼を見た。その眼は家康の心の奥を貫くほどするどかったが、家康は鷹揚に構えた。

「ほう、顔に何か書いてありますか」

「さがしものをしておいでのようにゃ」

「さがしもの？」

作左衛門の語気が強くなった。腹から押し出すようにいった。

「殿、こそこそなさるな。殿ともなれば、おなごのことはおもいのままになさいませ。おどおどなさるな、側室になさればよろしいではないか。堂々と側室にして子をなさいませ、子は徳川家の宝にございます」

こいつ、知っておったのか、と家康は思ったが、不意をつかれて家康は黙った。

お万は三河の知立神社神主永見貞英を父とし、刈谷城主水野忠政の女を母として天文十六年（一五四七）知立に誕生し

ながみさだひで

た。永見家は刈谷の水野家、岡崎の松平家と同じく三河の国の豪族で、双方と戦い、また和合しながら、両家の婚姻関係を結ぶことで戦国の世を生き延びてきた。水野家にはお大という姫がいて、岡崎の松平家（広忠）に嫁ぎ、竹千代、のちの家康を生んだ。つまり、お大とお方は伯母姪の關係で、家康とお方はいとこ同士という血縁關係にある。お方は、幼い頃から際立つた美少女であった。漆黒の髪に白い肌、黒目がちの大きな瞳に赤い唇をしている。永見貞英は躰もかねて家康のもとにお方を差し出した。元龜三年（一五七二）二十六歳のときである。そして、築山御前の侍女になった。

家康は三河から遠江まで覇權をひろげていた。岡崎城は長男の信康に任せて、家康は浜松城に移っていたために、岡崎へは信長の岐阜城へ行く途中くらいにしか訪れない。

家康はお方とはじめて会ったとき、蠱惑的なまなざしに出会って視線をとめた。視線がぶつかったときに、それがいきなり絡んできた。その色香に戸惑い、いったん視線をはずして宙に泳がせた。再び視線を戻したとき、お方は静かに微笑み、恭しく頭を下げた。

そこは築山御前の居間で、岡崎城に来るたびに儀礼的にここを訪れて挨拶をしていた。

「お万様が、殿のお子を身ごもられたようにございます」

作左衛門の声は大きい。家康は、作左衛門を手招きで呼んで腰をかがめた。

「んー」まわりを気にしながら、その先をうながした。

「拙者、お万様に泣きつきました。どうやら築山様も気付かれたようで、どうしたらいいものか困り果てて、松の木の下でうずくまって泣いておいででした。それで、拙者がとりあえず叔父の本多広孝の屋敷に匿ってございます」

「そうであったか、あいすまぬ。礼をいうぞ」
小声でいった。

「時機を見て、浜松へ移動させます。よろしゅうござるな」
「かたじけない。作左殿のこと身にしました。改めまするゆえ、よしなにお願したい」

家康は、作左衛門から言われるまでもなく、女の処しかたくらいわかってはいるつもりでいたが、お方が築山御前の侍女であったためにいいだせなかった。築山御前の性格を知りつくしているからこそいえなかった。

あの時一度だけ、男がむき出しになり、女は待っていたように呼吸をあわせてきた。男と女は、そういう時があるものだ。ただ一度だけだ。

元龜元年（一五七〇）から数年が、家康は最も忙しい。姉川の戦い、三方原の合戦、高天神城の戦い、長篠の合戦と、戦いに明け暮れる日々であった。そんな中で、お方は浜松城に移され局（小督の局）を与えられたものの、本多作左衛門重次は、身重なお方の万一を考えて、安全な浜名湖のほとりの遠江宇布見の代官中村源左衛門正吉の屋敷に移した。

ここで、お方は徳川家康の次男を生むことになる。

家康は引馬城を拡張して浜松城を建設した。西から東へ階段状につくられ、三の丸と馬屋の南には侍屋敷を付設した。

北は沼沢地で防御に適していた。作左衛門の進言によって、作左曲輪を西北の備えとしてつくった。完成後は浜松奉行の作左衛門がここに住んで守りを固めた。現在は、浜松城公園作左の森になっている。作左衛門は奉行として、この曲輪に米を中心とした兵糧を備蓄した。

家康は城が完成すると、城の周囲をつぶさに見て回り、足らぬ所は土塁をさらに積み上げ木柵を二重に巡らし、物見櫓を立てた。それから、知行地を担当する作左衛門を伴って浜名湖周辺の直轄地を見て回った。

休憩で立ち寄った庄屋で、愛と出会った。

作左衛門が仕組んだ気配が濃厚にある。愛は家康の前に、盆にのせたお茶を運んできた。物おじすることなく茶を差し出してから傍らに下がり、盆を胸元で抱くようにもって片膝をついて屈んだ。所作がすっきりとして小気味よくすがすがしい。姿そのものに華やきがあり、全身から清潔な色香がただよう。

屈んだ姿が家康には一株の水仙の花ように映った。

「名は何と申す」家康はやわらかくたずねた。

「愛、でございます」目に笑みを含み、顔を上げてはつきりと答えた。

白い顎からのど元が引き締まって美しい。まだ、十八歳で

あった。

やがて、愛は奥勤めから側室となって、お愛の方と呼ばれた。家康が最も愛したとされる女性、お愛の方（西郷の局）である。後に、二代将軍秀忠、松平忠吉を浜松城で出産する。

愛は西郷義勝と結婚して一男一女をもうけたが、義勝は武田氏の合戦で戦死していた。

お愛の方は、なにごとく控えめで温和で誠実であった。若いのに似合わず、他人の悲しみや痛みを自分のこととして受け入れることが出来た。さらに、贅沢を好まなかった。視力が乏しく、そのために顔を近づけて話をする、そんなしぐさも家康にはいとしくおもわれた。お愛と一緒にいれば、ふたりの気持ちはしっくりとなじむのがわかった。家康の心はなごみ、孤独が消えていき、暖かい灯が胸の内に燈るようであった。

性には自由奔放でやや派手好みのお万から家康の心はいつしか離れていき、こよなくお愛を愛した。以後、お万の方は、家康をわが手元へ引き寄せることは出来なかった。

お万の方の為に、書いておかねばならないことがある。お万は、遠江宇布見の代官中村屋敷で天正二年（一五七四）二月八日、家康の次男「於義丸」を生んだ。

天正十年（一五八二）織田信長が本能寺の変で倒れると、信長の跡目を争って小牧長久手の戦（天正十三年）で、羽柴

秀吉と家康が戦うが、和睦して於義丸を秀吉の養子に出している。それより、秀吉の秀と家康の康をとって「秀康」と秀吉が名づけた。このとき作左衛門の嫡子仙千代が随行して大阪へ行っている。於義丸（秀康）と仙千代（成重）は、その後永く運命を共にしている。大阪での秀康は礼儀正しく節度もあり、秀吉に非常に気に入られて重要な役どころを担った。上杉の南の押さえとして、関東の結城家十萬石の養子になり、のちに、越前松平秀康と名乗って六十七萬石の大名となっている。家康の長男信康自刃の後、秀康は二代將軍になつてもよさそうな境遇にありながら、一度も父を恨むことなく、その命に従い生を全うした。

こんな話がある。「於義丸」という名前の由来についてである。

家康は中村家で生まれた男の子を自分の子であると認めたが、何故か会いにはいかなかった（双子説がある）。名前も作左衛門にいわれるまで捨ておいた。

ある日、作左衛門に子の名を催促された。家康は重々わかっている。

「作左殿、お手間をとらせております。その子はどんな顔をしておりますか」

「顔でございますか。ゆつたりと愛嬌のあるお子にございます」

「何か特徴はありませんか」

「愛嬌のあるお子で、笑うと、ぎぎに似ておられます」

作左衛門はにつこりと笑った。笑うと、この男もいい顔をする。

「ん、ぎぎとな。なんでござるか、それは」

「ほれ、殿、あれでございますよ、川にすんでおります」

作左衛門は、口元に両手の人差し指をそえて、長いヒゲを書いて見せた。

「ああ、川にいるぎぎ（黄瀬）ですか」

「左様、左様、かわいいぎぎでござる」

「なんと、ぎぎに似ておりますのか」家康は声を上げて笑つた。

黄瀬魚とは三河の溪流に棲む淡水魚で、見た目はなまずに似ている。所によつては、ぎばち、ぎぎゆう、ともいい、背鰭と胸鰭に毒のある棘がある。これを獲ると空中でギギと鳴く。三河ではぶつぎりにして味噌汁に入れて食べる。

「於義丸」と名付ける。その場で家康が決めた。

切腹

本多作左衛門重次は、浜松三奉行としても重要な役どころをこなした。奉行といっても軍役を第一とし、奉行の仕事としては、蔵入地（直轄地）管理、軍事役夫の確保、年貢・船役の収納、兵糧の備蓄、他に給人代官の任免、新田の開発、土地争いの調停など民政にも広くかかわっている。浜松では城下町造りに奔走して、六軒しかなかった魚屋を三奉行が協

力して、五十七人の魚商人をよびよせて「肴町」をつくった。

浜松は海と湖に囲まれて、魚貝類に恵まれていた。当時の重要な蛋白源であり、町はおおいに栄えた。

長篠の合戦で勝利した家康は、城下町の建設と並行して、武田氏に落とされた城の奪還を急いだ。諏訪原城を奪還し、小山城は激戦となりいったん退却した。次に、要の二俣城は周囲に砦を築いてついに奪還した。続いて、一度は失敗した大居城も攻略に成功した。残るは駿河に侵攻し、甲斐への足がかりとするところまで来ていた。

突然、事件が起こった。

信長から、天正七年（一五七九）正妻築山御前と嫡子信康の殺害の命が下った。

信長は、安土城の普請の手伝いに来ていた酒井忠次と大久保忠世に罪状を言い渡すと、家康にしかと伝えよ、といったきり席を蹴った。いかなる申し開きも聞かなかった。

信長は絶対であり、是も非もなかった。安土城はほぼ完成して、天下に号令する勢いであった。

忠次からそのことを聞いた作左衛門は飛び上がって驚いた。

「馬鹿な、そんな無法があるものか」怒鳴るようにいった。立ち上がれない忠次をその場において家康のもとへ走った。家康はそれを聞くと、忠次と忠世が待っている本丸の広

間へ走ってきた。

忠次と忠世が取り乱して泣いていた。

「顔を上げよ。信長殿がなんと申された」

「築山御前と信康に謀反の疑いあり、誅殺せよ」命令を伝えて、二人は不甲斐なさにもその場にくずれて号泣した。家康はそれを聞くと、わが耳を疑い、目をむき、棒を飲んだように硬直して、押し黙った。

「殿、こんな理不尽が受けられまじょうか。お断り成され」作左衛門が、鬼瓦のような顔を一層赤くして、目を吊り上げて怒鳴った。

「信長め、血迷っていいたい放題。この作左が、信康様のこととは一番良く知っております。武田と謀反などあろうはずはありません。馬鹿な、馬鹿な」

家康は、言葉を失い「ううう」といったきり何もいわなかった。が、しばらくして、

「このことは公言してはならぬ。言動には慎むこと。わしが決める」そういうと、

「はやまるなよ」と作左衛門を向いていい、そして、

「ご苦勞であった」と一言いうと、書院へ引き下がっていった。

「いざとなったら決戦でござるぞ」

背中に、作左衛門のわめくのが聞こえた。

信長は、死、という文字を背中に太く書いて生きているよ

うな男である。

いつも、死の意識がある。戦の前は、好んで幸若舞の敦盛を謡い舞った。人間五十年、化天のうちに比らぶれば、夢幻の如くなり、一度生を享け、滅せぬもののあるべきか。短い生であるがゆえに、背中に死という文字を背負い、己の野望のために苛烈に生きた。己のみを信じて生きた。行動は一直線で、信じる道を切り拓くためには、いかなる妥協もなく、はばむ者は殺した。古いものを壊し、新しき規範を作った。背中に死を背負い、表の形相は、殺、であった。従うものは膝まずかせて許し、従わざるものは殺した。

家康は、信長の烈火のような気性をよく知っているつもりでいた。秀吉の、信長の懐に転がり込むような演技めいた忠誠心を、鼻白む思いで見てもいた。しかし、あのように仕えなければ信長には仕えることが出来ない。わかつているつもりでいたが、ついにわが身に火の粉が降りかかってきた。何事もその命に服して、共に力の一つにして戦ってきたはずである。そして領国を拡大し力をつけてきた。が、突然困った難題を押し付けてきた。

信長の真意は何か。その意図する所は何か。罪状の事実があったのか。それとも、わしを試しているのか。わしの真意を探ろうとしているのか。家康は一夜考え続けた。

眠れない一夜が明けると、家康は近習の者をひとり連れ

て、本丸から作左曲輪まで歩いて行った。一人で居ることに耐えられなかった。特に用事があるわけでも、作左衛門に頼みごとをするわけでもなかったが、足が作左曲輪に向かわせた。ギラギラと太陽が照りつける暑い日だった。木陰を選んで歩いた。曲輪は防御の為に土塁を周囲に回してあり、その外側は竹林や雑木林で、北と東は沼で深く落ち込んでいた。

曲輪の中は作左衛門の屋敷があり、下僕の住まいの他に大きな蔵が五つあった。ここにいざというときの兵糧が蓄えられているはずである。門をくぐっていくと、井戸端でゴボウを洗っている作左衛門の妻女濃にであった。濃がびつくりして跳ね上がるように立ち上がり、手を拭き深々と頭を下げた。

「濃どの、まえぶれもなくおどかして、すまぬ、すまぬ。ゆるしてくれ。作左衛門殿はおられますか」

「朝早くから、馬を飛ばして出ていきました。村を回ってくるといつておりました」

「そうか、それはお役目ご苦労でありますな」

「お殿様、なにかございましたか」

「いやいや」家康は鷹揚に答えた。

「作左は昨日えらい剣幕で帰ってきました、お酒を一気におおり、数杯飲んで寝てしまいました。夜中におおきな寝言をいつておりました。こんなことはめずらしいことでございます」

家康はそれには答えず、建ち並ぶ蔵を見上げていたが、「仕事の邪魔をしました。作左殿と話がしたくて、ふらりと

きただけです、よろしくお伝えくだされ」

踵を返して立ち去ろうとしたが、ふと思いついて、振り返った。

「お子は五人でありましたな、お濃どの」

「あ、はい」赤くなって濃が答えた。

「夫婦仲良いことは、まるで美しい一幅の絵を見ているようであります、お濃どの」

濃の頬が紅色になり、うつむいて乙女のように恥じらいだ。

「そうそう、お濃どのに会って思い出しました。わしがな、作左殿に、お濃はどんな女かと尋ねたことがある。作左殿、何と答えたと思う」

濃が小首をかしげた。

「濃は、梅の花のように可愛い女にございます。梅の花か、とわしがきくと、小さくて可愛いだけでなく、いい香りがします。そのうえに、実もよく生ります、とぬけぬけと言いつたよ」

家康は思い出したように軽く笑った。乾いた笑いだった。

「まあ、あの鬼瓦がそんなことを申しましたか」

濃は前掛けで顔をおおい、消えてなくなりそうに小さくなった。

「鬼作左といわれるほどのお方だが、わしはよく知っておる。弱い者には春風のようにやさしい心で接せられておる。見事なものよ」

家康は作左曲輪を出ていった。

数日後、家康は決断した。

兵を伴い岡崎城におもむくと、ただちに海路をつかつて信康を遠江の二俣城へ護送して、蟄居を命じた。つづいて築山御前を浜松城移城という名目で岡崎城を発たせた。築山御前は、遠江佐鳴湖の岸で浜松城からの使者に迎えられて、その場で死を告げられた。介錯人は野中三五朗重政であった。

家康にはその選択しかなかった。家を絶やさず、家臣団を守り、領国を維持し、この先武田と伍していくにはこの選択しかなかった。

家康は永禄九年（一五六七）十二月二十九日、二十五歳で公家の近衛前久の仲立ちにより朝廷から「徳川への改姓」を認可された。これは、松平一族の宗家の地位を築いたばかりでなく、源氏の棟梁は、将来、征夷大將軍となつて、幕府を開く可能性を有するものであった。このときから、家康の意識の中には、ほんやりと天下という虚像が描かれていたのではなかったか。

信康は切腹を命ぜられた。

岡崎から信康の補佐役平岩親吉が駆けつけて家康に願い出た。己の至らなさにためにこのような事態になったことを恥じて、自分が身代わりになりますと主張した。己の首を信康様の首として信長に差し出されよ、というものであったが、家康はその心根に痛く感謝しつつ拒絶した。

「忠臣をひとり失うだけでござる。命を大切に成されよ」そ

ういった。

二俣城には弟の於義丸が駆けつけている。

於義丸と信康は十五歳離れている。於義丸はこのとき六歳であつた。家康に於義丸をはじめて面会させたのは信康で、家康が岡崎城を訪れることを知って、密かに於義丸を岡崎城へ呼び寄せ面会させた。於義丸四歳のときであつた。

泣きくずれる於義丸に信康は兄らしくやさしく諭した。

「泣くな、もう泣くな。いいか、何事も父上のいうことに従え、何事もだぞ。そうしなければ生きてはいけぬぞ。わかるな。わかつたら、もう泣くな」

信康は天正七年（一五七九）九月十五日に自刃して果てた。

本多作左衛門重次は、二俣城からの一報を伝える為にか康のもとに参上した。待つていた家康の前に進み出ると、能面のように硬くなったこわい顔をして、恭しく一礼した。

「信康様、見事に御腹召されたとの報告がたゞいまございました」

それだけいうと、立ち上がり家康のもとを去つた。

「あつ、作左衛門殿」と家康が呼び止めた。

が、振り向くことなく、肩を落としてそのまま退去した。

鬼の涙

日が暮れると、家康は腑の抜けた木偶のように虚脱状態に

なり、ぼんやりとして時を過ぎた。何もする気になれず、余人を遠ざけて早めに寢所に入り横になった。

眼を閉じると、いままでも歩いてきた道が走馬灯のように浮かんできた。過ぎてしまったことを、いつまでも思い出していても詮無いことである。何度かその映像を振り払うために頭をふつたが、いつの間にかまた同じことが頭に浮かんできた。

思えば、幼少のころから十二年もの長い間、織田、今川の人質の時代を過ごした。しかし、思いもかけず、今川義元の軍師であり臨済宗の僧侶であつた太原雪斎殿の高話にあずかることが出来た。漢詩だけでなく政治哲学、兵学まで教えてくださった。名門今川家であればこそ出来たことであり、その時間にはあり余るほどあつた。今川義元が烏帽子親になり、元服して、義元の元を一字もらつて元信と名乗つた。そして、義元の姪である瀬名（鶴姫）と結婚した。瀬名は知的な美人で、女性の諸事嗜みをよくした。京風で武家の礼儀作法しきたりなどにくわしく学ぶところが多かった。すぐに玉のような子を二人授かつた。それがこの度のようなことになつてしまった。今川の大軍が織田の奇襲に一瞬で破れ、岡崎城にもどつた。敵対してゐた織田と同盟を結んだ。無駄なことだが、信長と会う前に武田信玄と会つていたらどうなつていたのか。信玄の領国支配の政には心動かされてもいた。雪斎和尚の教えは、信玄の政に重なることが多かったからだ。しかし、信玄は先に死に、織田の鉄砲の前に武田は衰退した。

禍福は糾^{あやな}える繩の如し、という。現実の事象を悲しんだり喜んだりするが、しかし、人生という永い道筋の中で振り返って考えてみると、何が福で何が過であったのかが見えてくる。誰もが道を行くと、必ず別れ道に遭遇する。しかし、誰もが一つの道しか選ぶことは出来ない。決断して道を選んだからには、その道をまっすぐに行くしかないのだ。後悔してはならない。己の運と力を信じてその道を行くだけだ。

こたびはこの道を選んだ。振りかえってはならない。徳川を存続するにはこの道しかなかった。これはわしが選んだ道だ。何度考えても同じだ。これはわしが決断したのだ。

寝ずの番の近習が外の廊下を足早に歩く音が聞こえた。家康は身を起こして戸をあけた。

「何事だ」

近習は片膝をつき頭を下げて、蠟燭^{ろうそく}をかかげた。黒い森の上に月が出ていた。北西の作左曲輪の森の辺りからなにやら異様な鳴き声が聞こえた。

「なんだ、あの鳴き声は」

今まで聞いたことのない、くぐもった低い鳴き声である。小さくなったかと思うと月に向かって泣くのか、空気の乾いた空に遠くまで響いた。

「あの鳴き声、はじめてにございます。山犬でございましょうか」

近習は首をかしげた。

家康は黒々と静まり返る作左曲輪の森を見た。月夜とはいへ何も見えなかったが、家康の脳裏には、あの男の泣き面が突然見えてきた。男が森の広場の隅にある大きな櫟^{けやき}の前で、拳を幹に打ちつけて泣いている。顔をくしゃくしゃにして、拳で大木を叩き、時折、空に向けて、うおっうおっ、と泣いている。

鬼が泣いている。鬼が涙を隠さず、空に向かって泣いている。

家康は胸が熱くなり、涙腺がゆるむのをおぼえたが、何事もなかったように、

「そうか、山犬か」と言った。

眠れぬ夜を過ごした家康は、日が上がる前に、近習をひとり連れて馬で城を出た。海が見たいと思った。大きな海が胸のうちを洗ってくれるかもしれない。東に奔り小天竜（馬込川）まで奔りそこから南に奔った。天竜川は何度も氾濫を繰り返している。大きくは東に大天竜、その西に小天竜が流れている。川は氾濫により枝分かれして小川がそこに流れていた。馬が小川に差し掛かった。はっ、気合とともに、馬の手綱を絞って小川を飛び越えた。近習も続く。田畑にはまだ人影はなかったが、東海道を横切るときにはすでに旅人の姿を遠くに見た。海に出る前には大きな潟湖があった。大きく迂回して海に向かった。馬の足音に驚いた鴨が群れて飛び立った。潟湖は餌が多く野鳥の宝庫だった。

砂丘の前の松林で馬を下りて、近習にはそこで待つように言いつけて、家康はひとり海に向かった。日のまだ上がる前の砂丘は、朝露を含み黒々と連なっていた。小山のような砂丘をゆつくりと歩いた。三つ目の小山の上に立ったとき、まだ暗い遠州灘が開けてきた。家康は波打ち際までゆつくりと歩いて行った。渚に立つて海を見た。何もない海と空の境に眼をやると、遠州灘の水平線は巨大な弓のようにたわんで見えた。大きな波が圧倒するように次から次へと押し寄せてくる。やがて、東の空が白んできた。水平線のあたりが朱色になり、その上の空が明るくなった。曙だ。

太陽が海から顔を出した。またたく間に大きな太陽が海から上がった。家康は向き直り太陽に合掌した。その動作は自然におこなわれ、しばらくの間合掌して頭を垂れた。太陽は赤々と家康を照らしていた。やがて、家康は顔を上げて真っ赤な大きな太陽を見た。朝の太陽はまともに直視することが出来た。金色の百万本の光の矢が家康を射てきた。家康は大きく口を開けて太陽を飲み込んだ。太陽の熱が口から入り身体の中にひろがっていった。金色の矢は家康の体の中で乱反射して、家康そのものがまるで黄金のように輝いた。太陽の光で海がみるみる金色に変わっていく。金色の矢と金色の波が家康に向かって押し寄せてきた。金色の光と海と家康は、一瞬、一体となってまぶしく輝いた。

このとき初めて、家康の脳裏には天下という虚像が実像となつて結ばれていた。

天下を狙う。信康、お主の死を無駄にはせぬ。無駄にするものか。作左、お主の涙、この家康忘れはせん。忘れはせんぞ。
家康は、金色の朝の光の中にいつまでも立ちすくんでいた。家康が、天下という二文字を胸中深く刻んだ瞬間であつた。

(西區)

「市民文芸賞」

四度目の死：小西行長伝

竹中敬明

辺りは暗くなりかかってきた。行長は疲れ、憔悴しきっていた。喉の渴きを癒すため谷川に下り、少しの間せせらぎの音を聞いていた。

腰を下ろしているこの場所が一体どこなのか全く分からない。杉林が生い茂ったこの場所には静寂だけがあった。

徳川方の探索隊が自分を捜している。今にも追手の声が聞こえてきそうである。行長は谷川の水を両手ですくって飲み、少しでも遠くへ逃げようとまた歩き始めた。

行長は歩きながら、今日一日の様々な出来事が頭の中を駆け巡っていた。人間の運命はある時を境に暗転する、まさに自分の運命が僅か半日の間にそうなってしまったのである。

南肥後二十四万石の大名であった自分が合戦に敗れ、今は付き添う家来とてなく、一人で山中を逃げ回っている、そんな惨めな状態になってしまったのである。「デウス（神）よ、

救い給え」行長は信仰する切支丹の神にすがりたい気持ちであった。

行長は弘治元年（一五五五年）和泉境で薬問屋を営む小西隆佐の次男として生まれた。

幼名は「弥九郎」色白で利発な子であった。堺は交易港として外国との往来が盛んで、その影響か父母は早くから切支丹の洗礼を受けていた。当然の如く弥九郎も幼き頃に洗礼を受け、「アウグスチヌス」という名を授かった。そして父母から切支丹信仰の道を教わった。また、交易で西国へ行き来する父隆佐の船に同乗し、交易の知識や航海術を習得していた。

弥九郎は十九歳のとき、備前的大名宇喜多家の御用達商人「魚屋」の婿養子に入った。

商いで宇喜多家に出入りするうちに、聡明で弁舌爽やかな

弥九郎は家中の重役の知るところとなり、やがて当主の直家に御目どおりがかなうまでになった。直家は弥九郎の知力や商人に似合わぬ胆力の太さに感心し、「あの者を出入りの商人にしておくのは惜しい、当家で使ってみよ」と重役に申し渡した。それから弥九郎に宇喜多家の対外交渉の役が任せられるようになった。

天正五年（一五七七年）二十一歳の弥九郎が世に出る転機が訪れた。それは羽柴秀吉が織田信長の命を受けて毛利が支配する中国地方に対する征伐戦であった。当初毛利と同盟関係にあった直家は秀吉の軍と戦った。

しかし、直家は天下の大勢が信長にあると読み、信長の支配下に入ることを決めた。

直家は中国方面軍の大將である秀吉と和睦交渉に入るべく、正使に足立太郎左衛門、副使に小西弥九郎を任じた。秀吉側との交渉は、実質的に弥九郎が務めることになり、弥九郎は秀吉との初めての会見の席に着いた。薄暗い上段の間に座った貧相な男は、弥九郎に圧倒された。背高く、色白く、涼しげな目鼻立ち、そして弁舌はあくまで爽やかであった。

秀吉は田舎大名の宇喜多家にこのような逸材がいたことに驚き、羨ましく思った。

秀吉側との交渉は、直家の嫡子秀家を人質に差し出すことで決着した。直家にとっては厳しい条件を覚悟していたが、弥九郎に対する秀吉の好感もあってか、宇喜多家は存続し領地も安堵された。「弥九郎、この度の交渉、大儀であった。

そちの功に報い二百石を使わす、以後家中にて励め」と直家は弥九郎を宇喜多家士分に取り立てた。弥九郎にとって人生の転機と栄達の機会が訪れ、そしてこれを期に名を「小西行長」と改めた。

直家の死後、嫡子秀家を当主とした宇喜多軍は秀吉の中国征伐軍に組み込まれ、行長は幼き秀家を宿老とともに支えて戦った。

天正十年（一五八二年）六月、秀吉と毛利との和睦が成立し、行長は戦功により秀吉から三千石を与えられて秀吉の幕下に入った。

そして秀吉から秀家の与力役も命じられた。

ここに行長と宇喜多秀家との終生に亘る関係が始まったのである。

行長はその後、商家時代の海上輸送や航海術の経験を買われて秀吉の水軍奉行に任ぜられ、戦の経験も重ねていった。

天正十三年（一五八五年）、行長は秀吉から瀬戸内の島々を支配する一万石の大名に取り立てられ、「摂津守」に任ぜられた。

行長は、「商家に生まれた自分が遂に大名になったか、人の運命というものは分らないものだ」と述懐しつつ、船の帆に満風を受けた気分であった。そして熱心な切支丹信者として、小豆島や瀬戸内の島々において切支丹の布教に努めた。人を殺し合う戦をしながら、一方で神の愛を説く、矛盾した生き方であった。しかし、それは行長だけのことではな

かった。多くの武将が殺生などを戒める仏道を信じながら、戦をしているのと同じことであつた。

行長の人生は、その後も順風万帆かと思われたが、またもや大きな転機が訪れた。

それは天正十五年（一五八七年）六月、秀吉による「バテレン追放令」であつた。秀吉の家臣は切支丹信仰を捨てるか、自分の知行を捨てるかの選択を迫られることとなつた。

切支丹大名であつた播磨明石城主の高山右近は、六万石の禄も家臣も全てを捨て、信仰の道を選んだ。行長は葛藤を続けた。しかし、行長は右近のような殉教者にはなれなかつた。大名という身分を捨てきれなかつた。思いあまつた行長の結論は、表向きは切支丹を捨てたかのように振る舞い、心の内では密かに信仰を持ち続ける、それは自分を偽り、主君秀吉を欺くという生き方であつた。

自分の生き方の後ろめたさを隠すかのように、行長は秀吉のために懸命に働いた。秀吉の九州征伐など数多くの戦に水軍を率いて勇戦し、更に肥後国の地侍一揆を加藤清正と共に鎮圧した。その働きもあつてか、天正十六年（一五八八年）、肥後国の南半分二十四万石の大名に取り立てられた。ただ予期せぬことに肥後国の北半分二十五万石が清正に与えられた。このことが行長の人生に大きな影響を及ぼすこととなつた。

晩年の豊臣秀吉は狂気がかつていた。大陸の朝鮮、明を征服して日本の属国にするという途方もない野望を持った。対

馬領主である宗義調に対して朝鮮国王の臣従を求める交渉を命じ、行長に対しても宗氏を助けて外交折衝に当たるよう命じた。朝鮮と友好な交易関係にあつた宗氏にとっては青天の霹靂であり、国際事情に長けた行長にとつてはそれは侵略そのものであつた。二人は苦悩しながら何度も朝鮮と折衝したがまとまらなかつた。

業を煮やした秀吉は朝鮮を武力で屈服させ、そして明も征服するとして、文禄元年（一五九二年）正月、全国の諸大名に朝鮮出兵を大号令した。「文禄の役」である。

全国の大名が続々と肥前の名護屋城へ集結した。そして第一軍から第九軍の朝鮮出征軍が編成された。

行長と宗義調の子義智は、先鋒となる第一軍を率い、加藤清正は第二軍を率いることとなつた。朝鮮に近い九州、四国、中国地方の大名を中心に総勢十六万の陸上部隊、九千余の水軍部隊が編成された。そして秀吉の養子となつていた若干二十一歳の宇喜多秀家が朝鮮出征軍の総大将に任ぜられた。

更に名護屋の本営と朝鮮の間を往復し、秀吉の命令を現地に伝え、現地の戦況や武將の戦い振りなどを秀吉に報告する戦奉行に石田三成、大谷吉継、増田長盛が任ぜられた。

大御所の徳川家康と前田利家は出征軍には加わらず、名護屋の本営に後詰（予備隊）として十万の兵を置いた。家康は表立って反対はしなかつたが、この無謀な戦は必ず破綻し、豊臣家は衰退すると予測していた。

宗義智は、父義調が亡くなつたため家督を継いだが、十九

歳の身には何もかも未経験であった。「行長様、この戦はどうなりましようか」父のような行長に不安気に尋ねた。

「義智殿、其れがしも分からぬ、こうなった以上戦うまで、そして早い時期に和平講和に持ち込みたいと思っている」

文禄元年四月十二日、行長が率いる第一軍は朝鮮釜山浦に渡った。行長は初めて見る朝鮮の山々を見ながら、「自分は武士になったため、これから異国の地で戦うことになってしまった、武士の人生が良かったのか」と先の見えぬ自分の運命と、主君秀吉の命とはいえこの無謀、無益な戦を憂いた。

第一軍は釜山城への攻撃を開始した。日本の優れた鉄砲の威力と戦国で戦い慣れた日本の兵は、短時間で釜山城を陥落させた。その後も第二軍、第三軍と出征軍は続々と朝鮮に上陸し、各地の城を陥落させ、破竹の勢いで北上していった。なかでも行長率いる第一軍と加藤清正率いる第二軍は、激しく先鋒を競い合いあった。

秀吉が肥後の国を分割して、南半分を行長に、北半分为清正に与えたことが二人の競争心を高め、更に出自、性格、宗教などの違いもそれに輪をかけた。地侍の子であった清正は行長を、「葉屋の倅が算盤で大名になりおった」と軽侮し、行長も負けじと清正を、「戦しか知らぬ田舎の無骨者」と嘲笑し、互いに相手を誇った。また、行長が敬虔な切支丹であったのに対し、清正は熱心な日蓮宗徒と、二人の信仰も反目のもととなった。

行長は、朝鮮に出征した小西隊の軍標に、大きな紙袋に朱

の丸を描いたものを用いた。

紙袋はその時代の葉袋を表したもので、清正から「葉屋の小倅」と軽侮されたことを逆手に取ったものであった。

首都漢城への一番乗りを行長と清正の軍は競い合い、五月二日に相次いで漢城に入城した。その後も行長の第一軍は北上を続け、六月十六日には平壤を占領した。追いつめられた朝鮮国王は明国に援軍を求め、七月十六日、明の兵五千余が平壤に南下してきた。日本軍と明軍の初めての交戦であったが、行長の第一軍はこれを撃退した。行長は清正から、「商人上がりの算盤大名」と侮られていたが、作戦、用兵は清正に優るとも劣らぬものであった。しかし、先鋒として先頭を進む行長の第一軍は、兵員消耗率が出征軍の中で最も大きく、軍団は疲弊していた。

八月、日本軍の強さを知った明は、沈惟敬を代表に立て行長に講和を提案してきた。加藤清正ら武力征服派にとっては眼中にないものであったが、講和派の行長にとっては願ってもないことであった。「日本軍の戦況が有利な時に講和し、朝鮮、明に交易を約させる、これで秀吉公に撤退の了解を得よう」実利を得ての名誉ある撤退、行長の先行きを見通した考え方であった。

「交易と引き換えに終戦とする」日本側のこの提案を明皇帝に伝えるため、沈惟敬は五十日の休戦を約した。行長にとっては終戦、講和へ道が開けたと喜んだ。

しかし、休戦中だと安心していった文禄二年（一五九二年）

正月、行長在陣の平壤城が突然明の李如松將軍率いる十万の大軍によって十重二十重と蟻の這い出る隙もないくらいに包囲されてしまった。城の兵力は疲弊した五千余、食料、水も殆ど無く、助かる見込みは全くなかった。行長は「自分の命もこれで尽きた」と死を覚悟した。

しかし、「窮鼠猫を咬む」死を覚悟した行長の隊は、雖で穴を開けるように重囲の一角を破り、辛うじて脱出した。行長は九死に一生を得ることができ、「ゼウスは、吾を守り給うた」と天に向かって感謝を捧げた。

明軍の本格的な参戦や朝鮮民衆の義勇軍蜂起はその後の戦況に大きな影響を及ぼし、日本の各軍は首都漢城の線まで撤退を余儀なくされるに至った。陸上戦闘が各地で苦戦が続く一方、海上戦闘でも李舜臣率いる朝鮮水軍が優勢で日本の水軍は打ち破られ、補給線の確保が次第に困難になっていった。

このような戦況悪化により、今度は日本側から明に講和を提案せざるを得なくなり、行長が再び明の沈惟敬と交渉に入った。

文禄二年四月、二人の間で、「日本軍は首都漢城から撤退、明は日本へ講和使節を派遣することと合意し、五月十五日、明の沈惟敬が石田三成、行長に同道され、名護屋城で太閤秀吉に謁見した。この時、秀吉は明が降伏講和に來たものと思いい、七ヶ条の厳しい講和条件を示した。退席した沈惟敬は行長に、「貴殿が約束した話とは違う、この条件では国に持ち帰れない」と拒絶し、講和は不調に終わろうとした。行長は

何としても交渉決裂を避けようと三成に相談を持ちかけた。そして二人で恐るべき策を講じた。

それは秀吉の出した条件を書換えて明皇帝に差し出すという、大胆不遜なものであった。

露見すれば死罪は免れぬものであったが、行長としては、「この戦を何としても早く終わらせたい」そんな願いからであった。そして行長の太い胆力がそれをさせた。

明の沈惟敬も講和条件の書換えを受け入れ、行長の腹心内藤如安が使者となって沈惟敬に同道し、国書が明皇帝にもたらされることとなった。しかし、国書の改ざんは道中で明らかになってしまった。

慶長元年（一五九六年）九月、明からの返書がもたらされた。明の使節に大阪城で謁見した秀吉は、明が七条件を受託したものと上機嫌であったが、明皇帝からの返書は、「汝、秀吉を日本国王に任ず」と属国扱いしたものであった。秀吉は激怒し、講和交渉は破綻した。そして行長と沈惟敬が謀った偽りの講和交渉が露見し、秀吉は怒り狂った。

「摂津、よくも俺を謀りおったな、如何なる料簡か、即刻腹を切れ」行長に切腹の沙汰が下った。行長は、「太閤殿下の逆鱗に触れてしまった、最早これまで」と人生における二度目の死を覚悟した。

しかし、責任の一端がある石田三成の必死の助命嘆願や前田利家の口添えもあって辛うじて死を免れることができた。行長は「二度目の死から生還できた、治部少（三成）には命

の借りができた。これからは治部少とは生死をとものにしようぞ」と腹に決めた。

行長とは対照に片棒を担いだ明の沈惟敬は、哀れにも明王朝から処刑されてしまった。

慶長二年（一五九七年）二月、秀吉は怒りにまかせて、再び十四万余の軍勢を動員して朝鮮への再出兵を命じた。「慶長の役」で、太閤秀吉の面子を立てるだけの戦であった。

今度は朝鮮南部の制圧と首都漢城の攻略を目標に、宇喜多秀家を大将とする左軍と毛利秀元を大将とする右軍とに軍団が編成された。

行長は島津義弘、蜂須賀家政、宗義智らと左軍に加わり、全羅道の軍事拠点である南原城の攻略に向かった。

しかし、各地における明、朝鮮連合軍と民衆蜂起軍の抵抗は強く、戦いは前回の「文禄の役」以上に苦戦が強いられることになった。

右軍も同様に苦戦を続けた。なかでも日本軍の南部防衛拠点として日本軍によって築城された蔚山倭城の籠城戦は熾烈を極めた。

蔚山倭城の築城は、十一月頃から突貫工事で進められたが、城が未完成の十二月二十二日早朝、明・朝鮮の五万七千の大軍によって包囲されてしまった。城を守るのは、毛利、浅野幸長らの小部隊と襲撃の報を聞いて船で駆けつけた加藤清正とその僅かな供回り、総勢二千余であった。

明、朝鮮連合軍は幾度と強襲してきたが、籠城隊が果敢に

防戦したため、明、朝鮮連合軍は強襲を諦め、兵糧攻めに転じた。城の食料が四日後に無くなった籠城隊は、食う物もなく壁土を水に溶かして腹に入れるような飢餓地獄に陥った。全滅かと思われたが、慶長三年正月三日、ようやく清正の本隊や日本の各隊から二万余の救援軍がたどりつき、清正らの籠城隊は辛うじて助かることができた。

この蔚山倭城籠城戦を契機に、日本軍の諸将の間に、「これ以上の戦は勝ち目がなく、占領どころか、死者が増えるだけだ」と厭戦論が一気に高まっていた。

このような動きは、当然のことながら戦目付であった三成の女婿、福原長堯によって秀吉に告げられてしまった。長堯としては忠実に事実を報告したまでだが、それは現地武将の難儀を斟酌せぬものであった。

現地の厭戦論は秀吉の激しい怒りを買ひ、加藤清正、黒田長政、蜂須賀家政らの武将は厳しい譴責処分を受けることになった。このことによって加藤、黒田、蜂須賀らの武将は「戦もせず、口先だけで仕事をしている福原や三成め、自分たちの手柄のために太閤殿下に告げ口をしおった」と三成らに激しい憎悪の念を燃やした。

朝鮮での厳しい戦況と現地武将間の対立が決定的になっていくなか、慶長三年（一五九八年）八月十八日、秀吉が伏見城で没した。

秀吉の死は、当然の如く朝鮮撤退の契機となった。徳川家康と前田利家の両重鎮によって撤退が決められ、三成、浅野

長政らの幕僚が出征軍帰国の手はずを進めた。

一方、朝鮮の現地では秘密にされていた秀吉の死が明、朝鮮側に知られるところとなり、明、朝鮮軍の反撃が一層勢いを増し、日本軍の撤退は困難を極めた。特に、行長が在陣していた順天倭城と島津義弘が在陣していた酒川倭城は猛烈な攻撃を受け、行長や義弘の隊は敵を撃退しながら辛うじて釜山浦に脱出することができた。

慶長三年十一月二十三日、日本に向けた第一次の撤退船が出港し、行長は島津義弘、立花宗茂らと二十五日に最後の便に乗船した。

行長は離れ行く船の上で、七年前に見た朝鮮の山々を思い出しながら、「自分は生きて帰れるが、異国の地で戦死し、遺骨すら還らない兵たちはさぞかし無念であろう」と痛恨な思いであった。

主君秀吉の野望が起こしたこの戦は、日本、朝鮮、明の将兵が何十万と死傷し、そして日本と朝鮮の民にも大きな犠牲をもたらした。

切支丹である行長は、ゼウスに対して耐えられない懺悔の気持ちで一杯であった。

秀吉の死後、豊臣家の政務は徳川家康、秀頼の後見は前田利家が担うことになった。

しかし、豊臣家臣団の大名は朝鮮の役での遺恨によって、加藤清正、福島正則、黒田長政らの派と石田三成らの派に分かれ、対立が深まっていた。

慶長四年（一五九九年）三月、二派對立の押さえとなっていた前田利家が亡くなるや、加藤清正、福島正則、黒田長政ら反三成派武将による三成襲撃事件が起こった。徳川家康の仲裁によって収束はしたが、三成は家康から、「治部少殿、清正らの怒りが収まらない故、ここは奉行の職を辞して佐和山の城で静かにされては如何か、時を見て私のご嫡男を奉行の職に推薦いたそう」と三成は体よく奉行の職を解かれ、蟄居に追い込まれてしまった。

豊臣政権は三成という頼りの側近を失うことになり、政権は一挙に不安定さを増していった。この豊臣家臣団の対立に乗じて家康は政権奪取への気持ちを一層強めていった。

元もと家康は、信長時代から秀吉とは同格であったが、家康は二番手に甘んじ、秀吉に臣従してきた。しかし、秀吉の子秀頼にまで臣従する気はなかった。

かつての秀吉が主君信長公亡き後、先輩格の柴田勝家らを策略、武力によって葬り、政権を奪取したように家康も、「政権は力のある者が担うべき」と考えていた。家康は、筆頭大老として豊臣家を支える形を執りながら、豊臣家打倒の布石を打っていた。

五大老の一人、上杉景勝が国元に戻って城の修復、国境の防備を増強していることを豊臣家に対する不穏な動きとし、上洛、釈明の求めに応じない景勝を豊臣家に対する謀反と決めつけた。

慶長五年（一六〇〇年）六月十六日、家康は筆頭大老とし

て豊臣家大名を率いて会津へ上杉討伐に向かった。

一方、三成襲撃事件の成敗として佐和山城に蟄居させられた三成も、豊臣家を守るために家康打倒の機会を狙っていた。

三成は、奉行の増田長盛、長束正家、前田玄以と謀り、次席大老の毛利輝元を反家康軍の盟主に担いで、「内府公（家康）、太閤様の御定めに数々背かれ、秀頼さまを見捨てられた」とする家康弾劾状を全国の大名に発して、挙兵を呼びかけた。この呼びかけに畿内、中国、四国、九州の多くの大名が呼応し、畿内に続々と集結した。勿論、行長には三成が直々に訪れ、計画を明かし、膝詰めで助力を請うた。

「摂津殿、貴公とは秀吉公の近従以来の仲、是非ともお力添えを頂きたい、宇喜多秀家公も秀頼君に馳走を約して下さい」

行長は去就に迷った。加藤清正、福島正則らとは対立していたが、家康公との仲は悪くはなかった。それと何より巨大な力を有する家康公に敵対することは、自分の全てを賭けなければならぬ。むしろ中立的立場を保ち、小西家の存続を図ることが大事ではないのか、行長の気持ちは揺れ動いた。

行長は人生の大きな岐路に立たされることになった。しかし、盟友の三成が豊臣家を守るために、絶対的な不利を承知で巨大な徳川家康に立ち向かった。そんな三成の義侠心、一途な気持ちと思うとき、行長は打算的な選択は取れなくなった。それに三成には命を助けてもらった恩義がある、主家筋の宇喜多秀家公も三成側に加担した。行長は、「治部少に加

勢してやろう、それに自分を士分に取り立ててくれた宇喜多家の恩義にも報いよう」と腹を決めた。

有利な方に身を置くという戦国の世の習いを捨て、不利を承知で義に立つ、武士にはそんな生き様も必要である。そう考えると行長は不思議な高揚感が湧いてきた。

慶長五年七月、会津に向けて進軍していた徳川家康率いる上杉討伐軍のもとに三成挙兵の報がもたらされた。家康は、東の上杉景勝、西の石田三成との対二正面作戦を強いられることとなった。しかし、二百八十万石という巨大な力を有する家康にとつて動揺はなかった。元も上杉討伐は、三成一派を炙り出し、挙兵させるための布石であり、むしろ待ち望んでいた結果の到来であった。家康は三成一派を撃破するために、軍団を西に向けて反転させた。

先鋒隊として福島正則、黒田長政、細川忠興、藤堂高虎ら反三成派の豊臣家大名が東海道を尾張、美濃に向けて進んだ。家康の長子秀忠率いる徳川主力部隊も中山道を尾張、美濃に向けて進んだ。

一方、大阪城に集結した反徳川派の諸将は軍議を開き、畿内を平定して尾張、美濃に押し出し、徳川軍を迎え撃つこととなった。

九月十二日、近江から石田三成が兵六千を率いて美濃大垣城に入った。その後、伊勢路から西軍の主力部隊となる宇喜多秀家の一万八千の部隊を初め、島津義久、福原長堯、熊谷直盛、秋月種長、木村重高らの諸隊が続々と大垣城に入った。

行長も豊臣家に馳走するために六千の兵を率いて大垣城に入り、城の内外は三万三千の兵で満ち溢れた。

この頃既に福島正則、黒田長政、細川忠興、藤堂高虎ら徳川方の先鋒部隊も大垣城の西北、赤坂の地に陣を構えて、江戸からの家康本隊の到着を待っていた。西美濃の地には六万余の東西両軍が集結し、天下を賭けた合戦の戦機が近づきつつあった。

九月十四日昼過ぎ、「赤坂の東軍の陣に家康の金扇馬標と葵旗が翻った」との物見からの知らせが大垣城に入った。家康本隊の到着に西軍の緊張は一気に高まり、急遽、軍議が開かれた。宇喜多秀家が主宰したが、実質は三成が主導した。三成の作戦は、第一段階として大垣城に籠って戦い、大津城攻めをしている毛利秀包、立花宗茂ら二万の来援によって東軍を挟撃する、第二段階として大阪城から秀頼公を擁した西軍の総帥毛利中納言の出馬を仰いで東軍と主力決戦をする決めていたが、諸将の考えも聞くことにした。

島津豊久が開口一番、「徳川本隊は遠路の行軍で疲れ果てている、今夜強襲すれば勝機は必ず我らにある」と強く主張した。豊久の夜襲案について三成は同意しかね、沈黙を守り続けた。主の考えを三成の軍師島左近が代弁した。「豊久公、今回の戦は天下の大義を賭けての戦さでござる、家康公と正々堂々と渡り合って勝負を決めるのが本義でございます」「否、左近、戦は勝たねばならぬ、負ければ本義もない」「ならば豊久公、夜襲は不意打ちで懸かるもの、敵方は家康本営

を中心にして何段もの陣を敷き、物見も多数放つてござろう。我ら三万余の軍が途中発見されずに家康本営に突入できるとお考えか」左近は、理詰めで相手を負かす主人三成の性格までも似てきた。「ならば我が島津だけで突込むまで」豊久の言葉は怒気を含んでいた。朝鮮の役で島津と何度も死線を共にした行長が口を挟んだ。「左近、戦というものは理詰め通りにいかぬものだ、ならば島津隊と我が隊とが夜陰に乗じて家康本営に襲いかかれば、敵方は大混乱したすは必定。他の隊は後詰として続かれよ」豊久は行長の助け船を、怒りを腹に押し込め黙って聞いていた。しかし、島津と左近の遣り取りが後の合戦で大きな尾を引くとは三成、左近とも考えもしなかった。

軍議が気まずい雰囲気になった時、三成の侍大将が駆け込んできた。平伏しながら急ぎ口で、「恐れながら、東軍は大垣城を素通りし、先に佐和山城を陥落させ、その後大阪城攻略に向かうつもり」と物見が聞き込んだきた報を告げた。軍議の空気は一変し、慌ただしくなった。しかし、行長だけは冷静であった。

「そのようなことは疑わしい。我ら三万余の主力軍を放置したまま西進するとは考えられない」とあくまでも懐疑的であった。三成も同じ考えであったが、明らかに動揺していた。自分の居城である佐和山城が陥落させられる心配もさることながら、家康軍との野戦を避け、籠城戦で時を稼いで大阪城から毛利中納言の軍勢の到着を待つとする基本戦略が破綻す

ることへの不安であつた。三成は暫らく考えていたが、必勝の手があることに気づいた。大垣の西方に位置する山間の狭隘地関ヶ原。その入り口にあたる南宮山一帯に毛利秀元、吉川広家、安国寺恵慧、名東正家、長曾我部盛親ら二万八千の軍勢が既に布陣していること、更に関ヶ原の松尾山一帯に小早川秀秋、大谷吉継、脇坂安治、小川裕忠、朽木元綱、赤座直保ら二万五千の軍勢も布陣している。これらの軍勢、布陣と連携した作戦を取れば必ず勝てると三成は確信した。

評定机に大きな紙が置かれ、幕僚が関ヶ原の地形を書き込んでいった。北の伊吹山系と南の養老山系に囲まれた狭い盆地の関ヶ原、北の丸山から笹尾山、天満山、松尾山を結ぶと扇状の地形になり、笹尾山と天満山一帯にかけて三成らの主力軍が陣を張れば「鶴翼の陣形」が取れる。中山道、北国街道と近江への口も押さえることが出来る。自分の居城である佐和山城への防衛線にもなる、この有利な地形と陣形をもつてすれば東軍の大軍を止められる。更に家康の本隊が狭い関ヶ原盆地に入り込んだら、南東に位置する南宮山に布陣する毛利秀元らの軍によって包囲できる。三成は秀家、行長、義久らの諸将に関ヶ原での合戦の有利さを説いた。暫らくのやりとりの後、行長が、「治部殿、家康は野戦上手、それと松尾山の金吾殿（小早川秀秋）の去就が明確でない」と疑問を呈し、豊久も、「計算通りになりますかな」と皮肉を込めた言い方をした。籠城戦か野戦か、作戦の重大な選択となった。籠城戦なら東軍に勝つことは出来ないが負けることもない、

言わば持久戦に持ち込める。ただこの作戦も懸念はあつた。大津城攻めの毛利秀包、立花宗茂らの西軍きつての精鋭部隊が後詰として早く到着するか、それとも中山道を進軍している徳川秀忠率いる三万八千の徳川主力軍が早く到着するかで、勝算が大きく変わることであつた。

一方、関ヶ原へ押し出している野戦も、金吾中納言の一万六千の隊が西軍として動けば勝算があるが、「金吾殿は既に家康方に調略されている」との噂があり、信頼できない不安があつた。軍議は長引き、最後に秀家が、「東軍に先んじて関ヶ原の地形を取れば有利な戦いができる、南宮山の毛利と松尾山の金吾の隊には使いを出して、秀頼公への忠義を再度念をつくことだ」と疑いを知らぬ貴公子らしい考えで関ヶ原への進出を支持した。

乾坤一擲の戦いの賽は振られた。大垣城には三成の娘婿である福原長堯を主将とし、熊谷直盛、秋月種長、木村重高ら七千を守備に残し、他の全ての隊に出陣の触れが回った。

出発は今夜半と決まり、城内は急ぎの腹ごしらえや荷駄揃えて人馬の動きが慌ただしくなった。外はいつしか雨が降り始めていた。

関ヶ原への進軍は、中山道を進めば最短距離であるが東軍に発見されるため、大垣の南、野口村から養老の牧田街道を経て関ヶ原に入る迂回路を取り、更に夜中の行軍であるが松火を燈さず、全ての音を忍ばせるよう各隊に触れが回った。

九月十四日午後七時すぎ、降り続く雨の中漆黒の闇へ、関

ヶ原の地で北から布陣する順に石田隊、島津隊、小西隊、宇喜多隊と出発した。暗闇の中、雨に濡れての行軍は人馬ともに難渋し、特にぬかるんだ路は小荷駄隊を苦しめた。行長は馬上で雨に濡れながら、先行への不安な思いが膨らんでいた。

東軍の物見はこの三万余の軍勢の移動を見逃すことはなかった。先ず大垣の西に位置する曾根城主の西尾光典から深夜家康の陣に第一報がもたらされた。仮小屋で就寝中の家康はこの報を聞くやがばつと跳ね起き、「天運、我に味方せり」と大声を放ち、直ちに全軍に西軍の追跡を命じた。

九月十五日午前二時、赤坂に布陣していた東軍諸隊は、先鋒の福島正則隊を先頭に西に向かって一斉に移動を始めた。この東軍側の移動は当然のこと赤坂周辺に配置されていた西軍の物見も察知し、三成に急報した。三成は東軍の軍勢がこれ程早く動き始めたことに驚き、更に後から急迫される展開になったことに慌てた。三成は一刻も早く関ヶ原の地に布陣し、防衛態勢を整えたいと焦った。

午前四時近く、西軍の軍勢は左翼の笹尾山に三成の隊六千、その南側の池寺池近くに島津隊二千五百、天満山の北麓に行長の隊六千、南麓に西軍主力の宇喜多隊一万八千と布陣が終わった。宇喜多隊の右翼には大谷吉継、平塚広らの隊三千、大谷隊の右翼前方に脇坂安治、小川裕忠、赤座直保、朽木元綱らの隊四千がそれぞれ十三日から着陣していた。更に西軍の最右翼後方に位置する松尾山には小早川秀秋の隊

一万六千が十四日から着陣しており、西軍はこの陣形、兵力で東軍を迎え打つこととなった。

東軍の軍勢も十五日未明から続々と関ヶ原、垂井の地に入り、陣を構えた。狭い関ヶ原の盆地に布陣した双方の兵力は、西軍が五万五千、東軍が七万五千であった。この時点で既に東西両軍に二万の差があった。しかも東軍が総大将家康の強い指揮統制のもと、各隊が共に先鋒を競おうと、攻める側として士気旺盛であった。

これに対し、西軍は戦闘意欲のあるのは石田、宇喜多、小西、島津、大谷らの隊三万五千ぐらいで、実戦兵力において西軍と東軍は四万の差があった。更に西軍は三成の強い指揮統制が及ばない混成部隊の体をなし、しかも守る側として士気は高くなかった。

天満山の北麓に、「白地に青の山道」印の旗が林立した。行長の陣である。雨に濡れながら将兵が急場の陣地構築と腹ごしらえを続けていた。行長は敵が攻めて来る方向を凝視しながら、急な関ヶ原への転進、急ぎの陣地構築など全ての面において準備の不足を感じ、辺りに立ちこめている霧のように戦況の見通しの悪さを感じざるを得なかった。

霧雨の中、三成が近従を従え馬でやって来た。松尾山の小早川に対して督戦に赴く途中で、二人は不安な気持ちに秘めながら短く言葉を交わした。「治部殿、急な展開になりましな。松尾山の御仁が信用できぬが、ここに至っては仕方がない。貴公と宇喜多殿と刑部殿（大谷吉継）と我が隊とで

死力を尽して戦うまでだ」「かたじけない、摂津殿御身の氣持ち身に沁みる」と三成は礼をのべた。

三成は、もしこの戦いに勝てば行長を百万石の大名で処遇しても過分でないと思底思った。「この戦は、何としても勝たねば豊臣家は滅びる」絞り出すように言い残して三成は松尾山に向かつて去って行ったが、三成の後ろ姿に力強さはなかった。

行長は、豊臣家を守るために巨大な敵と戦わざるを得ない三成の心中をおもんばかり、そして、自分もこれから自分や家臣、領国など全てを賭けての戦いをしなければならぬ。そんな運命を暗い空を見上げながら思いやった。「自分は朝鮮の戦で何度も死線をさまよい、生きながらえてきた、今度も同じだ」と自分自身を奮い立たせた。「この戦負けたら死ぬしかないぞ、生きて肥後に帰りたければ敵を蹴散らせ」「朝鮮で戦った我が小西隊の強さを今一度見せてやれ」と馬の轡を回しながら將兵を鼓舞し回った。

雨は止んだが、関ヶ原の盆地は深い霧に覆われ、視界は全く不良であった。およそ三町程の距離で西軍と東軍は息を殺したように静かに対峙していた。どちらからも仕掛ける様子はなく、或いは持久戦になるかと思われた。

午前八時、突如連射の銃声が前線に響きわたった。物見と称して最前線に出た家康の三男松平忠吉と舅の井伊直政の小部隊が宇喜多隊に銃を射掛けたのをきっかけに、静寂が一挙に破れた。遅れを取ったと東軍先鋒の福島正則隊が猛然と宇

喜多隊に銃射を浴びせかけ、各戦線でも激しい銃撃戦が始まった。

程なく東西両軍が喚声を上げての白兵戦に入った。行長の隊にも古田重勝、金森長近、織田右楽、寺沢広高らの隊が押し寄せてきた。

床几に座った行長は、「肥後の強さを存分に馳走してやれ」と押し出し太鼓を下知した。

そして、「松尾山の金吾は、形勢を見ながら有利な方に加担するつもりだ、宇喜多殿と治部少と我が隊が五分以上の戦をせんと負ける」と口を引き締めた。

歴戦の行長の隊は、寄せ手を数町も押し戻し、その後も一進一退を繰り返しながら戦線を守り続けた。そんな中、行長隊の左翼に布陣した島津隊は何故か押し寄せる敵を蹴散らすのみで、前方に押し出すことは決してなかった。何か含みのある戦いぶりであった。

全体的な戦闘は、松尾山に布陣した一万六千の小早川隊が西軍として参戦していないが、それでも西軍は兵力に劣りながらも五分の戦いを続けていた。

しかし、正午ごろ行長や三成の不安が的中した。それまで戦況を傍観していた松尾山の小早川隊が、東軍有利と見て突如山を下って麓の大谷、平塚隊に襲いかかったのである。

「金吾の童、太閤殿下の恩を忘れたのか」大谷刑部は血を吐くように叫び、全員が死兵と化した大谷隊は、猛然と小早川隊に立ち向かっていった。そして何度も山へ押し戻した。

激戦に次ぐ激戦で次第に兵力を消耗していく大谷隊に、更に前方に布陣していた味方であるべき脇坂、小川、朽木、赤座の隊が向きを変えて押し寄せて来た。裏切りである。衆寡敵せず、大谷隊は崩壊してしまった。

大谷隊の崩壊は、隣りで戦っていた行長の隊に大きな動揺を与えた。行長は前面に出て、「退くな、踏み留まれ」と将兵を叱咤し続けた。今まで押し寄せて来た隊に、更に大谷隊を潰した小早川、脇坂、小川、朽木、赤座の諸隊が雲霞の如く行長の隊に寄せてきた。

もはや態勢を立て直すことは不可能であった。行長は、残り少なくなった兵力をまとめて敵陣に切り込むか、それとも落ちのびるか、迫りくる時間の中で逡巡し続けた。「殿、退かれませ、大阪城には毛利輝元公がおられます。退いて再起を図るべきです」「一先ず、石田様の居城佐和山城に入られませ」と近従頭の芳賀新吾が声を荒げた。その声に我に返った行長は、釣られるように兜を脱ぎ、陣羽織を脱ぎ捨てた。

「治部殿、宇喜多殿、許されい」と声を絞り出し、数人の近従と共に馬に跨った。島津隊の陣の後を一気に駆け抜けた。辺り一面に西軍の旗が踏み倒されていた。戦線が混乱していたので敵も味方も小西主従とは気付かなかった。しかし、程なくして掃討戦に入った東軍の騎馬隊が追跡して来た。行長はこのまま街道を佐和山城のある西に向かおうとしたが、騎馬隊がもう真後ろに迫って来た。主従は北の山側に馬の向きを変えた。薄暗い杉林の前まで来て、新吾が叫んだ。

「殿、我らが追跡隊を引き付けますので、馬を捨て山奥へお逃げください、ご武運を祈ります」馬首を西に向けた新吾らを追って十数騎の騎馬隊が疾風のように駆け抜けていった。杉林の山へ逃げ込んだ行長は、小さな川に沿って奥へ、奥へと逃げた。どれくらい歩いたであろうか、辺りが暗くなりかかった頃、行長は一本の山道を見つけた。奥へ伸びるその道は明らかに里人が通る道であった。

行長は空腹に耐えながら、「何としても逃げ延びよう、秀頼公、毛利輝元殿がいる大阪城にたどり着き、再起の一戦を試みるのだ」そのことを支えに夜通し歩き続けた。

夜が白む頃、行長は小さな神社にたどり着き、拝殿の下で疲れた体を横たえた。まどろんでいると、ふと人の足音が聞こえた。行長は刀を引き寄せ、息を潜めた。足音は朝参りの村人であった。村人は行長の姿に気付くと驚きながらも、「どなたじゃな」と声をかけてきた。行長は、「私は小西という者、戦さに破れてここまで逃げてきた。しばらく私を匿ってはいまいか」と頼み込んだ。源太夫と言うその村人は、「名のあるお方と存じますが、ここ川合の集落は大きな集落で、よそ者が入ると直ぐに分かってしまいます、この上に中山という小さな集落があります。その名主様のところへご案内します」と言って先に立って歩き出した。

中山の名主、四位新九郎は不在であった。

集落では村役による相談が行われた。「名のある方だが、落人を匿うとお咎めがあるぞ」中山に災いが降りかかるで、

出ていつてもらおう」などと村人は口ぐちに言い募った。

そのうちに新九郎が戻ってきた。話しの大筋を聞いた新九郎は、「皆の衆、待つとくれ。我々のご先祖は平家の落人としてこの地に逃れてきた身、小西様も同じではないか、匿ってあげようではないか」従四位の名の由来を持つ名主のその一言で行長は命拾いすることができた。「かたじけない。私が再び世に出る時があつたら、この恩は決して忘れないぞ」行長の言葉は弾んだ。

新九郎は集落にある観音寺の須弥壇の中に行長を匿った。真暗闇で、狭い須弥壇の中で体を横たえた行長は、自分の運命をこの中山の村人たちに賭けることにした。新九郎が三度の食事を運んできた。須弥壇の戸を開け、僅かの光の中で行長はおし頂いた。麦飯と汁、沢庵だけの粗末な食事であったが、肥後の大名であつた頃の三の膳、四の膳の食事より美味に感じた。夜も疲れと安堵のせい、ぐつぐつと眠ることができた。このまま月日が経ち村人の助けを得て、大阪城までたどり着けるのではないかとさえ思った。

家康は、石田三成、宇喜多秀家、小西行長の三名の首謀者が伊吹山中に逃げた事を聞き、厳しい探索を命じた。十七日には伊吹山近辺の美濃、近江の村々に、「石田、宇喜多、小西を捕えた村には褒美を与える、匿った村は厳罰に処す」旨の触れが回った。行長ら敗将に対する捕縛の網が次第に狭められていった。

中山集落に住む要助は、二里半ほど離れた笹又に炭焼きに

行き、そこで同じ炭焼きに来ていた関ヶ原近くの新井村に住む林蔵という者と出会った。林蔵は、「関ヶ原で大きな戦があつてな、徳川様の方が勝った、石田、宇喜多、小西という偉い侍が伊吹の山中に逃げ込んだそう、見つければ褒美がもらえる、匿えば厳しいお咎めがある」と話した。これを聞いた要助は、観音寺に匿われている侍がそのうちの一人ではないかと思った。名主から絶対口外するなと言われていたが、このまま匿えば中山はお咎めをうけるに違いないと思い、小心者の要助は林蔵にこのことをこそつと打ち明けてしまった。驚いた林蔵はこの辺りを領地とする不破郡岩手の城主竹中重門の陣屋へ訴え出た。

九月十九日早朝、重門の三十人ほどの捕り手が密かに観音寺を取り囲んだ。行長はこれに気付いたが、もはや逃げることは不可能と悟った。斬り死することは武将として恥であり、自害すべきと思つた。しかし、自ら命を絶つことは切支丹の教で厳しく戒められている。行長はこの期に及んでも切支丹の道を捨てることはできなかった。行長は三度目の死を自ら捨て、捕縛の辱めを受けることにした。「我は、摂津守小西行長なり、武運拙く戦に破れ、ここに匿われていた」と言つて縄を打たれた。行長は、村人の誰かが密告したのだと思つた。新九郎と目があった。「行長様、心ない村人をお許してください」そう訴えているようであつた。行長は小さな村が勝者徳川の世で生きていくためだと思い、怨むことはなかった。「新九郎殿、短い間であつたが世話になった、今生

のお礼を申す」と行長は深く頭を下げた。要助はがたがたと震えながら、多くの村人たちと一緒にこの捕り物の様子を遠くから見ていた。

竹中重門は陣屋の座敷に行長を上げ、下座から短く言葉かけた。「この度の戦、ご無念でございました。役目柄、あなた様の身をお預かりいたします」と六千石の重門が二十四万石の太守にそう告げた。重門は自分の主家筋にあたる黒田長政に急ぎの使いを出して、行長の扱いについて伺いをたてた。

翌朝、長政から、「家康公が近江草津に在陣されている、公の元へ急ぎ行長を届けよ」との返事が返ってきた。行長は衣服を与えられ、駕籠に乗せられ重門の家来五、六名に警護されて草津へ向かった。行長は風が吹き込む駕籠の中で、「家来たちは肥後へ逃げられたか、三成や宇喜多殿も無事に逃げられたか」晩秋の冷気を感じながら思いを巡らせていた。

草津の陣屋に於いて家康は行長と短く対面した。あまり言葉を交わすことはなかったが、家康は以前から行長に対しては三成ほど嫌悪していなかったもので、形だけではあるが労わりの言葉をかけた。代わって陪臣の本多正純が仕置を決め、行長は敗将としてではなく、罪人としての扱いを受けることとなった。昼は縄を打たれ、庭に敷かれた筵の上で晒しものにされた。夜は狭い部屋に、鉄の首枷を嵌められ、閉じ込められた。首枷は、大名であつた身にとってこの上ない屈辱であり、行長の身体を苛酷なまでに痛めた。

行長は不審番に、「もう逃げもせぬ、死を覚悟している者にどうしてこんな惨い仕打ちをするのか、夜も眠ることができない、せめて夜だけでも首枷を外してはもらえないか」と頼んだが、過酷な扱いは変わることはなかった。行長はとり立てて家康公と敵対関係にあつたわけではなく、この度の戦は三成との誼で参戦したまで、武運拙く敗れはしたが、小早川の裏切りさえなければ勝ち負けは入れ替わったかもしれない。

「敗北の将に対するこのような非道な仕打ちの家康公の指示によるものなのか、本多正純の考えによるものなのか。少なくとも敗者に対する憐憫の情や、二十四万石の大名に対するせめてもの札が徳川方にはないのか」行長は首枷の痛みに耐えながら思い続けた。

このような辱めや苦しみをうけるなら、中山の集落で捕り手に囲まれた時に、やはり自害すべきであつたと後悔した。しかし、行長は切支丹としてゼウスが説く「受難の教え」を信じることで、辛うじて自分を支え続けた。

伊吹山中に逃れ、北近江の洞窟に隠れていた三成が、行長と同じように村人の密訴によつて捕縛され、九月二十一日、草津の家康陣屋に護送されてきた。三成も縄を打たれ、筵の上で晒しものにされた。三成は謀反の張本人として行長以上に辱めをうけた。前を通りかかった豊臣恩顧の武将たちの態度は様々であつた。三成憎しの福島正則などは、「治部少、その姿よく似合うぞ。天下を取ろうなどと野心を持った者の

成れの果てだな、たわけ者」と罵倒の言葉を投げつけた。多くの武将たちが一瞥して前を通り過ぎるか、中には小さな声で労わりの言葉をかける者もいた。三成は、「この度の戦は豊臣家、秀頼公を守るための義戦であった、きつと泉下の太閤殿下は、誰が忠義者であったか分つてくださる」そう思つて屈辱に耐え続けた。しかし、小早川秀秋が前を通り過ぎようとしたとき、三成の態度は一変した。かつと目を見開き、「金吾、汝は太閤殿下の大恩を忘れたのか。豊家、秀頼公を何よりお守りしなければならぬ汝が、我らを裏切り、徳川を助けるとは何事か、恥を知れ」と縄目を切らなばかりの勢いで秀秋を痛罵した。秀秋は一言も発することなく急ぎ足で去つていった。

京都の寺に隠れていた安国寺恵慧が九月二十三日に捕縛されたが、ただ一人宇喜多秀家の消息は依然として不明であった。

九月二十八日、三成、行長、恵慧の三人の身は大阪堺にあった。斬首の前に罪人として市中を引き回されることになった。一人ひとり牛が引く檻に入れられ、引き回された。

大名の身であった三人の姿は、髭がのび髪も乱れ、哀れであつた。堺は行長が生まれ育つた地であつたため、市中の至るところで罪人扱いされた行長らに、声を潜めて、「お可哀そうに小西のお殿さま」と手を合わせる町衆が絶えなかつた。なかには、「大阪城に閉じ籠っている毛利の殿さんらは何故助けにこないのか、御身大事の腰抜け殿様ばかりだ」と

大きな声で言う者さえいた。

十月一日、三人は京都で最後の引き回しをされ、六条河原の処刑場に連れてこられた。

三成、行長、恵慧の三人の座つた前には一人一人の穴が掘られていた。最初に三成の名が呼ばれた。三成は行長を振り返り、「摂津殿、貴公には格別なお世話になつた、お礼を申し上げる、あの世で一緒に太閤殿下にお目にかかりましょう」そう言い残し、穴の前に座り、首をはねられた。次に処刑役人が行長に、「前へ出ませい」と声をかけ、それから僧侶による読経と引導を勧めた。行長は最後まで切支丹としてゼウスの元へ発つため、「吾には切支丹の信仰あり、その義は無用なり」と大きな声で告げた。

河原の土手には黒山のような見物人がいた。

行長は澄みきつた秋空を見上げ、深く息を吸つた。この世の見納めである、全てが眩しかった。人はいずれの日に死を迎えねばならない、自分にとって今その時が来たのだ、そう思い静かに目を閉じた。

今生での四度目の死、今度は本当であつた。

首切り役人の刀が一閃した。

小西摂津守行長、享年四十三歳であつた。

(北区)

「市民文芸賞」

空き家探し

水野 昭

次で最後になります。少しばかり人里から離れていますがそのぶん静けさは保証します、と不動産屋の若者は言った。男の胸のネームプレートに久留美孝男と書かれている。

飯田線の伊那で私が列車を降りたとき、時計は午後の一時半を過ぎていた。平日の昼過ぎのせいか改札口を出たのは八人ほどで、みんな地元の人たちらしくさっさと目的の方向へと姿を消した。

昼飯には途中の駅で買ったいなり寿司を車中で食べているので腹の心配はない。

私は駅前の自動販売機で紙コップの珈琲を手に入れ、すぐそばにあるベンチに腰を下ろした。目的は今後暮らしていくための空き家探しだが、適当にやってきたのであつて事前に

パソコンのインターネットで調べることはしていない。使いこなせないものに信頼をよせていないからだ。

ベンチに座り熱い珈琲をすすりながら、晩秋の陽射しを浴びてしばらく辺りを見回していた。もしこのまま目的とする家が見つからずに帰る時間が遅くなってしまうと、泊まる宿も探さなければいけないだろうなと思った。

バス停のすぐそばにある観光案内所の看板が目に入った。遊びに来たのならまずそこに寄ってパンフレットをもらい、近場で見物できるところを聞き出す。金はそれなりに用意してあるので、それもいいかなと思いつつ観光案内所の方を見ていると、その向こう側にある宮司不動産に気がついた。

昼も過ぎたことだし、よし、ここで決めてしまおうと私は宮司不動産のドアを開けた。

「いらつしやいませ」とはつきりした若い女の声がして、続けて「いらつしやい」と男の太い声に迎えられた。

小さな事務所でこの二人以外に人の姿はなかった。

女性の事務員は、私のほうに背中を向けパソコンになにか打ちこんでいた男を「くるちゃん」と呼んだ。

「くるちゃん、お客様です。お願いしますね。あたしは銀行へ行つてきますから。でもすぐ帰るからね」

若い女は布製の袋に書類を突っ込むとそれを肩にかけ、鍵箱から車のキーらしきものを取り出した。

彼女は笑顔で私に一礼して外へ出ていった。明らかに女事務員の年齢は男性よりも若いので、二人のやりとりを不思議な違和感を持つて聞いていた。先輩、後輩の関係はどうなっているのだろうかと思つたからだ。

「はいよ。行つてらつしやい、気をつけて」

いかつい顔立ちの男は妹と接するようにやはり笑顔で応じてから、カウンターの私の前にのっそりと立った。のっそりの言葉どおり立ちあがると男は背が高く肩幅もある。

男は私に椅子を勧めた。

不動産屋の男は顔を見ただけでは年齢がはつきりしなかった。老けて見えるがもしかして学校を出て三、四年かな、とも想像した。丸みのある顔に皺が少ないので判断がつかない。だがしばらくしてから会話の中で見せる豊富な知識や地域の情報の多さからいって、四十は超しているかもしれない

と思ひなおした。

眉が太く下唇が厚くて鬼瓦のようにいかつい顔をしている。色が黒いのは客を案内するために事務所の外に出る機会が多いからだろう。本人も自分の顔について承知しているのだらう、初対面の会話の中でまず自分の顔について話を始めた。

「こんな恐ろしい顔をしています、家に帰れば美人の女房と二人のかわいい子供がちゃんといますので安心してください」

「そうですか」と答えると、つい笑ってしまった。まるで男の顔のできの悪さを認めてしまうようで、彼への侮辱になりそうな氣もした。

慌てて「あ、すみません。そんなことないですよ」と謝る。

これもおかしいのだ、無理に否定するということはやはり彼の不細工な顔を認識していることになってしまう。どのような顔であろうと、こればかりは生まれながらのことなので本人にとってはどうすることもできないのだ。自分の顔の醜さは整形でもしない限り、このまま一生持ち続けなければいけない。

高校時代にヘミングウェイというあだ名の同級生がいた。

小説家ヘミングウェイに顔が似ていたわけではない。ヘミングウェイの作品で映画にもなった名作『老人と海』から彼のあだ名はつけられていたのだ。中学から高校生になつたば

かりでまだ童顔が多いクラスの中であって、彼一人だけ年老いて見えた。

深い皺が鼻の横から口の両側に続き、あまり仲間と笑いあうこともなく、深めの眼窩からいつも冷ややかに教室の中を見回していた。生徒同士の雑談にはほとんど自分から入ることとはなかった。なにかの折りに話しかければ返事をするが、ふざけた冗談話を聞いても少しばかりにやりとする程度だった。

ほかの生徒とちがって大声をあげて騒ぐことはなく、教室の中にいるときは老人があたかもひなたぼっこをしながら世間の様子をうかがっている雰囲気があり、外見ばかりでなく動作の点でも常に哲学者のように落ちついて物事を判断していた。

学校へは私と同じ方角から自転車で通っていた。朝は別々だが、帰りに他愛もない会話をしながら一緒に帰ることが多かった。自転車の上でどんな話をしたのか覚えていないが、私がしゃべり続け彼は聞き手になっていた。私が学校での失敗談を言うと彼はクスリと顔をほころばせ、しばらくにやにやししながら自転車のハンドルを握っていた。

彼も自分の顔には若者らしさがないことを自覚していたのだ。直接にじいさん、あるいは老人と呼ばないで、著名なヘミングウェイと呼ばれることは間接的だけで結果としては同じことなのだが、彼はいやがっている素振りをしないでもしろ喜んでいたようだ。

彼は常に学校の図書室から借りてきた本を手にしていた。著名な小説家の書き手であるヘミングウェイというあだ名に、読書家の彼は密かに喜びを感じていたのかも知れない。先生にもちよつと変わったあだ名がつけられていた。ある先生を部活の先輩はライオンと呼んでいた。

瘦せて小柄なのでハイエナならわかるが、なぜライオンなのか先輩に聞いてみた。授業中の様子でわからないのか？ほら、講義しながら教壇の上を行ったり来たりしているだろう。動物園の檻の中にいるライオンと同じじゃあないか、と教えてくれた。

小学生時代では、顔やからだの特徴からそのまま「さる」とか「きつね」、太っていれば「ぶた」などと屈辱的なあだ名をつけられた友人がいた。当然呼ばれることはいやで、耳に入れば怒りもした。

いやがる本人にとって、こうしたあだ名はいじめの一種になっていたのだ。私は後頭部が出ていなくて面長な顔をしていたので、上級生からラッキョウと呼ばれていた。自分ではそれまで気がつかなかったが、ある日のこと写真を見てなるほどと思った。どちらかというとき色白の私が写っている写真には、まさしくラッキョウが学生服の上にちょこんと乗っていた。他人から言われるのはいやだったが自分で笑ってしまったように似ていた。

ヘミングウェイとは卒業後二十年ほど経って一度だけ通勤で利用していた新幹線の中で会ったことがある。

顔はほとんど高校時代と同じで、色白く鼻梁の高い顔は年齢以上に重みを感じさせられた。彼の顔にふさわしく社内の高い位置に存在している雰囲気をもし出していた。静岡までのわずかな時間を隣り合って過ごしたのだが、学生時代と同じように私が一方的に話をして、彼は聞き手となっていた。結局のところ彼がどこでどんな生活をしているのかわからないままで別れたのだった。

久留美の自分の顔についての冗談で、二人して腹をかかえて大笑いとなった。こんな男なら心のすてきな、なおかつ美人の奥さんがいても不思議ではないと思われた。自分の顔のいかつさを最初からあからさまにさらしてしまうこと、これはお客との心を通じさせる手段なのだが、そのとき以来彼に對して信頼を置いてもよいという印象になっていた。

言葉遣いは丁寧で素朴な人柄を感じた。

私が静岡に転勤となった最初の日、職場での話し言葉のイントネーションがかなりちがうと感じた。同じ県内であり新幹線で浜松市からわずか三十分の距離だというのに、とても遠くにやって来たものだと思われた。

久留美のしゃべる話を聞いていると遠州地方の言葉と似ていると思った。信州とは天竜川という縦の流れに沿って文化の交流があるのだろうか。

久留美はスポーツ選手のようにからだが大きい。カウンターの向こうにいて身を乗りだしているのかと思われるほど大

きな顔がすぐそばにあった。

低い声でゆっくりと丁寧に言葉を並べる。笑ったときの崩れた表情が一気に人なつっこくなつて、いつのまにかこちらも自然と笑顔になっている。家庭では子煩悩で、細々とした妻からの頼まれごとを、わかつたよと言って次々とこなしていきそうに思えた。

「これで最後となりますが四件目の物件です。ご希望に沿った物はこれだけです。条件を変えていただければ別の資料を確認してみます」

久留美は事務的に軽く言い放った。残念そうに言えば、私という客に失礼にあたると考えているのだろうか。私は早く決めたいがどれもこれも可もなく不可もなくということ、なかなか決心がつかない。今日がだめなら明日でもよいけれど気持ちが悪かされる。

安い宿をみつければいいや、あるいはあの観光案内所に教えてもらおうか。駅前にビジネスホテルがあったような気もする。

午後の三時を過ぎると、風の中にひやりとした冷たさを感じるようになる。車の中では気がつかなかった。空には雲がなくしつかりとした陽射しで、車内で過ごしているとジャンパーを着た背中が汗ばむ。

うねうねと続く国道を、久留美はあせることなくゆっくりと車を進める。大きなからだが軽自動車にすっぽりとあまり込んでいたので、なんとなくユーモラスな雰囲気をか

もし出している。

久留美はたばこを吸わない人間なのだと思った。小さな車の中にいて、彼からほんのりと整髪料の香りが漂っている。たばこを吸う人間独特の臭い匂いはまったくしてこない。

私はたばこを吸わない。そのためたばこの匂いには敏感で、すれちがう車の中で吸っているたばこの煙も感じて顔をしかめてしまう。たばこを吸う人には衣服や髪の毛にたばこの匂いもぐり込んでいるので、そばに寄るとわかるのだ。

静岡の勤務地には若い女性のアシスタントが五人いた。彼女たちは休憩室のテーブルで昼食を終え、さつさと街の中へと外出したり別の場所、聞いた話ではロッカー室の空きスペースなどへ移動して、昼の休憩時間を過ごしていた。

理由は休憩室でたばこを吸う男子職員がいるからだだった。最初のうち私はあまり気にしていなかったのだが、家に帰ってから着替えるとき、上着やシャツの匂いを妻が臭いわねとたびたび言うので気になりだした。

職場での不満がなにかないかと無記名で意見を提出する機会があった。その中のはとんどがたばこの煙への苦情だった。当然たばこを吸わない職員からの意見なのだが喫煙者にとってはかなりきつい文面が並べられた。

受動喫煙のために癌への危険にさらされたままで仕事をしにくい。吸っている本人だけ癌になるのはかまわないが巻き添えはごめんだ。癌になったら喫煙者から治療費を払ってもらえるのか。毎日シャツが臭くなってかなわん。クリーニ

ング代を出してもらいたい。

しばらくして休憩室の片隅に壁で仕切られた小部屋が作られた。たばこを吸わない私たちはそこを喫煙所ではなくガス室と呼んだ。

久留美は家に帰れば小さな子供がいると言っていた。もともたばこをやらないのか、新しく生まれた家族のためにやめたのか、いずれにしても家庭を大切にしている男なのだと推測できる。

左右には田畑が広がり、遠く山並みが赤や黄色に染まって続いている。畑の真ん中やこんもりとした森のそばに家が一軒、また一軒とたたずんでいる。国道に車は多いが商店はなく、小さな小屋があるので通りすがりに覗くと、老人が店番をして地元の野菜を並べた店だったりする。集落を幾つか抜けてリング畑やブドウ棚を横に見ながら進み、川を渡る。どこもかもが絵の素材になると腹の底で思った。

ここで暮らせば、趣味で始めた水彩画を描くには困らないだろう。時間をかけ大作を仕上げて中央の公募展覧会に出品することが夢である。今までやってきたものは小さな作品がほとんどだが、なんとかして大作を描きたいと思っている。自分一人の生活なら時間の余裕もあるのだから好きだけ趣味に没頭できるだろう。

なんとかしてこの地で空き家を見つけない。
私の父親は国鉄の職員だった。私が高校生のころ飯田線駒ヶ根駅に勤務していたことがある。父は単身赴任だった。

私は夏休みや冬休みのたびに父のいる国鉄官舎へ泊まりに行った。浜松から半日以上の時間をかけて、固い背もたれで背中が痛くなるのを我慢して、一人列車に揺られ父に会いにいったのだ。高校生になっても父の顔を見ると心中ほっとするものがあつた。子供から大人へと世の中のことがいろいろと分かつてくる年齢である。

わずか四年という期間だったが、私の中に信州の風を受けいれる場所ができたがっていたようだ。私は大学には行っていない。高校を卒業してすぐ就職した。

父はその後の転勤で、退職までの期間は静岡の管理局勤めとなつた。それでも酒を飲むとよく駒ヶ根の話をしていた。

静岡県の人間にとって厳しい冬の寒さがいつも話題となつた。私は話を聞きながら心の中にも父と同じように信州という言葉が植えつけられていった。

私は退職してから、妻が死ぬまでの数年は二人で車に乗り長野県へ、長野県へと日帰りや一泊旅行を楽しんでいた。

生まれてから今の年齢、七十二歳まで浜松以外の町に住んだことはない。長野県。信州という言葉の響き。今は亡き父や妻との思い出。それだけのことでこの地を選んでよかったのだろうかと思問し心が揺れる。

大丈夫だ。一人でもやっていけるのだと自分を元気づける。住めば都という言葉があるじゃないか。妻は天竜川東岸の町で生まれ、やはり私と同じく上流の信州にあこがれていた。妻も生きていれば賛成してくれるはずだ。

住居について贅沢したい気持ちはない。一人で暮らしていくという前提が今までの生活の中になかった。しかしこれからはちがうのだ。どのような家であっても自分だけが我慢するか、反対に満足すればいいだけのことなのに、いざとなると決心がぐらつく。

家族のない生活なので、帯に短したすきに長しになっていくのかもしれない。どこでもいいはずなのに優柔不断なまま、この歳になつてしまったのだらうかと気持ちが重くなつてくる。

アパートではなく、一戸建ての中古の家を希望している。

一番目に紹介してくれたのは駅の近くで、商店街のひとつ裏の通りにあつた。

「まずは一番近い場所からご案内します。駅から歩いて男の足で十分ほどの距離です」

平日の昼間のせいか通行量は少ない。駅の周囲にはいろいろな商店が並び、すぐそばにスーパーマーケットの屋上駐車場も見えていた。パチンコ屋の看板が目に入った。手作りのパン屋、レストランや喫茶店が並んでいる。

しばらく車を走らせ、踏切を渡り駅の反対側に出た。こちらでも地味で小さな店舗が軒を連ねている。

「駅まで車なら五、六分ですかね。しかしあまり大きい車では出入りがしにくいかもしれません。この先は道が狭いし生け垣が張りだしています。普通車なら大丈夫です。以前はそ

んなことはなかったんですが、毎年のようにご近所の庭の木が大きくなってきて、道路側に張りだしてきています。特に曲がり角にあるお屋敷のドウダンツツジが……ほらそこです」

久留美が指さす先を見ると、赤く色づいたドウダンツツジが石垣の上から顔を出していた。

「もう少しすると、車のストップライトと同じくらい輝くように赤くなり、それはそれは見事です。だから家の人も切るのをためらうんでしょうね」

家と家が建て込んでいる路地をさらに奥へと向かって、久留美はゆつくりと車を進めた。常に安全を心がけているようだった。

「私は車を持っていないから、道路が狭くてもその点は大丈夫ですよ。ほんの少し前に廃車にしたから」

「そうですか。車がなくてはなにかと不自由しませんか」

「なければいような生活をするだけです。近くなら自転車、遠くなればバスや電車を利用します。時間の余裕を見て行動すれば困ったなと思うことはないです。二十分や三十分くらい歩くことは平気です」

「それならいいんですが、猫の放し飼いの家が多いんですよ、ここいらは。以前のことですが、突然生け垣の横から猫が飛びだしたことがあって、危うく轢き殺すところでした。それ以来この道はなるべくゆつくりと走ることにしています」

人間ならば抜き足差し足忍び足といったところだろうか。ゆるいカーブを曲がって少し坂を上ると目的の家はすぐ目の前にあった。

北隣の民家は平屋で、むかしながらの黒い瓦屋根でかなり古い。紹介してくれた家は白壁二階建ての、赤い瓦屋根で一見しておしゃれだなと思わせる。道路に面してレンガで囲んだ小さな花壇がある。奥の方には紅葉した庭木が茂っている。都会とちがってすべてに余裕があり、車なら二台分の駐車スペースがある。洗車用の水道蛇口まで用意してある。

「車を二台置くことができるということは、来客が来たときにも心配がいらないうことです。それと、この道はすぐ先で行き止まりとなっているので、用事のない車は入ってこないから静かだと思います。それでも知らずに近道しようとしてきた車が、苦勞してバックするのを見たことがあります。県道から入る角のところに、地元の人がこの先通り抜けできませんと、手書きの看板をぶら下げてあります、目に入らないみたいです」

駐車場は万が一のためのスペースということで来客……など考える必要はないかもしれないのだ。これからの生活にその可能性はほとんどないだろう。息子は引越しのときくらいは手伝うよ、と言っていたが、出張の多い職場でおそらく無理だろう。最低限の家具や生活用品だけ運びこむつもりだ。タンスや冷蔵庫などの重たいものは運送屋にすえつけてもらい、あとはのんびりと一人で片づければいいのでその心

配はいらない。住居が決まったら手紙を出すから、休みのときにも家族で遊びに来ればいいからな、と伝えてある。

最初に家を見た感じでは悪くないなと思った。玄関は広くて大きな靴箱が備えつけられていた。室内もすべてが洋風で、タタミの部屋はなかった。居間となる十畳の部屋には、暖炉の飾りがあるが煙突はないので、その中にストーブを置くことになるようだ。

階段を上がると両隣の家の庭を見下ろすことができる。近所はむかしからの住宅地域らしく、家々の庭では屋根よりも高く成長した木が枝を伸ばし、葉を茂らせ、遠方の景色が遮られている。赤や黄色に紅葉した落葉樹がほとんどだが、ぐいとばかりに背を伸ばしたヒノキもある。

木の枝が邪魔になってせっかくの二階の窓からでも眺めはよくないな、と私は思った。

二階には六畳が二間ある。ここも板張りの床になっている。やはり一人暮らしにとっては部屋数が多すぎると感じる。しかし結論はまだ先のことである。今住んでいる浜松の家は工場地帯の真ん中なので、常にいろいろな入りまじった音に包まれた生活である。それと比べてこの静けさはどうだ。閉めきった室内にしていると心臓の音が聞こえて来そうだった。

「駅から近いので、以前はサラリーマンのご主人が、ここから歩いて駅まで行って電車通勤をしていました。こちらのご両親が亡くなったころ、今から十年くらい前ですが、改築し

たのでご覧のようにまだきれいですね。ところが昨年の暮れになってご主人がからだをこわし、奥様の実家のある岐阜に引越されました。田舎よりも大きな病院のあるほうが安心だということでした。この町にも総合病院があるのですが、地方の病院ということで心細かったみたいですね。でも、いくら田舎だといっても最新の医療施設が整っていますよ。それと、環境がいいので、長期の治療者がわざわざ越してくることもあるくらいですから。駅のそばには商店街やスーパーマーケットもあり、規模は小さくても都会と同じです」

玄関の外に立つて、私はあらためて建物を見あげた。おしやれという言葉にふさわしい家だがなぜかしつくりと心に溶けこんでこない。

「白壁がきれいで地中海の見える海辺でも似合いそうだ」

「以前はごく普通の二階建ての民家でしたが、都会育ちの奥様の趣味でこんなふうに設計されたようです」

車に乗ろうとしたときにとても強い視線を感じた。

北隣りにある家のガラス戸越しに私を見ている老婆に気がついた。黄緑色のカーテンが家の中を隠しているのだが、右端が少し揺れたのでおやつ、と思ったのだ。薄暗い部屋を背景に、カーテンと柱のあいだに白い顔が浮かんでいた。私たちの車のエンジン音やドアの開閉、家への出入りの音が聞こえたのだろうか。もしかして自分の家への来客かと様子を見ていたのかも知れない。

視線と視線があつたので頭を軽く下げた。これからの隣人

として付き合いをしていく可能性もあるからだ。

挨拶に気がついてはいるはずなのに老婆の白く見える顔はそのままの位置で動かない。ガラス窓の反射もあり明るく光る顔の一部しかわからないが、視線はやはりこちらに向けられている。

老婆から見えていないのではなく明らかにこちらを見すえている。怒っているようなつり上がった眉はぴくりともしない。能面のように表情が変わることなく顔が窓辺に浮かんでいる。少し気味悪さを感じる。

売りに出されている家である。やって来るのは不動産屋と新たに入るかも知れない客であり、どんな人間がやって来るのか。まだ決めてもないのに様子をさぐっていたのかもしれない。

家の中はうす暗いので外から自分の姿は見られていないと思ひ込んでいるのだろうか。いつまでも彼女の顔の表情を眺めているわけにはいかない。私は駐車場や家の白壁、窓など辺りを見回してから、もう一度老婆のいるガラス窓にそれとなく顔を向けた。

やはり彼女は同じ位置で同じように私を見つめていた。足もとは踏み台にでも乗っているのか顔の位置が窓の上の方にある。それとも老人としては背が高いのか。いずれにしても私は見下ろされていた。

私はもう一度さりげなく老婆に頭を下げて挨拶し視線を外した。

隣家の生け垣は、まるで前日に手入れしたようにきちんと整えられている。草一本として生えていない敷地に、いくつかの植木鉢が並んでいる。軒下には菊の植えられた鉢が並んでいる。菊の鉢のすべてに細い竹が添えられて、紐で転ばないように結わえられている。菊の品評会へ出すのかと思うほど整然として開花を待っている。玄関前に老人用の手押し車が置いてある。

私がこの家が気に入ったとしても、この隣人とは付き合えないだろうと思った。

私は今まで庭の手入れにはほとんど無頓着だった。浜松の家に庭木が少しあるが自己流の手入れをしている。父親が植えた紅梅とサルスベリ、ヤマモモやモミジの木が大きくなりすぎて困っていた。適当に枝を切り落とすだけのことはしている。手入れを怠ると木はたちまち大きくなる。私が出たあとの家にはどんな人が入るのか。父の植えた木は引き継いで手入れしてもらえるのか。なんの心残りもなく根元から切ってしまうのか。死んだ父にすまないという思いが湧いてきた。

駐車場の横に草花が植えられそうなスペースがある。妻がいればここでもすぐ花の苗を植えるだろう。南側の空き地では家庭菜園を楽しむだろう。妻なら花を通じて老婆と仲良く暮らすことができるかもしれない。

でもその妻はいないのだ。私が形式的に草花を植えたとし

でも、老婆の菊の花のように管理できない。あの様子では他人の庭にまで入ってきて、ここをあそこをと指さしながら、草花の育て方を老婆流に指導したがるのではないのだろうか。

「では次をご案内します」

車に乗りシートベルトを締めようとしてからだをねじり、一瞬だが隣のカーテンの隙間へ目をやった。

老婆の顔はまだそこにあった。

二軒目は見た目も新しく名古屋の建築会社の社長が別荘として使っていた物で、私一人で使うには贅沢という言葉が先行する造りになっていた。年金生活でつましく過ごすには不似合いだと思った。段差のある斜面の上にもまるでレストランを思わせる外見で、そのまま喫茶店として営業ができそうだった。

家族が若い年齢層ならよいかもしれないが、地味に暮らしたいという私の気持ちの真反対になる物だった。

三軒目は川がすぐ下に見える斜面の縁に立っていた。河岸段丘の中ほどで田んぼが家の南北にありアルプスの山並みが眺められる。景色はよい。ものごと全てに對して、心配性の私にはたとえ景色がよくてもだめだと思った。大雨のときにはどうなるのだろうかと思像していた。西側は石垣になっていてすぐ上に数軒の家が並んでいる。崖が崩れて、川に向かい土台ごと飲みこまれていく情景を想像してしまっ

気に入らない理由はさすがに恥ずかしくて言うことはできなかった。あまりにも神経質すぎると言われそうだった。だが新聞に載っている災害はみなそういふことばかりで、「ここに住んでから初めての災害です」という話があまりにも多いではないか。

「特に悪くはないが気が進みません。それにバス停からさうとう歩かなければいけないようですから」

最近になって車を手放した私にとって、バス停が近くにあるというのは重要な意味を持つ。断るのにいい理由が見つかった。これからはこの手で行こうと思った。

「あと一か所になりますが駅からは少し離れています。国道を通るバス停まで歩いて七、八分かかります。バスの本数も少ないです。家の敷地面積は住居としては広いですが、手を加える必要があるところが数か所あります」

なにもかも気に入ってもらえそうもない。都会の人間には信州の片田舎に住むのは無理なんだろう。どうせ断られるだろうから、と考えたのか彼は欠点を最初に並べた。

次で最後となる。これもだめなら別の不動産屋にあたるとしよう。それにしても半日ものあいだあちこちへと案内させたあげくでは悪いかな、という気にもなっていた。

もし彼が端正な二枚目風だったりして、なおかつ冷たい感じならこちらとしても事務的に、「悪いですがどうも気に入らなくて。なにしろ短いが残りの人生を過ごすところですから」といつて断るつもりだった。かといって中途半端な気持

ちで決めてしまい、後悔しながら暮らしていくのもいやだ。リンゴやバナナを買うのとはちがうのだ。私は見てもいない物件の、彼には悪いけれど断るときの理由をいろいろと考えていた。

最後の物件は街並みから離れて神社や雑木林の横を通り、坂をぐいぐいと上がりバスが通るといふ国道から外れて、なおも畑のあいだの坂を登ったところにあつた。

あれは？ まさかこんな場所に秋葉灯籠だろうか。車の多い国道からの曲がり道に小さなお堂が立っていたからだ。

タタミ半畳ほどの石造りの土台の上に、すっかり古くなっているがしっかりとした作りの木製のお堂が居座っている。青銅板の屋根で小窓のついた高さが二メートルほどある。むかしからの地域の歴史の刻まれた、なにかのいわれのある物のようだった。

遠州地方には秋葉灯籠が各地に残っている。江戸時代からの名残である。火伏の神である秋葉神社の、現代風に言えば出張所である。ここのお堂もそれに似ている。もしかしたらなにか関連の物かも知れないと思った。

男が畑にいた。軽トラックが道路の脇に止めてある。男は鋤を大きく振るって耕している。耕していると思つたがそうではなかった。地中からなにか掘りおこしている。茶色くなつたツルの絡まつた棚があるので、もしかしたら長イモかもしれない。ほかに緑の葉物が並んで植えられている。野沢菜や白菜とかダイコンだろうか。

軽トラックの脇をすれすれにゆつくりと私たちの車は進む。男は車の音で手を休めてこちらをちらりと見た。男は興味がないのかふたたび鋤を持ちあげた。

「あの男の人はもうじき八十になるはずです。近くのＡコープにある地元野菜のコーナーに自分の畑でできた野菜をいつも並べています」

うねりのある道をしばらく進んでから右に曲がると舗装がなくなる。草が生えタイヤの跡がついた坂道が続くと正面に家が見えた。

平屋の、かなり部屋数のありそうな家だった。

東向きの家の真ん中が玄関になっている。亀が左右に手をのばして、無言で坂道を上っていく私たちを見据えている、そんな構えの古い家だった。

ほかに家はない。道路の行き止まりが一軒家なので、久留美に言われなくても目的の家だな、とわかった。

妻に死なれて、葬儀のときの行きちがい近所の人たちと気まずい思いをしている。

狭い家だったので通夜から葬儀まで葬儀場ですべてすませてしまった。

我が家の駐車場は一台分だけで、家の前の市道は通行量が多い。南に行けば浜松市中部となり、北に一キロのところにはスーパーマーケットがあり、なおも北進すれば信号機の少ない道路として郊外へ続く。朝晩の通勤時間は渋滞をする

し、夜間はタクシーの抜け道として使われる。あらゆる車がスピードを落とさずに走りぬける。幅が四メートルほどで、中央に白線のない狭い道路である。電柱が両側に立っているで擦れちがいの車は難儀している。通勤時間帯には横切るのに苦労するほど車が行き交う。

自宅で葬儀を行うにはまず駐車できるところが必要だというのに、それは無理なことだった。通夜や葬儀で来た客が自家用車を止めておく場所はどこにもない。父親と母親の葬儀のときに、家の近所から門前に車を無断で置かれたという苦情が寄せられたほどだった。両親のころからは年月は経過しており、通行量は比べものにならない。たとえ一分でも道路脇に駐車するだけで渋滞となってしまうことは想像できた。いら立った運転手のクラクションが鳴らされる。それを避けるためにも必然的にすべてを葬儀場で、ということになったのだ。

近所の人たちに対して気が回らなかったということになるのだろう。葬儀を終えて帰ってくると顔見知りの老人が数人、自宅の門前に立っていた。

彼らは町内なので顔を知っているという程度で、名前や家などがどこなのかわからない。車を駐車場に止めているとぞろぞろとそばに寄ってきた。

「あんたの奥さんの沙和子さんにはずいぶん世話になった。せめてもと思って香典を用意したのだが、昨日から家にはだれもおらなんだ。そろそろ帰ってくるかなと思って待つ

ていたんだ。わしら年寄りも車もないし簡単には葬儀場まで行くことができない。沙和子さんにはいつも庭に咲いた花や家庭菜園の野菜をもらっていたのさ。最期にもう一度顔を見てお礼を言って、それから線香をあげたかった」

「言っては失礼だが、沙和子さんとちがって旦那さんは少しばかり冷淡で少しばかり礼儀知らずだな……無理もないか。わしもあんたの顔を知っているというだけでどんな人なのかよくわからん。もしかして小学校のころ、学校は一緒だったかも知れんが年が離れているからな」

就職してから四十年近く、仕事に追われてほとんど近所と付き合いがなかった。退職までの期間は早朝に静岡の会社へ出かけ、暗くなつての帰宅だった。隣近所の人たちでもあまり顔を見たことがなかった。

「あんたの親父さんは会社に勤めているところから自治会の役員をしていた。現職のうちから忙しかつただろうに、町のことをよくやってくれた。だからよく知っている。同じサラリーマンでも親子でずいぶんちがうもんだと思っていた。話に聞けば退職までは長いこと静岡に通っていたらしいな。それだからといってある程度の付き合いはしてほしいんだな」

遠回しに、わしらのような隣近所の年寄りを思いやる心に欠けているのだ、と言われた。

私が就職したときの勤務地は掛川市だった。転勤で磐田市や島田市の営業所に勤めたことがある。パソコンが導入されて人員整理が始まったときに、六年間名古屋の営業所に勤務

した。冬の朝はまだ星の出ている暗い道を駅まで自転車に乗って通った。退職前の十五年間は静岡市の郊外にある営業所だった。ここでも電車やバスの乗り継ぎがあり、そのために毎朝早い時間に家を出た。家に帰るころになると、辺りは暗くなっていた。六十歳が退職の年齢だったが、会社からの依頼で六十五歳まで勤めた。そのために町内の役も断ってきた。どうしても受けざるを得ないときは妻が代わりに出かけていた。

外出といえは休日になって近くの商店へ妻と食料品を買うために出かけるくらいで、親しく会話のできる顔なじみの町民はいない。

子供は離れて暮らしているので、妻の葬儀のあいだだけは賑やかだった。そのぶん、波が引けたように一人残されたとき、ここに暮らしていてもおもしろくないと思うようになってた。

浜松は私が生まれた町である。結婚して子供を育ててきた家である。しばらくのあいだ努力して、妻の好きだった草花を手入れしたり野菜を育ててみたが、背後からはいつも冷たい視線を浴びせられていた。近隣の人と顔を合わせれば私のほうから挨拶をし、言葉を交わそうとしたが、なんとなくだれでもがよそよそしくて、あまり声をかけてほしくないという雰囲気だった。

家の中はもとより、玄関から一歩外に出ると、庭の花ひとつをとっても妻との思い出につながるものばかりだった。私

は趣味といえは水彩画を描くことだった。会社に行っているときも、休日になると郊外へとスケッチに出かけることが多かった。このことも町内の人と顔を合わせることが少なかった理由のひとつになるのかも知れない。

しだいに今まで住んでいる町がイヤになって、いつそのこと別の土地に住もうかなと決心をしたのだった。

同級生の鈴木勝巳が不動産屋なので相談して自宅を売ることにした。電話をすると鈴木勝巳はすぐにやって来た。台所は妻が元気なころに改装しており、家の外回りもきれいである。市の中心に近いという好条件で、中古の住宅としてじきに売れるだろうと言った。

私の家からJ Rの駅まで歩いて約十五分である。バスを利用して市の中心部に出なければすぐ近くにバス停がある。庭と駐車場があり次の買い手が住むための条件も非常によいと鈴木勝巳は言った。

私が信州のどこかに引越すつもりだと話すと、鈴木勝巳は、「決まったら教えてくれないかな。おれは溪流釣りを趣味でやっているんだ。宿代わりに泊めてほしい」と言った。私は、「料理はだめだが酒だけは用意しておくから。いつでも遊びに来てくれ」と応えた。

私は子供と相談をしないで、結果だけを伝えた。名古屋にいた息子は学校を卒業してそのまま名古屋で就職し、名古屋生まれの娘と結婚し、名古屋郊外に家も建てた。生活の場が

すべて名古屋ということ、自分の生まれ育った土地には愛着もなく、「父さんがよければそれでいいよ。こっちには父さん用の部屋も一室あるからね。行く場所が決まらなければ名古屋へおいでよ」とあつさりと了承した。

「家の建っている敷地が八十坪あります。家の前には畑が五十坪あります」

不動産屋の若者の声が遠くから私の耳に届いた。私はその言葉をぼんやりと聞いていた。

「どうかされましたか」と久留美は心配そうに太い眉を曇らせて私の顔をのぞきこんだ。

「いや、なんでもないです。考え事をしていたものだから」私はむりに笑い顔を作った。

「家の敷地が八十坪あります。草が生えてますが家の東側には畑地が五十坪あります」

久留美はもう一度車を降りる前に言った。ここまでときは客を案内してきているらしい。それが証拠には庭先までの車の通るところだけは草が生えていない。

「家の北側にひと坪分の物置があります。以前の住人は畑をやるための農機具や飼料を仕舞うのに使っていました。でもこれは自分で廃材を集めて作ったようですね」

玄関のすぐそばに樹齢が三、四十年はありそうなモミジがあつて、傾きかけた日の光を浴び、赤や黄色に輝いていた。葉の一部は木の根の付近に散つて、緑の草と赤と黄色が着物

の裾模様のような彩りとなっていた。わざわざ東北まで行かなくても、こんな間近に紅葉の美しい土地があるのだと気づかされた。

若いころに公園に落ちていた中から一番美しい葉を探して、本のあいだに挟んだ記憶が甦った。一冊の本を読み終えるころに、すっかり乾燥した葉は、ちょっとした刺激でいくつもの断片になつてしまった。

ここに住もうと心に決めている私がいた。なぜ唐突にそんな気持ちになつてしまったのだろうか。

私は足下に落ちていたモミジの葉を一枚拾った。

「少しは手入れしないといけません、建築屋なら紹介いたします。もういい歳になります、仕事はきちんとこなしている根っからの職人さんです。私のところではなかれば一括してお願ひしています」

入る前から修理の話かよ、と思つたが正直でよろしいという気持ちが強かつた。隠しておいてあとになつてもめるよりもいいのかもしれない。特に目につくのがここここですけれど、と久留美は玄関横の雨樋と東側にせり出したトタン屋根を指さした。雨樋の留め金が錆びて折れていた。トタン屋根の一枚が浮き上がっていた。

この程度なら自分で修理できそう。これからはたつぷりと時間がある。テレビばかり見て過ごすわけにはいかないだろう。健康のためにからだを動かした方がいいと医者に言われたことを思いだした。

玄関を開けるととき戸とレールのあいだでじやりじやりと音を立てた。久留美は家に入るとすぐに奥の部屋へと入り雨戸を一枚開けた。紅葉の色濃くなった裏山が周辺に迫っていた。久留美は東側の雨戸も開けた。夕陽のためか黄色や赤味のかかった山並みが目の前に広がった。冷気を含んだ風がざつと吹き抜けていく。

「こういう量の家にしてはかび臭い匂いがいしませんな」
私は感心した。

「実は三日前にもこちらにお客様が訪れたんです。商談は成立しませんでした。が、お客様から十日ほど前に電話をいただいてから、一日おきに午前中だけ窓という窓をぜんぶ開けていたんです。このところ乾燥した日が続いたので家中の空気が入れ替わったようです」

久留美は正直に答えた。なるほど、このくらいの心遣いは商売人としては当たり前なのかもしれない。彼の外観とちがうその行動に、家庭でも慕われている父親であり夫であろうと想像ができた。

私はガラス戸を開けて廊下に腰を下ろした。

「南アルプスがよく見えますな。いい眺めだなあ、気持ちが和む」

長時間の列車と半日の車移動で一度に疲れが出てきた。私は廊下からタタミの上に這っていくとそのままごろりと横になった。

「あ、簡単に掃除はしてありますがそれでも埃があります。

着ている物が汚れますよ」
久留美が驚いて声を上げた。私はかまわずに両手両足を伸ばした。

「大丈夫ですよ。旅行用に少しばかり汚れてもかまわない格好ですから。ああ、やはりタタミがいいなあ。今まで見てきた家は現代風でテレビに出てくる都会の家、という雰囲気、家の中は板の間が多かった。私の年齢ではこのタタミの感覚が必要だな」

「台所だけフローリングとなっていますが、ほかはすべて畳敷きです」

家の傷みは自分で修理するための楽しみにしておきたい。私の先輩に、自分で購入した建築材料で子供部屋をひとつ作り上げた男がいる。道具さえあれば簡単だよ。元からある家にどうやってくつつけるかがポイントだよ。今では素人でも簡単に建築用のいい材料が手に入るから、と言っていた。

ひと通りの大工道具は私の自宅にある。死んだ父親は日曜大工が好きだった。物置や犬小屋など作るときに私もよく手伝いをさせられた。私はからだを動かすことは好きなので、家の修理はこれからの楽しみとしてとっておきたいと思った。前庭や畑の草取りをしていれば、閑だとおもうことなくたちまちのうちに一年が過ぎていくだろう。動けなくなるまで何年のあいだここで暮らしていけるのかわからないが、それまで精一杯の生活をしていく覚悟ができてきた。

祖父が、「朝になったら死んでいた、というのが理想だ。

入院していつまでも家族の世話になるのはいやだからな」と言っていた。祖父は倒れてから二日目の夜中に亡くなった。父や母は遺影に感謝していた。父親は一週間、母は三日間入院してから息を引き取った。妻は具合が悪くなってから三か月のあいだ通院していた。死ぬ一週間前に突然具合が悪くなり意識をなくし病院で息を引き取った。

私はどうなるのだろうか。周りの人になるべく迷惑をかけなくてもいいように死ぬ方法があるのだろうか。それには最後の最後まで健康で過ごせるような心がけなければいけない。私は横になったまま、今後のことを頭の中でいろいろと想像してみた。

「町の中心から離れています、下の国道に出ればバスが通っています。先ほどもお話ししましたが、駅のそばにはスーパーマーケットや中央道インター近くに市民病院もありますから、田舎といっても安心して暮らすことができますでしょう。電話線は以前使っていた配線がそのまま残っています。道路から引きこむために電信柱が一本敷地の中に立ててあるんです。だからNTTに申し込みをすればすぐにでも使うことができますと思います。電気と水道ですが三日前に連絡すれば大丈夫でしょう。台所はプロパンガスを利用することになっています。……ところで風呂ですが……」

久留美はちよつと口を閉じた。私の目の中を覗きこんでにやりと笑った。笑ったように見えただけなのかも知れないが、顔の筋肉は明らかに笑いの表情を作っていた。

「たきぎで沸かすことになっています。この家の持ち主は知りあいに建築屋があつて、いつもそこから廃材を運んでもらっていました。建築屋は市の焼却場へ金を払って処理してもらっていたので、ここの住人は風呂の燃料としてただで手に入れていたようでした」

我が家でもむかしはたきぎをくべる風呂だった。いつも父が友人の製材工場から廃材をリヤカーで運んでいた。私もリヤカーに積みこんだり、後ろから押ししたりして手伝っていた。材木から切り落としたばかりの木片は湿気を帯びていた。父はリヤカーから廃材を降ろして、庭の片隅に広げ乾かしていた。父は会社に出かける前や帰ってから、廃材の重なりをなおして乾燥の具合を確かめ、休日には斧で小さく割っていた。

あのころの父と同じことをやるのもいいものだと思った。自宅の物置のどこかにたきぎを割るための斧が放りこんであるはずだ。帰ったらすぐに探す必要があるな、と思った。

久留美は風呂場や台所を案内してくれた。どこもかもが子供のころの我が家に似ていると思った。

電話に関しては携帯電話を持っているので、新たに回線を引く必要はない。

私はこの家を購入する決心がついた。

私の気持ちかわかるのか、「気にいってもらえましたか」と男は笑顔で聞いた。

「母親のむかしの実家を思いださせてくれる家ですな。こ

している。気持ちが悪く落ち着きます。ここに決めようかな」
「ありがとうございます。さっそくですがお願いがあります。……」

男は言いにくそうに少し口ごもった。

「国道との交差点にあったお堂に気がつきましたか？ この家に住む人がお堂の中の電灯を、夕方になったら点すというお役目があるのですが……」

私は男の言っている意味がわからなくてすぐに返事ができなかった。

「それはどうということですか」

「この前に続く道は木曾へと続くむかしの街道でした。今はあちこちの電柱に街灯がありますが、ひとむかし前は夜になれば真っ暗で、月明かりのないときはとても不安だったでしょうね。そのために昭和の始めに電気が来たときに灯明として村の普請で建てられたみたいです。この家に住む人がずっと明かりを点す役をまかせられ、現代までも引き継がれているということ。空き屋になってからは、下の家の人が代わりにやって来て電気のスイッチを点けているようです」

その程度のことはおやすい御用だと思った。暗くなったら灯台守のように光を点す。一日の区切りとなる仕事。私が私に課せられるのだ。いいじゃないか、なんだか民話の世界に首を突っ込んだような気分となった。

近くを流れる川の堤防はきれいに草が刈られている。たぶん地域の人たちが総出となって勤勞奉仕をしているのだろ

う。左手の先に見えているのは神社の森らしい。正月や祭りのときには行事の手伝いとして参加することも必要となるだろう。積極的に飛び込んで行かなくてはいけないという覚悟は持っている。

「もうじき妻の一周忌となります。それが終わったら引越して来ます」

久留美はぎょっとしたような顔をして私を正面から見すえた。

「子供や孫は名古屋に住んでいるのでここに入るのは私一人です。でもよさそうな所だから友だちをたくさん連れてきます」

「そうですね。友だちにとって別荘代わりになるでしょうね」

久留美の顔に笑顔が戻った。

雨戸を閉じて玄関を出た。車が走りだし軽トラックの横を久留美はゆっくりと通過した。畑にいた男が手を休めてこちらを見ていた。私は窓を開けて会釈をした。男は戸惑ったようにしていたが丁寧な顔を下げた。引越したらまずあの男に挨拶をし、畑の手入れの仕方を教わろうかな、と思った。

(中区)

入選

下部物語

阿部 敏 広

私は今、妻と二人身延へと向かうJR線、特急富士川の車中である。静岡の浜松には三十年ほど住んでいるが、山梨の身延山へはお参りをした事がない。東京に暮らす妻の母がわざわざご利益があるからと身延山のお札を送ってくれた。それは我が家の玄関上に貼られている。若い頃私たちは苦勞の中その義母に大変お世話になった。その義母が昨年九十六歳の大往生で他界した。義母が高齢を押してこの身延山にお参りし、私たちのためにお札をもらってきてくれたのである。その事へのお礼も込めて、身延山へ一度お参りたいと常々思っていた。それとは別にこの地に前々から興味を持っていた事が二つある。

一つは『富士川下り』である。長く途絶えていたその舟運が、観光用に再開されたというニュースを知り、是非乗ってみたいと思った。

その動機はある著書を読んだことにある。大正末年、山梨の鰍沢から舟に乗り込み、富士川を下ったことが詳細に記さ

れていた。当時の舟運の様子、歴史、舟上から眺める兩岸の移り変わる景色が生き生きと描かれ、思わず旅愁をかき立てられた。その舟運がこの平成二十三年に再開されたのだから、私もその体験ができるということはこの上ない喜びだ。

そして興味を持っているもう一つは『下部温泉』である。

浜松から距離的には遠くはないのに温泉好きの私が今まで行く機会を逸している。信玄の隠し湯と称され有名な事は承知しているが、どんな所かは知らず是非訪れてみたいと思っていた。そこで身延山詣、富士川下り、下部温泉泊の日程を立てた。

四月初旬の春爛漫の中、しだれ桜満開に時を合わせていざ下部、身延へ私たちは旅立った。

ここは深い山の中だ。木を切り出す斧の音がカーンカーンと樹々の間にこだましている。

樵たちは夏の灼けるような太陽の光をジリジリと背中^{きん}中に浴び、吹き出る汗をぬぐおうとせぜず一心不乱に杉の太木と格闘している。

真夏の太陽が木洩れ日となって真上に差し掛かった頃、大きな笛の音が林間に轟き渡った。皆めいめいに作業を中断し、手ぬぐいで汗を拭きながら下部川^{しもがわ}のほとりへと集まって来る。中には顔を頭ごと川の中に突っ込み「生き返ったー」と叫ぶ者、両手で何度も冷たい清水をすくい口に運ぶ者、腰に下げた信玄袋からキセルを取り出し、葉煙草を詰め火をつけ

うまそうにくゆらす者様々である。思い思いに河原の石に腰掛けそれぞれは昼食のめんばちゅうしき（弁当箱）を開いた。

めんばの中は片手に余る大きなおにぎりおにぎりと沢庵、小菜のおかずだけであった。しかし質素な食事でも過酷な労働の後では彼らにとつて何にも代えがたいごちそうであった。

「いやあ、今年の暑さはひとしおじゃのう、去年より暑いんじゃないかろうかのう」

「それでも冬の寒さより、よかろう」

取り留めのない会話に、短い昼の時を過ごし彼らはまた持ち場へと戻って行く。

この下部の里は周りを急峻な山に囲まれ、耕作地も少なく村人は林業で生活の糧を得ていた。山には良質の杉や檜が林立し、切り出しても切り出しても容易には森の姿を変えそうにないほど資源は豊かである。切り出された木材はトロッコを使い、緩やかな道なき斜面を下って富士川の川港、波高島へと運び出されていた。

この頃は富士川の舟運も整備され、急流を下る材木や米は駿河へと運ばれて行く。身延線が敷設されるのはずっと後の事で、この山間の町は戸数は少なく下部部落と呼ばれていた。平坦な耕作地がない村は貧しい。しかしそこに肩を寄せ合い、家族が力を合わせ力強く生きている。樵の仕事を終えた恵吉と父親の松吉はトロッコに飛び乗り、山を下り、下部川沿いの湯町の茅葺きの我が家に走り込むように戻ってきた。恵吉一家は、両親、それに所帯を持ったばかりの新妻の

良子の四人暮らしである。

恵吉の父親は元々大工ではあるが、村に仕事は少なく樵の仕事しごとを副業とし、たまに頼まれれば大工の仕事もしていた。

息子の恵吉が嫁をとった時、その腕を生かし小さいながらも二人のために部屋を建て増ししてやった。

「やあ、今戻ったよ。今日も暑くてかなわなかった」

と恵吉は、新婚らしく優しい声をいつものように良子にかけた。

「お帰りあんた。もうすぐ夕飯がでけるからね。あんたの好きなあまごを焼いとるよ」

「あつ、そうそうお父さん、今日在所の叔父さんが祝事があつたとかでいいお酒を持って来てくれたからお酒つけますね」

「ほんとうかい！ 良子さん。どぶろくもいいがたまには盃の底の見える酒もいいな。何だかもうだれが出て来そうだ。たまらんな。恵吉、悪いが先にひとつ風呂浴びさせてもらうわ」

父親の出た後、恵吉も庭の片隅にある湯屋の五右衛門風呂へと向かった。湯釜から首だけを出して、良子のお酌とあまごを思い浮かべた。川から聞こえてくるかじかのキキキと鳴くのを耳にして一言、「おらあ、幸せだ」とつぶやいた。

同じ頃、恵吉の幼馴染で親友の幸太は、火の入っていない囲炉裏いろりを挟んで、母親と二人向かい合つての夕餉の一時であった。母親のおかねは、

「恵吉もよか嫁御をもろて。幸太、お前もそろそろ嫁をもらわなきや」

「またその話かい。耳にたこの出来る場所もなくなつちまつたよ。船頭の俺のところに来る嫁なんかいいよ」

幸太は子供の頃、船頭だった父親を富士川の濁流で亡くし、母親が反対するのを押し切つて父親の後を継ぎ船頭になった。母親に、船頭になるのだけはやめておくれと懇願されたが、この村での仕事は少ない。樵をやるか、船頭になるか、故郷を棄て甲府に出るかの選択肢の中で生きて行く術しかなかった。幸太は子供の頃父親の操る舟によく乗せられ、父親の竿さばきする船頭姿を誇りに思っていた。子供心に、「おれもいつかは父親のように……」と心の中で密かに思っていた。だから嫁をもらうために船頭をやめる気はさらさらない。

富士川は日本三大急流と言われているように、平靜でも流れは速い。いったん大雨が降れば暴れ川と化す。しかしどの船頭もそうだが、仕事のやり甲斐と矜持を強く持っている。材木や米を積んだ笹舟（高瀬舟）を竿一本で操り、急流の難所を乗り切る技は誰にでも与えられている能力ではない。まさに腕と度胸の世界だ。その幸太は技量と真面目な性格が幸いし、親方にも気に入られ、親孝行息子との評判も高かった。幸太に嫁を世話するという者も多い。ただし船頭を辞めるならという条件が常に付きまとい。幸太にとつても、船頭を続ける事と母親と一緒に住むという条件は譲れない。

ある日、村の名主が幸太の家を訪ねて来た。

「おかねさん、今日はいいい話を持って来たよ」

「おやまあ、何だろね。おかねでもくれるかい」

「いやいや、駄洒落を言つてる場合じゃないよ。相変わらずだな。幸太の嫁取りの話だ」

「何度も言つてるだろ、幸太は船頭だよ」

「いいんだよ、いいんだよ、船頭で」

「おやまあ、今どき物好きなお仁もあるもんだね。どこの誰だね。まさか稲荷神社のコンコ様の娘じゃあるまいね」

「いやいや、まじめに聞いておくれよ」

いつにない名主の真剣な表情にさすがのおかねも居ずまいを正した。

「ほら、幸太が乗つてる舟の船主の辰造親方んとこの娘を知つてるだろ。甲府での花嫁修行を終えて、この春帰つて来たんだ」

「何番目の？」

「一番上の波江さんだ」

「あの娘は幸太より年上じゃなかったかね。まあそんな事はかまわんけどね」

「そうだ二つ上だ」

「それは願つてもない話だけど、何かいわくでもあるんじゃないの？」

「そう物事を曲げて考えなさんなよ。向こう様のたつての願いだよ。人の縁なんて分からもんさね。おかねさんも幸太から聞いて知つてると思うが……、去年の梅雨の盛りするとき

に、波高島からの渡し舟がひっくり返った事があつたらう」
「そういう事があつたね」

「梅雨時で水かさがあり流れも速かつた。それでも五、六人の客が乗っていて船べりにつかまっていたものの、船頭は引き上げるのに難儀していた。そこへ岸の詰め所にいたお宅の幸太が急を見て小舟をこぎ寄せ、手を取って引き上げられたのが波江さんだ」

「何だか講談にも出てきそうな話だね。幸太は何にも言つてなかつたよ」

「そこが幸太のいいところさ。人助けは当たり前の事くらいに思っていたんだらう」

助けられた波江は、事故の顛末とこの命の恩人の事を両親に告げた。それが図らずも雇い人である船頭の幸太と親方は知つて、誇りに思うと同時に幸太に対して浅からぬ縁を感じた。命の恩人への感謝の念は、思慕と變つて行くのに時間とはかからない。波江は幸太の船頭姿、竿さばきに見とれ、乙女心を穏やかでないものにしていった。波江はこの思いを親に告白したが父親は一瞬躊躇つたものの、辰造親方は偉かつた。船頭は元より危険な仕事であることは百も承知だ。だが船主が自分の娘を船頭にやつたとなれば、何艘も船を持ち、何十人と抱える船頭たちへどれだけの励みになるか分からない。辰造は幸太の親孝行も人柄のよさも分かっている。そこで、自分の子は娘ばかりで跡取りのいない辰造は、「養子」を条件にこの話を名主へ持つていったのである。

これを最初冗談くらいにしか思つていなかったおかねは、飛び上がらんばかりに喜んだ。幸太も船頭という仕事を認めてくれている辰造親方の懐の深さに感激し、波江に好意を持つている幸太は二つ返事で同意した。幸太は一つだけ条件を出した。母親も一緒に住まわせてほしいと。

その祝言は、桜の季節に合わせ、辰造親方の屋敷で行われた。宴席の末席には幼馴染の恵吉夫婦の顔もあった。出席者は二人の橋渡しの名主が仲人となり、雇い人の船頭をはじめ、村の主だった者、双方の親戚が襖を取り払った大座敷にズラズラと居並んだ。楽しみの少ないこの小さな山間の部落は、秋の神幸祭りと正月が唯一の楽しみである。それが今年は春先にこの祝言が加わつたのだから、年三度もの祝い事に部落の者は心中穏やかでない。たつぷり呑めるお酒とご馳走に、平常心でいると言う方がむずかしい。

その祝言はおごそかさもあり、自前の結婚式ではあるが正装した人たちが居並んだ。その雰囲気に合わせて、名主がはなむけに少しでも格式をと、「ト高砂やこの浦船に帆を上げて……」と謡つた。ところがその先の歌詞を忘れてしまい、他の誰もその先を知らなかつたので助け舟の出しようがない。名主は、「ウーウー」とゆでダコみたいに真つ赤な顔をして唸りながら目を白黒させていた。それでもこの日の列席者はお互い気心の知れる仲、辰造親方が、「名主さん、いい声のその一節で充分や、二人の門出にびつたりの謡や、まずはめでたい、めでたい」とうまくその場を取り繕つた。

これで一気に座が和み、祝宴へと突入していった。中にはお祝いに来たのか、酒を飲みたいために来たのか分らない輩もいて、新郎新婦そっちのけの婚礼ならぬ大宴会が始まった。時間の経過と共にこの宴席が誰のためのものか、見境がなくなるほどだった。参列者はこの時とばかり飲み、食べ、語らい、歌った。お昼に始まった宴席は、いつの間にか太陽が月に変わるほど時が経過していた。

幸太も新妻をほったらかし、袴の裾をまくり上げ、恵吉らの輪の中で車座になって氣勢を上げていた。船頭たちも、「親方もよか跡取りが出来て安心じゃな。辰造舟運はんばんざいじゃー！」

などと氣勢を上げていたが、この幸せの陰に不幸が足音も無く忍び寄って来ているのを、この時点では誰も知る由はない。

下部温泉。山梨県富士川沿いにある、武田信玄の隠し湯として知られている山あいの温泉だ。私は新聞のチラシにツアー会社の興味引く広告を見つけた。それは個人ツアーで、「下部温泉に泊まる身延山（久遠寺）参拝」というものだった。

去年台風で不通になっていた身延線が再開されて、記念の格安ツアーだったから何だかラッキーな気分にもなる。さっそくそのツアーに申し込んだ。私は仕事でこの身延線に何度か乗ったことがある。しかし富士宮まででそれから先は知らない。そしてもう一つ、この富士川沿いにある下部温泉に行っ

てみたい理由がある。文豪の「田山花袋」が、大正期この温泉に泊まり絶賛している。また石原裕次郎が足を骨折した折り、下部で湯治のため長く逗留し、その効能を評価している。

この事からは非行って見たいと思った。その下部へと向かう出発当日、天気は快晴だった。「これは雪をかぶった富士の絶景が見られる」と、身延線に乗って富士を見た事がない女房にその絶景を是非見せたいと、早くも心が騒いだ。新幹線で静岡まで行き、そこで身延線に乗り換える。静岡からは特急「富士川号」を利用とのことだったが、ゆっくり景色を楽しみたいので鈍行でいいかと担当者に聞いた。何と普通だと四時間かかるとのことだ。特急だと一時間二十分くらいらしい。私たちは富士を見るために、進行方向右の座席に陣取った。富士川の鉄橋越しに、製紙工場の高いたぐさんの煙突群を睥睨するように、頭に白い雪をかぶった富士がドンと構えている。富士宮を出ると、右手にさらに大きくそびえる富士が、電車の行く手を阻むように迫ってくる。女房は腰を浮かすように、その神々しい車窓からの眺めに窓に額をつけて見入っていた。

幸太は祝言の次の日、辰造親方からこんな事を言われた。「どうだ幸太、一生に一度のめだたい事だ。波江を連れて新婚旅行とやらに行つてきちゃどうだ」

「とんでもない。こうして祝言を上げてもらったことだけでも身に余る有難さだと思っていますのに」

「なーに、お前のためじゃない。波江は身を粉にして家業の事務方をやってくれている。これからは女房業もやらなきゃいけない二足のわらじだ。その娘にお札と骨休めを兼ねての事だ。親方の命令だ。連れて行ってやつてくれ。石和に幼馴染が旅館をやっている。話を通しておくからゆつくり温泉につかつてくるといい」

幸太は親方の氣遣いに感謝し、二人は石和の温泉旅館に出かけて行ったが後年、この温泉旅館に二人は再び違う目的で来なければならぬことになる。

石和から帰った次の日の早朝、二人は共に身延山へと祝言の報告を兼ねて出かけた。本堂の正面に立ち二人は長いこと手を合わせていた。幸太は後を継ぐことになるであろう舟運の隆盛を、波江は幸太と末永く幸せでいられることを。この当時、下部温泉には旅館が一軒しかなかった。源泉を引くその宿は大岩館と言う。大岩館でもてなし切れない身延参詣の泊り客は、近在の百姓家に分宿し供応を受けていた。今で言う民宿である。その百姓家の泊り客は、下部川沿いの村の共同浴場を利用していた。恵吉の家はその大岩館の近くにあり、離れを参拝客に供していた。お足を頂いて客を泊める以上それ相応の供応をしなければならぬ。

恵吉は手先が器用で好きなこともあって、母親と供に板前の真似事をし、泊り客に料理を出していた。妻の良子は仲居をこなし、春、夏の大岩館の忙しい時は仲居として出向いて手伝いをもしていた。都会からの泊り客は母親と恵吉の手に

なる、ほうとう鍋、馬刺し、岩魚の囲炉裏焼きなどの田舎料理に舌鼓を打っていた。来年の泊まりを約する客もいるほど評判がよかった。また良子も根っからの明るい性格でよく気がつき、お客の評判も上々だった。恵吉は忙しい中、ある日ふと、「この忙しさが続けば宿としても充分やつていけるのだがなあ、しかしこの忙しさも一時的だからなあ」と思い直し、何の考えもなしにただ漠然と、鉄道でも通ってくればなあと思っていた。この宿としての経験、恵吉の料理の腕と良子の客扱いの誠実さがのちに大きく役に立つ事になるとは、この時点では二人は夢にも思っていない。

この年、八王子、大月を通り甲府へと抜ける中央線が開通した。この頃はもう主な鉄道の幹線は全国を網羅していた。日露戦争の戦勝で、日本は一気に世界の列強と並ぶ一等国のし上がって行こうとしていた時期でもある。鉄道は富国のための重要な基幹産業で、官営鉄道は日に日に路線を延伸していった。辰造親方は、中央線が開通したことによって身延参詣の人数が増えるだろう、渡しも舟運も忙しくなるだろうと心の内で喜んでた。ところが結果はまったく逆で、物資や木材の一部が富士川を下る事無く、甲府から貨物を利用し東京へと運ばれるようになっていった。身延への参拝客も今までと同様で増えることはなかった。甲府から身延まではやはり遠いのである。辰造の営む舟運も影響を受け翳りが見えてきたが、ただそれほどの打撃でもなく気にはしていなかった。

下部近辺から甲府へ物資を陸路運び出す事は容易なことではない。富士川を下れば一日で清水に着くが、陸路を甲府へ運ぶとなると数日を要する。ただ舟運にも問題はあった。

清水港から甲府へ送る帰りの荷を積んで下部に戻るのに四、五日かかる。しかも戻し舟は、船頭四人で河岸よりロープで引っ張るのだから、並大抵な努力ではない。

「♪上り舟見りや愛想が尽きる。下り舟見てまた惚れる」と唄に歌われていたくらいだ。私鉄の簡易鉄道敷設の話もあったが、難工事が予想され資本が集まらず立ち消えになった。

幸太は戻し舟は辛かったが若さがそれを克服し、この船頭の仕事にやりがいを感じていて、また楽しくもあった。

四人一組で班を作り、下りは舳先に先導、艫に竿使いの二人でそれを交代で行う。速い流れは先導が座礁しないよう進路を操る。艫みに来ると艫の船頭が竿を操る。この四人の息と呼吸が重要で、自然四人の結束は固く仲も良くなる。

早朝、波高島を出ると夕には富士川の河口に出る。それから海岸線に沿って清水港へと四人艫で舟を漕ぐ。清水港へ入った舟は夜留めして次の日に荷降ろしをやる。

仕事を終えたある夜、行きつけの一膳飯屋に行き四人は酒を飲み歓談していた。

「これがあるから船頭を続けられるんだ、なあ幸太そうだな」と毎度の決まり文句を投げかける。いつものようにその店で幸太ら四人が酒を酌み交わしていた時、隣の座敷に見慣れぬ二人組みの男が盃を傾けていた。

風体からして商人風で垢抜けた着こなしは、一目で土地の者でないことが知れる。幸太はしばしの無聊に聞くともなしに時おり聞こえてくる二人の話に興味を引かれた。

歯切れのいい江戸弁に時おり「てつどう」という言葉が耳に入る。「富士身延鉄道」という言葉が聞こえた時、幸太はつい体をそちらに向け聞き耳を立てた。

周りの騒音に話は途切れ途切れにしか聞き取れなかったが、どうやら富士から甲府へ抜ける鉄道が出来るらしいとの話をしているようである。幸太は一瞬胸騒ぎを覚えた。

中央線が開通して、下部を通るでもないのに舟運は少なからぬ影響を受けている。それが富士川沿いに鉄道が出来れば舟運がどうなるかは子供でも分かる。しかし難所の多い富士川沿いに鉄道を敷設するなどは、以前の私鉄の計画が頓挫したように現実的な話ではないと思っていた。幸太は横の頭船頭に小声で話しかけた。

「頭、今隣で飲んでる二人組がいやすね」

「それがどうした？」

「どうやら東京もんのようですが、話していた内容が気になりやしてね」

「何の話だ？」

「何やら富士から甲府へ抜ける鉄道が出来るとか何とか言ってるんですよ。身延を通るなどもね」

「何だって！ そりゃいつの話だ」

「頭、ちょっと声がでかいですよ。途切れ途切れで詳しくは

分かりやせんが」

「そいつがもしほんとうの話だったら大変なことになるな」

頭船頭はしばし無言で天井を見上げていた。そして何を思ったか隣の二人に、

「私らはね、富士川の舟運を生業とする船頭なんです。お話中のところ割って入って申し訳ござんせん」

と言葉をかけた。頭船頭は銚子を片手に、

「無粋な田舎もんの酌ですがまずは一献」

二人組みは、知らぬ土地での心細さに話しかけてくれたことに小さな安堵を感じ、この闖入者に対して遠慮がちに盃を差し出した。世間話に始まりお互いの垣根が取れたところで頭船頭は切り出した。

「さつき小耳に挟んでつい聞き耳を立てて申し訳なかったんですが……。甲府へ抜ける鉄道が出来るとか」

「おや聞こえましたかね、私らは鉄道省に荷を納める仕事をしてましてね、私らの商いに関わる事には気がいくんです。まだ公にはなっていませんがね、近々新聞に出るのは間違いござんせんや」

ここで二人組みの一人がはたと何かに気付いたようで、

「先ほどあんさん、富士川の舟運って言ってましたよね……。そうですか。それであんさんが鉄道の話に興味を持ったのに合点がきましたよ」

「鉄道が出来るとなれば俺たちやおまんまの食い上げになりますからね」

「そんな事もないでしょうが……。影響はありますね。お気持ちは察しやす」

二人組みの一人が、遠慮がちに利根川水運の顛末をかいつまんで話した。利根川沿いを鉄道が走り、利根川上り下りの蒸気船が廃止になり、武州川越からの荷も鉄道にとつて替わられた経緯を話した。この話を聞き、しおれる四人に対し悪いと思ったのか、

「富士川もそうなるという話じゃござんせんよ」

と言って、利根川水運の関係者が鉄道敷設に関わる工事で雇われ、多くの人が鉄道会社へ雇われた事も付け加えた。

宿へ戻った四人は酔いも覚めてしまった。飲み直しとばかりに宿の一室で車座に座り、思い思いの愚痴とも諦めとも取れる話をしていた。頭船頭が話を締めくくるように、一座に独り言のように口を開いた。

「中央線が出来て影響を受けているのに、下部から甲府に抜ける鉄道が出来れば俺たちは終わりだよ。でもそれはまだ遠い先の話だと思っていたが、東京もんのあの話の様子じゃすぐにでも工事が始まりそうな気配じゃないか。俺たちがジタバタしたってどうなる話じゃないし、お国の決めることだ。これも時代の流れだよな。愚痴を言ってたてしようがねえや。辛気臭い話はもうやめだ。さあ飲もう飲もう」

下部に戻った頭船頭はこの話をすぐに辰造親方の耳に入れた。これを聞いた親方は一瞬絶句したが、「来る時が来たか」と大きなため息をついた。

「これはまだ又聞きの噂だ。他の船頭の耳に入ったら動揺するだろう。このことは事がはつきりするまでは絶対に口外しなきゃならねえ。ここだけの話にしてくんな。幸太にはわしから言つとくが、他の船頭二人にもきちつと口止めしといてくれ、頼むぜ頭」

人の口に戸は立てられない。どこでどう漏れたのか、この噂は船頭仲間に広まった。この噂話が現実的な話となつて辰造たちに襲ひ掛かつてきた。富士川の舟運に代わつて鉄道が敷設される？ 船頭仲間は動揺した。

辰造は村長に呼ばれ、鉄道敷設の話事実として聞かされた。

「わしゃ遅かれ早かれこうなる事は予測していたよ。見ろよ、東海道線沿いはほとんどん開けていつてゐるじゃないか。天竜川の舟運だつてとつくの昔に無くなつてゐる。もう舟運に頼る時代は終わったのだ。鉄道が出来りや甲府まで通じる。前のためになつた私鉄の簡易鉄道の話ではない。甲府の財閥の資本で国の規定にそつてやる事業だ。身延山だつて恩恵を受ける。この下部だつて駅が出来りや、荷だつて鉄道で清水や甲府まで運ぶだろう。時代の流れだ。それに逆らう事は出来んよ」

辰造は村長の話を神秘的な面持ちで聞いていた。親の代々からの舟運の仕事を継いだ今までの過去の事が、頭の中を駆け巡つていた。この仕事が自分の代で終わりになることが理屈では理解できても、感情ではとうてい受け入れ難いことだつ

た。

この夜辰造はなかなか寝付けなかつた。舟運が終わりになれば自分は何をすればいいんだろう。隠居まではまだ間がある。自分の事はいとしても船頭たちをどうしてやればいいんだろう。船頭一筋の幸太はつぶしが利かない。波江も苦勞するだろう。それやこれや思い煩つてゐるうちに、遠くで一番鶏が鳴くのを聞いてようやく辰造は浅い眠りに落ちた。翌朝、辰造は幸太を呼んだ。

「いよいよ皆に話す時が来たな。ちようどいい機会だ、早い方がいい。今日仕事が開けたら皆にここに集まるように言つてくれ」

その夜、辰造の屋敷の大座敷に船頭の全員が集まつた。何事かとめいめいが疑心暗鬼になつていた。辰造が重い口を開いた。噂の発端になつた四人が伝えた東京もんの事から話し始めた。

「その時は単なる噂だと思つていた。私鉄の簡易鉄道の事もあつたし、また立ち消えになるんじゃないかと軽く考へていた。しかし村長の正式な話を聞いて、これはただ事ではないと思つた」

と言つて村長の話を皆に伝えた。ここまで話すと座に沈黙が流れた。

船頭たちはただうつつむいてゐる。辰造は付け加える。

「でも鉄道が通ると決まつても出来るのはまだ先の話だ。それがせめてもの救いだな。今から身の振り方を考へりや何と

かなるさ。心配するな、わしだって皆への恩返しだと思って出来る限りの事はするよ」

翌日この話は樵の恵吉の耳にも入った。

「幸太も大変だなあ、せっかく辰造親方の跡取りになったというのに」

「船頭さんたちはどうするんでしょうね？」

「まだ先の話だから、いずれ親方が身の立つようにはするんだらうけど。鉄道が通って駅も出来れば村にもぎやかになるんじゃないか。何しろお山（身延山）のお膝元だから、参拝者もずんと増えるんじゃないだろうか」

いつの世もそうだが大事業が行われると恩恵を受ける者と犠牲になる者の両者に別れ、あるときは対立さえしてしまふ。しかし下部の人たちは偉かった。当然反対するであろう舟運に携わる人たちまでも、最終的に諸手を挙げ賛成し協力しようというのだ。これは辰造の、船頭や関係者に対する配慮、説得の影の尽力が大であった。

いよいよ工事が始まった。東海道線の富士駅を基点とし、富士川の右岸を通り、一度も富士川を渡る事無く甲府まで延伸する。鉄道が完成するまでは、今までどおり舟運も、一時の隆盛はないものの重要な輸送手段である。波高島から相変わらず木材や米が運ばれ、鰍沢から身延山への参拝客を運んでいた。

身延まで工事が進むのを辰造親方はじっと指を加えて見ていたわけではない。

ここ下部には温泉が湧き出ている。今までは江戸時代から続く老舗の大岩館という旅館が一軒あり、周りの百姓家と共に身延詣の参拝客を供応していたが、鉄道が通るとなればそれだけではとても対応できるものではない。素人商売でない大岩館のような、泊り客を充分満足させられるような本格的な旅館の建設が急務である。辰造はこの温泉を何とか発展させようと真剣に考えた。

温泉町として発展すれば、永年舟運を支えてくれた恩返しになるとも思っている。村役場でもその考えは持っていた。但し開発には大きな費用がかかる。少ない村の予算では何ともならない。辰造は村の有志を集め役場との協議を始めた。そして結論が出た。温泉街を造ろうというのである。そのために下部村の入り口に駅を誘致しようという計画も出された。しかしこの計画は村の資本だけではどうにもならない。辰造、村長、森林組合長の三人は、馬車を乗り継ぎ二日ばかりで甲府の県庁を訪ねた。県としても身延線沿線の住民には負い目がある。

東京、長野間の中央線は当初、東海道線を経由し身延線、甲府、長野の予定であったが、富士宮、甲府間の工事が難工事になるとの事で平野部を走る八王子、大月ルートに変更になった。この事により富士川沿いの集落は置き去りにされた形になったのである。

県としても身延線の開通によって沿線の発展を考えずにはおられない。何としても身延山は県の有力な観光財産であ

る。そこでお膝元の下部に温泉宿泊施設があれば観光客増大は明白である。県はこの計画に尽力を惜しまなかった。計画如何によつては、下部が石和に次ぐ温泉街にならないとも限らない。

そこで県はこの話を石和の旅館組合に持ち込んだ。旅館主たちはこの話に大いに興味を持った。中央線の開通は東京からの観光客をこの石和にどんどん運んでくれ、石和は発展の一途を辿っている。身延線が開通し下部に温泉街が出来れば、県内のみならず東海道線の東西から客を運んでくれる期待が持てる。下部駅設置も夢ではない。下部が第二の石和にならないとも限らない。下部への投資を旅館主たちは真剣に考え始めた。

いよいよ、身延線の伸張に合わせるかのように、大岩館に軒を並べるように旅館が建てられる計画が進行していった。

辰造も一大決心をした。率先垂範とばかりに、自らが主張した温泉街計画のさきがけになろうとするかのように、旅館業に進出する事に腹を決めた。この経営を幸太夫婦に任せようというのである。それから半年ほど過ぎたある日、幸太は恵吉に、

「恵吉、^{おやじ}義父から話があるっていうんだ。仕事を終えたら良子さんと一緒にちよつと家に寄つてくれないかなあ」

「何だよ話って」

「それは直接義父から話すだろうから、あつ、それに晩飯は用意しとくからって」

その夜、恵吉夫婦は辰造親方の屋敷へと向かった。

「やあ恵吉、夜道が大変だったなあ。さあさあ中へ」

座敷にはお膳が並べられている。恵吉は胸騒ぎを覚えた。これだけのお膳を用意してしかも酒まで出されている。

「話というのは無理な頼み事だな」と、恵吉は直感し身構えた。妻の良子も心中穏やかでない。「さあ、まずは一献」と、指し出された調子を恵吉は手でさえぎつて、

「親方、まず話を聞かせて下さい。でなきゃせつかくの酒も喉を通りませんや」

「それこそうだな、じゃあ、まず話をするか。実はなうちで旅館をやる事になった」

「えつ、そんな突然の話、舟はどうするんです？」

「いや、舟運はこのまま続けるよ。身延線の様子を見ながら。旅館の経営は幸太夫婦が中心になってやるが。頼みというのはあんたら夫婦で幸太を助けてやってほしいんだ。あんたらなら泊り客のもてなしの経験もあるし、恵吉には板場をやつてもらいたいんだよ。あんたの腕の評判は聞いているよ。

良子さんには奥向きの指図をしてもらいたい」

「えつ、私らが旅館勤めですかい」

「いやか」

「いえ、嫌も何も敷から棒に」

「何でも話の初めは敷から棒だ。さあ話した。恵吉一杯やれ」

恵吉は胸の動揺が納まらない。泊り客のもてなしの経験があるといつても、本業ではなく片手間の仕事だった。それが

本格的に客を泊める旅館で果たして板前の仕事が自分にできるだろうかと不安な気持ちになる。注がれた盃を一気に飲み干した。そして大きいため息をつき、天井を見上げた。

樵の仕事は危険だ。若い内はいいが歳を取って出来る仕事ではない。いずれ子供も生まれてくるであろう。自分の子に樵の仕事だけは継がせたくはない。今までの宿の真似事も嫌いだ。むしろ好きだ。料理の腕を奮いたい気もする。それよりもなによりも良子が喜ぶであろうし、生活も今よりは安定するであろう。そう思うと先ほどまでの不安がだんだん小さくなっていった。

良子自身もこの話は悪くないと思った。むしろやりたいと思った。しかし差し出がましく口を挟むわけにはいかない。恵吉が首を縦に振るのを祈るしかない。

盃を重ね、幸太が重い口を開き恵吉に話しかけた。

「恵吉の迷いは分かるぜ。俺だって不安だ。船頭は嫌いじゃないさ。おやじの用いだと思ってやってきたさ。危険と背中合わせでな。だけどお互いこれから子供を持つ身だ。鉄道が出来れば親方の言うように舟も終わりさ。お前たち夫婦が助けてくれりゃこんな心強い事はない。どうだ恵吉……」

「何だか頭が混乱してるぜ。親の代からの樵だ。他の仕事をしようなんて考えた事もないや。俺に旅館の仕事なんて勤まるのかな」

と言った瞬間、副業の宿の真似事家業が忙しかったあの日、旅館をやってもいいな、鉄道が出来ればいいなと何気な

く思った事を思い出した。単なる夢想だったものが現実の話となって覆いかぶさって来ることに身震いした。

「俺だって同じだ。だけど勤まるも何も、勤めるしかないんじゃないか」

辰造親方も口を開く、

「わしだって今すぐ舟をやめられれば旅館のおやじだって何にだってなるよ。鉄道が通って旅館じゃ遅すぎる。しかし大勢の船頭を抱えて、今すぐ舟運は止めることはできない。それは土台無理な話だ。俺には船頭たちが身の立つようにしてやるという大事な仕事がある。波江、お前も何か言ってやれ」

「私も最初、お父さんから話を聞いた時はびっくりしたわ。田舎にいと世の中の変化が分からないけど、甲府に行ってよくわかったわ。鉄道が通って街がどんどん開けていったらしいわよ。私が二年いた間にもずいぶん変わったわ。私は逆に旅館をやって見たいわ。面白そうじゃない。そう思わない？良子さん」

良子はそつと首を縦に振った。恵吉はそれを見逃さなかった。そしてキツパリと言った。

「親方、やらして下さい」

「よし、話は決まった。若いお前たちの門出だ。さあ飲め、食べろ！明日は幸い仕事は休みだ。皆でお山に報告に行こう」

私たち夫婦は身延駅に降り立った。（ここが久遠寺のある

身延か）私は年老いた女房の母親が、私たちのためにお札をもらいに東京からはるばるやって来たであろう感慨に浸った。バスの時刻表を見ると三十分も待てば久遠寺行きがあるので、その間私たちは駅前を散策する事にした。どの家並みも落ち着いた建て方で統一されている。しかもどの家も新しい。京都のように都市計画で建築制限がされているのではないだろうか。

乗り合いバスに乗り込み、初めて見る風景の中をバスは走る。富士川にかかった橋を渡る。のどかな田園風景の中をバスは四月のほんやり暖かい空気の中を走る。

初めての土地への旅はいいものだ。何もかもが新鮮で、私は車窓からの風景に酔い痴れていた。バスは坂道を登り参道商店街の中ほどにある停留所へと入って行った。

山門をくぐってしばらく行くと目の前の景観に度肝を抜かれた。本堂は見え、目の前には気の遠くなりそうな急な石段が行く手を阻んでいた。一瞬私は、「東京のお義母さんがこの石段を……まさか」と思った。

幸い石段を迂回する坂道があったので、私たちはそちらを選んだ。それでも私は息を切らしながら登って行った。お義母さんも高齢でありながらこんなきつい思いをして、私たちのためにお札をもらってきてくれた事に感謝の念でいっぱいだった。本堂は噂に違わず立派なもので、樹齢数百年のピンクを撒き散らしたようなしだれ桜は、見事を通り越し驚嘆以外の何者でもなかった。

翌日、辰造親方一行は徒でお山を目指した。長い石段も彼らにとって登りなれたもので、このきつい思いをするからこそ御利益を与えてくれるものと思い、有難い事とさえ思っていた。

参拝の後、参道の茶屋でほうとう鍋を肴に酒を呑んでいた。恵吉も幸太も昨日までの不安な顔はない。

波江も良子もこれから始まるであろう新しい生活に、夫たち以上に明るい希望の笑顔を見せている。辰造も若々しい四人の頼もしい顔を見回しながら、長い間の煩悶から開放され美酒に酔っていた。

そして辰造はこんな話を始めた。

「恵吉たちは家業でやっているから宿の仕事は知っている。しかし幸太と波江はど素人だ。どうだ恵吉、幸太らを助けろと思って石和と一緒に修行に行ってもらえないか。幸太らが新婚旅行で行った知り合いの旅館がある。店主は身延出身の人でわしとは幼馴染だ。この間、出しておいた手紙の返事が来た。喜んで迎え入れてくれるそうだ。一人前になるには大変だがわたしたちにはそんな時間はない。その事を話すと、店主は何とか三ヵ月でいろはは覚えられと言っている。例え三ヵ月といえども修行と名がつけばきついに決まっている。しかしお前たちの将来のためだ。どうだこちらの旅館の普請中に行ってみちゃくれまいか」

「義父さん、何と手回しのいい。素人の俺は不安でいっぱい

だったから願ってもない事です。あの旅館だったら気心も知れてます。やるからには必ず成功させたいですからね。恵吉らも一緒なら心強い。考えようによっちゃこりや二度目の新婚旅行だぜ、なあ恵吉！」

親方は大笑いし、

「そりゃいい、修行と思えや辛いだろうが。新婚旅行か、そりゃいいや」

辰造親方は忙しくなった。役場へ出掛け、大工の棟梁に会い、温泉場に足を向ける多忙な毎日に日を費やしていた。

数日後、四人は石和へと向かった。到着した石和の町は大勢の湯治客でにぎわっている。服装も東京からの客が多いせいかどこことなくきらびやかである。女性は丸髷を結び、帯にも羽織にも下部では見かけない派手な柄も見受けられる。良子は精一杯おしやれをして来たつもりだったが、自分が何だか山出しの田舎者のようで軽い引け目を感じた。

旅館に着くと番頭が飛び出て来て、事前に聞かされていたのか、

「これはようこそ、この度は不思議な縁ですね。よろしくお願いますよ」

と挨拶する。如才ない客あしらいで帳場へと案内した。主人らしき人が、

「これは、これは幸太さん。遠いところをさぞお疲れでしょう。すぐに部屋に案内させますからまずはそこへおかけ下さい」

と席を勧めた。

着いた翌日から幸太、恵吉は宿名の入った法被を着、波江と良子はたすきがけに宿名入りの前掛けをし、宿の一員となって懸命に働いた。これから下部でやる仕事は人に雇われてする仕事ではない。これからやろうとする旅館の成否は自分たちの双肩にかかっている。その意識がここ石和での宿の過酷な仕事をなんでもないものにした。波江と良子は布団の上げ下ろしはもちろん、拭き掃除、客の送り迎え、配膳と独楽鼠のように動き回った。幸太は帳場を手伝い、風呂の掃除、庭木の手入れと余念がなかった。

恵吉は本人の強い希望で板場修行をさせてもらった。宿の真似事をしていたから包丁を使う事には慣れている。板前たちもずぶの素人ではない恵吉の手伝いには、足でまといどころか人手が一人増えたことに多忙な板場としてはずいぶんと助かり、ありがたがった。

仕事熱心な恵吉は遅くまで起きて今日覚えた料理の献立をメモし、板長の訓えを思い出し手帳に書き留めていた。こうして四人が無我夢中の中、下部も前へ前へと進んでいた。

その下部では、辰造親方のやる旅館の敷地で地鎮祭が行われていた。場所は太岩館の並びである。太岩館の店主も大喜びだ。

「親方がよくぞ思い切って旅館業に手を出してくれたと思うよ。口はばつたいがどんな事でも力になるよ」

「大岩さんがそう言うってくれるのは心強い。何しろやるのは

素人ばかりだから」

「初めは皆素人だよ。私だってそうだったんだからね。何とかなるもんだよ」

「村長から聞いた話だが、石和の方から旅館をやりたいという話が来てるそうだね」

「耳には入っている。石和の旅館主たちが役場と話し合ってるらしい。話がうまく行けば何軒も旅館が建って、ほんとにぎやかな温泉街になるかも知れないね」

いよいよ建前の日が来た。旅館名も辰造親方の発案で「舟運館」と決まった。いづれ廃業となる波高島の舟運を惜しんでの命名である。誰しもが「いい名」だと言ってくれた。建物の骨組みが成り、床板の張られた二階に辰造夫婦をはじめ、船頭らと関係者の顔が並んだ。建設も急ピッチで進められ、ほぼ骨組みが出来上がり三カ月も過ぎた頃、幸太ら四人が厳しい修行を終え下部に戻ってきた。辰造親方は幸太、恵吉の顔が引き締まっているのを見た。波江も良子も短い期間ではあったが、石和の繁華に揉まれたのか山出しの女房の顔ではない。四人は、建物は骨組みだけはあるがそれぞれの思いでじっと見上げていた。幸太には完成した舟運館のイメージが思い描ける。この建物の中で走り回る自分の姿を思い浮かべると、身震いする緊張感が体の中を走った。

それから六ヵ月後、完成した「舟運館」の大広間で祝宴が張られ、辰造は、

「やっと完成した。もうすぐ身延まで線路が来る。こんな喜

ばしい事はない。今日は遠慮なく楽しんでくれ」

と相好を崩し心から喜んでいようだった。

身延線はまだ工事半ばだったが突貫で進められている。その中、舟運館は開業の日を迎えた。噂を聞いた近在の人で舟運館は賑わった。四人の石和の苦勞が身を結んだ。小さな失敗はいくつかあったものの、知らない人の目にはこの四人は永年この仕事に携わっている玄人として写っていた。

それから二年後、ついに身延駅が完成し、線路はさらに北へ北へと延びていっている。

身延駅舎完成の祝いは、村をあげて紅白の提灯行列まで繰り出した。その一番列車が身延駅に滑り込んで来る。辰造らは駅前で、幟を手手に今か今かとその到着を待っている。

蒸気機関車が身延駅に迫って来た。白煙を吹き上げ、「やって来ましたよ！」と叫んでいるような、「ボーッ！」と山間に大きくこだまする警笛を聞くと、辰造は思わず堰を切ったようにあふれる涙を止めることができなかった。

多くの迎えの人たちが幟を振って出迎える。三両の客車を従えた列車は多くの乗客を身延駅へ降ろした。この後参拝を終えた客の多くが下部温泉泊まりとなる。大岩館と舟運館、後発の旅館が争うように客引きをしている。幸太も恵吉も印半纏を着て、

「今日のお泊りはどうぞ舟運館へ」

と声を限りに張り上げていた。

夕方到着した客と参拝を終えた客は馬車に分乗し下部川沿

いに緩い坂を上って行く。

「やあ静かなよかとこですなあ」

「いい湯が出るらしいですよ」

などと駿河方面からの客たちが口々に思いを吐露していた。舟運館の玄関には女将の波江をはじめ良子ら仲居が居並び今日の泊り客を迎えた。開業以来最多の客数である。ごつた返す客に、恵吉ら板場の者まで総動員で右往左往して客をさばっていた。

辰造は親子三代勤めた舟運の幕を閉じた。

船頭たちは身延線工事に携わっていった者、舟運館に雇われた者、辰造の口利きで甲府に職を得た者それぞれである。辰造は彼らの行く末の配慮をし見届け、これを機に隠居した。波高島近くの屋敷を処分し、舟運館敷地内に小さな隠居部屋を建て夫婦で住むことになった。

身延駅が出来た事によって、東海道線を利用して東西から観光客がどっと押し寄せてきた。身延山は鉄道が出来た事によって、今までちょっと遠くて難儀でと言っていた遠方からのお年寄りも、身延山詣でにどっと繰り出した。

「身延山詣でをして、夜は下部温泉」が極楽、極楽と言われるほど人気を博した。

辰造夫婦が、「やれやれ船頭たちの身の振りもうまくいった。やっとこれで肩の荷が降ろせる」と思ったのも束の間、幸太は辰造夫婦に、「人手が足りなくて大変だ。猫の手も借りたいと昔の人はよく言ったものだ」と謎かけみたいな事を

言った。辰造は、「やっと楽が出来る」と思ったものの、幸太の遠まわしの「手伝ってほしい」の婉曲な願いがうれしかった。元々働き者の辰造夫婦は、次の日から自ら進んで庭木の手入れや敷地内の掃き掃除などをし、時には仲居たちに交じって客の出迎えなどもしていた。そしてお互い顔を見合わせにつこり笑い、「当分隠居はお預けだな」などと言っていた。

鉄道会社の宣伝も人気に拍車をかけ、大岩館と舟運館の二軒だった下部温泉に石和からだけでなく都会からの資本も入り、次々と下部川左岸沿いに旅館が建てられていった。ひなびた温泉という言葉があてはまらず下部温泉街と呼ばれるようになっていった。

七年後、下部駅（のちの下部温泉駅）の開業により下部温泉は押しも押されもせぬ温泉街を形成していった。

身延山参詣を終えた私たち夫婦は、今日の宿下部温泉へと向かった。下部温泉駅からタクシーに乗り、下部川沿いの緩やかな傾斜を進んで行った。しばらく行くと「下部温泉街入口」の看板が目に入った。右手に共同温泉風呂がある。道幅がだんだんと狭くなり、左右に旅館が立ち並び温泉街の雰囲気が一気に押し寄せてきた。古い建物も数多くあり、歴史の重さを感じさせる。

橋を渡ると私たちの今日泊まる「舟運館」の建物が目に入り玄関で車は泊まった。と同時に仲居さんらしき人が二人出向かえ、「ようこそいらっしゃいました」と旅の労をねぎら

つてくれる。建物を見上げると老舗旅館らしく、あたりを睥睨するかのような重厚な三階建ての建物が歓迎してくれてるようだった。

私は富士川舟運に興味があったので、ネットで調べこの旅館名に惹かれたのでここを予約した。二人では充分過ぎる広さの十畳の部屋に案内された。リフォームされたのか建物の古さに比べ、まだ畳の香残る新築かと思われるきれいな部屋だった。縁側の窓を開けると、眼下に清流をたたえた川がザッザッと心地よい波音を立てて流れている。

私たちは露天風呂に行くことにした。河岸の一段高いところにはそれは設えられ、川の流れが一望できるようになっていく。熱くもなくぬるくもなく丁度よい湯加減である。湯けむりの中、私は岩を背に、山の端に隠れた太陽から木漏れ陽がキラキラと川面に反射しているのを、体中の幸せを感じつつ眺めていた。風呂から上がり食事までの一時をロビーで休息することにした。

ソファアがいくつも置かれた広いロビーの一角に座りタバコをくゆらせていると、ロビーの奥に額縁に入れられた写真が飾られているのが目に入った。何の写真だろうと思って近づくと、画用紙大のセピア色になった一葉の写真である。建物を背にして、おそらくこの旅館であろう前で十人ほどの人が写っている。女性は髷を結っている。服装からしてずいぶん昔の写真であることが分かる。

私は興味深く、食い入るように見入った。

写真の下には何やら説明書きがありそれに目を通そうとした時、後ろからふいに声をかけられた。振り向くと、到着の時挨拶のあったこの宿のご主人である。

「ずいぶん真剣にご覧になられていますね」

「ええ、歴史に興味があるものですから」

「それはこの旅館が創業された時の記念写真なんです。私の先々代の創業者の人たちなんです。先々代は舟運業をやっていたんですが、それが廃止されて旅館業を始めたんですね……素人の集まりで最初は苦労したみたいです」

私は説明書きに目を通した。そこには簡単に富士川舟運の興亡が記されていた。身延線開通による舟運の終焉とともに、その舟運の家族らによってこの旅館が興された事も書かれてあった。さらに写っている人物の紹介がされていて、そこには何某辰造とその妻、幸太その妻波江、恵吉その妻良子の名が見えた。

私にはその人たちがどういう人たちであったのか知る由もないが、舟運から旅館業に転身した不安を感じさせない笑顔の面々がそこにあった。末尾に大正七年三月吉日と記されていた。

(中区)

「入選」

大江戸弓始末

生田 基行

嘉永七年（一八五四）閏七月、秋とはいえまだ日差しは強く暑い日であった。抜けるような青い空に入道雲が湧き出して、江戸の家並みの薨は日を照り返して光っており、街道の木木からはいまだに蟬の声がやかましいほどに聞こえてくる。その街道は、このところの晴天で埃っぽく、草鞋穿きの足下は白く汚れている。

時刻は四ツ（午前十時）を過ぎるころ、濱松藩主井上河内守正直の一行は行列をなして高輪の大本戸をこえ、江戸市中に入った。大名行列とはいっても、濱松藩五万石では三百名ほどのものでしかない。その藩主井上正直にしてみれば、昨春以来の江戸へ戻ったわけで、帰ってきたなというくらいのものである。井上正直は江戸の藩邸で生まれ育ち、濱松へはこれまで三度の帰国をしている。

沿道では庶人たちが「井上鷹の羽紋」といわれる、鷹の羽八枚を円形に配した紋所により、この行列が譜代大名の濱松藩井上家であると知る。このたびの出府は、十七歳になる藩

主井上正直が十三代將軍家定に初御目見をするためである。その列の中に四年前、藩の弓術の試合で結末に涙を吞んだ、井沢家の入り婿、源次郎も藩主に供奉^{くぶ}している。源次郎は、濱松藩の下級武士が練磨する弦友舎の三羽烏であり師範代でもある。藩内では勘定方に勤め、今年二十代のなかばとなり、禄はやや増えて七十石となっている。

四年前のその試合の結果は上級武士の集う経誼館側が勝ちをおさめ、堀川と村中、久根が江戸に出て、富岡八幡宮の東にある三十三間堂で、諸国より勝ち抜いてきた者たちと弓の腕を競った。結果はまずまずの五番であった。

源次郎と同じ弦友舎で同年の村田左京、鈴木清三郎も前後に歩きながら、江戸の殷賑さに心を奪われている。往來をゆく武士や庶人の多さは、濱松とは比べものにならない。ただ、江戸の特徴であるのか、武家の姿が目立つ。

やがて左手に芝の大寺を見ながら、

「おい、源次郎、この人の出はなにか、祭でもあるような混みぐあいじゃないか」と左京が増上寺の門前を見ながら言った。参詣人であろう

か、石段の周りでは人人が途切れることなく行き交っている。大変な人出である。

「うむ、とくに何かの行事でもあるとは思えないが、江戸とはこのようなものではないのか。人がどこから湧いてくるようだな」

そのとき、右手海辺に近いあたりで鉄炮の音が聞こえた。

「む？」

源次郎は驚いてまわりの同役の顔を見ると、うしろにいた江戸詰めひでらの経験のある清三郎が、

「うむ、あれは勘定吟味役をおつとめなさる江川英龍ひでらさまのお屋敷だな。六年前は鉄炮の音はしなかったと思うが」

と小首を傾げて言った。

幕臣江川英龍は屋敷の海側に鉄炮の稽古場を設け、日々炮術の調練をしているらしい。それにしても、このような町中で物騒な気もすると源次郎は思ったが、庶人も平気を装い、また隊列も乱れることなく、そこからおよそ半刻（一時間）ほど、巨大な千代田城（江戸城）を左に見ながら進んだ。源次郎たちはこの道中で多くの城を眺めてきたが、この城の威容には、江戸という町の持つ特異さにあらためて複雑な思いがした。

武士という階級は、知行所から上がる、あるいは祿される米によりその地位が保たれているといっている。また、およそ人口に占める武士の割合はほぼ一割である。この時代、わが国の人口はほぼ三千万人であるから、武士階級は三百万人となる。しかし江戸においてのその比率は五分に近い。江戸の人口に対し、米の生産者集団が不足し、いきおい諸国から米を集めて蔵に入れなければならない。そこに札差が活躍する場があるのだが、非生産者集団である武士はこの時期、とくに下級武士にあつては生計がますます苦しくなっていた。それは商業者を中心とした産業の発展であり、貨幣経

済である。武士にとっては米が貨幣であり続けたが、元禄のころの一両の貨幣価値がこの時期には三分の一以下に下落していた。江戸では大名や旗本などが札差から米を担保にして金を借りていた。中には翌年の米までを担保に入れる始末であった。むろん、それは諸国であつても同様のものではつた。

行列が進むにつれていよいよ通りは繁華になり、商家が隙間なく立ち並んでいる。店前に出した大暖簾の裾を紐で石に固定し、海風が入るよう戸は開けてある。源次郎はもの珍しさに、首を回してきよろきよろするのは見苦しいので、目だけで辺りを見渡した。

掘割に水が流れるように、通りには多くの人の流れがある。その人の流れに沿って行列は日本橋の下流にある江戸橋を渡った。この掘割は後に日本橋川と言われる。渡つてすぐ右に折れ、また二つの小橋を越え、細い掘割に面した濱松藩上屋敷に到着した。そこは大川（隅田川）の西側で、後に浜町と呼ばれている。大川の河口に近くても、屋敷の向きがよろしくないのか海風のとおりが悪く暑い。

一行のうち藩主並びに重役、それに上士はこの上屋敷に宿すことになる。井沢源次郎たち下級武士およそ二百名はさらに大川堤に出て、新大橋を東に渡る。新大橋は長さ百十六間（約二〇八メートル）とあるので両国橋より長いものである。橋を渡った広場のつきあたりには御粉蔵があり、その南、小名木川に沿った深川元町に中屋敷はある。

「源次郎、腹がへったな。飯はまだか」

と左京が口をとがらせて言った。時刻は九ツ（午後零時）をかなりまわっている。

「うむ、それに喉も渴いてきた。冷たい茶でも呑みたいものだ」

と清三郎も顔を四角にして言う。

「まあ待て。出府の挨拶もしなくてはならん。飯はそれからだ」

源次郎がそう言いつつ中屋敷の門の前まで来ると、中屋敷の用人である、中年のいかつい顔をした酒井義直が五名の武士とともに迎えに出ていた。

「それがしが用人の酒井義直でござる」

道中御苦労であった、と劳いの言葉をかけた。源次郎たちは用人のあとに続いて屋敷うちへ入ってゆく。

五日後、すでに主だった先へ挨拶を終えた藩主井上正直のもとへ、閏七月二十三日の大安に登城し、將軍家定に拝謁するようにとの連絡がはいった。藩主とともに登城するのは、江戸家老大沢又八郎ほか上士十名ばかりの者たちで、源次郎など下級武士はその日は非番となる。大沢又八郎は国家老大沢源五郎の弟で、藩主正直とは姻戚関係にある。

登城の日、五ツ（午前八時）の鐘を合図に一行が城に向けて上屋敷を發った。源次郎も左京、清三郎と中屋敷から駆けつけ多くの者たちと見送った。駕籠は水野周防守の屋敷を右にとって北に向かい、大伝馬町の角を西に行く。その広い通

りの突き当たりに常盤橋御門があり、そこから城内へと入る。

源次郎たちは見送りを終えて中屋敷に戻ろうかと思ったが、今日は非番であるので、

「左京、清三郎、三十三間堂に行ってみないか」と源次郎が二人に声をかけた。

「うむ、四年前はまことに残念であつたからな。この目でしかと見ておきたいの」

左京が答え、四角顔の清三郎も頷いた。

三人は上屋敷から南に向かい永代橋を渡つて東に行く。少し前には霧が出ていたようだが、今は大川の水は朝の光を波間に受けてゆつたりと流れている。そこには荷を積んだ多くの川船が往き交っている。門前仲町に出、永代寺を左に見て広い通りを歩く。まだ早い時刻ということもあつてか、人の通りは少ない。門前には茶屋や土産ものを売る店が立ち並んでいる。商いはこれからとみえ、品物を店の前に並べ始めている。その店頭には小さな暖簾が風にはためいている。

大樹に囲まれた永代寺に並んで富岡八幡宮があり、その東側に三十三間堂があつた。こもやはり大きな木木に囲まれており、また南におよそ三町（約三三〇メートル）ほどすぐ海であるため、夏の残りの海風が心地よく吹きわたっている。

三人は三十三間堂の南門から入り、南北に長い堂の前にある道場へ向かった。向こうからは稽古を終えたのか、弓矢を担いでくる者が二人歩いて来て、軽く会釈をしてすれ違う。

その通路を掃いている三人ばかりの中に住持らしき者がいたので、

「お早うございます。私どもは濱松藩井上河内守正直家中の者で、井沢源次郎、またこちらは村田左京、鈴木清三郎と申します」

源次郎が道場の見学に参った旨を伝えると、

「そうですか、私はこの三十三間堂の住持で快雲と申します。あなたたちもやはり弓を引かれるのですか」

と住持が言い、源次郎が左様ですと答えると、道場への道を快く案内してくれた。

「今朝は異人さんが来られて弓を引いておられますぞ」

と住持は言葉が続けた。

「異人さんですと？」

三人は顔を見合わせ、はて異人とはどのような弓を引くものか、と興味津津で道場に向かった。

やがて矢を放つ音、的に中る音が響いてきた。道場の入り口の立派な看板には「弦秀館」と黒黒と大書されている。その前で快雲住持に礼を言ってから、

「失礼つかまつります。見学に参りました」

と声をかけつつ中に入ると、道場の中は思いのほか広く、射位が左側で、右手にはいちだん高くなった床があり、畳が敷かれている。射位では十人が並んでもまだ余裕があるほどであった。また壁際には練習用の巻藁が五基並べられている。その巻藁に向かって、羽根のない巻藁用の矢を放つ若侍

も三名いた。畳床に座っていた品のいい五十年配の、館長であるうか、

「どうぞ、こちらの畳をお使いなさい」

と言って、源次郎たちをちらと見た。

失礼いたしますと言いながら、源次郎たちは畳床に座って一揖した。館長と思しき人物は、顔は目の前の矢を放ったばかりの武士を見ていた。その武士の後ろ側で弓を引いているのが異人で、髪は紅く、いでたちも見慣れた袴姿ではない。それも珍しかったが、源次郎たちはその男の変った弓に見入った。通常使う弓は長さが七尺二寸（約二二一センチ）に對し、その弓はおよそ短いものである。

「これが噂に聞く洋弓というものか」

角顔の清三郎がやや首を捻りながら、熱心に弓を凝視して呟いた。

「うむ、初めて見る弓だが、小さいものだな」

と左京も頷き、源次郎も仔細に観察している。

わが国で發達した弓は、外国のそれに比してなぜか長大なものになった。騎乗して使う半弓と呼ばれる弓でも六尺三寸（約一九一センチ）であるが、異人の弓はそれよりもまた一段と短い。洋弓は五尺三寸（約一六〇センチ）ほどであるが、放たれた矢の速さは見ている限りどちらも変わらないように見える。だが異人の放つ矢は的中率が高く、ほぼ正確に的を射抜いている。

やがて一息入れるよう二人が畳の座に戻ると、あらためて

挨拶を交わし、

「見学をさせていただきますました、濱松藩井上河内守正直家臣、井沢源次郎にござります。またこちらと同じく村田左京、鈴木清三郎にござります」

と源次郎が言った。

「わたしはこの弦秀館の館長を務めております、三矢平四郎と申します。濱松藩と申されますと、梅木先生か河内先生のご門下でござりますか」

「はい、梅木門下でございます。師匠をご存知でございますか」

「ええ、昔のことですが、梅木先生もここ弦秀館で弓を引かれたことがあります」

と三矢平四郎は言ったが、それは知らなかったと三人は顔を見合わせた。

「梅木先生は息災でおられますようか」

「はいおかげさまで元気にしております」

と清三郎がいった。そのあと三矢平四郎は、ついであるがしこの二人を紹介いたしましょうと言い、二人に目であうながし横に座らせた。

「僕は」

と、この武士は最近流行りだしてきた一人称で、旗本の中濱萬次郎ですと名乗った。

「こちらはジェイコブ・ヒュースケンと申し、この一月にわが国を再訪された亜米利加のペリー提督の通辞です。提督は

先月、印度に戻るになりましたが、彼は日本国に残ったのです」

と萬次郎がヒュースケンを紹介した。

「ヨロシクオネガイモウシマス」

とヒュースケンが辞儀をした。ヒュースケンは彫りの深い顔だちであるが、目もとは人懐っこい感じがした。

中濱萬次郎は、元は土佐の漁師で、漁に出ているとき颪風（なみかぜ）に会い、仲間四人と無人島の鳥島に漂着し百四十日余りの後、亜米利加人の船長ホイットフィールドの乗り組む捕鯨船ジョン・ハウランド号に救助された。亜米利加で十年を暮らし、嘉永四年（一八五一年）、日本に戻ることできたのである。江戸に来てからは語学の能力を認められ、英語に関する通辞をしていた。またペリーとの交渉の席にも就けられる予定であったが、阿蘭陀語の通辞がその功を妬み、あるいは立場を失うことから退けられてしまった。今は江川英龍の配下であるが、ヒュースケンの面倒もみている二十七歳である。

ジェイコブ・ヒュースケンは阿蘭陀人で、後の安政三年（一八五六年）に来日することになる、タウンゼント・ハリスの通辞として活躍するヘンリー・ヒュースケンの従弟である。（このヘンリー・ヒュースケンは従弟の話聞くか、あるいは手紙によってか、日本という国に大変な興味をそそられたようである）

提督ペリーに従って、ヒュースケンが英語を阿蘭陀語に直

し幕府役人と交渉することは、ペリーにとつても実に齒がゆいものであつたらしく、癩癩を起していたことも記録に残っている。だがヒュースケンはどういう訳か、日本国を気に入つたようで、言葉の通じる萬次郎とよく連れだつて出歩いてゐた。そのうち、弓の名手らしいとの噂が立ち、黒船の甲板から、飛んでいる鳥を射ち落としたなどという話も聞かれた。時に二十五歳であつた。

「先ほどから拝見していましたが、ヒュースケンどのの弓は大変短うござりますな。外国ではそのような弓が普通に使われるので?」

源次郎が尋ねると、ヒュースケンが何事か萬次郎に聞くそぶりを示し、代わつて萬次郎が、

「はい、この弓は日本国では洋弓と呼ばれ、亜米利加や阿蘭陀ではおよそ通常の弓として使つております。もちろん国によって多少の違いはありますが」

よろしければ手に取つてご覧だされ、と萬次郎がヒュースケンから弓を受け取り、源次郎に手渡した。三人はもの珍しそうにしげしげと見た。その弓はわが国の弓と同じく竹でできているが、短い分だけ軽くまた扱いも容易なように思えた。ただ大きく違うのは、わが国の弓は矢を番えるときに弓の握りの外側（親指側）であるのに対し、洋弓では内側（人差指側）である。わが国の弓では、弓手（左手）を伸ばしなからやや左外側に力を按分するので、放つた後の弓弦が弓手の外側に回る。それに比べ、洋弓では弓はそのまま真直ぐに

押し込んでゐるようであつた。ともかくも、そのような違いはあるが、的中の精度は練磨稽古によるのは論をまたない。

萬次郎は弓を受け取つてヒュースケンに戻すと、

「今朝は江川屋敷からこの先の木場まで所用があつて参つたのです。近々屋敷の手入れがあるものですから、材木の下見に」

と萬次郎が言つた。

「江川屋敷と申されると、あの増上寺の東でございますか? 徒では少々遠くはござらぬか」

源次郎が尋ねると、

「いや、屋敷の東に舟着場がありますので、それに乗つて佃島を迂回して参りました」

「なるほど舟でございましたか。江戸はまことに水運の發達した所でございますな。私どもは江戸に初めて参つたものですから、これからゆつくりとあちこちを見てまいろうと思つております」

と源次郎が言つた。

「それならば、舟を使われるのも一法ですぞ」

と言いながら萬次郎は起ちあがり、

「それでは源次郎どの、私どもはぼつぼつ帰らねばなりませぬが、このつぎは是非お手前の弓を拝見したいものです。また折があればお会いしましょう」

そう言つたあと萬次郎とジェイコブ・ヒュースケンは道場をあとにした。見送りながら源次郎の耳には、先日増上寺の

あたりで聞こえた鉄炮の音に対しての奇妙さがよみがえった。弓の稽古と鉄炮の調練では不釣り合いではないかと思っている。

二人が出て行ったあと、三矢平四郎は、

「いま射った二人の的をご覧になると、参考になるものがあるかもしれないぞ」

と言って退室したあと、三人は安土に向かった。

清三郎が安土に行き、的を見ながら顔を四角にして言った。

「この中りの正確さはどうだ。全部とはいかないが、図星のまわりに集中しておる。大したものだ。ヒュースケンとやら、なかなかやりおるの」

左京も的を見ながら、

「うむ、よく中っておる。しかし矢が安土にめりこむ深さは少し浅いようだな」

すかさず清三郎が、

「なるほど、すると洋弓とわれわれの弓とは見たところ速さは変わらないが、貫通力が違うということになるか」

と相変わらず理屈っぽいことを言っている。源次郎はこの様子を見て、彼我に弓の違いはあるが道場で射つということであるなら、的中させることには差が無いであろうと思った。

まもなく九ツになるので三十三間堂を北に出て、仙台堀を西に歩きながら、冬木町にある一膳飯屋で軽く昼飯を喰った。喰い終わって清三郎が、もう少し町中の様子を見ようではないかと言いながら歩き出した。藩中屋敷の東側を北に行

き、堅川の二つ目橋を渡って回向院を見てまわり、大川に沿いながらのんびりと中屋敷に戻るとすでに夕刻であった。ようやく傾いた夏の終わりの日差しが大川を白っぽく染め、対岸の家並みを金色に光らせていた。

源次郎は江戸で始めた暮らしについて、故郷に残してきた妻女の多恵とその母里江にまめに手紙を出している。それに二歳になる娘由美に何を送ってやったら喜ぶだろうか、などと思案する子煩悩でもある。また三十三間堂に行くことがあったら、永代寺か富岡八幡宮あたりの土産物屋で何を買おうか、などと思いつつ夕飯を喰った。

八月もなかばになり、朝夕の風に秋の気配を感じるようになった。その日、勤めが終わると、先日見てきた三十三間堂の道場弦秀館に魅了されているのであろうか、左京、清三郎と連れだつて近くの南森下町にある飲み屋「伊豆屋」に出かけ一杯飲むことにした。話題はむろん三十三間堂に集中し、通し矢などはいかがであらうか、などと話が弾んだ。「伊豆屋」の五十がらみの親爺多三郎はちよくちよく三十三間堂に行くらしく、時おり口をはさんでは女房のまさに注意されていた。

それからほどなく、源次郎たち三人は用人の酒井義直に呼ばれ、明日八ツ刻（午後二時）、上屋敷に参るよう言いつかった。委細は江戸家老大沢又八郎から説明があるという。三人は顔を見合わせ、何事であらうかと訝った。

翌日、上屋敷に参り家老に会うと、

「じつはご公儀の勘定奉行をされている川路聖謨^{としあきら}どのから、わが殿に弓術の試合をという話がござった。というのでも川路どのは、殿の先代正春公が老中をお勤めなされているときから昵懇のあいだ柄であつてな、なお川路どのは江川英龍どのからのご依頼のよしにござるそうだ」

話をつめていくと、萬次郎がヒュースケンから弓術の試合ができないかと相談を受け、萬次郎は主人にあたる江川英龍に話を持ちかけたということであつた。その話が巡り巡って濱松藩にまわつてきたとは、源次郎は弦秀館で会つた彼らに浅からぬ因縁を感じないわけにはいかない。むろんヒュースケンも今のところ相手が誰になるかは知るよしもない。また大沢家老も、七月に弦秀館で会つたあの二人と、源次郎や左京、清三郎が面識のあることを知らなかつた。

「ご家老、ではヒュースケンどのは相手が誰であろうとも試合ができればよろしいかと？」

と源次郎が言うと、
「うむ、そうらしい。ともあれこの話はお断りできぬと思うが」

と言つたあと、

「さすれば承諾したのち、こちらの人選を報告することになる。幸いわが藩には、そちたちがおるので心強く思うが」
と江戸家老大沢又八郎は早くも試合を進める氣でいる。

源次郎は、先に弦秀館で見たヒュースケンの腕前に驚嘆しており、そのことを家老に話そうかと思つたが、臆している

かと思われるのも癪なので、やや思案する格好をしたあと
「かしこまりました。で、ご報告はいつまでになさるのでございますか？」

「うむ、この九月の晦日までにということになっておるようだが、早いほうがよろしいであろう」

「は、ではわれら一両日中にでもご返事をいたしまする」

と言つて源次郎たちは上屋敷を退出し、まだ明るい時刻であつたが料理茶屋「みその」に向かつた。「みその」は富沢町にあつて、江戸湾の活きのいい魚を喰わせる店である。親爺は彦次郎といつて四十を二つほど出た腕の良い職人肌で、女房のはるは器量も申し分なく愛想も良い、たいそうな女将である。三人は女中の案内で奥に通され、そこは手入れのゆきとどいた内庭がよく見えるきれいな小部屋であつた。本来なら下級武士が使うにはもつたない店であつたが、この談合にはやむを得ず、むろん財布の中身を確認してから入つた。
「さて、いかがいたそうか」

と源次郎が切り出した。

「うむ、折角のお話であるので、わしはやつてみたいと思つが、しかし事と次第がいかなることになるのかよくわからぬ」
と清三郎が言つた。

「なに、勝てば恩賞のひとつやふたつは出るのではないのか。まさか負けたら腹をめされよ、などと云われることもあるまい」

と左京が明るく言う。が、源次郎には少し腑に落ちないも

のがある。相手は腕のたつ異人であり、またこの話がわが濱松藩にされたというのは名譽なことなのか。試合となれば、結果によっては幕臣である旗本や御家人が相手では具合が悪い、と川路聖謨どのは考えたのか。ご家老はああ言ったが、万一負けるなどということになればお家の一大事にかかわるか、はてはわれら下級武士は簡単に処分されることもないとはいえない。などと思うと酒の味がわからなくなっている。

「源次郎、わしにもまだよくわからないところがあるが、この話はとりあえずわれらがお受けしなければ、ご家老もましてや殿も具合の悪いことになりはせんか。ここは肝をきめてお受けしようではないか」

と清三郎が、まだ迷っている源次郎に言う。源次郎はその迷いを二人に話してみたが、どうも疑念を払拭しきれない。わからないことも多くまだためらいもあったが、

「うむ、しからはお受けするといいたすか。われら三人であればめったなことでもないであろう。お受けするとなれば、早めにご家老に報告し、充分な稽古を重ねなければなるまい」

と源次郎が言うと、左京も、

「そうだ、これまでも試合となつて負けたなどということはないからな」

また明るく言つて酒を呑みほした。

「みその」を出ると六日目の上弦の月が南の空に輝いていた。通りに面した店ではすでに軒行燈に灯がはいり、庶人が家路へと往き交つていた。新大橋を渡りはじめると、大川に

は半月がきれいに映えて揺れていた。

二日後、大沢家老に会い、試合を引き受けることを言上した。家老は、

「そうか、うむ。それでこそ弦友舎の三羽鳥であるな。殿もお喜びになられるであろう」

「ところでご家老、相手のヒュースケンどのと組まれる者はどなたにございましょうや？」

と源次郎が問うと、

「まだ決まつてはおらぬようだが、ヒュースケンとやらの同役であるらしい」

「と申されますと、船乗りでございますか」

「うむ、その者たちも短い弓の達者であると聞いておる。手強いかもしれぬ」

と家老は言いながら、腕組を解くと、

「お、そうだ。そちたちの弓と矢を新しくするのであれば、弓町の駿河屋甚三郎の店に行くとよい。その店はわが濱松藩と昔から馴染みが深いでな」

大沢家老は言い、金のことは心配するなと付け加えた。弓師甚三郎は、源次郎たちの師匠である梅木清左衛門と旧知の間柄で、温厚な人として知られている。

大沢家老と面談したあとの九月十五日、大安の日を選んで、源次郎たちは日本橋を渡つて広い通りを南に向かった。間もなく京橋があり、ここを渡つて広場になったところを右に曲がった。その左はもう弓町で駿河屋はすぐにわかった。

なかなか構えの大きな店で、手代がすぐに入口まで出てきて、いらつしやいませと招き入れた。源次郎が名乗ると、手代は奥の座敷に案内し番頭を呼びに行った。番頭はまだ三十前の若い細面の男であつた。

「手前は番頭の栄之助にございます。いつも濱松様には、たいへんお世話になっております。あるじの甚三郎はただいま、お城に所用があつて留守にしておりますが」

と当主甚三郎の長男である番頭が言つた。

この駿河屋というのは幕府御用達の弓師で、栗林という苗字を許されていた。帯刀のほうも許されていたようである。そこで三人は自分たちに適つた弓と矢を新しく揃えることにし、そのまま駿河屋の裏にある道場で早速試し射ちをした。弓の撓り具合といい、矢の走りといいすばらしいものである。さすがに江戸の弓師と思うが、じつは諸国からいいものを選んでこの江戸に持つて来るのである。この当時、江戸という町に必要と思われる物産を、陸路であれ海路であれ運び込めばそういう商売になつた。

番頭の栄之助は、

「使い心地はいかがなものでございましょうか？ もし不具合がございましたら何時でも仰せつけ下さいませ。お直しをさせていただきます」

などと言ひ、ご請求はのちほど上屋敷に伺いましょうということになつた。藩の公費である。話をしているうちに当主の甚三郎が帰つてきた。

「梅木先生はお元氣であられますか」

と、いかにも大店の旦那といった風情で濱松のことを懐かしがつた。栗林甚三郎は、元は尾張の武士であつたが、その若いころ諸国を巡つていて濱松で梅木清左衛門と出会い、弓の教えを乞うことになつた。甚三郎は清左衛門より八歳年下であつた。後に甚三郎は武士を捨て、弓師になるため江戸に出た。今は駿河屋の屋号で店を構え、旦那として商いをしてゐる。年は五十にまだ三年ほどあるが、髪はなかば白くなつてゐる。

源次郎たちは、甚三郎の昔の話がひととおり終わると、冷えた茶をがぶりと呑み駿河屋を出た。その足で三人は弓矢を買い求めたことなどを大沢家老に報告し、中屋敷に戻つた。

次の日から三人は、手が空けば上屋敷の中に設えてある弓道場でさかんに弓を引いた。真新しい弓と矢はまだ手になじまないが、矢の走りなどは目を瞠るものがある。

「源次郎、やはりナニだ。新しい弓はいい。矢を放つ瞬間、弓の撓りが確実にこたえてくれる」

と清三郎がめずらしく感情を面に出して、歯を見せながら言う。

「うむ、まだ手にしつくりこないが、古い弓とはずいぶん違うものだな」

と源次郎が言いながら、左京を見ると、

「おい見てくれ。このすばらしい矢羽根はどうだ」と言つて鷹の羽根をつけた矢に見入つてゐる。左京の選ん

だ矢四本のやや小ぶりの羽根は、硬くもなく柔らか過ぎずの逸品といつていい。むろん矢の走りも安定感がある。この時代、弓矢はすでに武器というより工芸品あるいは美術品にちかくなっている。そのため随所に弓師の感性が顕われ、その美しさに洋弓は遙かおよばない。

源次郎たちが稽古に熱中して幾日か過ぎた日、上屋敷の用人岡野善右衛門に呼ばれ、書院に行くと、

「ヒュースケンどのと組まれる他の二名はドルマンとバレントという水夫長である由、これ川路どのから伝達がござった。この水夫長たちは、ヒュースケンどのと負けず劣らずの腕前であるらしい。また日取りは十月二十六日（の大安）である。場所は深川三十三間堂の弦秀館ということになった」

心して稽古に励むよう、と言われた。そこへ家老の大沢又八郎があらわれ、

「総見役は南町奉行の池田播磨守頼方^{よしかた}どの、立合いは弦秀館館長三矢平四郎どので、看的は寺社奉行太田摂津守資功^{すけかつ}どのの家臣徳山どのと杉内どのと決まった。なかなかおごとなかたとなったが、そちたちであれば心配はなからう」

などと言った。

源次郎は、なるほどこれはおおごとになったものだわい、だが相手に不足はない、と思っている。左京と清三郎の顔を窺うと緊張感があらわれているのがわかる。それは対戦相手のことよりも、総見役や立合い人に対して身を引き締めているのだ。

「総見役が、南町のお奉行でございますか」
源次郎が尋ねると、

「うむ、この十月の町奉行の担当は、南町奉行所ということになるのだな」

と大沢家老が言った。

江戸の町奉行所はひと月ごとに北と南が交代であたつていた。その南町奉行池田播磨守頼方は旗本で、なかなかの名さばきを見せ、人望もあつかった。また弓の達者でもあり総見役にはうってつけと思われた。いっぽうの寺社奉行の太田摂津守資功は掛川藩主で、じつさいには試合の看的は家臣が当るのだが席には就く。弦秀館のある場所が三十三間堂の内とすることもあつて寺社奉行があてられた。以上が試合の役どころということであつた。

すでに試合までにはひと月とないので源次郎たちは時を惜しんで稽古をかさねた。そんななかで左京が、
「いちど弦秀館で弓を引いてみるか。やはり当日の試合場で少しは稽古しておくほうがよろう」
と言った。

「そうだな。岡野さまに頼めば、三矢平四郎どのの許可をいただけるだろう」

と源次郎も思い、早速岡野善右衛門に面会して書状を認めてもらった。

次の日、源次郎たちは書状を携えて弦秀館に向かった。深川のまわりでは、晩秋ということもあつて公孫樹などの葉は

すでに落ち、青空に雲がうつすらと広がっていた。その日は風も弱く南側からは潮騒も聞こえている。弦秀館では、以前見たときよりも多くの門弟たちが弓を引いて賑やかである。

源次郎たちが門弟の一人に声をかけ、館長に面会し、挨拶のあと書状を差し出すと、

「さようなことでしたら、遠慮なく稽古されるとよい。先日モヒュースケンどのたちがここで稽古をされておりましたぞ。弓は違うがなかなかの腕前でございましたな」

そう言つて三矢平四郎は快く場所をあけてくれた。ここ弦秀館では上士とか下士の区別をしていなかったが、よく見ていると横柄な感じの者がいて、これが旗本かなと思う。これから將軍直属の家臣団である旗本というものの、すべてが幕府のなにかの役に就いているわけではなく、三千石以上で非役の者は寄合、それ以下で非役の者は小普請といわれている。ひとくちに八万騎ともいわれるその旗本でも、百石以上五百石以下が六割を占めているので無役の小普請組や寄合は、かなりの非生産者集団を形成しているといえる。幕府もいざというときのためにこれらの組織をおいているのだが、それがために財政を圧迫している。

源次郎たちは射位に立つて、的に向かい矢を^{つが}番える。弓を引き、放つ。清三郎も左京も続く。的からは連続して快音が響く。そのあともつづけざまに快音を響かせるので、まわりの者たちも注視し始めた。三人で十二本を射ち十一本を的中させた。この弦秀館はなんとなく相性がいいのかもしれない

い。道場によつて射ちやすいところとそうでないところがあるが、これは周囲の広さであるとか、安土が近くに感じられたりなどの、道場からうける印象が強い。

「源次郎、この道場はいいな。的に矢が吸い込まれていくようだな」

左京が大げさに言うが、清三郎も、

「うむ、たしかにここは射ちやすい。床が滑らんの。今日は裸足だが、試合の当日は足袋を穿くだろうからな。足が滑るようでは踏ん張りがきかん」

「そういえば安土も手入れが行き届いているし、道場の床もすばらしいものだな」

と源次郎も感心した。

四年前、濱松藩代表の堀川たちがこの道場で諸国の精鋭と試合をしたが、今度はわれらの番である、と思うと感慨深いものがある。源次郎たちはおよそ一刻半（三時間）ほど弦秀館で稽古をし上屋敷に戻った。秋の日は暮れるのが早く、新大橋を渡るころには城は影絵のように、家並みの向こうに浮いて見える。ただ天守の上部ばかりが光っていた。

上屋敷の台所で夕飯を喰ったあと、三人は百匁蠟燭をもらつて屋敷内の道場に行った。すでに道場には誰もおらず、しんとしているなかに、蠟燭を射位に二本、安土に三本を差し、黙々と弓を引いた。晩秋の風が心地よく吹くその中を矢が捻りをあげて走る。蠟燭の光に浮きあがった的からは快音が響く。そして一刻（二時間）ほどで稽古をきりあげ、中屋敷に

戻った。

中屋敷に戻った源次郎たちは、そこで思いがけず田辺雅之助に出会った。ほかに吉川半七郎、松本伸兵衛も奥に座っていた。この三人は源次郎たちと同じく梅木門下の弦友舎に集う、藩の下級武士たちである。

「いやしばらくであつたな。こんどナニか、異人を相手に試合をするそうじゃないか」

と雅之助が言った。

「うむ、そうなのだ。やはり国元でもその話が広まっておるか」

源次郎が言うと、丸顔の松本伸兵衛が、

「家中の者は殆んど知っておるようだの。これは噂であるが、この試合に勝てば、恩賞として三名になにがしかのご加増があると聞いておる。だが敗れた場合、弦友舎はお取り潰しになるかも知れん、などと言われておる。そのため急ぎ江戸に参つた」

「なに、そんなばかなことが」

と清三郎が顔を四角にして気色ばんだ。源次郎は、

「いやあり得ないことではないな。藩としても弦友舎と経誼館のふたつを維持していくことは、今の時代むずかしからう」

濱松藩も譜代大名として幕閣では重用されてはいるが、台所は思ったほどに裕福ではない。およそ十年前、藩主として井上家が入封するとき、濱松を去ることとなった水野家は、城下に多額の借金を残していたため騒動を起こしていた。井

上家としても傍観していることもできず、その調停にあたつたことがあつた。

「われらも及ばずながら、加勢にまいった。是が非でも今度の試合には勝ってもらいたい。いや梅木先生のためにも勝たなければならん。用事があればなんなりと申しつけてくれ」と吉川半七郎は言った。

「ありがたい、持つべき者はまことに友であるな」

そう言つて源次郎は左京と、台所からこつそりと酒をもつてきて銘々の茶碗に注いだ。左京が、勝利のために、と言つたあとと皆で呑みほした。

あくる日から源次郎たちの稽古には、いつその熱がはいつた。上屋敷に設えた道場では吉川半七郎たちが、交代でみずから矢取りをかつてでくれ、源次郎たちの射つ矢数がぐつと増えた。そうした稽古に励むなか、試合までにあと十日ほどとなった十月十五日の夕刻に、中屋敷用人酒井義直がめずらしく六人に声をかけてきた。

「なかなかがんばっておるな。じつはな、わしは明夕六つ刻、『やましろ』という茶屋で」

会合があると言う。「やましろ」は上屋敷の北、難波町にありやや格式のある料理茶屋で、そこには大沢家老と行く。ついでにはそちたち六名も同行せよ、ということであつた。会合の相手は江川英龍どのとその配下、中濱萬次郎、ヒュースケン、ドールマン、バレンツの五名である。また立合いの三矢平四郎どのも同席する。弓術の試合を前にして面識を持つ

ておくことと、試合の取り決めることであつた。

翌夕、「やましろ」に着くと女中に案内されて奥の座敷へと入った。暮れ六つには少し間があつて、幕臣江川たちはまだ来ていなかった。源次郎たち下士はやや緊張した面持ちであつた。ややあつて三矢平四郎が女中に案内されて入つてきた。そのあとじきに江川たちもやつて来て一同が揃つた。互いの挨拶が済むのを見計らつて「やましろ」の主人富之助と女将のしまが座敷に入り、挨拶をかねたお礼を言上したあと酒がはこび込まれた。すでに源次郎たち三人は、中濱萬次郎やヒュースケンとは顔見知りであつたが、ドルマン、パレンツとは初対面である。この二人はヒュースケンとはちがつて、黒い髪で瞳はいくらか碧く、目つきに鋭いものがある。よく鍛えているとみえて、筋骨は逞しかつた。

今宵の会合では、ヒュースケンの主張する一人十二本（一ダース）あて射ち、一組都合三十六本とする。弓と矢はそれぞれの持ち物でよい。道場弦秀館の射位や的の位置は従来のままとする。勝敗は的中数で決する。的中同数の場合は、一組一人ずつの二人同射の射詰めとする。どちらかが外すまで続ける。両組とも外した場合そのまま続行する。などの取り決めたのだが、ヒュースケンたちは萬次郎の流暢な英語にそのつど頷いて、よく理解したようだった。

これら取り決められた条項は三矢平四郎を通して、総見役の南町奉行池田播磨守頼方や看的役の寺社奉行太田撰津守資功に届けられ、試合当日を待つばかりとなつた。この試合の

噂は弦秀館ばかりでなく、弓師甚三郎のほうにまでひろがつていった。

いよいよ試合前日となり、藩上屋敷では源次郎たちを激励するために、藩主井上正直みずから声をかけることになつた。藩主が下士に直接声をかけるなどということは、まずない異例なことであつた。その日源次郎たちは上屋敷に入つた。書院で平伏している源次郎たちにむかつて正直は、「そちたち、明日は存分にいたすように。吉報を待つておる」と言つた。

「は、ありがたきお言葉、謹んでおうけいたします」

と源次郎がこたえ、清三郎、左京も恭しく頭を下げた。

こうしたなかで源次郎は四年前、藩の弓術の試合でうけた重圧とは比べものにならないほどの緊張感があるのを感じた。その日は明日の試合に備えて三人とも稽古を早めに切りあげ、弓矢をはじめとした道具類の点検を怠りなくやつた。あとは自分の腕を信じて挑むのみである。

嘉永七年十月二十六日、試合当日である。源次郎たち六名は五ツ（午前八時）の鐘を聞きながら中屋敷を出た。ひんやりとした初冬の空は青く澄みわたり、遠くに百舌の声が聞こえる。小名木川を渡るとき右手に城が見え、その奥にはうっすらと雪をいだいた富士が望めた。さらに仙台堀を越えて三十三間堂にむかう。弦秀館に着くと館長三矢平四郎を迎えてくれ、道場の中へと通された。田辺たちは門弟らと共に、巻藁を使えるよう準備をしてきている。弓に弦を張つてい

るとき、萬次郎やヒュースケンが入って来た。互いに挨拶を交わし健闘を誓う。時刻はまだ五ツ半（午前九時）を少しまわった頃である。そこへ総見役池田播磨守頼方が、看的役太田撰津守資功とその家臣徳山と杉内が続いてやって来た。その者たちの供に来た中間者は、道場の外にある長椅子で待機している。総見役の池田と看的役の太田は道場の上座で床几に腰をおろし、その横に三矢平四郎が並んだ。源次郎たち三名とヒュースケンらは射位の後ろで座り、時を待っている。やがて三十三間堂の鐘が四ツ刻（午前十時）を告げた。

弦秀館館長三矢平四郎が、

「ではただいまより試合を始めることといたす。本日の決まりは先般の取り決めのとおりといたす。なお総見役は池田播磨守頼方どの、看的役は太田撰津守資功どので、また立合いはそれがし三矢平四郎でござる。それでは両組立たれよ」

六人が射位にむかつて進む。ヒュースケンの組が上手で、下手が源次郎たちである。「前」が清三郎、「中」が左京、源次郎は「落」である。まずヒュースケンが矢を番える。こちらは清三郎である。ヒュースケンは弦を鼻先でとどめ間合いを見て放つ。矢の勢がいい。きれいに的中する。清三郎も続いているから快音を響かせる。次がドールマンでこれも見事に的中。左京も負けじと的中。バレンツも前の二人に続き、源次郎もぎりぎり弓を引き、放つ。矢羽根が唸りをあげて的中する。両組よく当て序盤を終え十二射中、源次郎組十一本、ヒュースケン組十本であった。その差はたった一本であ

る。小休止を取って中盤に入った。この中盤ではヒュースケン組が十一本、源次郎組も十一本の同数で、ただ一本の差が続く。安土の的を見るとヒュースケン組の方が傷みがはげしい。多くの矢が的の中心部に集まっているのである。それを見た立合いの三矢平四郎が、

「終盤に入る前に的替えをいたす。暫時待たれよ」

と言ったあと、門弟たちが素早く新しい的に替えた。いつのまにか道場のうしろには弓師甚三郎のほかに、「みその」の親爺彦次郎や、「伊豆屋」の多三郎とまさも来て首をのばして見ている。

「お待たせした。それではこれより終盤といたす」

と三矢平四郎が言うのと、六名は再び射位に立ち並んだ。こまで一人八本を射ち、皆中（四射全中）連続は源次郎とヒュースケンの二人である。終盤が始まる。ヒュースケンは相変わらず見事な腕前を見せる。源次郎も美しい射型で的中を繰り返す。一組九本が終わって両組ともにすべての中している。最後の四本目になると、「中」で射っている左京が的枠に当てながら惜しくも外した。腕組みをして見ていた萬次郎も、思わず腕を解いて顔を上げた。見物している者たちからも「おー」とどよめきがおこる。うしろで見ている多三郎もまさも声を出して応援したいのだが、それは憚られる。ヒュースケン組最後のバレンツは何故か体がすこし揺れはしたが、矢は的に吸い込まれた。それを見て源次郎は最後の矢を番え弓を引き絞る。疲れはまだ感じない。弦友舎の道場と、

師匠梅木清左衛門の顔とが脳裏をよぎるなかで、放たれた矢は唸りをあげて的に吸い込まれていく。終盤まで射ち終わって源次郎組十一本で都合三十三本、ヒュースケン組十二本で源次郎組に追いつき都合三十三本の同数となった。あとはよい射詰めである。

小休止をしているあいだ、三矢平四郎の指図によつて的一組一個に替えられ、安土には真新しい的が二個並べられた。「ではこれより射詰めといたす」

三矢平四郎が言ったあと、各組は的に対し一列の縦並びとなり、二人が同射することとなった。まず清三郎とヒュースケンである。ふたりほぼ同時に放つ。快音である。次が左京とドールマンが射つ。連続して的中する。道場内はしんとして咳ばらいのひとも無い。源次郎はバレンツを横眼でちらと見ると、顔色が少しばかり青い。疲れがでてきたのであるうかと思つた。ふたりが射位に立ち、引き始める。頃合いをはかつて同時に放つ。源次郎の矢は走りがすばらしい。二つの的から快音が響く。

二巡めにはいる。清三郎とヒュースケンが射位に立ち、的に向かつて引き始めた、そのときであつた。ぐらりと道場が揺れ、立っていることができなかった。巻藁が動き、神棚からは瓶が落ちて大きな音をたてて割れた。天井がぎしぎしと軋んで、落ちた梁材の一部がヒュースケンの肩を打った。源次郎と萬次郎が、すばやくヒュースケンを抱え起こし、道場の隅に運んだ。そのヒュースケンに萬次郎が何事か話しかけ

ている。道場の外からは瓦の崩れ落ちる音のほか、ごうつと獣の咆哮のようなものも入り雑じつて聞こえる。

「お静かに願いたい。揺れはじきに鎮まるでありますよう」立合いの三矢平四郎が落着いた声で言つた。

弓術の試合どころではなくなつたが、総見役の池田頼方と看的役の太田資功は床几にかけたまま、そのほかの控えの者たちも揺れの収まるのを待った。揺れが鎮まってみると、道場も三十三間堂も、かなり破損して傾いたところがあつた。

「もはや本日の試合はこれまでといたし、両組引き分けいたします。おのおのにおかれては」

お氣をつけて帰られますよう、と三矢平四郎が試合終了を宣した。

源次郎たちは弓矢を片づけ、弦秀館をあとにすることにした。幸いなことにヒュースケンの怪我は軽く、ドールマンやバレンツの肩を借りて歩くことができた。南町奉行の池田頼方や寺社奉行の太田資功は、互いの挨拶もそこそこにして、急ぎ城へと戻つた。

源次郎は、この試合の顚末と地震についての詳細を、妻女の多恵に宛てて書状を書いた。試合での勝利を得ることはできなかったが、負けることもなかった旨、地震では怪我もなく元氣にしている由などを書き送つた。

このときの地震は遠州灘沖を震源として発生したもので、この数日あとまで余震が続いた。また十一月には土佐沖を震源とした大地震もあり、朝廷と幕府は打ち続く兇事のため

十一月二十七日に嘉永から安政に改元した。しかし翌安政二年十月二日に、江戸川下流を震源として江戸を襲った大地震では、死者約七千名という大惨事になった。この大地震により三十三間堂は半ば倒壊してしまい、そのまま打ち棄てられて明治五年に廃された。

この試合のち源次郎たちは、対戦相手であった阿蘭陀人ヒュースケンや中濱萬次郎たちと交誼を深め、ときに料理茶屋などで酒を酌みかわすこととなる。萬次郎の話す世界は、源次郎にとってまるで想像もできないお伽噺のようであったが、日本という国の外に目を向け視野を広げさせることにもなつてゆく。

後年、江戸では大きな事件も起きたが、京都の騷擾さに比べればまだ平穏といえた。そのため源次郎ばかりでなく、江戸の庶人にとつても、幕府が瓦解する、あるいは公方様がいなくなる、などということは思いもよらないことであった。源次郎はこの先も（たとえ下級藩士であろうと）、このまま侍を続けながら弓を引き、藩に尽忠していくものであらうと考えていた。だが、藩の思惑は幕府・徳川家と一体のものでなかったたのである。

嘉永七年、江戸に冷たい風が吹き始め、庶人の通りを往く足が、こころなしか早くなる季節であった。

（東区）

「入選」

蛸が鳴く

伊藤 昭一

わたしはねえ、大正十三年生まれですから今年で八十九歳になるんでしょうか。おかげさまで、ここの老人ホームに入っていただけで、そう、十年あまりになります。ありがたいことです。大勢の皆様にたいへんお世話になっています。わたしのような年寄りが独りで暮らすなんて考えただけでも心細いですからねえ。

ええ、わたしは今浜松市になっていますが、以前の引佐郡井伊谷のまたその奥の部落で生まれました。わたしの両親は猫の額ほどの畑を耕すほかに、地主さんの山に入って下草を刈ったりして、まあ樵の真似事みたいなことをして働いていました。あの頃はみんな貧しい暮らしをしていましたねえ。貧しいことが当たり前でしたからねえ。

貧乏人の子沢山と言いますが、わたしの家も男三人女三人の六人きょうだいでして、その長女がわたしでね。尋常小学校を卒業すると、口減らしに東京へ女中奉公に行きました。随分と昔の話なんであんまり詳しくは覚えちゃいませんが、

浅草の観音様に近い職人さんの家でお世話になりました。羽子板造りの職人さんの家で、当時はかなり手広くやっておりましたね。お弟子さんの若い衆も十人くらいいましたからねえ。職人と言えはあの頃は、籠屋、ブリキ屋、桶屋、大工なんかが軒を連ねていましたねえ。職人横町ですわ。羽子板職人は戦争前は随分あつたそうですが、最近じゃ東京中で数軒しかないと言うじゃありませんか。これも時代ですねえ。

昔は、お正月に羽子板で遊んでいる近所のお嬢さんをあちこちで見かけましたよ。そうそう、獅子舞が来たり浅草の観音様へ参詣する人も大勢いましたねえ。

その職人さんのところに四年お世話になりました。ご主人も奥さんもとてつよい方でしたから、もつと居たいとも思いましたが、わたしに徴用が来たのです。そういう制度とか決まりがあることさえ知らなかったわたしでしたが、お暇を頂いて郷里に帰りました。給金のほかにお饞別もいただきました。

ずっと後になって、と言つてもあの戦争が終つてからですが、東京が終戦の年の三月に大空襲に襲われて、東京の大部分が焼けてしまったことを知りました。何十万という人が亡くなり、写真で見るとわたしは働いていた隅田川の近くにあつた羽子板職人さんの家も焼け野原の中でした。隅田川が大きく曲がっているあたりの記憶が今もわたしには残っています。

郷里へ帰つて間もなく、わたしは豊川海軍工廠へ行くこ

とになりました。

その日は村の神社へお参りしてから、役場の人や親戚、両親、きょうだいに送られて、軽便と呼ばれていた汽車に乗って金指駅まで行き、そこから二俣線に乗り換えて豊川工廠に行くのです。皆は

——まるで兵隊さんの出征のようだなあ

と言いながら、何度もバンザイを叫んでくれました。

徴用されて来たわたしたちは三十人位でしたでしょうか。以前から働いている人も合わせて百人は下らなかつたでしょうか。

豊川工廠の寮に入り、次の日からそれぞれの仕事をするようになってきました。

寮生活は一部屋が六人でした。六人は仕事もいっしょで、機銃部というところでした。鉄砲の銃身に弾が流れやすいように溝を彫る仕事でした。朝から晩まで働きました。食事は三度三度、与えられました。わたしの田舎に比べればご馳走と言つていいほどでしたが、やはりお腹は空きましたね。

お休みは外出が自由でしたが、お金はないのでどこかへ遊びに行けるわけはありません。せいぜい豊川稲荷にお参りするくらいでしたね。

そんな時

——家に帰りたいなあ

と、わたしが独り言のように呟きますと、豊川工廠にわたしと同じ引佐郡から来たマサちゃん

——行こうか

と言うのです。

ここへ来てから半年ほど経った頃でした。

——どうやって行く

と、わたしが聞くと、マサちゃんは

——二俣線の線路を歩いて行けば必ず行けるよ

と、答えました。

仕事が休みの次の日曜日、朝早くマサちゃんとわたしは、朝ごはんもそこそこに、二俣線の線路に沿って歩き始めたのです。三ヶ日を過ぎ、都筑、佐久米、気賀と歩いて行きました。右手に浜名湖が広がっていました。キラキラと輝く浜名湖が大きかったなあ。でも、そんな景色をゆっくり眺めたりする余裕はありません。ひたすら歩き続けました。

久し振りに家に帰れる期待で胸がいっぱいでした。どれほどの時間がかかるものか見当もつかないままに歩き続けました。いっぺんも休むことなくお昼近くにやつと金指駅に着き、そこでマサちゃんと別れ、帰りの時間を約束しました。

家に着くことが出来ました。

みんなびっくりしました。

——仕事ができなくて逃げ帰ったのかえ

と、母親が聞きました。

——ちゃんと断って来たのか

と、心配そうに父親が言いました。

——いいや、日曜日は休みだから……

と答えましたが、少し心配でした。黙って出て来たことを叱られはすまいか、と思いましたが、みんなに会えた嬉しさですぐに忘れてしまいました。

ゆっくりご飯を食べ、近所の人たちともいろんなことを話し合っているうちに、マサちゃんと約束した時間が迫ってきました。

二俣線の金指駅で落ち合い、帰りは親にねだったお金で切符を買うことが出来ました。わたしのお母さんはモンペを買ってくれました。お菓子や果物もたくさん持たせてくれました。

豊川に近づくにつれて、マサちゃんとわたしは監督さんに断らずに家に帰ったことを叱られはしないかという心配が頭をもたげてきましたが、寮に着いてからお詫びにいくと、監督さんは

——楽しかったか、父ちゃんや母ちゃんは元気だったかなんて言って、叱るどころか笑顔で許してくれました。もし、これが軍隊だったら決して許されることではないことは、わたしも知っていました。

わたしが小学生だった頃、銃剣を持った兵士が四、五人、村の中をまるで、獲物を狙う狼のような鋭い目付きで通り過ぎていくのを見たことがありました。

あとで聞くと

——あれは脱走兵を探しているんだ
と言いました。

見つかった脱走兵は、あの銃剣で芋刺しにされ、血まみれになっていく、そんな想像にわたしは震えました。

その頃の日本は、満州事件から始まった戦争が次第に中国大陸に拡がってきている状態だったのでしょうが、わたしたちには本当はどうなっているのか知らされませんでしたし、わたしたちも知ろうとも思っていないませんでした。日本は戦争に決して負けることはない誰れもが信じていましたし、日本が戦争するのは正義のためだと考えていましたからね。

それから一年ほどして母親からの手紙で、わたしの父親が召集されたことを知りました。村の若者という若者のほとんどが召集されていて、とうとうわたしの父親のような年嵩で、一家を支えているような者まで戦争に行かなくてはならないのか、とわたしは暗い気持ちになりました。わたしの男きようだい三人も、とくに召集されたり軍需工場で働いていましたから、農作業は母親や家にいる妹たちに任されることになりました。

豊川工廠では三年半ほど働いていましたが、突然一の宮の工場に異動することになりました。仕事は豊川工廠でやっていたことと同じでした。でもね、一の宮へ行って半年もしないうちに、豊川大空襲があつてわたしたちがいた豊川工廠も全焼してしまったのです。

いっしょに二俣線を歩いて故里へ一日だけ帰った仲良しのマサちゃんは焼死したことを知りました。

昭和二十年八月七日のことでした。
わたしはこの日を決して忘れません。

マサちゃんは生まれ故郷も同じだし、豊川工廠ではいつもいっしょに働き、寮の部屋もいっしょでしたから。それに、もつと残念でならないのは、もうあと一週間もすれば戦争は終つていたのに、という思いが強くなりました。わたしは悔やみ切れない気持ちでした。

終戦で私たちは何もかも失ってしまったような気持ちでしたが、一方で故郷へ帰ることのできる開放感がふくらんできました。

わたしは二十歳になっていました。

やがて、三人の男のきようだいも無事に帰ってくるのが出来ました。復員した長男が一番遅くなりましたが、何よりも無事で帰れたのですから……まだ帰って来ない父親の消息を待つだけでした。支那へ渡ったということだけは判っていましたが……

妹ふたりは浜松で仕事を見つけて家をあとにし、男きようだい三人も、それぞれ二俣や浜松に職を求めて家を出ましたから、わたしと母親ふたりの暮らしが始まりました。

あの頃もやはり暮らしは楽ではありませんでしたが、空襲のない平和な世の中が明るかったと思いますね。それに、わたしも若かったしね。

間もなくわたしは農協の事務員として働くことが出来ました。職員が三人だけです。事務だけやっていればいいと

いうわけにもいきません。荷物を運んだり、配給の品物を分けたりする仕事も任されていました。

農協に勤めるようになって一年ほどした頃、わたしはお世話してくださる方が居て、農家の次男と結婚することになりました。戦後も食糧難は続いていましたから、農家の嫁になることは誰もが羨やむことでした。一度だけ見合いをして決まりました。実直そうな青年であることも、本家から五反の田圃を分けてもらえるということもわたしには嬉しいことでした。

結婚式は相手の家で行いました。今思えば質素なものでした。嫁入り道具は、母親やきょうだいが揃えてくれた筆筒と下駄箱だけでしたが、わたしは満足でした。

でも、やはり気に懸かるのは父親の消息がまるで判らないことでした。村のなかでも復員してくる人もいましたし、ソ連に抑留された人もボツボツ帰って来ていましたから。嫁ぎ先の家にも復員した夫の知人や、ソ連に抑留された人が尋ねてくることがあって、わたしもその様子を聞くことがありました。わたしの父親もまだ復員していないことを話しますと

——何、戦死の公報がなけりやまだまだ望みはあるさ

と、慰めてくれますので、今にもひょっこり帰ってくるような気もしました。

——二年半も抑留されてさ、舞鶴港に着いた時は、そりゃ嬉しかったよ。何せ食うや食わずでガリガリに瘦せちゃつてさ——零下三十度なんて想像出来ねえだろうが、寒いというよ

り痛い。毎日毎日森の木を伐り出して貨物列車に積み込むという作業で、飯と言えば、黒パンが一枚か二枚、塩辛いスープだけの飯でね。それも列車の遅れとか言って飯にありつけないこともあったりしてさ。ノルマが達成出来ないでグルーブ全員が欠食なんということもあったなあ。暖房のない小屋が寝床さ、みんな重なり合って寝るしかない

そんな話をしているのは、わたしの夫の年長の友達であったり、親戚の者であったりしました。

——そうだ、百メートル四方くらいの大きさの収容所に、おそらく三百人以上が収容されていただろうなあ。四六時中見張り番の兵士が銃を持って警戒しているから脱走なんて出来ない。仮に脱走出来たとしても、あの広い荒野を逃げ切れるもんじやない

——そう言や、収容所に連れて来られる時、俺は満州から鴨緑江を渡って来たんだが、あの河の橋桁に日本兵の死骸がいくつもブラ下がつているのを見たときは、ゾツとしたよ。俺の最期もあんな姿になるのかと思ってさ……

彼らの話を聞きながらわたしは思いました。戦争って何て残酷であることか、戦争に負けた国ばかりじゃなくて勝った国だって急にしあわせになるとは限らないのだから。

それにしてもソ連から帰国した人の話ばかりで、支那から帰ったと言う人の話はほとんどないことが不思議に思えましたが、わたしは聞くことが出来ませんでした。

父親の消息はまるで判りませんでした。判っていることは

支那に渡った、と言う最後の知らせだけでしたから。父がソ連に抑留されているとはどうしても考えられませんでした。

それにしても、わたしが豊川工廠に居た頃、マサちゃん和二俣線を歩いて一日だけの脱走をしたことなんてかわいいことだったのだ、と思いましたね。

夫の知り合いが言っていました、ソ連に抑留されて帰ってきた当初は、一人十万円と故郷に帰る旅費が支給されたものの

——長い間ご苦労様でした

という人々の声が、次第に聞かれなくなったことを嘆いていたのですが、戦後を生きることに一生懸命で、過ぎ去ったことなんかどうでもいい、戦争で肉親を失った人への思いやりと言うか、慰めというか、そんな優しさが次第に消えてしまうような気がわたしはしました。

昭和三十年の八月のことでした。

戦争が終って十年が経っていました。新聞なんかでは、最早戦後ではない

なんていう言葉が載っていましたが、わたしは、絶対それは違うと思いました。だってわたしの父親をはじめ、知り合いの人の家でもまだ復員していない人もいるし、その生死さえ知らされていない家族も居るのに……

ある日、わたしはひとりの男の人の訪問を受けました。

——突然こうしてあなたにお目にかかって、先ず何からお話していいか迷っています。出来るだけありのままだに、私自身の感情を交えずお話ししたいと思います

初老と言ってもいい年輩の人で、この人も軍隊にいた人だなと想像しました。

わたしは座敷に上ってもらい、近くにいた夫も同席してもらいました。

——私はあなたのお父様が属していた歩兵第五十六大隊第八中隊の中隊長であった、山岡と申します。戦争が終って本土に引き上げたのが、今から二年前でした。私は直ちにC級戦犯として二年間拘束され、裁判にかけられたのですが、幸い無罪となりました。自由の身となった私がすべき事は、共に戦い行動した私の中隊に属していた兵士のうち、亡くなられた方のご家族を尋ね歩いて、当時の状況をお話し、お悔やみ申しあげるのが務めと心得てこうして各地を歩いています。あなたのお父様とはずっと行動を共にしていました

——じゃ、わたしの父は戦死したのですかと、わたしは息急ぎ切って尋ねました。

——確かに戦死、です。しかし、その事情を申し上げなければなりません

——事情、と言いますと

——戦死であれば、公報があるわけですが、それがなかったことが、こうしてあなたをお尋ねすることが遅くなった原因でもあるのです。

長くなるかも知れませんが、どうか私の話をお聞き下さい。

敗戦が間もない六月中旬でした。ご存知かも知れませんが、今も話題になっている南京攻略のあと、私たちの中隊は、各地に頻発するゲリラの襲撃に対抗するために、命令されるままに南京と上海の中ほどにある町、蘇州の近くにいました。

ある日の朝のことです。点呼するとあなたのお父様が居ないのです。たいへん真面目で実直なお父様がまさか脱走するはずはない、と私は信じていましたから、部下とともに夜が更けてから搜索に出かけることにしました。昼間ではゲリラの襲撃に遭う可能性があったからです。勿論、昼間のうちにも二三人の少人数での搜索はやっていました。搜索は二か月あまり行いました。

仮に脱走したとすると、本人の名誉は全く否定されますし、部隊としても責任を問われますから私たちも必死でした。

すると付近に僅かに残っていた農民から、死んでいた日本兵の遺体を埋めたという情報がありましたので、夜間、その場に行きました。確かに最近掘り起こしたであろうと思われる土の跡がありました。

何人かの兵士がスコップでそこを掘り起しました。既に腐乱しかけた人間とおぼしき肢体が現れました。部下の兵士がその一部分を切り取って雑嚢に入れ持ち帰りました。

支那大陸の戦線は一進一退というよりも、日本の敗北は既に決まったもののような状態でありましたから、司令部や司令部に付属する医務班も、混乱状態と言ってもいい状況であ

りました。

しかし、私としては持ち帰った肢体がお父様のものでありましたら、お父様は夜間警戒のために巡視したところ、ゲリラに銃撃されて戦死したと考えられます。また、そのように報告をしたのですが、返ってきた軍医の判断はこうでした。人骨とは認め難い。

私たちは再び搜索を始めなければなりません。お父様の名誉のために、私たち中隊の名誉のためにも避けることは出来ませんでした。

戦況はますます悪化の一途を辿り、私たちの中隊は蘇州から撤退する命令が下りました。

最初に申し上げたお父様の事情、というのは

この問題は不問に付す

というような決着の仕方を余儀なくされたのです。

つまり、戦死でもなく、戦病死でもない、いわんや脱走でもないというような曖昧な残ったまま、私たちはその地を退却しました。まさに敗走という状態でした。

ある種の信仰のように、日本の不敗を信じていたのが、急転直下ぶざまな私たちの敗戦となったことが、お父様にとって不名誉な結末となってしまいました。

決して許しては頂けないでしょうが、こんな事実があったことを判って頂きたいと願うばかりです――

わたしも、わたしの夫も何も言うことが出来ませんでした。長い沈黙の時間が流れました。

わたしも夫も、山岡という中隊長であつた人の古ぼけた軍服と、頬のこけた顔を見つめるしかありませんでした。

鯛の鳴く声をわたしはほんやり聞いていました。

鯛の鳴声にわたしはいい思い出がなかつたことに気付きました。今日という日もそうであるように……

山岡という人の話をどう受けとめていいのか、これからどうすべきなのか……

わたしの夫が掠れた声で言いました。

——まず、遅ればせながら葬式をせにやらんな、それもあなたの実家だな。死亡届だつて出さなきゃならんし……

夫の声がわたしには何故か冷たく聞えました。考えてみれば、わたしの嫁ぎ先のこの家は、わたしの父親とは関係がないと言え言えなくはないのだから……

やがて山岡さんは帰つて行きました。

戦死した部下の兵士の家を、一軒一軒訪ねて歩くのは、決して山岡さんの義務ではない筈でしょう。中部地方に限られているとはいいますが、なかなか出来ることじゃない、とわたしは思うのです。訪問を受けた人の家でも、みんながみんな歓迎するとは言えないまでも、山岡さんの気持を分かってくれるかどうか、と思うのです。

召集された兵士はすべて喜んで出征したとはどうしても思えません。戦争で肉親を失つた人は、その悔しさや悲しさを訴えるところもなく、いわばその腹いせに山岡さんを責める事だつてあるに違いないと思うのです。

わたしの父親の死の真実を伝えてもらったことは、わたしにとつてはひとつのけじめを付けていたのだという感謝はありますが、わたしの夫にも同じような気持をもってもらいたいと思うのはわたしの甘えなんでしょうか……

わたしの父の死の真相と言つていいかどうかは判りませんが、山岡さんがお話してくださつたことに嘘や偽りがあるとは思えません。すべてが本当のことだと思ひます。わたしはずつとそのことを考え続けていました。

どこかしっくりしないことがあるような気がしてなりませんでした。うまく説明できないのですが……実はわたしはその後、夫と離婚するのですが、ひとりになつてから、こんな考えが浮かんたのです。

山岡さんがお話になつた父の遺骨であろうとして軍医に提出した骨が、実は人骨ではなかつたかと判断されたことが、父の死が不問に付された決め手であつたのですから、もし人骨と認めてもらえば父の死が戦死とされ、不名誉な死ではなかつたことになるのではないかと、というわたしの思ひつきにわたし自身がひどく驚きました。でも、そこには真実に目を背けた偽りがあることに気づくのです。でも、当時混乱に陥つていたという軍の医務班に絶対の信頼を寄せていてよかつたのか、という疑問も同時に生まれたのです。

わたしには父の死が避けられなかつたとしたら、人骨ではないという判断を曲げてでも良かつたのではないかと、軍医の判断にしてもそれが唯一の真実だと言えるのか、という疑いも

消すことが出来ませんでした。本当のことを言って不幸になるのだったら、むしろ本当のことを曲げてもいいのではないか。本当のことを言い張ることです不幸になるよりはずっと良いのではないかと。

もちろん、このわたしの思いつきを誰かに話すことはありませんでした……

わたしが結婚してから十年が経ちましたが、子宝に恵まれませんでした。夫も夫の両親もそのことについてはひと言も言ったことはありませんでしたが、親戚のだれ彼にはそのことを残念がっていることは聞いていました。田舎には、三年子なきは去る、とか、石女と書いて、うまずめと言うような言葉があつて、子どもが生まれぬ嫁は離縁するか自分からその家を去らなければならぬ、というふうな考えが消えてはいないことをわたしは知っていました。ごく稀にはありますが、そんな例があることを知っていました。特に農家は先祖伝来の田畑を受け継いでいくのに、子どもがいけないことは致命的なことでしょうから確かでしょうね。

わたしの父親の葬儀は、かたじけなくありませんでしたが、わたしの実家でやりました。

わたしの母ときょうだいで行いました。古い父の知り合いも何人か参列してくださいましたが、多くを語る人はいませんでした。みんな父の死を判ってくれたと、わたしは思うことにしました。

父の葬儀が済んだのをしおに、わたしは離婚しました。夫は何も言いませんでした。離婚届にも黙って判を押しました。

もし夫婦の愛があれば……ということは考えませんでしたから、夫や夫の家族を恨むことはありません。田畑を耕して暮らしていくという、どうにもならない現実の前にはこうするしかないではありませんか。

わたしは実家に戻り、母とふたりの暮らしを始めました。亡くなった父が残したちっぽけな田畑を耕作するだけでは暮らしては成り立ちませんので、以前勤めていた農協へお願いしたところ、すぐに許して下さいました。

高度成長の波が、こんな田舎にまで届いていたのでしようか、職員も増えていましたし、農家も従来の作物に加えて、トマトやセルリー、レタスなどの温室栽培や、山を開いて椎茸栽培に取り組むなど、随分と変わっていました。

わたしは以前勤めていた時のように、主に預貯金を扱う仕事を受け持ちましたが、その金額の大きさに驚きました。融資を担当したり保険を受け持つ職員もそれを口にしていました。

——水飲み百姓なんて、もう死語になったなあなんて言って笑っていました。

でも、母とふたりの暮らしにとっては、そうした話は無縁でした……

増えたとは言え、せいぜい二百戸足らずの村にもささやかな公民館が出来て、そこで仕事を終えた夜間に舞踊とかカラオケ、習字や俳句や編み物の教室が出来て、わたしは俳句の教室に入りました。

小学校しか出ていないわたしにとっては、辞書と首っ引きで俳句を作る楽しみを得ました。

俳句を教えてくださる小学校の先生は、山口誓子の崇拜者とかで、その人の句をいくつも紹介してくれました。そして誓子の句集の中からいくつかを選んで、次の俳句教室までに暗記してくるように言われました。わたしは今もそれを覚えています。なかでも

海に出て木枯し帰るところなし

の句は、先生の解説によれば、山から吹いてきた木枯しが、海に出てしまえば再び帰ってくることはない。この句が作られた昭和十九年は、戦争の最中であって、次々に飛び立っていく特攻機になぞらえて作られた句ではないか、という人もいるが、誓子自身は句集の自注には書かれてはいない、とおっしゃっていました。わたし自身は、どうしてもこの句にわたしの父親を重ねずにはいられませんでした。

そんなこともあって、俳句を日記代わりにノートに書き連ねることがいつの間にかわたしの習慣になっていました。

俳句はその後も続けました。六十歳定年で農協を辞めても、わたしは続けました。何年も前に作ったわたしの俳句を読んでみると、当時のことがまざまざと思い出されるのに不

思議な感じがします。

俳句は何にもまさる自分史だ、と俳句の先生がおっしゃっていましたが本当だと思います。だってそうでしょ、人がものを考えるのは「ことば」で考えるしかないのですから。

先生はまたこんなこともおっしゃって下さいました。聖書にも

はじめに言葉あり

という言葉があることも。もっともわたしには、この言葉の深い意味については理解の及ばないことにも気づいています。

多くの人にとっては、こんな当たり前のことであろうことに、わたしは今初めて気づきました。

人は生きてきたように死ぬ

とも言われますが、これもわたしだけの理解の仕方での理解することになっています。

農協で働いていた頃、何度か再婚を勧められたこともありましたが、わたしは断りました。老いた母をひとりにしておくわけにもいきませんし、たとえどんなに好きな人であつても、ただそれだけで結婚するわけにはいきませんものね。

わたしが定年で農協を辞めて間もなく母が亡くなりました。同じ部落に生まれ、顔馴染みでもあった父と結婚し、八十八歳の米寿を生きた母は、さまざま苦勞を重ねたであらうに、ひと言も不平不満をいうことなく静かに逝きました。

わたしもじきに亡くなった母と同じ年齢になります。今日も鯛が鳴いてますね。大きな出来事があった時には、いつも鯛が鳴いていたような気がしてなりません。
長い間わたしの話を聞いて下さってありがとうございます。

(西区)

「入選」

すな
砂 漣 さざなみ

白井聖郎

二年ぶりだった。

遼一は、燃えるような赤色を基調とした振袖をまとっている千華と、写真を撮った。

新見市では成人式が毎年一月二日に「まなび広場にいみ」で行われる。名古屋に住んでいる千華にとっては、正月の帰省ついでに出席できるから都合がいいようだった。遼一は岡山市で一人暮らしをしている。

「遼一、元氣そうね」

「千華も。さらに綺麗になって」

「そういう言葉を使えるようになったのね。付き合っている頃に言われたかった」

一人二人と同級の輪が広がり、式場では旧友らとまとまって座った。新見市に住んでいるのは数人で、他の町や広島県に住んでいる者が多かった。東京に出たのが二人、大阪も二人、名古屋の大学に進んだのは千華だけだ。

同じ中学と高校に通っていた千華とは、高校生のときに付

き合っていた。恋人という関係になると喧嘩が多くなり、結局半年だけ付き合って、三年生の秋に別れた。ぎこちない関係がしばらく続いたが、高校を卒業する頃にはまた会話をするようにになっていた。

会場には三百人以上はいそうだった。あちこちで笑い声や歓声が沸き上がっている。

渦巻く熱気を抑えながら式の間は静かになっていたが、式が終わり懇親会が始まると、皆の盛り上がりも大変なものだった。新見市に残る人のほうがはるかに少ないため、それぞれがおよそ二年ぶりの再会を楽しんでいる。

「遼一は夜の同窓会には行くの？」

「もちろん。千華は？」

「もちろん」

二人は目を合わせて笑った。

「じゃあまたあとでね」

千華は他の女たちの集団に入っていた。遼一も高校の同級とも肩を叩きあったり握手をしたりして再会を楽しんだ。

夕方になり電車に乗った。各学年一クラスしかない小さな中学校だったので、同窓会といっても集まったのは十七人だった。欠席は七人だ。中学校区内の矢神駅や野馳駅の前は飲めるような場所がほとんどないので、芸備線に乗り野馳駅の隣の東城駅前での集合だった。東城駅は広島県になるが、新見駅に電車で行くよりは近いのだ。矢神駅の少し北の駅で伯備線に乗り換えると隣接している島根県に行けるが、遼一は

行ったことがなかった。

一度帰宅した後なので、それぞれ私服になっている。コートを脱いだ千華は、ラメのような光が入った黒のワンピースに、黒のタイツと紫のパンプスを履いている。胸元には白い珠の二連の首飾りが光っていた。

幹事の音頭で、中学校の体育大会のときのポーズを真似る形で、皆が一斉にグラスを上げた。

小学生の頃から変わらない者や、都会に行ってかなりあか抜けた者もいる。皆、時に当時は懐かしみ、時に現在を熱く語っている。

「二次会には行くの？」

同窓会も終わりにさしかかる頃、千華が隣に座って小声で聞いてきた。

「そのつもりだけど、千華は？」

千華は、ビールの一気飲みをして盛り上がっている男たちに軽く目をやってから、遼一にぼつりと言ってきた。

「ちょっとああいった盛り上がりは苦手だね。久しぶりに二人で話をしない？」

遼一は舞い上がるように胸が熱くなった。クラスの他の連中たちよりも、千華ひとりさえいれば、遼一はそれでよかった。

「千華、少し変わったな。積極的というか、自分からそんな誘い方ができるんだ」

「素直になったんだよ」

「名古屋はどう？ 大学は楽しい？」

遼一はビールを飲みながら千華に尋ねると、千華は花が開くような笑みと一緒に、右手の薬指にある指輪を見せてきた。

「彼氏とクリスマスにお揃いを買ったの」

言い終わると他の男が向かいに座ってきて、話に割り込んできた。しばらくすると千華の向いにも女が来て、話は多方面に散らかっていくので千華が目配せをしてきた。あとからゆっくり話そう。たぶん、そんな意味だろうと遼一は解釈した。

東城駅発の最終電車は夜の九時だ。二次会に行く人はそのまま東城駅の前で飲むらしいので、帰りはおそらくタクシーなのだろう。

遼一は千華と電車に乗った。他にも数人帰るようで、電車の中でも話が盛り上がっていた。泥酔している男も一人いる。

野馳駅で降りた者や新見駅まで行く者もいるが、二人は矢神駅で降りた。当時と何も変わらず、小さな小屋のような無人駅だ。暗くて見えないが、目の前にはすぐに小さな山があり、民家や店舗がまばらにある程度だ。

「随分と久しぶりだね、二人でこの駅から歩くなんて」

「名古屋に比べれば、何もないでしょ？」

「うん。何も、なさすぎる」

高校生のときはよく、手をつなぎながら歩いていた。駅の近くに一本だけ生える、御衣黄桜という淡い緑色の桜をよく眺めていた。花の中央が筋状に赤みを帯びてきた四月の下旬

に、初めてキスをした。当時の興奮は、少しずつ忘れてきている。

「御衣黄か、懐かしいな」

立ち止まって呟いた千華の、目ではなく唇を見てしまった。興奮は忘れてきても、柔らかな唇の感触は忘れることがない。

千華もいろいろと思い出しているのだろう。告白も、別れも、この木の下だった。数秒だけの沈黙を、甘酸っぱい思い出が埋めている。

「遼一、ここでよく蚊に刺されていたよね」

遼一は思わず吹き出してしまった。

「そんなことを思い出していたの？」

「いろいろよ」

そう言って二人は南へ向かって歩き出した。

「遼一は相変わらずね」

「何が？」

「だらしない歩き方が」

千華が背中を軽く叩いてきた。

「ダメよ、背筋を伸ばさなきゃ」

数十メートル歩いたあとと細い道路を右に曲がり、光望公園に入った。このあたりは芸備線と国道一八二号線と中国自動車道が南北に並走していて、車や電車の音がよく響く。木のベンチに二人で座った。

「今日は楽しかったね。みんなに会えて、元気をもらえた」

「そうだね」

それから千華の恋人の話になった。デートでどこへ行っただとかの話聞かされ、遼一はかすかな嫉妬を抱いてしまった。そして嫉妬をしてみよう自分に苦笑した。遼一にも同じ大学に恋人がいるのだ。

一年間に数回しかメールでのやり取りをしていないので、毎日のように顔を合わせていた高校生までとは違い、お互いにそれからをほとんど知らない。

木々を大きく揺らす風が吹いた。体を震わせ小刻みに足を動かしながら会話は続いた。

「名古屋にはいつ戻るの？」

立ち上がって歩きながら聞いた。公園にある外灯の明かりで、吐く息は月に照らされる薄い千切れ雲のように、淡く白く見えた。

「明後日の四日のつもり。年越しは広島の親戚の家で迎えたし、明日は家族と過ごす」

二人はブランコに座った。コートを着ていても、尻にブランコの冷たさは伝わってくる。

「アルバイトが五日からなんだ」

千華はカフェでアルバイトをしているようだった。そのカフェは店長の趣向で日々違う音楽が流れていて、週末を中心に生演奏もあるらしい。知り合いのジャズであったり、ピアノ演奏であったり、軽音楽部の学生の演奏も行ったりしているようだ。

「私も何回か勤務中にピアノを弾いたの。すごく緊張したけど楽しかった。そのあと普通にオーダーを取りに行くど握手を求められちゃったりね。店長の娘さんが二十代半ばで、私のピアノに合わせてフルートを吹いてくれた時もある」

千華はそのアルバイトが大好きなようだった。普段は口数が少ない方だが、興奮すると止めるまで話し続けるのは変わっていないかった。かすかに酔っているためさらに饒舌になっている。遼一との再会で気持ちが弾んでいるのもあるようだった。

その店長の娘の彼女というのが、どういう巡りあわせか千華の彼氏が中学生のときの家庭教師だったようだ。

時計の針は十一時近くを指している。千華とこんな時間までいるのは初めてだった。

「そういえば私たちって、高校生になってから市民になったよね」

同窓会でも遼一は他の男たちとその話をした。中学を卒業した年度末に、市町村合併で哲西町から新見市に変わったのだった。

「お盆には一度こっちに帰ってくると思うから、会えたらまた会おうよ」

千華はそう言って、小石を拾いながら軽く投げた。乾いた砂地の上に落ちる音が、すぐに聞えた。

「こんなに綺麗な星空を見るのは久しぶりね。空が降ってきそう」

「都会は星があまり見えない分、夜景が綺麗なんだからいいじゃない」

遼一は星空を見ることが好きだった。特にどの季節の夜空が好きというものはなく、星座を探すわけでもなく、ただ漫然と眺めるのが好きだった。

「あ、流れ星」

口を少し開けたまま空を見上げる千華を、遼一はしばらく見つめていた。

大学三年になると講義が一段と難しくなってきた。一、二年で学んできた電磁気学、力学に加えて、統計力学というものが出てきた。一般教養の授業がほとんどなくなった分他学部の友人と顔を合わせる機会がかなり少なくなった。

千華とは成人式の前後に何度かメールのやり取りをしたが、それぞれの大学に戻るとまたもとのように連絡をしなくなった。

日本で初めての政権交代が起きて一年近くたったが、また首相が変わった。中学生のときは同じ人が総理大臣だったが、高校生になってからは一年に一度は変わっているように思えた。いいことだとは思えなかった。

彼女と別れた、とだけ千華にメールを送った。励ましやら慰めの返事が来た。千華はまだ年下の彼氏と続いているようだった。その男に対して嫉妬がないわけではないが、いままさら千華とどうするという気持ちもない。

千華のアルバイト先の店長の娘とその相手が秋に結婚をするようで、まだ正式ではないが千華と彼氏も式に出席するという。

猛暑だ、異常気象だという話が今年も出ていた。毎年のことだった。遼一が小学生のころからそんな話は毎年近所の人から聞いていた。正常な気候がどういったものかなど遼一にはわからない。少なくとも毎年毎年異常だと言われるわりには、周囲にとっては暑いだけでこれといって困った夏でもなさそうだった。

ある夏は盆の時期に雨が続いて、こんな夏は滅多にないと言われた。逆に雨のまったく降らない夏もあって、こんな夏は初めてだと言われた。台風が来てはこの時期には珍しいと言われ、虫の鳴く声が早いと異常だと言っている。

原因を求めれば地球温暖化となり、対策はというと、曖昧で不可能なもので、まして一個人でどうすることもできない。

生物学科の教授のひとりに言わせれば、二酸化炭素が十五パーセントくらいになっても、植物にとってはむしろ都合がいいらしい。ただそれも教授個人の意見で、実証されているのかは知らない。現状、地球規模で生態系の乱れがあるにせよ、いままでも地殻変動や氷河期のたびに変化は起こってきているわけだから、何千万や億単位の年月で見れば、気温の変化などあって当たり前だという。

地球は相も変わらず泰然としている。それがその教授の口癖だった。

七月の終わりに、夏休みには故郷に戻るのか千華にメールを送ってみたが、返事が来なかった。遼一がそうであるように、前期の試験期間なのかもしれない。

一週間がたち八月になっても、千華からの返事はなかった。忘れていただけなのか、故意なのか、遼一は少し不安になりもう一度メールを送ってみたが、やはり返事がなかった。

遼一の通う大学は、八月と九月がまるまる休みになる。その期間を利用して猛烈にアルバイトをする者や、車の免許を取る者、旅に出る者もいる。

高校の友人らと飲む予定が入っていることもあり、千華とは連絡が取れないまま、遼一は成人式以来はじめて新見市に戻った。

少し寄り道をして、矢神駅の前に車を停めた。御衣黄桜は少しだけ芽吹いている。来年の春に咲くまで、ひっそりと力を蓄えている。年に一度咲き誇るために、風雨にも冬にも人知れず耐えている。それを凌ぐからこそ、花開くのかもしれない。

実家に帰って翌日に、千華の彼氏が死んだらしいという話を母親から聞いた。本人や家族から直接聞いたわけではなく、噂として耳に入ったようだった。こんな田舎では他人のプライバシーすらすぐに話が広まる。

千華が無事なのかはまずには気になったが、どうやら無事らしい。千華が連絡をくれないのは、その件があったからなのだろうか。千華への軽はずみな言動は控えることにした。

実家に戻ると、風呂も食事の準備も自分でする必要がなくて楽だった。楽だが、田舎だということもあり、やることがない。広島市に勤めている姉も帰ってくるようだったが、日程を聞くと遼一とはすれ違いになりそうだった。

千華のことがやはり気になった。千華は飼っていたエキゾチックショートヘアという、目や鼻などの各部位が顔の中央に寄っていてお世辞にも可愛いとはいえない猫が死んだときに、高校を休んで二日間泣き続けていた。

たかが猫で、と当時は思っていたものだった。それでも、猫の死で二日間泣き続けるということは、もし彼氏が死んでいたとしたら、千華の悲しみようが尋常ではないことくらい容易に想像できる。

意を決して夜に電話をかけてみたが、千華は出なかった。何かあったのか、故郷に帰って来れるのかだけを、メールで送った。返信が来たのは夜中の三時だが、確認したのは朝起きてからだだった。

「帰らない。落ち着いたらまた連絡します」とだけの、絵文字も何もない文章だった。明らかに様子が変わるのがわかり、いてもたってもいられなかったが、遼一は千華から連絡が来るのを待とうと思った。

六月に別れた女のことをたびたび思い出している、それを否定するかのようには、合コンで知り合って最近気にかけている女のことを考えるようにしていた。それでもやはり千華のことが気になってしまふのだった。千華との思い出が多いこの

町が、余計にそうさせるのかもしれない。

結局夏休みの間に千華からの連絡はないまま、後期の授業が始まった。

相対論的量子力学の課題を解くのに時間がかかった。コンピュータ物理学の講義が休講になったので図書館で勉強していると、一人の女が遼一の机の隣に来て立っていた。顔は上げずに参考書をめくりながら、黄色と黒のチェック柄のスカートと、膝上まである黒っぽい靴下の間から見える太ももに目をやっていた。

「相川くん」

顔を上げると、立っていたのは最近気になっている法学部の夕実という女だった。コンパをしたときには胸のあたりまであった髪の毛が、いまは頬にかかる程度の短さになっている。後ろ髪も肩に届いていない。

「昨日もここにいたでしょ」

遼一は軽く頷いただけだった。気持ちが高ぶってきているのをはつきりと自覚している。

「隣の席、座ってもいい？」

遼一はまた頷いた。夕実が歩いた後にほのかに甘い香りが漂った。

「何の勉強？」

「ちよっとごめん、この問題を解いてからにしてくれる？」

「わかった、ごめんなさい」

夕実が本を読み始めるのを目の端で捉えながら、遼一はま

た机に目を落とした。夕実と話したい気持ちが洪水のように溢れているが、目の前の問題が大きな壁のようにそれを堰き止めていた。夕実の本をめくる音が、規則正しく聞こえてきた。

「ダメだ、できない。難しい」

髪をむしりながら遼一は上を向いて、そのまま頭の後ろに手をやり電灯を見ていた。本を閉じた夕実が教科書を覗きこんできた。

「書いてある内容がひとつもわからないわ」

遼一は返事もせずに、参考書や配布されていたプリントを黒の鞆にしまい込んだ。夕実の持つている本に目をやると、「若きウェルテルの」とだけ見えて、続きの文字は夕実の指に隠れて読めなかった。作者らしきカタカナも数文字見えた。

「思っていたより勉強熱心なんだね」

夕実を見るとちようど席を立つ所で、遼一の目の高さにあまり大きくはない胸があった。胸を見ていたら、思わず先ほど解けなかった問題の解き方がひらめいた。

「あ、わかった。解くから少し待っていて」

プリントを出して、詰まっていたところを解き終えた。遼一が急いで立ち上がると、夕実は微笑んでいた。綺麗な歯並びだった。

図書館を出て目の前の広場の右側のベンチに座った。図書館を背にすぐ右側に、文学部と法学部と経済学部の棟があり、遼一が属する理学部の棟は逆の左側にある。情報理工学

部が図書館から一番遠くにあり、前の彼女がいる教育学部も遠かった。他にも薬学部と農学部と工学部があるが医学部だけは、大学病院があるためか他のキャンパスだった。

「就活している？」

「していない。俺は院に行こうと思っている」

「理系は多いよね、院」

四年生になったら宇宙物理学の研究室に入ろうと思っている。研究をさらに重ねたい人は大学院に進むが、その研究室は毎年半数くらいが大学院に進むらしい。

会話をしているうちに、夕実の名字が小早川だと知った。名字ではなく名前を呼べばいいようだった。

図書館から出てくる集団に夕実が手を振っていた。遼一は一人も見覚えがなかったが、そのうちの一人はコンパに来ていたらしい。

「覚えていないの？」

夕実に驚かれながら、笑われた。夕実の顔しか覚えていないと冗談まじりに言ってみたが、それは本当のことだった。

「あんなに盛り上がりたっていたのに？」

夕実は呆れながらも、うつむき加減に少し嬉しそうな表情をしていた。夕実の横顔を見ながら、目線を落として胸や脚を見て、そのあと真正面を向いた。前の恋人はスカートをはくことがなかったことを、ぼんやりと思い出した。

「次は授業？」

「うん」

夕実が落胆の色を見せている。

「最後のコマは授業がないけど」

「私があるのよね、英語の本を読む授業が」

「図書館かここで待っているよ」

夕実が笑顔を見せながら頷いた。

別れ際に、夏よりも今の髪型のほうが似合っている気がする。と夕実に言って、遼一は理学部棟へ歩き出した。

千華のことが心配ではあったが、遼一は講義中について夕実のことを考えていた。声や容姿を思い出しては、胸だけではなく下半身も少し熱くなっていた。

講義が終わり友人と歩きながら話をしていった。外へ出るとあまり親しくない一人の男が煙草を取り出し、慌たたく小刻みに吸っていた。遼一は煙草を吸わないが、煙草のにおいは好きだった。

しばらく立ち話をしたあとに、それぞれは別れた。遼一は夕実を待つために、図書館で時間を潰すことにした。

一時間ほどして図書館を出てベンチに座った。遼一だけではなく、他の学生もいたところにいる。構内の木々の葉はところどころ黄色づいてきている。遠くからは運動部らしき声が聞こえる。空には綿菓子のような淡い雲が低い位置にとどこころ見えた。ものすごい速さで西へと動いている。

誰かが走ってくる音がした。講義中だから夕実ではない。女が目の前を通って行き図書館の中へ消えていった。見覚えのある顔だったが思い出せなかった。

数分して女が図書館から出てきた。先ほどとは打って変わってゆつくりと歩いている。女が遼一に気付いて近づいてきた。少しずつ思い出してきた。薬学部の人に違いなかった。一年生のときに一般教養の授業で仲が良くなった女だった。しばらく喋っている、講義を終えた夕実が目の前を歩いて、少し離れたベンチに座った。薬学部の女と別れて遼一は夕実の隣に座った。夕実は目を合わせようとしなかった。

「楽しそうだったね、すごく。話はもういいの？」

少し含みのある言い方をされた。うつむきながら口をとがらせ、夕実は動きを見せなかった。遼一は戸惑いながらも、もし妬んでいるのだとしたら夕実は自分に気があるのかもしれないと、密かな期待も抱いた。

「風がやわらかいね」

少し間をおいてから遼一は呟いた。

「だから、二人で少し歩いて、ご飯を食べに行こう」

「変わった誘い方をするのね」

夕実が首を小さく縦に振っている。

二人は無言のまま歩き、構内を出てすぐのカフェに入った。客の多くが大学生のこの店は、店側がコンパの催しを企画したりしていて、好評だった。週末には無料のジャズライブが行なわれるようだ。岡山大学だけでなく、近くの女子大や短大の学生も多い。

「私、やきもち妬いちかった」

パスタを頼んだあと、夕実が口を開いた。

「すぐに妬いちやう、そうゆう自分が嫌いなんだけど、ついで」

遼一は黙って聞いていた。壁に目をやると、来店したらしい吉本芸人のサインがあった。

それからは授業の話やアルバイトの話などに話題はそれた。法学部の夕実は六法全書が必読書で、毎日持ち歩いているようだった。

夕実は実家のある倉敷市から電車で通っている。

店を出ると辺りは暗くなっていた。もうすぐ十月だが、まだ肌寒いという感覚はない。道路を挟んで南側にある県総合グラウンドを通った。敷地には武道館や競技場や広場がある。

居酒屋のアルバイトは九時からだったので、時間はまだある。話しながら二人であてもなく歩いていた。点在する街灯のために、二人の影はまるで生き物のようにいくつも動き回っている。

歩いている最中に夕実と腕が触れても、夕実は遼一との距離をとることはなかった。遼一はさりげなく夕実の右手に触れて指をからめた。夕実もしっかりと握り返してきた。

西へ車を飛ばした。隣には夕実が座っている。

尾道ラーメンを食べに広島県へと向かっていた。

妙に黒い雲が北の空に居座っているが、頭上には青空が広がっていた。ハロウインの季節が過ぎ、クリスマスの飾りつけが目につくようになってきている。岡山市からは四十キロ

メートルほどだが、国道二号線で繋がっているのも、近いものだった。

倉敷から南下すれば香川県に入れるし、尾道から南下すれば愛媛県に入れる。瀬戸内海を挟むだけで、四国はすぐそこだった。春になったら夕実と行くつもりでいる。

千華からの連絡は夏以降にないままだった。気にはなっていたが、便りがないのは無事な証拠なのかとも思うようにならなっていた。夕実がいることで、千華のことをあまり考えなくなっているのも事実だった。

十一時半に店に着いたが、すでに三十人程の行列が出来ていた。鶏がらだしの醤油スープはコクがあり、食べた後も口の中には余韻が残っていた。

店を出るとすぐ近くにある千光寺公園にも寄った。苦手なのか、ロープウェイに乗っている間、夕実は遼一にしがみついていた。志賀直哉が一年間滞在されたと言われる部屋にも入った。その時期に執筆された小説を、夕実はたまたま読んだことがあるらしかった。

車をパーキングエリアに停めたまま、千光寺から南西へ一キロメートルほど離れたところにある林芙美子像でも写真を撮った。遼一にはさっぱりわからないが、ラーメンだけではなく、文学スポットとしての一面もこの町にはあるようだった。

そこから東へ真っ直ぐに四百メートル戻ったところにある、銭湯ののれんがかけられてあるカフェへ入ったのは三時

半を少し過ぎた頃だった。明治に建築した銭湯を改装したらしく、カフェとしては不思議な雰囲気醸し出している。

大学の授業の話もした。細胞などの小さなものを研究する生物学、細胞を構成する分子を研究する化学、さらに小さな原子を研究する原子核物理学、さらに小さい陽子やニュートリノは素粒子物理学の分野になる。夕実は真剣に聞いてはいたが、理解できていないようだった。遼一も夕実の話す法律の話はさっぱりわからない。お互いに頑張っているねという程度のところで、話は落ち着いた。

隣のテーブルに座る親子が頼んだ尾道カレーの香りが、しばらく漂っていた。

帰り道も国道二号線を走っていた。車内では夕実の好きな女性シンガルの音楽が流れている。夕食を簡単に済ませた後、福山市の明神という交差点を左に曲がって北上し、ラブホテルに入った。

「楽しみだね、緊張するね」

夕実は初めて入るようだった。普段は遼一のアパートでセックスをしている。

微小な原子核物理や素粒子物理とは反対に、地球や太陽系を扱う惑星物理学があり、さらに銀河や銀河の集まりを扱う宇宙物理学というものもある。遼一は宇宙物理の研究室に入るつもりでいる。

宇宙物理を学ぶと、人間があまりにも小さく見えてくる。砂粒ほどでもない存在なのだろうと思えてくるのだ。そんな

ことをぼんやりと考えながら、遼一は夕実の胸の淡いピンク色をした先端部分を口に含んだ。夕実の体が反応を示す。人間がいくら小さく見えようが、遼一は女の胸は大きいほうが好きだった。揺れるほどではない夕実の胸は少し物足りなく思える時もある。夕実が遼一にまたがり腰を振りはじめ、のけ反っていった。こういった反応は医学なのだろうか生物学的なのだろうか、どのような研究がなされるのか、遼一は喘ぐ夕実を見上げながら、最後は思考を止めて襲ってくる快感に身をゆだねた。

夜中に目が覚めた。遼一に寄り添いながら夕実は眠っている。

時間を確認しようとして携帯電話を開くと、メールが一件届いていた。

千華からだった。

絶対に暗い内容だと確信できた。確信できる理由は思いつかないが、予感ではなく疑いようもない確信だった。それでも遼一はメールの確認をした。

「心を引きちぎられるようにつらい毎日です。帰る気力もありませんが、でも、遼一には会いたいです」

遼一は何度も何度もメールを読み返した。なぜ今日このタイミングでの連絡なのだと、舌打ちをしたくもなかった。

遼一は一度目を閉じた。眠気はすでに吹き飛んでいる。夕実が少しだけ動いて、足と足が触れた。

早く千華のもとへ行きたかった。行かなくてはならない気が

がした。だが夕実がいた。連れて行くわけにもいかないし、まして事情を話したところで他の女の所へ行くなど言えるはずもなかった。夕実の嫉妬深さはそれなりにわかっている。男の友だちだと嘘を通すこともできそうにない。

千華からのメールは夜中の一時だった。今は五時だ。もし千華のメールを見てすぐに車を飛ばせば、名古屋には朝に着いた。朝にメールに気付いても新幹線に乗れば、早く着くに違いなかった。今からでも遅くはない、そう思ったが、やはり夕実がいるので、行くこともできなかった。夕実を起こして家まで送り届けることにせよ、デートを早めに切り上げるにせよ、不審さをぬぐえないだろう。

泊っているホテルの目の前の道路を北へ一キロメートルほど進めば、山陽自動車道に入れる。近くにあるコンビニに寄れば金は下ろせる。一刻も早く千華のもとへ行きたかったが、名古屋は遠かった。実家に帰って来てくれたら一番都合が良かったのかもしれない。道路を走っていて昨日偶然知ったが、高速道路へと繋がる目の前の道路は東城街道と呼ばれる国道一八二号線で、北上を続ければ東城市までおろか遼一たちの地元にも行けるのだった。千華が実家に戻ってきていたのなら、とも考えたがそれでも、やはり夕実を乗せたままでは行けないだろう。

解なし。遼一は諦めた。解けない連立方程式だ。千華も夕実もどちらも大切な女性だがどちらかを優先するしかなかった。

今夜名古屋へ向かうと、遼一は千華に返信を送った。千華からはすぐに返事が来た。感謝の言葉と、詫びの言葉が添えられていた。

遼一は、寝息を立てている夕実を抱きしめながら、しばらく千華のことを考えていた。

八時に目覚めた夕実ともう一度セックスをした。千華のことが気になって仕方がなかったが、思いとは裏腹に、体は夕実に対して素直な反応をしていた。

夕実がたびたび訝かしむほどに、遼一は集中力を欠きながらその日はデートをしていた。

晩ごはんを済ませて夕実を家に送り届け、遼一は八時台のぞみに乗った。名古屋に着いたのは十時過ぎだった。グレーの帽子をかぶった千華は改札口まで迎えに来ていたが、間違えうほどにやつれていて、かける言葉を一瞬見失った。

「遅くなってごめん」

遼一が言った途端、千華は目を赤くした。

「来てくれてありがとう」

そう言うとき千華の目からは、大量の涙が溢れだした。

初めて来る名古屋を楽しむゆとりはなかった。言葉のイントネーションが、岡山とは違うことには気がついた。

駅を出て無言のまま数分歩き、居酒屋に入ってカウンターに通された。右隣に座る千華はうつむいている。右手の薬指には、成人式のときに見せてくれた指輪が光っている。

頼んだ酒が来て飲み始めても、二人は黙りこんだままだった。

た。千華はテーブルの上に両肘をついて、組んだ手の上にあごをのせている。口元を強く締めて瞬きはあまりしていない。何かを言いたいときの、昔からの癖だった。話すことを頭の中で整理しているはずだ。

「遼一の隣は、やっぱり落ち着く」

千華が聞きとれないほど小さな声で呟いた。

「中学生のころは理科の時間になると急に元気になっていたよね。高校生のときはクラスが違ったりもしたけど、登校中の電車ではよく隣に座っていた覚えがある」

千華がいろいろと思い出話をしていた。本題はおそらく違うことだろうと思いつつ、遼一は酒を飲みながら相槌を打っていた。

「新しく彼女はできた？」

「うん、まあ」

「そう、よかったね」

千華が少しだけ微笑んだようだった。

少し間が空いた。千華は肘をついたまま、指輪に触れている。

「私ね、彼氏と、別れちゃったの」

千華はそう言って指輪をはずしたが、また薬指に戻した。目には再び涙が浮かんでいる。

「死んじゃったの、夏に。私の目の前で」

「えっ」

驚きを隠せなかった遼一は、思わず声に出してしまった。

「私の目の前で、川に流されて死んじゃった」

テーブルに目を落としたまま、千華が手を膝の上に置いた。

「私がね、川に遊びに行きたいって、彼氏は乗り気じゃなかったのに、何度も何度も言って無理やり誘っちゃったの。今思えば、なんであんなに無理して行っただろって。まだ夏休み前で試験期間が始まったばかりだったのに」

千華が言葉を選びながら、ゆっくりと話していた。

「私のせいで死んじゃったのかな。私のわがままのせいで。そう思えちゃって。違うよって周りには言ってくれる。でも、ほらあいつ、彼氏を死なせた奴って、ひそひそと言っているのも聞えてくるし」

千華が一度顔を上げて、遼一を見つめてきた。遼一は何を言えばいいのかわからなかった。千華はまたテーブルに目をやり、飲み物を口に入れた。

「でもね、私、彼を誇りに思えるの。溺れかけていた小さな兄弟を助けるために彼は体を投げ出してね、男の子たちは助かったの。私は月命日に彼の家に行ってお参りしているの。その子たちと親も来ているのよ。彼の親からしたら私たちの顔なんて見たくもないのかもしれないけれど、それでも三回行って三回ともおうちに上がらせてくれた。お通夜では取り乱して『息子を返して下さい』って言っていたのによ」

千華が再び指輪をはずし、左手で持ったまましばらく見ていた。

「でもね、こんなことを言っちゃいけないのかもしれないけ

れど、本当は私、小さな見ず知らずの兄弟よりも彼氏に生き残ってほしかった。例えば子どもたちを見捨てて、罪悪感に溺れながらも彼氏に生きてほしかった」

千華が体を震わせている。

「彼も子どもたちも、どうしてあの日あの場合ににくちやいけなかったの」

千華は溢れてきた涙が頬を伝うのを拭いもしない。

「それとね、前にも言ったアルバイト先の店長の娘が、交通事故で死んじゃったの。高速道路で追突されて。結婚式を間近に控えていたのに」

店長の娘の名前を言っていたが、うまく聞きとれなかった。「たまたまアルバイトのことでどうにも困っちゃって、電話をしたの。他の友だちが運転をしていたみたいだったから。そうしたら悲鳴と何かがぶつかる音が同時に聞こえてきて、そのあとしばらく呻き声があったんだけど途絶えちゃって」それはまだひと月も経っていない最近の話だった。千華の頬を伝うものは、一滴ずつ速度を速めながら服の上にこぼれ落ちていく。

「ねえ、遼一」

鼻も真っ赤にさせた千華が顔を上げた。

「今日突然死ぬかもしれないのよ。明日は、二度と来ないのかもしれないのよ。そんな現実を、私はどう生きればいいのか？どれだけ恋しても慕っても、どんなに思い出そうとしても、結局脳裏に浮かぶのは溺れていく姿と、引き上げられたとき

の姿。聞えた悲鳴と、棺の中の少し歪んだ顔よ」

千華と目が合った。

「遼一が来てくれた。私、本当に嬉しいの。私にはまだ、手を差し伸べてくれる遼一がいた」

遼一は死んだ女性の婚約者のことが気になってしまった。

どんな心情でいるのだろうか。一人で抱え込むのだろうか、別の女性に心を預けるのだろうか。

「時の流れが解決してくれるって、友だちは言ってくるわ。私にはまだわからない。日に日にたまる古新聞のように、私の中で時間は重たくなっていく。私はその重さに耐えられず沈んでいきそうなの。川の底まで、海の底まで、私は暗くて深くても音もない所まで堕ちていきそうなの」

千華は一気にまくし立てた後、大きく呼吸をした。

「だけと遼一が来てくれた。あの頃のようにただ聞いてくれるためにだけわざわざ来てくれた」

高校生のときに飼っていた猫が死んだときも、千華は泣き崩れていた。あの頃の遼一はなぜそんなに泣くのだろうかと思ったってただだった。

あのときほど無関心ではなかった。しかしこの日も遼一はかける言葉がわからないでいた。何を言っても空虚であり、どんな言葉もありきたりのような気がした。手をつないだり髪をなでたりそっと抱き寄せたり、そんなことも考えられたが違うような気もした。隣にいてあげるだけでいいのかもしれない。

話に一区切りがつき、千華も酒を飲み始めた。サラダとピザと唐揚げを頼んだ。夕実が唐揚げを苦手にしていることを遼一はふと思いついてしまった。携帯電話を開くと、夕実からメールが二件届いていた。千華に断りを入れて返信をしておいた。

左隣に座る若い男女の会話の端々が聞えてきた。こんな冬にシベリアに行くらしい。

「生きていく毎日が怖いよね」

空になったグラスを見つめながら、千華はまだ何かを言いたそうだった。

年が明けて三月に、とんでもない地震が東北地方で起きた。大学内でも募金が集められていた。春休みに入ると、就職活動どころじゃない、と何人もがボランティアとして東北へ行ってしまった。周囲に東北出身者がいないため実情はメディアを通してしかわからなかった。

自分にできることは何かを考えたが何も浮かばず、自分は自分の人生をしっかり生きることだと考えるだけだった。夕実と計画していた四国旅行は中止にして、貯めておいた金の多くは募金にまわした。

法律の話をよくしていた夕実も、震災を機に人情的な話をするようになっていた。友人たちもそれぞれに何か思うことがあるようだった。

四月の終わりに、千華からメールが来た。死んだ彼氏が好きだった外国のミュージシャンが、震災の影響を受けて自身

の「SING」という歌を、「SING IT FOR JAPAN」という題で日本のために歌え、とりメイクしたらしかった。

震災で、無情にも落としてしまったたくさんの命がある。ただでさえ、千華は彼氏が目の前で子どもを助けて死んでいる。慕っていた女性が交通事故で死んでいる。「死んでしまった人たちのためにも、命を無駄遣いできない」と、少しずつ立ち直っているようだった。ただ、読みとれる文面からは、気負いというか、気を張り詰めすぎているような感じがしないでもなかった。

実家の近くに地元の山羊牧場直営のレストランができたように、次に千華と地元で会えたら、その店に行つて山羊のミルクを使ったデザートを食べることになった。

時季的に御衣黄桜が散るころだった。遼一は葉桜になった構内の桜の木を眺めていた。大学生になって四度目の春だった。遼一が属する総勢十数名の研究室では、主に宇宙ニュートリノ、ニュートリノ原子核反応、宇宙背景放射測定 of the three themes で研究が行なわれている。

宇宙背景放射とは宇宙最古の光のことであり、つまりそれをつかえることでビッグバン直後の宇宙の状態を観測できるのだ。電子回路、電磁波、超伝導、電磁気学、量子力学などの知識を総動員することになる。

梅雨が明け、夏休みが近づいてきた週末に、夕実が遼一のアパートに連泊することになった。遼一も土曜日は居酒屋で

のアルバイトを休みにして、夕実と岡山駅前デートをした。夕実が作ってくれた夕飯を済ませてから、十一時に遼一は風呂に入った。試験期間が終われば夏休みになる。

千華は盆には岡山に帰ってくるのだろうか。四月の終わりにメールを送ってから連絡は取っていないかった。就職活動も大詰めのところかもしれないが、一度メールを送ってみようと思った。

小学生的のころから、風呂でも水たまりでも波紋を見るのが好きだった。たった一粒の滴が生み出す紋様を、飽きずによく見ていたものだった。宇宙の勉強をしていると、星ひとつなど大したことなく思えてくる。けれど、砂粒ほどの価値もない人間やその他の生命が、奇跡のように思えることもまた事実だった。波紋が広がるように、宇宙も膨張している。

湯船につかっている間に携帯電話が鳴った気がした。しばらくするとテレビの音が聞こえてきた。電話の音は気のせいだったかもしれない。波紋と波紋がぶつかるのをしばらく見ていると、遼一は風呂から出た。

夕実の機嫌が悪そうに見えたが、テレビの内容が不快だったからと言われて会話は途切れた。電話を確認したが鳴っていないかったようだ。少し引かかるものがあったが、それが何かは気がつかなかった。携帯電話を閉じると夕実と目が合ったがすぐにそらされてしまった。

その晩はセックスを拒まれた。珍しく泊りに来たのだからそういう態度に少し違和感を覚えたが、そんな日もあるのだ

ろう。

「私のこと、好き？」

電気を消してから、背を向けている夕実がぼつりと呟いた。

「うん、どうして急に？」

「なんか、不安になっちゃって」

遼一は夕実の頬に軽く口づけをした。しばらくまどろんでいるうちに眠ってしまった。

翌日の日曜日は夕実が行きたがっていたので、本屋へ行くことにした。午前中は二人とも部屋で試験用に勉強をしていた。なかなか寝付けなかった夕実はやはり不機嫌そうだったが、帰ろうとするそぶりは見せていない。

ランチを済ませてから本屋へ入った。二人で雑誌コーナーへ行ったあと、夕実は小説を探しに、遼一は科学関連の本を見に行った。途中で電話がきた。登録されていない番号だったが、見覚えがあるような気がした。出ようかと思ったが、視界に入る夕実がちょうどこちらに向かってやって来るところだったので電話には出なかった。あとからまた電話をすればいいだろうし、急ぎだったらまた連絡が入るはずだった。

夕実を送り届けたのが遅かったので、日中に来た番号へは明朝に電話をすることにした。

数時間たった真夜中に実家から電話がかかってきた。初めてのことだった。

「明日か明後日はこっちに帰って来るの？」

遼一は笑ってしまった。大学の試験が幾つかあるというの

に、実家に帰るわけがない。

「千華ちゃんの告別式には出ないの？」

電流が全身を貫いたような感覚に襲われた。

「千華、が、死んだ？ え、なんで？ どういうこと？」

遼一は動揺し狼狽している自分に気付いた。

彼氏の命日に合わせて、千華は同じ場所で自殺をしたようだった。

思いつめていた去年の十一月には、連絡をよこしてきた。そして春先には元氣を取り戻しつつある様子だったのだ。今回はそんな連絡もなく急に死んでしまったのだろうか。通夜にも葬儀にも出る、と親には伝えた。

なぜ自殺を？

遼一は、真つ暗な部屋の中で、目を宙に彷徨わせていた。時計の針の音よりも心音がかなり早く聞える。成人式の日に見た晴れ姿よりも、名古屋で鳴咽していた姿が脳裏にへばりついてくる。

千華。

呟き、出るはずもない電話をかけようとしたが、千華の名前は登録されていないかった。千華から来ていたメールも、遼一から千華に送ったメールもすべて消えている。アドレスごとすべて見あたらない。

嘘だろ。

寒気を覚えた瞬間に、日中にかかってきた見覚えのある番号というのは千華の番号だとはっきりと思い出せた。昨日の

夜携帯電話を開いたときに感じた違和感は、いつもの画面ではなかったことにも気付いた。

夕実が消した？

入浴中に電話が鳴った気がしたのは、錯覚ではなかったのかもしれない。メールの内容を見れば、千華と遼一がただの友人ではないことくらいわかるはずだった。昨年の秋には夕実とデートをした直後に名古屋まで行っている。夕実は寝付かなかったのではなくて、メールを見るために起きていたのだろうか。

夕実への疑惑も、千華の死も、遼一は認めたくなかった。外が明るくなるまで千華のことを考えていた。実感がわかないからか、不思議とまだ涙は出てこない。

集中できないまま試験を終え、地元に戻った。夕方の試験と明日の試験は休むつもりでいる。日中に夕実から何度かメールが来ていたので、通夜があるとだけ返信をした。本来なら寂しさややりきれなさを紛らせてほしいところだが、正直なことを言えば、疑いを抱いてしまった夕実どころではなかった。

実家に着く前に矢神駅に寄った。車から降りて葉の残る御衣黄桜を見上げた。千華と最後に二人で見たのは成人式の夜だった。あれからすでに一年半が過ぎている。

昨日の電話が気になった。電話に出られたら違う結末だったのだろうか。電話があっただろうと思われる土曜日の夜、

そして昨日。千華は遼一に何を求めたのだろうか。

彼氏の命日に同じ場所で死んだということは、例え電話に出られたとしても手助けはできなかったのかもしれない。

立ち直ったように見えたが、実はそうではなくて、千華は耐えられなくなったのだろうか。それでも、震災の後には、「命を無駄遣いできない」と、はつきりと言っていた。その意思が切れてしまったというのか。

電話に出られなかったことの後悔と申し訳なさが、押し寄せる波のように容赦なく遼一に襲ってくる。千華が彼氏を失ったときの重さに耐えられずに沈んでいき、海底まで堕ちていきそうと言っていたのを思い出した。

一陣の風が吹いた。砂が舞い上がり、西に傾いた陽の光を浴びながら降ってくる。

蚊が左腕に止まった。よく刺されていたと千華に笑われたのが懐かしい。いくらでも刺してくれ。そして千華の笑顔をくれ。

通夜と告別式くらい、背筋を伸ばして歩こうと思った。だらしがない、と千華に何度も注意をされていた歩き方だった。

道の駅の向い側にある、千華と行くはずだった山羊ミルクの店も通ってみた。緑色の三角の屋根をしていて、月曜は定休日のようなのだ。

実家に帰り父親の礼服を借りた。初めて着る黒の喪服は、言いようのない緊張感を与えてきた。

葬儀会場へ向かった。間違はなく千華の通夜だった。同級

や見知った顔を見かけた。会場へ入ると、ハンカチで涙を拭
っている千華の父親が見えた。母親は憔悴している様子だっ
た。高校生の弟もうつむいている。

水死ということは、おそらく棺の中の千華とは対面できな
い。千華は何を思い、自らの命に終止符を打ったのだろう。
あの時に電話に出られたら。何度も思っていることだった。
高校生のときまでは毎日書いていたらしい日記は、書き続け
ていたのだろうか。もしそれがあれば、少しは千華の心情が
わかるのかもしれない。

千華の遺影を見ながら、遼一は謝罪の言葉を唱え続けてい
た。電話に出られなかったことが悔やみきれず、遼一は底の
ない穴へ落ちていくような気がした。周囲のすすり泣きが、
遼一をさらに暗闇へと引きずり落としていく。

隣に座る男が、枯れた老木のように動いていなかった。数
珠を持つ左手の婚約指輪だけが光っている。

流れ星を見たときの千華の笑顔を思い出そうとしたが、う
まく浮かんでこなかった。

(中区)

「入選」

ラーフラの唄

の い り

1

ある日、カピラ城に立ち寄った旅人が、ぼくと叔父さんに
いました。

「ちょっと見ないうちに、もう九才と十六才になったか。月
日は暦が無くて、過ぎていくものなんだね。誰も止めるこ
とができない。ところで十六になったナンダよ。よく目の前
を見てごらん。城壁に朝日があたって、光と影の凸凹が見え
るだろ」

九才の僕は黙って俯いてきいていました。

「たしかに屏風のように、光と影が互い違いになりますね。
それがどうかしましたか。お義兄さん」

ナンダ叔父さんはこたえました。

「丸い煙突も、やはり西側は影になっている。あの影全部を
消して、煙突も家も輝いて立っているようにするには、どう
したらいいのかな」

謎なぞをするように旅人はききました。

「お義兄さん。それは簡単です。兵士に足場を組ませて、日があたらないところへかがり火を当てれば解決です」

叔父さんは誇らしげに謎にこたえました。

「兵士にたよらないで、どこにも影が無く輝いて立っているようにするには、どうすれば良いのだろう。私はそれを聞いたのだよ。それがわかれば、この世から争いや戦争というものがなくなるのだよ。すぐ出る答えでも、考えたから、頭がよいからといって出る答えでもない。今、答えが出なくてもいい。これは次に会うときまでの宿題だよ。よく考えてごらん。わたしも同じ宿題をよく考えてくるよ。じゃ、また出かけるよ」

旅人は叔父さんとよくにいいました。

そばでじつと耳を澄まして聞いていた王様は

「それまで分かっているのなら、いつでも帰って来てこの国を守っておくれ」

と、旅人にいいました。

しばらくたったある日のこと、カピラ城でナンダ叔父さんの結婚式がありました。

ほくは城の儀式にめつたに出席したことがないので、固くなって口を一文字に結んで、母と並んで座っていました。

花婿と花嫁が雨のように花びらを受けたとき、黄色い服をきた十人ほどのお坊さんが花婿を囲み、演説を始めました。

話しているリーダーは、このまえのナンダに宿題を出した

旅人でした。

「一つ、南の同盟国マガタの基地を、この国の近くに作ることに反対する。二つ、北のコーサラが、この国にせめ込むのにも反対。そのためには」

声を荒だて、多くの老爺さんにあたる王様に向けて言い放ちました。

「戦争のもとになるこの結婚、反対。花婿の王子は今すぐ寺に連れいく。そこに座っている子供も連れていく」と、ナンダ叔父さんとほくを指さしました。

お母さんが悲鳴をあげて、ほくをきつく抱きしめました。

王様は気を失って倒れ、花嫁のスンドリーは花たばを足もとに落として泣き出しました。招待客は何ごとが起きたのか分かりません。花婿のいないカピラ城の宮殿は、葬式のように静まり返ってしまいました。

その夜は満月の明かりでぼんやりと間接照明されて、お城にはどこにも影が無く、浮かび上がって見えました。

旅人は

「これがナンダに出しておいた宿題の答えだ」

というように九才のほくと十六才の叔父さんをお城から攫って、この道場に連れてきました。

ナンダ叔父さんはいまでも花嫁のことが忘れられず、道場をぬけ出すことがあります。

兄貴たちに聞くと、あれから十年以上たった今でもあのスンドリーに会いに行くのだそうです。

兄貴たちはそのたび大慌てで、叔父さんを道場に連れもどしました。

2

そぞろ歩きから帰った和尚さんが、まき置き場にかれ枝を投げこんでからいました。

「戦争が始まる」

ふるさとのカピラ城に北の大国コーサラが攻め込むのだそうです。

ほくは母やナンダ叔父さんのお母さん、お爺ちゃんの事が心配でした。

カピラ城で八才のときに仲間はずれと蔑みに会ったコーサラ国の瑠璃太子が、今、王になってその仕返しに攻め込むのだそうです。

和尚さんは軍隊の通り道にある枯れ木の下に一人座って、瑠璃王と二度話したそうです。一回目のときには王から

「青々と茂った木が森の中に沢山あるのに、和尚はなぜわざわざ街道ぞいの枯れ木の下に座っておられるのか」

と聞いただけで、そのときは退却したそうです。

二度目のときも、王は車を降りて座禪する和尚さんのそばまで歩いてきて、枯れ木の下に座っているわけを尋ねたそうです。

「枯れていても、ふるさとの木陰は和むものだ」

答える和尚さんを不思議そうにながめ、軍を引挙げたそうです。

「カピラ城は持ち堪えるでしょうか」

兄貴が和尚さんにききました。

「カピラ城で釈迦族の学生達が瑠璃太子に行った仲間はずれや蔑みを、無かったことにできると思うか」と聞きかえしました。

「できません」兄貴が答えると、和尚さんは

「その通りなのじゃ。八才のとき、太子が受けたカピラ城での蔑み、つまり『瑠璃太子は尊い生まれで無く、コーサラ国の先王パーナデイ王に嫁乞いをされて、釈迦族の大臣マハーナーマの下女を、自分の子であると偽って嫁入りさせた。瑠璃太子は、その下女の産んだ下賤な子である』そう罵られ、カピラ城講堂のしし座に座った太子を鞭打ち、地面に叩きつけた学友どもが居ったのじゃ。太子はそのとき『われが王位についたとき、この怨みは真つ先に晴らしてくれよう』と言ったと聞くが、今、そのときが来てしまった。今さらわたしが望郷への思いから、国境の枯れた木の元に座る位では瑠璃王の怒りはとても収まらない。腹違いの弟マハーナーマの自惚れと放漫は、滅びの原因となってしまうたのじゃ。釈迦族は誉れ高く自尊心が高いが、今回はそれが裏目に出てしまったのだ」

和尚さんはそう云うと医師ジーヴァカを始め、ほくと十人ほどの従兄弟やおじさんを連れてカピラ城に向かいました。

カピラ城につくと、傷ついた女子供の手当をしました。穴倉に突き落とされ、傷つき死んでいく女達に説法されました。

「わたしの説く法である言葉は、今のジーヴァカには及ばない。わたしから離れ、散り散りとなり、無いに等しい。今死ぬ君も、これから死ぬ私も、出会いと別離にさらされている。誰もが苦痛と悩みのなかにある。六つの生まれの中にある。この道理を受け入れるものは、生まれ変わることはない。生まれ変わることがなければ、生も死もない」

和尚さんの説法を聞きながら、女子供の命がいくつ燃え尽きたことでしょう。

ジーヴァカは和尚さんのお話を聞きながらそれを自分の責任のように感じてしまふのでした。

「八歳のときうけたいじめが、どんなに深い心の傷だっただろう。瑠璃太子は帰国するとすぐに、産みの母を殺したのだ。王子の怒りと悔しさを分かつとうとしない、父パセナーディ王の軍隊もほろぼして瑠璃太子が王となり、三度目の進軍でカピラ城に攻め込み、張本人のマハーナーマおじさんを追い詰めた。『私が浮かび上がってくるまで、攻め込むのを待ってくれ』マハーナーマおじさんは池の底の藻に絡み付いて、時間稼ぎをして頑張って死んだ。でもそんな一時しのぎは、かえって焼け石に水だった。

瑠璃王のコーサラ軍は逃げ惑う女子供を殺し犯し、穴に埋め、または奴隷として連れ去った。瑠璃王は無傷で勝ち、怒

りは収まったようだったが、そうではなかった。心の傷はどんな谷底より深かった。帰国後、その戦争に反対していた兄の王子までも殺した。それから、七日あと王は憂さ晴らしの川遊びをしたという。川上に大雨がふって、一行は流れに飲み込まれ、瑠璃王の死体さえ見つからなかったという。一時の蔑み、ちよつとのつもりのいじめでも、長年相手の記憶にとどまると悪い復讐心となり、運命は悪い結果へ転がり始めて止まらなくなってしまう。素直に謝らせても貰えなくなってしまう。その後、悪い宿縁は自然現象まで巻き込んで、瑠璃王に死を招き、城も原因不明の発火で燃え尽きたということだ。この世は他人が断ち切ることでできない宿縁が、繰り返し行われる修羅場なのだ」

和尚さんは肩を落としていました。

「それを断ち切るには、自分に湧き上がる怒りを心で耐えて、仕返しをしようという気持ちをなくすことですね」兄貴は自分にできそうな行いに気付いて、和尚さんに尋ねました。

こうして、ぼくのふるさとの国はある時は北のコーサラ、ある時は南のマガタ国の一部になってしまいました。行く先を失った人々が、和尚さんをたよって何百人もきました。

そのなかに、母も、王妃である叔父ナンダのお母さんもいました。

女性の弟子を取らない和尚さんは、従兄弟のアナンの誘導

尋問にこたえて

「女性だって立派に修行を完成できるんだが。いままで一度も受け入れたことがない、それが心配なんだよ」

つい、本音で答えていました。

「女性でも修行を完成できることがお分かりなら、あなたの父王がなくなってから、頭を丸めて三度もたずねて来たナンダの母さん。四度目の今回はラーフラの母さんまで頭を丸めて出家を願っているのです。受け入れてやってください。釈迦族は今みんな、難民になってしまったのです。居場所だけでも与えてやってください」

従兄弟たちに熱心に頼まれ、和尚さんはその意見をとうとう受け入れました。

がんな和尚さんが人の頼みを聞き入れたことは、もう一度ありました。

ぼくとナンダ叔父さんが連れ去られたあと、ぼくのお爺さんでもある王様が嘆き悲しんで頼んだ願い事でした。

「これからお寺に人を連れて行くときは、かならず親族の許しを取ってからにしておくれ」

この時お爺さんはマハーナーマ叔父さんを、密かに跡取りに決めていたのかもしれない。ふるさとが無くなっても、母と叔母さんとたくさんの親戚や顔見知り会え、一緒に暮らせるようになった時はほんと嬉しかったです。お寺から逃げだしたナンダ叔父さんがまた連れもどされました。

叔父さんの俯いた目から、ガラスのかげらのような涙がと

び散りました。

「それで、スングリーには会えたの」

ぼくの母が小さな声で聞きました。

「二階のベランダに、スングリーの姿がぼんやり見えたとき、アナンたちに引き離され、連れ戻されました。」

声は扇風機や自転車のリムにはじかれたように、ぶるぶる吹きあがっては途切れて消えました。

「可愛そうに、あなたの気持ち良くわかるわ。あれから十四年。あなたは、もう三十だわ。スングリーもあなたのこと忘れられないで、まだ待っているのね」

母はナンダや、スングリーや、ぼくや、自分の名前や、年を確かめるように十四年の年表を地面に「石墨で刻みこみました。」

「叔母さん。ぼくはその消えていく年月のことを考えると、何か取り返しがつかない様な気がして、居ても立ってもいられなくなり、つい、お寺の掟を破ってしまうのです」

後は言葉になりませんでした。

母はだまって叔父さんを見つめ返しました。

「わたしも同じよ。和尚さんの言いなりになって、ラーフラとナンダまで出家させたのに、戦争は止められなかった。カピラ城も釈迦一族も全滅してしまった。それが何かとても悔しいの。それを思うと、ここへ来てから今日まで心やすらぐ日など一日もなかったわ」

子供の頃、ぼくと母が庭の木陰のシーソーに乗っていて、

大きなあたたかい水まくらに全身包まれるような感触が、今の母の言葉から伝わってきました。

「あなたのお母さまには内緒よ。それで気が済むのなら、スンダリーへの熱い思いをいつでも聞いてあげるわ。わたしはあなたが可愛そうで仕方がないのよ」

母はそういつて叔父さんを抱きしめました。

「あなたのお母さまにはいつだって叶わなかったわ。あなたがお寺に連れてこられた時も、取り乱すこともなかった。国が滅び、国を追われても、駅で馬車を乗りかえた位にしか思っていない。和尚さんの言いなりですものね。昔は和尚さんの乳母だったのよ。だから今でもお乳をあげている気持ちなのかしら。あら、ごめんなさい。わたしの悪いくせね。昔のあれこれをまだ懐かしんで居るなんて！ 今でもあなたのお母さまに焼きもちなんか妬くなんで！」

ナンダ叔父さんは泣きじゃくりながら母の言葉を聞いていました。

食事を知らせる木魚になると、ぼくの頭にも、立ち上がったナンダ叔父さんの頭にも、カレー・ライスが「ぼつ」と浮かんだのがわかりました。

3

朝のお勤めを終わって、兄貴と物乞いにでかけました。里の家を一軒ずつ回ります。

夏の地面はしっとり湿って、はだしの足に気もちのよい冷たさでした。

太陽が山のうえに出て、大川はにごってゴウゴウ流れていました。

夕べ台風だったからです。

岸辺の死体焼き場では、お寺から修行に出ていた先輩の放浪僧が、車座になって座禪を組んでいました。

生焼けの死体がごろんと転がって、その肉を狙って野犬も辺りをうろついている場所です。

「お前にはまだ早すぎるが、あれは不浄観という修行なんだよ。この世は常に移り変わっていることを、焼き場の死体が白骨になるまで観察して、直接学んでいるところなんだよ」と兄貴はつぶやき、行き過ぎました。

しばらく行くと、大声で怒鳴りあっている人だかりがありました。

円陣のなかに男が泡を吹いて倒れていました。

「今日はよく死体に出会う日だな」と思いました。

「どく蛇にやられたんだ」

村人は叫んでいました。

生まれたばかりの赤ちゃんを抱き、三才位の男の子を連れてたがが近寄って来て、死んだ男を見ると「あつ」と尻ごみしました。夕べ男は、嵐の中赤ちゃんを産める場所を探しているうちに蟻塚に足をとられ、中に居たどく蛇にかまれまし

た。女は嵐でたおれた大木の影で赤ん坊を産みました。

川一つ越した女の実家は、あたりでは知らないものが無い大商家でした。

死んだ夫は元を正せば、その見習いの小僧さんでした。

若いふたりはおたがい好きになり、親の反対を聞かず、駆け落ちして、遠い地方で一緒に暮らしていたのです。女が夫に

「しきたり通り、自分が生まれ育った家で赤ん坊を産みたい」と言い出したときから、男にはいやな予感がしました。

家に近づけば近づくほど、怒って身分の違いを暴き立てた主人の顔を思いうかべました。

「いまさら、元の主人に許しを乞う位なら死んだほうがましだ」とも思いました。

女は夫の本心に気付く余裕も無く、生まれたばかりの子を親に見せたい一心でした。

「川向こうの実家から、助けが来るまで」

という約束で夫の死体を村人にあずけました。

心は疾うの昔から実家のほうへすつ飛んでいて、子供さえ一緒なら夫の事などどうでも良かったのかもしれない。

そして土手をよるけるように、渡し船のほうへ歩きだしました。

ぼくと兄貴は寺の言いつけを破って、女をしげしげと見つめていたのではないかと思います。ぼくらは村人と土手に登って、遠ざかって行く三人を見届けました。

三人は渡し船に真つ直ぐ向かっているように見えました。

「さあ！ 物乞いに行こう」

兄貴が目ではくに合図したとき、女は土手に男の子を座らせると、赤ん坊を抱いて流れに入ったのです。

兄貴は女に向かつて

「まてー。まてー」

叫びながら村人とかけ出しました。

女は「渡し船では、間に合わない」と実家に急いで川を渡り始めたのです。

川を渡り、向こう岸に着くと流木でベッドをつくり、そこに赤ちゃんを置いて、男の子を連れに流れを引き返して来ました。

向こう岸にオオタカが舞おりたのは、女が川の中ほどに来たときでした。

村人たちは手も足も出せないこちら岸で、慌てふためいて、ぎこちなくオモチャのように動き回りました。

オオタカは野ウサギを採る時と同じように、ベッドの赤ちやんを地面に打ちつけました。

動かないのを確かめると、首根っこを爪でつかんで空たかく舞あがり、連れ去りました。

女は川の中ほどで背伸びすると

「だめー。やめてー」

オオタカに向かつて、手を振りました。

土手で母をじっと見詰めていた三才の男の子が、呼ばれた

と思つて流れに向かつて這いだしました。女は男の子に「だめー。来ちゃ駄目」

兩岸に、大きく手をふったとき、男の子は、頭から川に吸いこまれました。

兄貴は土手をかけおり、村人の制止をふりきつて、つんのめるように川へとびこみました。

ほくも、何も考えず、男の子めがけて跳びました。

泳ぎは少しだけ自信がありましたがお城のプールで泳ぐのとはだいぶ違っていました。岸辺の木や草が、川上に向かつて狂つたように突っ走り、ほくは水を飲みました。

川底では、大きな石が好き勝手に転げまわつて、足をすくいました。ほくは岸辺の木杭に突きあたり、ヌルヌルの藻にしがみつきました。

息をはずませた兄貴がほくの背中を抱き

「あきらめよう。ふか追いつたら命を落す」

岸辺の葦と村人が差し出した手をたよりに、岸にあがりました。

女は波間に消えてなくなり、予想もつかない下流で頭を出し、向こう岸に流れ着きました。

兄貴はぬれた裾をしぼりながら、村人と向こう岸を見つめました。

カモメの灰色の翼がきらつと白く光ると、入道雲に吸い込まれたように消え、せみの声が割れんばかりに響いてきました。

帰り道渡ししの船頭さんはどちらの岸で起こっていることも一番早く知っているのに、渦まぐ川面を竜神でも宥めるように、黙々と櫓で撫でて引き返しました。

商店街に入ったところで

「ああつ。また人だからだ」

兄貴は一步後ずさりしました。

さっきの女が目の前で、父母と妹一家、家族七人の死体の前に

「いつそ川に流されて死んでしまおうと思つたが、せめて故郷の両親に詫びてから死にたいと、せつかくやつて来たのに！なんていうことなの」

泣き叫んでいました。

夕べの台風で、実家が倒れその下敷きになったのでした。

村人がお供えた小銭や、食べものや、花などが風で道路にとび散りました。

三年ぶりの近隣の声掛けにも答えませんでした。女は自分が誰だか忘れ、影になったように人垣からさまよい出ました。

4

白ネコが大問屋の塀の上にさ迷い出ました。その影がガラス戸をよぎり、さっきのカモメのように空に向かつて吹きあがると消えました。

空には、白ネコが綿菓子になつてふくらんだような入道雲

がでていました。

ネコは後ろ足をふまれたように塀の上でよろめき、あわてて四つ足でふんばりました。ネコは昨日ネズミをいたぶつてるとき、油断して足をかまれました。

いつものように商店街の残りものを腹いっぱい食べて、目測で塀にとび乗るまでは何事ありません。

でもそのあと足が纏れてしまう。まわりは爪もかからない空ばかり。

女は着ているものがすべて脱げ落ちて、そのことにさえ気づかないのでした。

村人が目を逸らした瞬間から狂気の中へさ迷い始めました。

のら猫も女も、目的を失って迷うような足取りでした。

入道雲だけが、どつしりと空に腰をすえてゆらぎません。

おんなと猫が悲しそうに見つめあうと、そのぶん水平線から入道雲が無限に盛り上がりました。

「こんな、皆が忘れ去ってしまつて振り向いてもくれない所に長居すると……女も猫もカモメのように吸い込まれて消えてしまい……皆、死んでいなくなつてしまふに違いない」

ぼくはそう思い込んでいました。

実際、近隣やぼく達が目を背けた一瞬に、裸の女も猫も迷子になって、その場から消えていました。

帰り道、ぼく達はまた死体焼き場のそばに差し掛かりました。すると中の一人が兄貴に近付いてきて

「同僚の僧が殺された」

というのです。

内臓が飛び出し、蛆虫が湧く死体を前に修行していると、心にストレスを感じる者が出ました。そのうち本当にこの世をはかんでしまったのです。

不浄観とか無常観に達するどころか、自分が今生きていることに疑問を抱き、しまいには

「こんなに汚れた自分を殺して欲しい」

「自分を殺そうとする仲間を先に殺したい」

などと口走るものが現れたのです。

今日の昼ごろ、同じ場所で修行をしていた異教徒に、僧として一番大切な自分の衣と鉢を報酬として与えてしまいました。

そして、仲間を殺させるという事件が、起きたのです。

兄貴は一同に修行の一時停止を命じ、全員いったんお寺に戻るように呼びかけました。

道場に帰って庭に出ると星がにじんで輝きました。

天の川がぼくの涙の向こう側を音を立てて流れました。

夜空に僕の頭の影が、合わせ鏡でも見るように何処までも並んで浮かんでいました。

「ぼくの影が宇宙に繋がって広がってゆく」

星が瞬いて、ぼくの涙の池に破片のように落ちてきました。

その逆もありました。

天の川が滝になって流れる音がきこえました。

ぼくはどこにいるのか、誰なのか。座っているのか、歩いているのか、眠っているのか、わかりませんでした。

涙腺いっぱい詰まったぼくの熱いもの、そのマグマの爆発や噴出は人に伝えることが出来ないものでした。

闇を引き裂いて

「ジッ、ジッ、ジッ」の吃音がひびき、オオタカの菱のような多面体の爪が、秒針のように

「カチッ、コチッ」

星座を掴んで回すのでした。

その動きと同調して、ぼくの頭も少しずつ星と同じ方向へと傾くのが分かりました。

そこでぼくはこんなことを呟いていました。

カカチチ ココチチ

そこんとこじやない ここんとこ

ここんとこじやない ここんとこ

歯車じやない 時計みたいな

時計じやない 歯車みたいな

自分に噛まれた舌みたいな

自分の舌を噛んだような

ジッ ジジー ジッ ジジー

行くものは行かず

行かないものに分けなどない

カッチン コッチン

ぼくは大きな時計の針に乗ってまわってた

ヤーン ヨーン

それから何事も無かったように、静かないつもの夜空が広がってきました。

兄貴がぼくの顔を心配そうにのぞきこんでいました。

つぎに母がのぞきました。

「気がついたのね。あなたは足の骨が折れたときも泣かなかつたのに、生まれて初めて、声を出して泣いたのよ」

母の口が動くのがみえました。

「いつもの癩癧とちがうと思っていたら、その後、顔面にチック様の痙攣が二十秒ほど続き、すうーと気を失ったのよ」

母の顔が夏の大三角の星空に、ほんやりと浮かび上がってきました。

マガタ国王の重病を治した名医ジューヴァカは、その時のぼくを

「テンカン発作」と診断したそうです。

夏の日、母とぼくと兄貴は道場の前に机を出して受け付けをしていました。

庭に教壇があり、和尚さんのお話がある日でした。風鈴が鳴っていました。

そこへ全裸で泥まみれの女が赤ん坊を抱いて入ってきました。

「裸はいかん」

兄貴は目をそむけると、追い払うように手をふりました。ぼくは嵐のとき、一度に家族全員を失ったあの女を思い出しました。

「何処で取り戻したのか。あの時、オオタカに攫われたはずの赤ちゃんを抱いている」

和尚さんが咄嗟に袈裟をぬいで女にかけ、門番の兄貴に「中に入れてやりなさい」といいました。

和尚さんのお話が始まりました。

和尚さんは、焼き場での修行組に、殺そうと思っただけでも殺したのと同じであり、その罰は、もっとも重い破門であると宣言しました。

そして修行方法を、自分の呼吸を数えながら道場で静かに座る方法に変えました。

俯いていた女は、和尚さんの話がもどかしいとでも言うように急に立ちあがって

「はやくこの子を治す薬をください」と、催促しました。

和尚さんは女に向かつて肯くと

「芥子の種を集めてきなさい」

短くこたえました。

女は和尚さんが掛けてくれた袈裟を落として立ちあがり、入ってきた時と同じ姿で出ていきました。

女は夫と親戚七人と三才の男の子が死んだところまでは、すなおに思い出せるのです。

しかし、オオタカに攫われた赤ん坊の事を思った瞬間、記憶に稲妻が光りました。

赤ちゃんを攫ったオオタカが獵師の弓矢で撃たれてしまい、バタバタ川面に落ち、赤ちゃんがどうしても助かって女の胸に落ちて来て生き返ってしまう。そのような幻想が何度も襲って来るのでした。

村人たちに

「かわいそうね。元気をお出し。その子はもう死んだのよ」といわれるたびに、女はもつと強く赤ん坊を抱きよせ、息を吹きかけ悲しみを深めました。

和尚さんは

「良く効く薬を作ってやろう。材料の芥子の種を、死別を味わった事の無い村人から貰ってきなさい」

と女にいったそうです。

芥子の種はどの村人のところにもありました。

しかし、別れの悲しみが無い家など一軒ありません。

村人に話しかけるたび、薬になる芥子の種は女の胸から少しづつ無くなっていきました。

そしてオオタカが、吾子を地面に打ちつけた場面の辛い記憶をうけいれたのでした。

われに返った女は大川で身を清め、吾子を火葬でとむらうと、頭を丸め緋のサリーを身にまとい道場にもどりました。

二十三才になったこの頃、道場で「和尚さんがぼくを甘やかしている」という噂が、サーっとひろがりました。

ぼくがピカピカにみがいだ厠にわざわざ来てほこりを指ですくいあげ、「やりなおし」などと言う兄たちもいます。

ぼくには、道場でどんな事をどれだけやれば丁度良いのか今でもわかりません。

何度もやり直していると、自分がだんだんいやになってきて、気がつくとい自分の手のひらに血が出るまで噛み付いているのでした。

兄貴はぼくの手に包帯を巻きながら

「賤しめられ、辱められ、嫌がらせを受けたと思っても癪癪を我慢することだ。悪い宿縁を断ち切るための、勇気のいる修行をこれから始めるぞ」と、励まします。

兄たちの注目がぼくひとりに集まって来ると、右手指の折りまげが増えると母は言います。そして厠通いも増え、近づく者の手の甲にも無闇やたらと噛み付くのだそうです。

今日はきつく注意されたため、はき気がして眠くなり、テンカンの大発作になっていました。目の下がピクピクいれいれして、いつの間にか気を失っていました。

気がつくと、母がぼくの手を取って泣きながら囁きました。「そんなに無理して我慢することは無いのよ。一生かけてゆ

っくりやればいいことなのよ。急ぐことも恐がることもないのよ。わたしの声が聞こえたらすぐに目を覚まして『お母さん』と呼んでちょうだい」

ぼくが手を握り返すと

「母さんはあなたに隠していたわけじゃないのよ。あなたの修行に甘えは禁物と思って黙っていたのよ」

母は僕の手を握り返しながらいいました。

「三度目の発作まで引き起こしてしまった今、あなたに、こんなことになったわけを言っておこうと思うのよ。和尚さんはあなたが生まれるとすぐに、あなたとわたしと城を捨てて森に入って出家してしまったのよ。それが知れ渡って、やかみ半分のある噂がたったのね。でも我が家は普通の家族のように、跡取りの子宝を授かったと喜んでいられたかったのよ。それで今までわたしもいいそびれていたの。ごめんなさいね」

母は、無くなってしまったカピラ城を、いま目の前に見ているような懐かしい眼をしました。

「和尚さんはあなたの父としては失格なのよ。確かなことは、あなたがいるから私も和尚さんも親なわけよ。和尚さんがいまさらみんなの前で、あなたの父だと堂々と名乗れないのも分かるでしょ。一度すべてを捨ててしまったからなのよ。いまさら未練らしいことはいえないのよ。でも子があればこそ親といえる。だからやっぱりあなたは和尚さんの子だといえるんだわ。私はね。今三人で同じところに住んでい

るのに、家族でないことが本当は悔しいの」

ぼくも確かにそうだとおもいました。

和尚さんは一度もぼくを「自分の子供だ」といったことがありませんでした。

ぼくが居なければ、和尚さんは和尚さんのままで、母は和尚さんの女の弟子のままで家族としてはバラバラです。

もつと簡単にいつてしまうと、もと夫婦と呼ばれた男と女という繋がりがあるように離散して、お城を離れ今同じお寺で暮らしています。

和尚さんも生まれる前の羊水の虹色に囲まれて、いま父として初めての産声を、ぼくだけのために上げるのかもしれない。

子が親を生む瞬間でした。

しかし今の状態では、ぼくの親は世界中さがしてもいません。

ぼくはいつも孤独で一人なのだという事に気がつきました。

ぼくは発作から覚めて、母の迷いごとをしているような目が何をいいたいのか、穴が開くほど見つめました。

母の顔があさばらの鈍い光に包まれました。名医ジューヴアカが勤めている無常院から、母の造った風鈴が鳴り渡りました。

むすび

世界古典文学全集六 仏典一 長老の詩（テラー・ガータ）295—298に入っていない詩が、作者の感で発見できたこと。日本ではじめて公開できることに、この上ない喜びを覚えます。

チベットの大藏經の穴倉の片隅に、クッション材として挟み込まれ、埋もれていました。

この短篇のための取材旅行の際、立ち寄ったチベットのシヤル寺、大藏經保存協会は

「これは後世の吃音者の落書きである」

として、第一発見者の私に

「この落書きとも汚れとも見える傷から、何かが読み取れるなら、日本に持ち帰ってご自由に訳してみてください」

ということ、ただと言う有難い価格で、偶然にも賜りました。

この場をお借りして関係者皆様とこのありがたき縁に、お礼を申しあげます。

紙魚だらけの四片の木の葉に、爪で引っ掻いたようなサンスクリット語から、日本語に何とか置き換えることができたと思います。

この新しい資料に、ご意見をお持ちの方はお気軽にご連絡たまわりますようお願いいたします。読者諸君は、これが事実か、ファンタジーかなどと無駄なことを考え、ラーフラの時

代に遊んでみてください。

原本である木の葉は、作者の私がラーフラ・バッダの個人情報保護のため（2013・9・30）飢えた動植物に与えたので、あとかたもなく消化されてしまい現存しません。

ラーフラ・長老のうた

298―2 ラーフラは長老とよばれる年になつてしまつた

ただ ラーフラの取り得は馬鹿の一つ覚え決まりをきっちり守る

今でも父の教えを守つて失つた故郷を思いやる

298―3 子が殺されたとき何処へ消え去つたのか教えるものはいない

親を失つた子は自分がどこから来たかをきれいに忘れ去る
その悲しみの種はナミダの池の底に落ちしみわたる

298―4 戦争は各人がばらばらだという思いから始まり

どの種も違いを越えたい望みから繋がりがついている
時には親となり変幻自在で多くの世界はひとつになった

298―5 それぞれの障りをひとつの物のお互いの側面

と認め合うとき

菱形の時の爪は空中から突然あらわれ星座をまわし顔をおもいつきやり取り自分のもつて生まれた障りを道標にかえてくれる

* この Conte は、仏教説話から引用や再構成などもしています。（キサーゴータミーとバターチャーラの合体など）

ラーフラ b a d d a h a 和讃

親という原因で子という結果があるのではなく

子がある結果親という原因があるのである

健康があるから障りがあるのではないそれはもともと一つの事

イナズマが走り記憶に「ああつ」と叫び掛けたくなる瑠璃太子の恨みが戦争を生み

種を割つても爪先ほどの未来も見つからない双葉も茎もましてや花などどこにもない

蔑みを狙つていて消してしまうモグラ叩きのような実践術はないか

蔑みはうぬぼれと言う原因からうまれる

親は川ながれの西瓜のような結果に縛られ理性を失う

ラーフラの姿は夜空にはじけ星空に種を見つける
 子は賽の河原の石を積み上げ 時がそれを突き崩す
 戦争の原因は誰だったのか王子だったのか学友だったのか
 王や母だったのか

岸辺の仲間殺しが教室の障りとして語り継がれる

障りは真つ先に回収される吉原の風呂屋に童の姿 裸で現
 れた時も色の水に溺れたときも

蔑まれてもその悪いウイルスを自分の熱で断ち切れればよい
 ことは誰でも分かっているが

帝国による戦争は怨みと仕返しとの連鎖となりまだなくな
 らない

子が殺されたとき親が何処へ消え去ったのか教えるものは
 皆無だ

親を失った子は自分がどこから来たかを忘れ去る
 その悲しみの種はナミダの池の底に落ち阿頼耶識にしみわ
 たる

ブツダに会える種を持ったキサー・ゴータミーのナミダも
 阿頼耶識に落ち

ハイダラハルドの緋のサリーによって障りを消し苗が枯れ
 ることはない

女は裸でさまよう事ももうない

蔑みを耐えたラーフラは体が癩癩発作で軋んだのを知って

いる

このときブツダという親が姿を現したが

シャリホツはラーフラがなすべき親との荒々しい戦いの仕
 方を教えてくれた

敵意に満ちた戦争は各人がばらばらだという思いから始ま
 り

どの種も違いを越えたい望みから繋がりがっている

ブツダは時には親となり変幻自在でばくの世界はひとつに
 統一された

ラーフラとは無常に進化する姿への道のりでありゼロへの
 出発だった

蔑みを乗り越えるための時間割が過ぎる速さよ
 ラーフラはいま長老とよばれる年になってしまった

目もとが澄んでいたあのラーフラ 取り得は馬鹿の一つ覚
 え決まりをきっちり守るだけ

失った故郷を思いやる戦いを武器も持たずブツダといまだ
 に続けている

蔑みはすなおな感情だから飼いならすこともない

ケシの種の方便はお寺の外に跳び出して行わせた行動療法
 それぞれの障りをひとつの物のお互いの側面と認め合うと

き

ブツダはラーフラの本当の父だといえるのだろうか

蔑みを乗り越えたラーフラに　シヤリホツは孤独な自分と
 の静かな戦い方を
 母ヤソーダラは自己との長い対話を教えてくれた　母であ
 ることも終生忘れなかった
 菱形の時の爪は空中から突然あらわれ　星座をまわし顔を
 おもいつきり抓りラーフラのもって生まれた障りを道標とな
 した

(中区)

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

小説選評

竹腰幸夫

本年度応募作は全十七編。そのうち歴史ものの五編はいずれも読みごたえがあった。また本来の「物語」としての小説は四編。この中にも興味深い作品があった。昨年と異なつて現代世相に材をとつたものが少なく、自伝、エッセイに近い作品が多かった。その場合、作者の意欲・意図は十分に理解できるものの、読者の共感を得るためには、何より「説明する」のではなく「描写すること」に工夫をおきたいということ、「小説」のレベルに高める条件として留意をお願いしたいと感じたことだった。

『鬼の涙』 長篠合戦から信康切腹までの激動の時世を、徳川家康の重臣本多作左衛門を中心に描く。その視点からは家康の人物も従来とは随分趣の異なつた人柄に描かれて面白い。小説は後半俄然盛り上がり、家康が天下人への決意を固める瞬間に説得力がある。

『四度目の死……小西行長伝』 戦国の世、敬虔な切支丹大名小西行長の波乱の生涯。商人の子として生まれ、早くから洗礼を受けていた少年が宇喜多家の養子となり、やがてその才氣と瀬戸内水運の力量を秀吉に認められ出世をするが、それは切支丹信仰と武人としての内面の戦いを余儀なくさせるものでもあった。二度にわたる朝鮮出兵の描写など見どころも多く、読ませる作品である。

『ラーフラの唄』 仏教説話をもとに、「四苦八苦」を逃れ

られない人間の宿命を説話的に描いた。着想は面白く、後半の流れにもがく母親の切なる願いをよそに、空のオオタカがいつも平然と幼い子を浚つて行つてしまふ場面は心をしめつける。構成、構想、一部の文章にもう一つ読者が自然に入り込める配慮があればと惜しまれた。

『蠅が鳴く』 戦中戦後を生きた八十九歳の女性の話。エッセイとも見える一人称小説。戦争末期、女性も「徴用」された。彼女の徴用先は「豊川工廠」。機銃の銃身に溝を掘る仕事である。一方父は戦地で行方不明。戦後その顛末がわかるのだが、なんとも釈然としない結果に空虚を抱える。テーマ性は十分。ただ、主人公の心中の思惟、哀しみあるいは豊川工廠での作業の様子など、説明でなく「描写」が欲しかったところである。

『空き家探し』 七十二歳。子は自立し、妻を亡くした男が独居用の家を探す話。近所つきあいを妻任せにしてきたため、浜松市街地での一人暮らしに不安を感じ、信州の田舎に越そうと考える。ややおしゃべりな、あるいは自己陶醉型の一人称文体なのだが、それが、この老人のこれからの「空き家」さがしに向かう特性の描写でもあるのかと考えると得心が行く。

その他『砂漣』は、元彼女の恋の動向を気にしつつ新しい恋人と過ぐす学生の気分を描いて面白い。が、折角東日本大震災に貯金を寄付しながら、福島状況に一顧もできな「理系」主人公の設定には鼻白む。背景としての時代の空気を描く工夫をしないと、元彼女の自殺も、作者に弄ばれた印象を免れない。『サミツチ』は生々流転する生命の神秘を「詩劇」ともいべき手法で描いた意欲作。文章、描写も卓越。「小説」が、日常を越えた時空へ読者を誘導する船であるとき、この古風な試みは還つて斬新と思えた。ただ、残念ながら字数が規定を越えた。

小説選評

柳本宗春

様々な題材を採り上げ、バラエティに富んだ十七作品でした。思わず引き込まれてしまうものには、確固たる物語世界のイメージと緻密な描写があります。「完成した」と思ったところで、もう一度自分の作品を丁寧に読み直し、書き直すことを心がけて下さい。

それぞれ一言ずつですが、感想を申し上げます。

「忍者 二人の服部氏」

時間が行きつ戻りつし、分かりにくい。一直線にドラマを展開してほしい。

「ラーフラの唄」

「むすび」の解説を物語の中に流し込めれば良かった。

「四度目の死…小西行長伝」

歴史の説明に終始している。話の焦点を絞って、小西行長という人間を描き出すべき。

「大江戸弓始末」

文体が完成されている感がある。優れた小説だが、前作の方が読者を引き込む力があつたか。

「下部物語」

構成が良い。地方に生きる民の姿が生き生きと描かれている。

「一葉のふねのうきよ也けり（一葉日記より）」
樋口一葉の評伝。力作だが小説とは言い難い。

「鬼の涙」
描写は良いが、本題までが長く、同じ話が繰り返されたりと構成に難がある。

「蛸が鳴く」

自伝的小説。テーマが絞り切れていない感じがする。

「時のなかで」

だんだん描写が簡略になっていき、物語を伝える力が弱い。

「下宿生活」

内容は興味深い点が多かったが、小説としての評価は難しい。

「ニートをのりこえて」

波乱の人生ではあるが、話が散漫になってしまっている。

「空き家探し」

大げさなテーマではないが、作者の筆力を感じる。挿入される回想エピソードをもう少し短くした方が良いのではないか。

「MUGEN ムゲン」

日常と幻想の入り交じったような小説。読者を納得させる仕掛けがもう一つ足りないようだ。

「砂漣」

やや不自然な部分もあるが、描写と展開の力によって物語に引き込まれていく。秀作だと思う。

「サミツチ」

独特のスタイルがあり内容も面白いが、四百字詰五十枚に収まりきれなかった。

「戦火の傷跡」

前半は非常に興味深く読めるのだが、後半の展開が不可解。

「暁子はあば中欧をゆく」

紀行プラス回想録である。エッセイとしては評価できる内容。

児童文学

「市民文芸賞」

ぼく、いま日本晴れ！

河 島 憲 代

「もうすぐなの？ おとうさん」

「ああ、かささぎ大橋を渡ればアジサイ広場は近いぞ、こうせい」

「ふーん。アジサイ広場には、どんな犬がいるんだろう」

ぼくは、おとうさんが運転する車の助手席で、窓の外ばかりみていた。おとうさんとおかあさん、ふたごの弟たちと、いまから、アジサイ広場でひらかれている「犬の飼い主を探す会」に行くところだ。

車が何台もすれちがっていく。天竜川にかかる白い大きな橋が、ぐんぐん近づいた。町並がとぎれると、目の前がぱあっと広がった。

海へと急ぐ川の水は、空の色を写している。

ふと、ぼくは、おかあさんが生まれ育ったいなかの景色が目にかんだ。ザリガニやフナがいる川。その川の土手を、

ぼくは、おじいちゃんとおばあちゃんと暮らす犬のハナとよく散歩をした。

三才の夏のはじめだった。ぼくは、とつぜんおとうさんとおかあさんとはなれて、いなかで暮らすことになった。

「えらいねえ、こうちゃんは、泣いたりせんで。ママは、おなかの中にいる赤ちゃんたちふたつの命を守るために入院しなくちゃいけないさ。こうちゃん、おにいちゃんになるんだね」

おばあちゃんが、しょんぼりしているぼくを、おんぶしたり、だっこしたりしてくれた。

おじいちゃんは、ぼくを田んぼや畑に連れていってくれた。そんなとき、いつも犬のハナといっしょだった。かけっこしたり、カエルを追いかけたり、ハナはぼくのいちばんの遊びともだちになった。

秋のおわりごろ、やつと弟たちが生まれた。

「ママが、おじいちゃんちへやってくる」

うれしくってたまらなかった。けれど、おかあさんは、赤ちゃんのふたりの弟たちのせわばかりで、ほくにはすこしもかまってくれない。やつぱりほくは、ハナと遊んだ。

「ハナ、ハナ、おいで」

というと、犬小屋からこげ茶色の顔をみせ、長いしっぽをパタパタ振り、のそつと出てくる。そうして、おなかをみせてあまえるからいつぱいなでであげたんだ。

お正月、ほくは、おもいきっておばあちゃんにいった。

「ハナをばくんちで飼っていい？」

すると、おばあちゃんは、ちよつと困った顔をした。

「こうちゃん、ハナをかわいがつてくれて、ありがとう。だけど、ハナがいないとおじいさんもばあちゃんも、さみしいよう」

ほくは、ハナを連れてくるのをあきらめた。

でも、犬をどうしても飼ってみたかった。

それと、このごろのほくは、大きくなったふたりの弟たちを、プロレスごっこで押さえついたり、ゲーム機をひとりじめしたりして泣かせる。そんなほくをみて

「犬を飼ってみようかしら、こうせいに……」

おかあさんが、おとうさんに話していた。

それできよう、犬たちにあいにアジサイ広場へ行くことになった。

おとうさんが、車を止めた。

「ここっ？」

みまわすほくの目に、アジサイの花がまぶしくとびこんできた。シートベルトをパシャッとはずしドアを開けた。

犬の声が聞こえてきた。

「はやくいこう」

「いこう、いこう」

ふたりの弟が車から、ぴょん、ぴょんと飛びだす。

「おかあさん、ほく、ほんとうに犬を飼ってもいいんだよね」

「こうせい、ちゃんとおせわできる？」

「だいじようぶ、もう三年生だよ。ほくは」

そういつて、野球帽のひさしをクルツとうしろにむけた。

風が、ほくのほつぺたをこちよくなでて吹いていった。

アジサイ広場は、サッカーコートくらいの広さがあつた。

そこに、犬を見にきた人たちが何人も集まっていた。

「キャン キャン」

「ワン ワン ワン」

あちらこちらに置かれたゲージの中で、犬が飛びはねたり、うろろうしたりしている。

ほくは、いろいろな犬をみて歩く。どの犬も、なんだかさみしそうな目をしているような気がした。

そのとき、ほくは、うす茶色の顔をした犬と目があつた。おでこから黒い鼻先まである白い毛のすじがめだつ。からだ

は、ちよつと長めの白い毛。おしりのあたりにも、うす茶色の毛の部分がぼつんとある。おばあちゃんちのハナより、だいいぶ小さい犬だった。ゲージには「ラン。ジャックラッセルテリア」と名札がついていた。

クリッとした目で、ぼくを見てくる。

「ラン」

ゲージの前にしゃがんで呼んでみた。

ランがゲージに鼻を押しつけて、短いしっぽをピコピコ振った。

「あら、かわいい」

おかあさんが、ぼくのうしろでいった。おとうさんとふたりの弟もランのゲージのまわりに寄ってきた。

「よかったら、遊んであげてください」

係のおばさんが、にこにこぼくたちの方にきていった。

「やんちゃな子だけど、やさしい犬よ。散歩してみる？ おにいちゃん」

「ええっ？ ぼく？ おとうさん、いいっ？」

「ああ」

おとうさんが、にっこりした。

係のおばさんが、ゲージの中からランをだきあげてリードをつけた。ぼくはランの頭をなでて、リードの先を受け取った。

係のおばさんがランを地面におろしたとたん、ランが走り出した。

「うわあつ、ちよつとまてよう」

ぼくは、ランに引っぱられるようにして走った。弟がふたりに追いかけてくる。ランは足が短いのに、けっこう走るのには速い。

ランがアジサイの下で、ふいにおしりを下げて止まった。シャーと、おしっこを出した。

「あはっ、おしっこをがまんしてたのかあ」

歩きだしたランのおしりにあるうす茶色のもようが、ハート型をしていることに、ぼくは気づいた。

「ランちゃん」

「ランちゃん」

弟たちが、かわりばんこにランをだいた。

そして、三人でいっぱいアジサイ広場をランをつれてかけ回った。ランが走るのをやめて、地面におなかをぺたぺたとつけた。うしろ足は、まるでバンザイしているみたいにぴーんとのばしている。ハアハアと舌を出して息をしているランに、ぼくは笑っていった。

「へえっ。おまえ、ちようからだやわらかじゃん」

ランのそのかつこうをみて、ふたりの弟も

「ランちゃん、かわいいー」

声をそろえていった。

ランを気にいったぼくたちは、一週間家であずかることになった。

「ラン、ぼくんちへいっしょに行くんだぞ」

そういつてランの背なかをなでていると、係のおばさんが、おとうさんとおかあさんにランの話をしてきた。

「この犬は、きよ年の東日本大震災のとき、大津波で海に流されたんですよ。ガレキの間で箱舟のように浮いていた犬小屋の上で鳴いていたそうです。運よく通りがかった漁船の船長さんに助けられたのは、三日後。犬小屋にランと名前が書いてあったって話です」

「ほんとですか!」

「よく生きていたなあ、ラン」

おかあさんとおとうさんが、目をまるくして、ランとぼくの方を見てきた。

ぼくは、ぎゅうつとランをだきしめた。

「船長さんからランをあずかったわたしたちは、前の飼い主さんのことをいろいろと調べてみたのですが……わかりません」

と、係のおばさんがランの頭をなでながらいった。

ぼくは、テレビで見た忘れることのできないあの東北の大津波のできごとを思った。そして、もういちどランをだきしめた。

ランは、ぼくんちの部屋の中を、あちらこちらとにおいかいで歩きまわった。

「ランちゃんの足音、楽しい」

「チャチャチャ チャチャチャだもん」

弟ふたりが、ランの歩き方をまねして四つんばいになり、ランを追いかけてはしゃぐ。

つぎの日から、ぼくは朝六時に起きて、おとうさんとランの散歩をした。

「ランのウンチは紙で取り袋に入れて持ち帰るんだよ、こうせい」

用意してきた袋を見せていった。

「ラン、学校から帰ったら、いっぱい遊ぶぞ」

そういつてから、ぼくは学校へ行った。

一週間があつという間にすぎた。

ぼくは、ランを、もう「犬の飼い主を探す会」へかえしたくなかった。

おかあさんだつてきつとそうだ。だつて

「ランちゃんは、女の子だから」

なんて、リードは赤にするし、ランのベットだって花もようのを買ってきたりした。

ぼくは、ランとであつてからずっと考えていたことを、おとうさんにはつきりといった。

「ランを家で飼ってあげようよ」

「こうせい、おとうさんもそのつもりだ」

ランにブラシをかけていたおとうさんが、にこにこいつてきた。そうして

「ラン、たいへんだぞ、うちのワンパクどものあいでは。ははっ」

って笑った。

「やったあ！」

おとうさんの背中にとびついた。

「おい、ラン、これからずつといっしょだぞ」

こうして、ランは「犬の飼い主を探す会」から、ぼくんちの家族になった。

さつそく、家の近くにあるヤマ動物病院で予防注射をしてもらった。ランは先生に注射してもらう間、おとなしくしていた。

「ラン、痛くないのか？」

「すごいね、なかないね」

ぼくも、ふたりの弟たちも、犬に注射するのを見るのは、はじめてだった。

ぼくは、学校でランのことを友だちにいっぱい話した。すると

「ランちゃんと遊びたい」

というので

「いいよ。おいで」

ぼくはとくいになっていった。

さつそく、みさきちゃん、ほのちゃん、さとしくんが遊びにきた。

夜、ランは、ぼくのベットの下に置いた花もよりのベットでまるくなってねむった。

夏休みのある日。朝からとても暑かった。

「あつーい」

目をさましたぼくは、机の上の目ざまし時計を見た。

「なんだ、まだ五時じゃんか。いいや。おい、ラン、散歩に、あれっ」

のぞいたベットの下にランがいない。

「あはっ、ランも暑くてねてられないってか」

着がえてカーテンを開けた。

「おにいちゃん、もうランの散歩なの？」

「ぼくもいく」

三つならんだベットの中で、弟たちがねむたそうに目をこする。

居間に下りてくると、ランが、ぼくをまっていたとばかり寄ってきた。

「ラン、おまえいつ起きたんだよ」

だきあげると、ぼくの顔をなめてきた。

バジャマで新聞を読んでいるおとうさんに

「夏休みだもん、ランの散歩、ぼくひとりで行っていい？」
そういつてみた。

「ランが、もうすこしこのあたりのようすになれたらたのむよ。ちよつと待っている、すぐ着がえてくる」

ぼくは、その間に、玄関のロッカーヘリードを取りに行く。

「ぼくだけで散歩に行つてあげれるのにな。はやく行かないと暑くなっちゃう。ラン、ほら、こんなにいい天気」

うっかりぼくは、ランにリードをつける前にドアを開けてしまった。

「あつ、まて、ラン」

はだしのままランを追った。

ランがうれしそうに庭をかけまわる。つかまえようとするぼくをふりきつて、白いからだをボールのようにはずませ、道へ出た。

「そっちへ行っちゃあだめだめ」

あわてて追いかけるぼくをどんどん引きはなして、ランが、みさきちゃんちのブロックべいの角をまがった。必死になって走ったけれど、ブロックべいの先にランの姿はなかった。

「ラン。ラン」

まだ人通りのない朝の町に、ぼくの声がひびく。いつもの散歩コースと反対側へ走っていつてしまったラン。ランを見失ったぼくは、頭の中がまっ白になった。

太陽が小学校の校舎のななめの空から、強い日ざしを放っていた。

「ランは、こっちへ行ったのか」

その声に、はっとしてふりむく。

「おとうさん、ランがいなくなっちゃった」

「とにかく家にもどれ。おかあさんと手分けして探してくる」
すぐあとから走ってきたおかあさんが、息をはずませている。

「こうせい、家にいるのよ。ランがもどってくるかもしれないでしょ。何かあったらケイタイに知らせて」
というおかあさんに、ぼくは

「ラン、帰り道わかるかなあ、心配だよ」

つて返事をして、口をへの字に結んだまま家へもどる。小石をふむはだしの足が痛い。

「あれま、おにいちゃん、くつものはかずにどうしたね」

となりのおばあちゃんが、垣根の上までのびたヒマワリの間から顔をのぞかせた。

「ランが、いなくなっちゃった」

「たいへんだあ。ばあちゃんも探そうねえ」

ぼくの目から、涙がほつぺたをつたつて落ちた。

しばらくして、おとうさんとおかあさんが、汗だくになって帰ってきた。

「ランは、遠くへ行ったかもしれないあ」

「ええ」

そういつて、おとうさんはバイクに乗って、おかあさんは自転車で、またランを探しに行った。おとうさんのフルフェイスの黒いヘルメットが、きらっと光った。

(ラン、どこへ行っちゃったんだよう)

不安がますますふくらんだ。ぼくは、力がぬけて玄関にすわりこんだ。

開けはなったままのドアから、むっとするあつい風が入っ

てくる。弟はふたりとも、アサガオのからまる庭のフェンスにへばりつき、おとうさんとおかあさんが走って行った田んぼのむこうをながめていた。

ぼくは、空にひろがる灰色の雲を、ぼんやりと見ていた。

「外は、あつーい」

「お茶、つめたいお茶」

弟たちがぼくの横をすどおりして、冷蔵庫へ突進して行った。

「水、飲みたいだろうなあ、ラン」

犬だって、熱中症になるとヤマ動物病院の先生がいつていた。ランが、舌を出してハアハアと苦しそうに、暑さの中をさまよっている姿が目にくわんだ。

「いつものように、おとうさんと散歩のしたくをすればよかった。『待っている』っていわれたのに……」

ひとりごとをいつているぼくに、コップでつめたいお茶を飲みながら、ふたりの弟が聞いてきた。

「おにいちゃん、ランちゃん帰ってくる?」

「もどってくるよね」

「わかんない」

つつけんどんに、ぼくはいいかえす。

「広い道の方へ行っちゃったのかなあ」

「ランちゃんは、信号なんかわかんないよね」

「じゃあ、車にひかれちゃう」

「そしたら死んじゃうね」

ぼくは、おもわず立ち上がり

「そんなこというな!」

どなつて、居間のソファにうつぶせになった。

どのくらい時間がたったのだろうか。おとうさんとおかあさんがもどってきた。

「だめだ、みつからん」

「交番にまい子屈を出しましょう」

「犬のこと、たのめるだろうか」

「おねがいするだけでも」

「よし、ランの写真を持って行こう」

もういちどおとうさんがヘルメットをかぶった。おとうさんが乗ったバイクの音がしだいに小さくなっていった。

「ランは、名札を付けた首輪もつけず飛び出したんだ。みつけてくれた人がいたって、ぼくんちのランだってわかりやしない」

おかあさんの手が、ぼくの肩をそっとだいた。(もう、ランには、あえないだろうか) 胸が痛いくらいつまった。あの大地震と大津波でランは、家族とはなればなれになった。ぼくのせいで、また、ランをひとりぼっちにしまった。

(ラン!)

ぼくは、心の中でさけびつづけた。

朝の町に飛び出したランは、そのころ、大通りにある手づくりパン屋さんの店の前をうろついていた。

風にのつて、こうばしいパンが焼けるにおいのする方へ、ランはつつ走ってきたのだ。ランにとって、なつかしくつてたまらないにおいだった。

ランは東北の海辺の町の、野原ベーカーリーのかんばん犬だった。

二〇一一年三月十一日。

「ラン、いまからお店を開めて、買い物に出かけてくるね。日なたぼっこしていなよ。三時ごろにはもどるから」

そういつて、野原さんが、ランを店の中庭に連れてきた。

芝生はまだ芽ぶいていない。でも、昼さがり、春の日ざしがふりそそいでいた。ランは、庭をかけまわる。赤い屋根に白いかべの野原ベーカーリーそっくりの犬小屋もあった。

「ランの家も新築したんだぞ。雪がつもったつてつぶれんよ」

目を細めてランにはおずりした野原さんは、奥さんと車で出かけて行ったのだった。

そして、二時四十六分。大地震がきた。

ランのまわりに、屋根がわらがバタバタ落ちてきた。

「キャン」

にげまどい、犬小屋に飛びこんだ。奥の方でちごまつていた。

ドバーツ。すぐ、大津波が町をのみこんだ。なんともなんども波をかぶり、もがきながらもランは、流されていく犬小屋の上にへばりついてた。犬小屋が、まるで小さな箱舟になってランのからだを支えていた。

夜になり、だれもない真っ暗な海。星だけが、何ごともなくったように青白くまたたいていた。

「キューン キューン」

ずぶぬれのランが、寒さの中でかなしく鳴いた。長い長い夜が開ける。ランは、気が遠くなつていった。また、やみが下りてきて、そして、夜が開けた。

ふっと目を開いたランの耳に

「おい、犬だ。犬がいるぞ」
人の声がした。

ランは、波でゆれる犬小屋の上に力をふりしぼって立ち、からだをブルッブルとした。飛び散ったしずくが、朝日の中で虹色に光った。

「生きてるぞー」

ランのそばに漁船が近づいてきて、ふわっと網ですくわれた。つかれきったランは、日焼けした漁師のおじさんの太腕の中で目をつむった。

「生きろよ。ラン。ランっていうんだろ。おまえがのつかつていた犬小屋に、そう書いてあったぞ、ラン」

ランは耳をかすかに動かして、名前をよばれるのをぼんやりと聞いていた。

「ラン、おまえの住んでいた町はどうなったか……」

漁師のおじさんが、やさしく頭をなでる。

「ゆっくり休め。港に寄つて、おまえを守ってくれる人に、ちゃんとたのんでやるさ」

遠い海へ魚をとりに行くおじさんの漁船は、静岡県 の 福田港に着いたのだった。

ランが、焼きたてのパンのにおいをたどってやってきた店は、まだ閉っていた。

ランは、パン屋さんの前のプラタナスの木かげでハアハアと舌をだし、そのうち、アスファルトの舗道におなかをべたりとつけた。ときどき立ち上がっては、パン屋さんの前をいったりきたりする。

大通りをはさんでパン屋さんとむかいあっているガソリンスタンドで、金色の髪を束ねた外国の女の人が、さっきからランを見ていた。信号が青になったとき、その金色の髪の女の人は、足ばやに大通りをわたってきた。

「ハロー！ ワンチャン。マイゴナノ？ ソレトモ、パンヤサンノコ？ ハナレアルクケンデス」

金色の髪の女の人に、ランはだきあげられた。

「ピンポーン」

金色の髪の女の人が、パン屋さんのインターホンを押した。ドアノブにかけられていたプレートがゆれて

「はい、お店は十時からですけど、何か」

店の人が顔を出した。

「モーニング。ワタシ、ケリー。コノイヌ、オタクノコデスカ？」

「ええっ？ うちでは、犬を飼っていません」

「コノイヌ、オタクノミセノマエ、ウロウロ、イッタリ、キタリネ」

「みかけない犬だけど、パンがすき？」

パン屋さんが、ランの頭をなでていった。

ランは、まるい大きな目をクリッとし、鼻をひくひくさせた。そして、クーッと小さく鳴く。

「ケリーさん、どうしましょう」

「オツケイ。ワタシ、コウバンイクネ。ルック。オシリニハートマークアルヨ。メズラシイイヌ、キツトミツカルカイヌシサン」

「はやく家に帰れるといいわね」

パン屋さんが、ランのおしりにあるハート型をしたうす茶色の毛をみて、にっこりした。

店の中から焼きたてパンのいいにおい。

「コンド、オミセニ、パンカイニキマス」

ケリーさんはランをだいたまま、青信号で大通りをわたり、ガソリンスタンドへもどって行つた。

「おまちしてまーす」

店の前に出てきたパン屋さんが、ケリーさんにむかつて手を振った。

「ババババッ」

バイクの音が止まり、おとうさんが家にかげこんできた。

「いたぞ！ ランが、みつかった」

「ほんと！」

「どこ、どこにいたの？」

弟がふたりしておとうさんに飛びついた。

「い、きてんの……ラン」

ぼくは、ソファでからだを起すのがせいっぱいだった。

「もちろんさ、みんなすぐ車に乗れ。ランをむかえにいく」

「こうせい。はやく、はやく。よかったね」

おかあさんに背中を押されて、ぼくはおとうさんの横にすわった。

「交番に行つてよかったよ。大通りをうろつくランに気づいた人が、交番に連れていってくれたんだ。ご親切に飼い主がみつかるまで世話をする自宅へランを連れていったのだ。ケリーさんという外国の人だよ」

「外国の人？」

ハンドルをにぎって運転するおとうさんを見た。

「この町には、外国の人が多く暮らしているからなあ」

「日本語、わかる？」

「こうせい、心配いらないよ。ケリーさんは日本語がとても上手だったと、おまわりさんがいつていたからな」

雨がフロントガラスにボツボツとあたりだした。信号待ちをしている間にどしゃぶりとなった。

「こんな雨の中で、ランがまいごになっていなくてよかったね、こうせい」

おかあさんにそんなふうにいわれて、ぼくの目の奥があつ

くなつた。涙があふれた。鼻をすすり、両手でほつぺたの涙をふいた。

「おにいちゃんは、ランちゃんがみつかったのに、なんでないてんの？」

「どうしたの？」

弟がかわるがわるチャイルドシートのベルトをゆるめ、助手席のぼくをのぞいてくる。

「うるさい」

ぼくは、かぶっていた野球帽のひさしをぐいっと顔まで下げた。

「うれし涙さ、なっ、こうせい」

そういつて、おとうさんがワイパーのスピードをあげた。

滝のようにふりつける雨を、ワイパーがせわしくはじき飛ばす音がする。

「うれしくつても涙が出るのよ」

と、おかあさんがほへんだ。

「そうなの？」

「ほんとう？」

ふたりの弟がぼくの顔をのぞいてる。

うしろの席に飛びうつて、ぼくはふたりにパンチしたいくらいだった。

「アメノナカ、オムカエネ」

金色の髪を束ねた、すらりと背の高いケリーさんが、ぼく

たちを待つていてくれた。

「ウチニモ、イヌガイマス。イマ、ニヒキデアソन्दルヨ」
「ありがとうございます。みつてくださって、こんなにうれしいことはありません。この子がいちばんかわいがっているのです」

おかあさんはぼくを押し出して、ていねいにお礼をいった。

「ランのこと、あ、ありがとう」

ぼくはどきまぎして、いそいで野球帽をとり、ぺこんとおじぎをした。

「ランチャントイウノネ。プリーズ」

ケリーさんはすきとおるような青い目を細めて、ぼくたちを部屋に案内してくれた。

黒い犬がほえてきた。

そのあとから、ランがまっしぐらにぼくにむかつてかてきた。

「ラン！」

むちゅうでランをだきしめた。ランが、ぼくの顔じゅうなめてくる。

「オーッ！ ハッピーネ」

黒い犬をだいたケリーさんが、ぼくとランをかかえていった。

ランを連れて家に帰るときも、雨ははげしくふっていた。ぼくはランをだいて、車のいちばんうしろ三列目の席にの

る。車が走り出す。

「パパ、おにいちゃん、へん」

「ママ、おにいちゃん、へん」

「あははっ、そうだな」

と、おとうさん。

「うふふ。へんよね、おにいちゃん。さつきから、ヘラヘラしちゃって」

助手席からおかあさんまで、ぼくをみて笑う。

だって、ずしっと手ごたえのあるランの重さ。ランのあたたかさ。だきしめているぼくの腕の中で、ランが動くのがうれしくて、うれしくて、ひとりでに笑えてきちゃう。

(ランに、またあえたんだもん)

「あのな、ラン。外は雨だけどね、ぼくの心は、いま、日本晴れ！ くふっ」

ランの耳もとで、ぼくはささやいた。

(東区)

夕焼けの島のツオイ

住吉玲子

だれもない川岸の土手に寝そべって、ぼくは夕焼けを見ていた。

草の斜面を、すずしい風が吹きわたっていく。サワサワとゆれる草の葉が、顔やうでにあたるのがくすぐったかった。

この町に引越してきて、今日で一週間。転校して二日目の学校に、まだ友だちはいない。

学校から帰ると、ひとりでこの川べりまで歩いてきた。白い雲を浮かべた青空が、オレンジ色の夕焼けの空に変わっていくのを、ぼくはただながめていた。

六年生の二期がこんなふうにはじまるなんて、一か月前には考えていなかった。

西の空、灰色にたなびく地平近くの雲に、まっ赤な夕日が一秒ごとに沈んでいく。夕日の最後のひとかけらが消えると、雲のふちが、もう姿の見えない太陽の光をうけて、金色

に輝いた。

いつもの空想を、ぼくははじめていた。

夕焼けの空に見える灰色の雲は、海に浮かぶたくさんの島。夕暮れの風の中でオレンジ色の海に広がる、ぼくの世界。

大きな雲の細く飛びでたところ、あそこが半島。そこからずっと島の内がわに入っていくと、高い山がづらなつて、山は原生林におおわれている。

雲のふちのギザギザは海岸線。複雑にいくくんだリアス式海岸だ。オレンジ色の海から白い波がうちよせている。

散らばったちぎれ雲は、ひとつひとつが小さな島で、どれも大海原に浮かぶ無人島。

ぼくは高い空の上から、一人乗りの飛行機にのつて、鳥みたいに風をうけて、それらのいくつもの島々を見おろしている。

だれも知らない、ぼくだけの空想の世界。

急に強い風が吹いた。はっと身がまえるほどの激しい風だ。立ちあがると、土手の草がまるで打ち寄せる波のように、うねってゆれている。

その時、フラッシュを浴びたみたい、あたりが強い光に輝いた。からだがぐるぐると回転している気がして、目がまわった。チカチカとまたたく光の中を、ぼくは下へ下へと、どこかへ落ちていった。

ドン！ と、背中に衝撃しょうげきを感じて、ぼくはうめいた。めまいがして、すぐには動けない。

やっと目を開けると、夕暮れの燃えるようなオレンジ色の空に、木の枝の黒いシルエツトが、くつきりと刻まれているのが見えた。服についたごみをはらい落しながら、ぼくは立ちあがって、ぐるりとあたりを見まわした。

どこか知らない、森の中だった。

「ここはどこ？」

思わず声にだしてつぶやいた。

うす暗い森の中は、カサカサというかすかな葉ずれの音が聞こえるほか、しんとしている。

何がおこったんだ？ どうしてこんな場所に來てしまったんだろう。ぼくはあせる気持ちで、やみくもに森の木々のあいだを歩きまわった。

空はしだいに暗くなっていく。このまま、こんなところで夜になったらどうしよう。泣きたい気持ちをおさえこんで、少しでも人のいそうな場所に行こうと、木のすきまをぬって足をはやめた。

道にでた。

道といっても、人ひとりが通れるくらいの細い山道だ。その道をたどって、少しくだつていくと、木立がまばらになってきた。見おろすむこうに遠く家の明かりらしい黄色の光が、ぼつりぼつりと小さく見える。

よかった、人が住んでいる。

ぼくの目に、涙がジュワツとあふれた。あそこにいけばなんとかなる。

あわててかけだそうとしてころんだ。その時

「おまえ、だれだ？」

とつぜん、うしろから声がして、ぼくはころんだ姿勢のまま、ビクツとふり返った。木のかげに人が立っていた。子どもだ。あたりはうす暗くなっていたので、顔ははつきりとわからない。

「どっから來たんだ、おまえ」

「えーと、どこって……」

立ちあがりながら、ぼくはなぜか、きのうのことを思いだしていた。

「『大森市からきました。佐野航平です。よろしくお願いします』」

これは転校してきたぼくが、きのう、新しいクラスの自己紹介でいったことばだ。

「あの、ぼくは、さのこうへい。えーと、それより、ここはどこなの？」

ぼくは、せっかちに聞きかえした。

「どこって、ここはお山にきまつてるだろ」

お山か、たしかに山の中だ。

「見たことのないやつだな。まだガキみたいだけど、ここになにしてる？」

「よくわからない。落っこちちゃったんだ」

「落っこちたって？ どこから？」

「川のそばから」

「川のそばから落っこちた？ なんだそれ」

ぼくはこままってしまった。ぼくにだって理解できないのだから、説明のしようがない。

「まったくもう、いつてることがさっぱりわからないや。さつきは大きな流れ星が見えたし、こんどはうさんくさいよそ者があるし、きょうはなんだか変なことが多いな」

その子はぶつぶつとつぶやきながら、用心ぶかい目つきで、ぼくをじろじろと見た。うす闇やみの中で、目だけが明るく大きく見えた。

「おまえ、今からどこへいくんだよ」

「どこって、家に帰りたいけど、どうしたら帰れるかわからないんだ」

われながらなさけないと思ったが、自分の声がだんだん泣き声になっていくのをとめられなかった。

「まいごか。えーと、『さのこう』とかいったな。泣くなよ。よし、今夜は泊めてやるから、うちへこい」

「泊めてやる」って、急にそんなことをいわれても、簡単についていっていいんだろうか。この先に見える、人の住んでいそうな明かりのところで、だれかに助けてもらって、家に帰れるかもしれない。そうしたほうがいいんじゃないだろうか。だけど、このまま野宿だなんてことになったら最悪だし。ぼくのこころは、時計の振り子みたいにゆらゆらゆれた。そして決心した。

「泊めてくれるの？ ありがとう。だけど、家のひとに聞かなくてだいじょうぶ？」

「おう、気にするな」

「あの、それと、ぼくの名前『さのこう』じゃなくて、さのこうへいだよ」

「いいにくい名前だな」

「こうへいって、呼んでくれればいいよ」

「あいよ。こうへいだな。おいらは、ツオイ。リーリオの孫、オーツのむすこのツオイだ。ちょっと待てよ。もう暗いからな」

そういいながら、ツオイは、背中に背おつていた大きな袋をおろすと、中からもじゃもじゃした草のかたまりみたいなものを取りだした。両手でつつむようにしてもむと、かたま

りが、ボオウと淡い光をはなちだした。ぼくがびつくりしているのがわかったのか、ツオイはぼくを見てニツと笑った。「ひかり草（くさ）を知らないんじゃない、やつぱりおまえ、このへんの者じゃないな」

ツオイは、落ちている枯れ枝にひかり草を巻きつけると、手に持って山道をのぼりはじめた。

「えっ、なんでそっちに行くの？ ああ黄色い光のあるほうに、行くんじゃないの」

ぼくはあわてて、小さな明かりの見える道の先を指さした。

「おいらの家はこっちなのか」

ツオイはぼくのとまどいにかまわず、どんどん歩いていく。

すっかり暗くなった山の中の小道を、ぼんやりしたひかり草の明かりをたよりに、ぼくはツオイのあとをひたすらついていった。足もとの土や草や枯れた小枝をふむふたりの足音だけが、ザクザク、ピシピシと聞こえていた。

やがて、木々のむこうにちらちらと光が見えた。窓からもれる明かりだった。山の斜面を石垣でささえた場所に、小屋といってもいいほどの小さな家があった。

「じいちゃん、かえったよ」

ツオイがそこから声をかけると、ギーというところのきしむ音とともに、光と、食べもののいいにおいが流れてきた。

「おそくなったな」

やせて背の低い男の人が、部屋の明かりを背にして戸口に

立っていた。

「じいちゃん、お客だよ。こいつ、まいごなんだ。今夜、うちに泊めてやってもいい？」

「これは、おどろいた」

ツオイのおじいちゃんの警戒（けいかい）するような視線を感じて、ぼくはドギマギしながら、ペコリとおじぎをした。

「入りなよ」

そういいながら、ツオイは、背おつてきた重そうな袋を部屋のすみにおいた。

「あー、はらがへった。晩ごはん、なに？」

ツオイは、とびらの正面にあるかまどのなべのふたをあけながら

「ねっ、泊めてやってもいい？」

と、もう一度、おじいちゃんのほうを見て、ニコツとしていった。

「ああ、かまわんよ」

ツオイがニツと笑って、ぼくに片目をつむってみせた。

おじいちゃんはまだ、ぼくから目を離さなかった。

「佐野航平です。お世話になります」

ぼくはもう一度、きこなくおじぎをした。

「どこからきたのかね？」

「あの、大森市から引越してきて、それから川のところで、えーと、夕焼けを見ていたんです」

「こうへいは、夕焼けじゃなくて、夢でも見てたんじゃない

か？」

ツオイが、なべの中をかきまぜながら笑った。

「聞いたことのない土地の名だな。まあいい、そまつな家だがゆっくりしていきなさい」

それからおじいさんは、ひとりごつのように、

「古いいつたえに、『はるか遠いところに、われらとはちがう、さまざまな髪の色、はだの色の人々が暮らしていて、時にわれらのもとをおとずれる』とあるが、おまえさんは、まさにそのような」と、つぶやいた。

「ほんとうだね。おまえは髪も目も黒いな。背がずいぶん高いし。おまえみたいなやつ、見たことないや」

ツオイもまじまじとほくをみた。年は同じぐらいかもしれないが、ツオイの背はほくの胸ぐらいまでしかなかった。

「それに、おまえの服、おもしろいかたちをしている」

ほくのほうも、明るいところでツオイとおじいちゃんを見て、びっくりしていた。

ふたりとも、うすいオレンジ色のはだと、金色の大きな目をしていて。おじいちゃんの顔はしわがよって、ツオイのはつべたはぴかぴかしていたけれど。そして、おじいちゃんの髪は灰色だが、ツオイのは、あざやかなオレンジ色をしていた。

「まるで、夕焼けの国にきたみたいだ」

ほくは、こころの中でつぶやいていた。

ツオイのおじいちゃんは、炭焼きの仕事をしていた。

つぎの日、ほくはツオイと一緒におじいちゃんの山仕事の手伝いをした。家に帰りたいと思っても、どうしたら帰れるのかわからなかったからだ。

「炭はな、お山の神のめぐみだ」

おじいちゃんはそのいうと、木々の下草したぐさを節くれだった手で刈りはじめた。

「こうしてな、お山の手入れをするのさ。そうすれば、お山の神は、われらにめぐみをあたえてくれる。炭にする木を切っても、その根もとからまた新しい芽がのびてくる。生まれつきの赤んぼうが一人前になるころには、その芽がそだってまた切ることができる」

「じいちゃんの焼く炭は特別なんだ。昔からの、手間てまのかかるやり方で焼くから、特別いい炭なんだ」

ツオイはじまんそうにいいながら、おじいちゃんの刈った草を両うでにかかえて片付けていた。ほくも枯れた枝を集めていくつもの束はちにした。

山仕事の手伝いは疲れたけれど、山の木のおいや木の枝のざらざらした手ざわりが、ほくには新鮮でこちよかった。

つぎの日も、ほくはツオイとおじいちゃんの家に泊めてもらった。

ここがどこなのか、なぜほくがこの場所にきてしまったのかわからないままだった。おじいちゃんは『につぼん』という国の名前も聞いたことがないといった。ほくと同じ言葉

話すのに不思議だなと思った。

ツオイの通う学校は少し変わっていた。学校に行く日、ツオイは朝早く山をおりて、いくつかの小さな村を越え、学校のある大きな村まで歩いていくのだという。学校では五日間、寄宿舎に泊まって勉強をする。そして、家に帰ると、また、だいたい五日間ぐらい家の手伝いをする。学校までが遠いから、このあたりの村の子どもはみんなそうするのだという。

ぼくが山道でツオイにであつた時も、ツオイは学校からの帰りだったのだ。

こんどツオイが学校にでかける日に、ぼくもその大きな村と一緒につれて行つてもうらうことにした。そこに行けば、ぼくの家への帰り道がわかるかもしれない。

おじいちゃんが、炭焼きの準備をはじめた。炭焼きがまの床の灰をならして、背の高さより長く切りそろえた原木を、かまの奥からていねいに並べていく。かまの入り口までいっぱい。それから、かまに火をつける。火をつけたら、だんだんに中の温度を上げていく。火の強さをかげんしながら見まもるのだという。

その夜から、おじいちゃんは炭焼き小屋で寝泊まりをして、夜も火の番をするらしい。ぼくはツオイとふたりだけで晩ごはんを食べた。

「いい炭はね、もとの木の太さの半分よりもっと細くちぢ

むんだ。たたくとカンカンていい音がするんだよ。じいちゃんがそういつてた」

「ツオイもおとなになったら、炭焼き職人になるの？」

「どうかな」ツオイが言葉をとぎらせた。

「迷ってる」

「どうして？ おじいちゃんの炭を、あんなにじまんするのに」

「おいら、町に行くことになるかもしれない。ずっと遠くの大きな港のある町。父ちゃんと母ちゃんがその町に住んでいるんだ」

「そうか、ツオイはお父さん、お母さんと離ればなれに暮らしているんだね」

「町に行けばいろいろな仕事があるからって、父ちゃんと母ちゃんは町へ出かけていった。じいちゃんは、炭はお山の神のめぐみだ。炭焼きの伝統を絶やしちやいけないって、いつもいう。じいちゃんはきつと、おいらに一人前の炭焼き職人になつてほしいって思っているはずなんだ。おいらお山が好きだ。町はどんなところなのか知らない。ちよつとこわい。父ちゃんや母ちゃんには会いたいけど、おいら、あんまり行きたくないんだ」

これまで、元気で明るいツオイしか見たことがなかったのに、金色の目をふせてこんなふうになやむツオイが、ぼくには意外だった。

翌朝早く、ツオイとぼくは、炭焼き小屋のおじいちゃんのところへ朝ごはんを届けに行った。でも、小屋におじいちゃんの姿はなかった。炭焼きがまの火はちゃんと燃えている。

「おけがないから、沢へ水をくみにいったのかな？」

しばらく待ってもおじいちゃんは何もつてこなかった。

「変だな、じいちゃんがこんないつまでもかまのそばを離れているなんて」

「なにかあったのかなあ」

ぼくも心配になってきた。

「おいら、見てくる」

「ぼくも行くよ」

おじいちゃんは、沢でうずくまったまま動けなくなっていた。足をすべらせてけがをしてしまったのだ。ツオイとぼくが両側からおじいちゃんのからだをささえて、ひきずるように沢をのぼり、やっと炭焼き小屋までつれて帰った。

「とんだへまをしてしまった」

「痛いのかい、じいちゃん」

ツオイが心配そうに、おじいちゃんの足にぬらした布をあてた。

「骨は折れてないよね」

「ああ、ただのねんざだ。だが、前にも痛めたところだからな」

「すごく痛いのか？」

「たいしたことはない。だが、どうにも立ちあがれない。二、三日は歩くことができませんね」

おじいちゃんは、口では痛くないといったけれど、足を動かすたびに顔をしかめた。

「これからがかんじんなのだが、これでは今度の炭はだめだな」

あけはなつた戸口をふりかえって、炭焼きがまからのぼる白い煙を見ながら、おじいちゃんは力なくつぶやいた。ツオイは、おじいちゃんの足にあてた布を取りかえながらだまっていた。風が小屋の中にけむりを吹きこんで、炭焼きの強いにおいが三人をつつんでいた。

「じいちゃん、おいらに炭焼き、教えてくれよ。だめかもしれないけど、うまくいかないかもしれないけど、おいらやってみるよ」

とつぜんのツオイのことばだった。しばらくだまっていたおじいちゃんが

「そうか、やってみるか。そうだな、やるだけやってみるか」
そういつて、ツオイの肩をポンポンとたたいた。

おじいちゃんが炭焼きの先生で、ツオイとぼくが生徒だ。そのあと、二日間火を燃やしつづけて、かまからのぼる白い煙がうすくなってきた。

「そろそろだな。かまの口を閉じるぞ」
やっと立って、杖をつきながら歩けるようになったおじい

ちゃんがいった。

小さなすきまだけを残して、かまの口を閉じていく。なかなかうまくできないけれど、ツオイとぼくはけんめいに働いた。やりおえると、からだじゅうがすすとほこりでよごれていた。

「お山の木が炭になっていく音が聞こえるか？」

ぼくには聞こえなかった。でも、ツオイは「うんうん」と、おじいちゃんのことばにうなずいていた。

炭焼きがまの口をとじてから四日目、おじいちゃんは、もう、杖なしでも歩けるようになっていた。でも、力仕事はまだだめだ。

今度は、かまの口をすこしずつ広げていく。中から青白い炎があがって、それがだんだん大きくまつ赤になって、かまの口から吹き出すほどになった。炎がおさまると、かまの中の炭が、すきとおるように赤く燃えている。なんてきれいなんだろう。

「もう、炭を取りだしていいんだね」

「ああ、ゆつくりとな」

おじいちゃんが見まもる横で、ツオイが長いさおのついた道具をつかって、かまから炭を出しはじめた。途中で引つかかったりつかえたりして、なかなかうまくできない。ツオイの顔からもからだからも汗がふきでて、オレンジ色の髪が熱い炭に照らされて、まつ赤にみえる。

かまから出した炭に、おじいちゃんが足をひきずりなが

ら、湿らせた灰をかけていった。なれた手つきだ。ツオイとぼくは交代で、焼きあがった熱い炭をかまから出した。

とうとう炭ができあがった！

片付けが終わると、ぼくたちは沢まで走って水の中に飛びこみ、からだを洗った。着ていた服もぎぶぎぶ洗って、木の枝にほした。沢の冷たい水をおたがいにかけあつて遊んだ。ツオイが川底の石をひっくり返すと、金色に光る小さなカニがいた。カニは日にきらめく水の中で、宝石みたいに輝いて流れの中を歩いていた。

「見てごらん。こうすると、魚が寄ってくるんだ」

ツオイが、川べりにしげっている赤い木の小枝を折ると、白い樹液が流れた。その小枝の折り口を水の中に入れてしばらく待つと、小さな魚が樹液に群がってきた。魚のからだは二センチメートルぐらいの大きさで、赤や黄色や緑に光っていた。

「きれいな魚だね。この木の樹液がすきなんだね」

「ああ。でも、きれいなだけじゃない」

集まってきた魚たちをツオイが手のひらにすくうと、リリ、リリリと、かすかに鳴き声のようなものが聞こえた。「ほらね、鳴くんだよ。こんなに小さな鳴き声だけど、たくさん集まっている時は、沢のすぐ近くまでくると、はっきり鳴き声が聞こえるんだ。夏のおわりに下流からこの沢にのぼってくる魚さ。じいちゃんはアキツゲウオって呼んでる」

太陽がぼくたちのまわりの水面に、キラキラと光のかけらを散らしていた。

ぼくは、このツオイたちの住む見知らぬ場所にきてからはじめて、ここから楽しいと思った。

それから、ツオイもぼくも草の上に寝ころんでからだをかわかした。

「ツオイ。やったね。とうとう炭が焼けたね」

「うん。やったな、こうへい」

ツオイは満足そうだった。

ぼくはかたむきはじめて太陽に顔を照らされながら、両腕を頭の下で組んで、やさしい風に吹かれて草の上で目をとじた。

「おいらな、きめた」

とつぜん、眠っているのかと思ったツオイが、空を見あげたままいった。

「おいら、町に行く。町に行つて、知らないことを覚えたり、いろいろな人にあつたり、今までやったことのないことをやる。じいちゃんが元気なうちは、炭焼きはじいちゃんにまかせる。それから……」

「それから？」

「それから先のことは、その時考える。今は今のことをやる」

「そうか」

「おいら、今夜、父ちゃんに手紙を書くよ。町へ行くつてあした、ツオイは学校へいくという。」

ぼくもツオイと一緒にでかける。ぼくの家への帰り道は、学校のある村で見つかるだろうか？ 心配だけれど、行つてみるしかない。

ツオイとぼくが炭焼き小屋へもどるころ、空が夕焼けに染まりはじめた。小屋の戸口で、おじいちゃんがぼくたちを待っていた。

「じいちゃん」

ツオイが叫んでかけだすと、オレンジ色の髪が夕日に光つた。

その時、まるでフラッシュを浴びたみたいに、あたりの景色が強い光に輝いた。ツオイがおどろいた顔で、ぼくのほうをふりかえるのが見えた。ぼくはからだがぐるぐると回転しているみたいで、目がまわった。光の中を、ぼくはどこかへ落ちていった。

草の葉が風にゆれて、ぼくの顔やうでをなでている。目をあけると、ぼくは川岸の土手にいた。草の上で、あおむけに寝ていた。夕焼けの空に雲が浮かんでいる。

リリリ、リリリ。炭焼き小屋のそばの沢で聞いた小さな魚の鳴き声が、耳にひびいてきた。

その鳴き声が、リリリンと自転車ベルの音にかわつていく。

「おーい、こうへいくーん」

だれかがぼくの名前を呼んだ。だれだろう？ ぼくは立ち

あがった。

「なにしてるの？」

声のするほうに顔をむけると、土手の上に同じクラスの川口くんがいた。ぼくのすぐ後ろの席の子だ。自転車にまたがって笑っている。

「やあ」

ぼくも笑って右手をあげた。

「今から、帰るところ」

ぼくはそう答えて、土手の斜面をかけあがった。

「見てみなよ、すごい夕日だね」

川むこうに沈んでいく太陽を、川口くんが指さした。大きくてまろい、まっ赤な夕日だ。オレンジ色の光が川口くんの顔を明るく照らしている。

ぼくたちは夕日が沈んでしまうまで、そこに立ってだまって見ていた。

それからぼくは、夕焼けの空に浮かぶ雲にむかって、大きく手をふった。

「なにしたの？」

「雲に、さよならをいっただけ」

「ふーん。おもしろいね、きみ」

川口くんがゆつくりと自転車をこいでいく横を、ぼくは並んで歩いた。

「あした、学校おわったら遊ばない？」

川口くんが立ち乗りしながら、ちよつと先へすすんでいっ

た。

「うん、いいよ」

ぼくは答えると、自転車の川口くんをかけあしで追いこした。川口くんが追いかけてくる。

オレンジ色に染まった空の下、ぼくは全力疾走で走った。明日にむかって。

(浜北区)

「入選」

カサブランカのかおり

宮島ひでこ

もうすぐ、クリスマスです。

横浜で、ずっとひとりぐらしをしているひろよおばあちゃんから、カサブランカという名前の、ゆりの花たばがときました。

かわいいメッセージカードがそえてあります。

『ももちゃん、お元気ですか。』

今年のクリスマスパーティーに、わたしのお友だち十名が参加します。いつも中華料理のお店でしたが、人数がふえたので、ホテルを予約しました。海が見える歴史のあるホテルです。歌やダンス、おどり、マジックショーなどあります。おたのしみにね。

十二月二十四日、午後三時から。

場所は、みなとの丘ホテルです。

ひろよおばあちゃんより」

生け花の先生をしているおばあちゃんは、とってもおしゃれで、お化粧するのが大好きです。明るいピンクやむらさき色の洋服がよくにあいます。いつもはものずかなおばあちゃん

さんですが、ときどき

「やってやろうじゃないの！」

と、男っぽいことばをつかうので、ユニークなおばあちゃんだと、ももよは思っています。

このまえ、いちばんなかよしのミキちゃんがあそびにきて、初めておばあちゃんに会ったとき

「ねえ、ももちゃん、ひろよおばあちゃんてさ、とっても若く見えるんだけど、何さいになるの？ 五十五さいくらい？」

と、小さな声で、耳もとでささやくようにたずねました。

「ええっ！ 五十五さい？」

ももよは、びっくりです。だって、ほんとうは六十九さいだから。

「そんなに、若く見える？」

「うん、スターみたいにつけまつ毛つけて、目はぱっちりしてるし、マニキュアやチークもすてきだしね」

「実は、お化粧でへんしんしてるのよ。ほんとに、おもしろいよね、お化粧って。このまえ、おばあちゃんと温泉へ入ったとき、お化粧をしていない顔は、目がほそくて顔がひらべったいの。おばあちゃんじゃないみたいだった。おかしくな

って、わるいかなっておもったけど少しわらっちゃった」

「うちのママもね、お化粧しないと、まゆ毛がちよっとしかないし、目は小さくて、いつもつかれているようにみえるんだよ。ほんとに、ふしぎだよね」

「ももちゃん、わたしたちもおとなになったら、つけまつ毛つけるのかな？」

「わたしは目をこするくせがあるから、つけまつ毛だめかも」
「わたしは今は小学三年生だけど、二十さいぐらいになったら、ばっちりお化粧するかもしれないわ。みていてよ」

ももは、今度のクリスマスパーティーに参加するおばあちゃんたちのお化粧が、とつてもたのしみになってきました。

いよいよ、クリスマスパーティーの日です。ももたちは、お父さんの車で、ひろよおばあちゃんの家へ行きます。車のトランクの中には、おばあちゃんの大さきな、つぼみがいっぱいついてゐるカサブランカの花たばと、お母さんが、やつとさがして買ったという花の刺しゅうのスカーフ。そして、ももが、色えんぴつでえがいたカサブランカの花の絵。その絵は、木でできたみどり色の額に入っています。大きなつつみのプレゼントになりました。

横浜についたのは、午後二時すぎです。

おばあちゃんの家は、港の見える丘公園をのぼりきった坂の上にあります。

黄色やむらさき色のパンジーや、ビオラの花たちに囲まれている洋風づくりの小さな家。らせん状になった石だたみが、門のところからつづいています。

車からお父さんは、走るように家の中へはいっていききました。お母さんも、両手いっぱいプレゼントをかかえて、お父さんのあとからつづいていきます。

ももは、外の景色にしばらく見とれていました。

遠く空、ひろがる海、どちらもやさしいみず色で、海の上にはたくさんのお父さんの小さな船が、まぶしいおひさまの光をあびて、クリーム色にかがやいています。

(なんて、きれいなんでしょう……)

ももは、立ち止まったままでした。

「ももちゃん」

ひろよおばあちゃんの呼んでいる声がきこえます。

げんかんを入ると、大きな青い花びんに飾られた白いカサブランカが、ピーンと花をひらき、家中をやさしいかおりでつつみこんでいます。

「こんにちは、おばあちゃん」

おばあちゃんは、ももよのそばへかけよつてきて、かかえるようにだきしめました。

「いらつしゃい、よくきたね。まっていたのよ。車に酔わなかった？」

「うん、だいじょうぶだった。おばあちゃん、香水つけてるの？ カサブランカの花のかおりといっしょだね」

ももは、ひろよおばあちゃんを見上げながらたずねました。

「そうなのよ。よくわかったわね。この香水は、外国へ旅行に行った友だちが、おみやげだつて買ってきたものなんだけど、カサブランカのかおり」という名まえがついているのよ。わたしが、世界一すきな花はカサブランカだつて話した

ことがあるから、おぼえて下さったのね。きつと」

ももよは、おばあちゃんの顔を、しっかりとながめてみしました。いつものお化粧ではありません。濃いアイラインに、少し長めのつけまつ毛で、大へんしんしています。

ちよつと、目のお化粧をやりすぎているように見えます。じーつとみていたら、おかしくなつて、下をむいてわらつてしまいました。集まつているおばあちゃんたちは、みんなつけまつ毛をつけています。

「かわいい、ぱっちり毛ね」

「使いやすいわ、このぱっちり毛」

「そのぱっちり毛、とってもおにあいよ」

と、よびあつているので、何のことかなと思つていたら、つけまつ毛のことでした。

おばあちゃんたちのお化粧は、それぞれ洋服、アクセサリ、くつ、バック、ぜんぶがびつたりで、とってもおしゃれでした。

パーティー会場となるホテルは、ひろよおばあちゃんの家の近くにありました。

ゆつたりとおちついたロビーは、外国からのお客さまでにぎわっています。大理石をしきつめた床を歩きながら、ももよはわくわくしてきました。

ロビーの中央には、クリスマスの花が、古びた木の根っこのような花器に飾られています。

五階にあるパーティー会場は、海が目の前に見えるひろい窓

があり、舞台やピアノも窓ぎわにありました。テーブルが、舞台を中心に扇の形にならべられています。

お父さんは、司会の席で、さっそく自己紹介をして、パーティーをすすめます。

テーブルに着いたおばあちゃんたちは、ガヤガヤとおしゃべりをはじめています。

ひろよおばあちゃんのあいさつ、そして、乾杯とつづき、食事をしながらのショータイムとなりました。

「みなさま、ただいまから、ステキなダンスがはじまります」

お父さんの声と同時に、ラテンダンスの曲がながれはじめました。

さつきまで、お食事をしていたがねをかけたおばあちゃん、席にいません。

いつのまにか着がえにいき、準備をしたためがねのおばあちゃん、やがてステージにあらわれました。肌がすけてみえる赤いダンスの衣装を着て、赤いハイヒールをはいています。そして大きな金のイヤリングをつけて、若いダンサーとならんで立っています。若いダンサーは、そのおばあちゃんのお孫さんで、二人が手をつないで舞台へあがると、拍手がしばらくつづいていました。

マンボ、ルンバ、チャチャチャ、と三曲がくりかえされます。おばあちゃんたちは、待つてましたとばかりに、すーつと舞台の上にあがり、みんなでおどりはじめました。ももよは、どうしていいのか困っていると、司会をしているお父さ

んが

「ももよ、前にでてきていっしょにおどつてごらん」

と、マイクを通してさけんでいます。ももよは、はずかしくて下をむいていました。

すると

「ももちゃん、さあ、いらっしやい」

と、はりきつて、リズムにのつておどつていたひろよおばあちゃんがやってきて、ももよの手をとると、舞台へつれて行きました。

お母さんも、他のおばあちゃんたちと、笑いながらおどつています。ももよは、ひろよおばあちゃんとむきあつて、おしえてもらいながらたのしみました。

いつのまにか、夕やけ空になり、やわらかいオレンジ色の淡い光が、部屋全体をつつみこんでいます。

動きのはやいラテンダンスの曲から、静かなスタンダードの曲にかわったとき、赤い衣装のおばあちゃんとお孫さんのダンサーの二人だけの舞台となりました。テーブルにすわっているどの人の顔も、しあわせそうに見えます。

いよいよ、ひろよおばあちゃんがうたいます。ゆつくりと、舞台のマイクの前に立つひろよおばあちゃんは、おちついています。

『マイウェイ』という曲を、英語で話しかけるように、大きな声でうたいあげました。うたいながらじぶんのうたに感動したのか、ほほをつたつて流れる涙が、やわらかい照明の

中できらりと光っています。

（もしかして、ひろよおばあちゃんて、昔は歌手だったのかしら）

ももよは、あまりにも上手なので心の中でそう思っていました。

お父さんの司会がすすみます。

「次は、熊本からおいでの馬場さまが、黒田節をおどつて下さいます。どーぞー」

はかま姿で、白いはちまきをして、りりしい姿のおばあちゃんが、せんすを右手にもち、舞台のまんなかにすわって、おじぎをすると、ぴんと背すじをのばして舞いました。

『酒は、のめのめ、のむならば——』

最初は、じーつと舞台の方をみていたおばあちゃんたちは、歌とおどりにあわせて全員でうたいはじめ、大合唱になってしまいました。

次は、マジックショーです。ももよはたのしみにしていたので、舞台のそばにすわって待っていました。ところが、マジックに使うひもをもって、舞台にあがったけれど、そのおばあちゃんはあがつてしまつて、全部忘れてしまい何も思いうかばず、それで中止となつたのです。しょんぼりしていたおばあちゃんを、ひろよおばあちゃんがだん上にかけて「気にしないで、この次のおたのしみね」

と、なぐさめています。

「来年こそは、がんばるわ」

と、にこやかな顔で、みんなにおわびをしているおばあちゃんに、ももよはいっしょうけんめい拍手をしました。

楽しかったクリスマスパーティーは、またたく間に終わりました。

年が明け、新しい年になり、一月も終わろうとしていた土よう日のことです。会社がお休みだったお父さんは、ひろよおばあちゃんの買い物を手伝うため、横浜へ車ででかけました。デパートでの買い物をすませ、食事をする事になりました。

「おふくろ、何が食べたい？」

「久しぶりに、おさしみ定食をたべたいわ」

ひろよおばあちゃんは、車の後部座席にいつものようにこしかけて、車のドアをボタンとしました。そのとたんに「ゴー、ゴー」という、大きないびきをかきはじめたのです。異変に気づいたお父さんは、首をうなだれるように目をとじ、いびきをかいているひろよおばあちゃんに

「おふくろ、どうした！ おふくろ……」

今まできいたことのない大きないびき。意識はありません。あわてふためきながら、近くの病院へつれていきました。

救急病院なのに入院できるベッドがなく、救急車で他の病院へ運ばれ、すぐ手術をうけることになりました。脳こうそくという、脳の血管が何かの原因でつまってしまい、血液が脳の方へまわらなくなりおこる病気です。

お父さんは、ショックで、何もかんがえることができずに、しばらくぼーっとしたまま、手術が終わるのを待っていました

た。お母さんへ知らせたのは、手術が終わってからです。

（あの、いつも元気なひろよおばあちゃんが、手術したなんて……。信じられない）

ももよは、お母さんと、夜遅くに病院へ向かい朝までいて、東京の家へもどりました。

面会はできず、学校へ行っても気がかりでおちつきません。

おばあちゃんに会えたのは、手術が終わって三日すぎからでした。

目をつむった状態で、点滴注射と酸素マスクをつけています。信じられない姿に、ももよはショックで、しばらく言葉もできません。手の指をなでながら

「おばあちゃん、わかる？ 大へんだったね。きこえる？」

おばあちゃん……」

死んだようにねむっているひろよおばあちゃんの姿は、一か月前のクリスマスパーティーのときのおばあちゃんの元気な姿とくらべると、同じおばあちゃんとは思われません。ももよは、ただ涙がこみあげてくるのを全身でうけとめているだけでした。あたたかいおばあちゃんの手をさすりながら、ももよは、声をかけています。

「おばあちゃん、早く元気になってね。おばあちゃんが、おくってくれたカサブランカ、つぼみが二つひらいたよ。あと五つのつぼみも、元気で青いまんだよ。わたし、ずーっと水をとりかえているからね。おばあちゃんが、早くよくなりますようにって、カサブランカの花におねがいするから

「……。いのっているから……」

おばあちゃんから何のことばもありますが、ももよはあきらめず、ひろよおばあちゃんに、これからもいろんなことを話しかけてあげようと思いました。

お父さんとお母さんは、ほとんど毎日のように病院通いです。ももよは、二週間に一回のわりあい、おばあちゃんを見舞いました。

季節は、桜の花が満開の四月。

ビックニュースです。ひろよおばあちゃんの、意識が少しもどりはじめました。みんなの顔がわかるようになったのです。手、足の運動もとり入れられるようになりました。食事は、点滴注射と管で直接胃へいれる栄養の方法でしたが、だんだん口からの食事ができるようになるとのことを、お父さんは、担当の先生からきいてきました。

「おばあちゃん、よかったね。少しずつよくなっていくって」
ももよは、家にかざっているカサブランカのつばみが、又、二つひらいたことを伝えました。

「あ、り、が、と、う……」

丁度病室にいた、お父さん、お母さん、ももよの三人は、久しぶりのひろよおばあちゃんの声に涙があふれで、みんなでおばあちゃんにだきついてよろこびました。

「おばあちゃんよかったね」

次の日のことです。

お父さんが、久しぶりに朝食をみんなで食べながら、うれ

しそうに話しました。

「三日後に、おばあちゃんは、家の近くにあたらしくできたリハビリ専門の病院へ移ることになったよ。やさしいピンク色のかべで、おひさまが、どの部屋もてらしてくれる明るいつくりで、先生やスタッフの皆さんも、元気でいい感じだった。家から近いのが、いちばんだから……」

久しぶりにみるお父さんの笑顔です。お母さんとももよは、顔を見あわせてほえんでいます。

「お父さん、おばあちゃん退院できるよね」

「できると思うよ。おばあちゃんは、むかしから根性があり、パワーがあるから、どんなことにも負けないよ」

「そうだよね。元気になってやろうじゃないの。退院してやろうじゃないの、わたし負けないわよ」

ももよは、ひろよおばあちゃんの男っぽい言葉遣いをまねしてみました。

お父さんも、お母さんも、うなずきながら笑っています。
「今朝のみそ汁おいしいね、お母さん、何か入っているの？」

お父さんは、みそ汁の味をかみしめています。

「元気になる、とくべつの麦みそを入れてあるから……」
窓からやさしい朝の風と、やわらかいおひさまの光がさしこんできます。

テーブルの上のカサブランカは、五つめのつばみがふくらみ、今にも咲きそうです。あと残りの二つのつばみは、きみどりでピンとしています。

大きな輪のようになって、今まで咲いたままの四つの花は、カサブランカのかおり、の香水と同じかおりをずーっと、はなちつづけています。
ひろよおばあちゃんが元気になって、ひよっこり帰ってくるような、そんな気持ちで、ももよは、花びんの水をあたらしくとりかえています。

(中区)

「入選」

白バラが咲いた日

生崎美雪

五月のある晴れた日曜日のことでした。

二階の部屋の窓辺に座って、恵理子は本を読んでいます。お父さんとお母さんが朝早く出掛けてしまい、一人でお留守番です。小学校四年生になったけれど、一人のお留守番は、なんだか心配で、本を読んでも落ち着きません。「コッソ、コッソ」と、窓で音がしました。恵理子は、読みかけの本をぱたんと閉じて、そっと窓の外を見ました。

「まあ」

窓ガラスのむこうに見えたのは、白いバラの花でした。緑色の葉っぱをつけた細長い枝のてっぺんをかたむけて、恵理子の部屋の窓へ白い顔を近づけていたのです。

「きれい。昨日までは咲いていなかったのに。きっと、今朝咲いたのね」

白バラのやわらかな白い花びらは何枚もかさなりあって、ふんわりと広がっています。窓を開けると、風がふわりと部屋の中に入ってきて、白バラのほかに甘い香りがただよいました。

「いいにおい」

恵理子がそっと目をとじると

「ポロン、ポロン、ポロン」

どこからか、ピアノの音が聞こえてきました。ピアノの音に耳をすませて、恵理子はそっと目をあげました。窓ガラスのむこうの白バラが、まるでピアノの音に合わせて踊っているように揺れています。

「おとなりの家から聞こえてくるみたい」

恵理子の家のすぐとなりには、大きな洋館のような白い家が建っています。けれど、いつも静かで、ピアノの音が聞こえたことはありませんでした。

「おとなりのすみえおばあさんは、おじいさんが天国へ行ってしまってから、あの白い家で、ずっと一人きりで暮らしているのよ」

（お母さんがそう言っていたけれど。誰がピアノを弾いているのかしら？）

「あつ」

恵理子は思わず息をのみました。となりの家の窓があいていて、風になびいている白いレースのカーテンのむこうで、一人の少年がピアノを弾いていたのです。

色白で、きれいにととのった横顔、白いシャツに、黒い半ズボン、白いハイソックスをはいています。黒いグラランドピアノにむかって、姿勢よく、細長い腕をすつとのばして、ほほ笑みながら楽しそうに弾いています。

恵理子は少年を見つめたまま、じっとして動けなくなってしまうしました。恵理子には、そのピアノを弾く少年が、どこか知らない国の王子様のように思えたのです。

「直人ちゃん、ピアノの練習が終わったらおやつよ」

すみえおばあさんの声がしました。

「うん。もう終わり。おやつにする」

少年はピアノのふたをしめると、椅子からおりました。恵理子は急いでカーテンをしめました。すると、カーテンの音に気がついた少年が、窓の方へ近寄ってきました。窓から顔を出して

「誰がいるの？」

と、聞いてきました。恵理子は、ドキドキして返事が出来ません。

「こんにちは」

少年が明るい声をかけてきます。恵理子も思わず

「こんにちは」

と、言っしまいました。言ってから急にはずかしくなつて、恵理子のほほはぽつとあかくなりました。

「顔、見せて」

少年の言葉で、恵理子はおつとカーテンから顔をだしました。恵理子の家の窓となりの家の窓との間の距離は、一メートルくらいです。手を伸ばせば届くほどに近いのです。恵理子と少年は窓越しに向き合いました。

「君、名前は？」

「恵理子です」

恵理子の胸はドキドキして、てのひらからはじんわりと汗がでています。

「ぼくは直人」

「直人くん、ピアノ上手なのね。私、あの曲聞いたことがあるわ」

「ありがとう。あれは、シューベルトの『野ばら』っていう曲だよ」

「『野ばら』……。素敵な曲ね」

恵理子が笑うと、直人にもっこりと笑って言いました。

「恵理子ちゃんは何してたの？」

「お留守番。それで本を読んでいたの」

「何の本？」

「アンデルセン童話の『人魚姫』よ。絵もとっても素敵なの」

「恵理子ちゃん、本が好きなの？」

「ええ。直人くんは？」

「ぼくも好きだよ」

「それなら貸してあげるわね」

恵理子は、読んでいた絵本を窓から直人へさしだししました。直人は白い家の窓から身を乗り出すと、恵理子から絵本を受け取りました。

「ありがとう。読み終わったら返すね」

「ええ。いつでもいいわよ」

白バラが風にゆれました。

「いいにおいだね。ぼく、昨日この家に来たんだ」

「どこから来たの？」

「遠くの街からだよ。一人で来たんだ」

直人は、ちよつとさみしそうな顔で言いました。

「お父さんとお母さんは？」

「お父さんの仕事の都合で、ふたりでドイツに行っちゃった」

「ドイツ！」

恵理子は、ドイツの街の景色を本で見たことがありました。石畳の道や、緑のしげった森、赤レンガ造りの家並み、大きなお城があつて……。美味しそうなパンやお菓子……。

「ドイツなんて、素敵ね」

「お父さんは、音楽にかかわる仕事をしているんだ」

「音楽の仕事って、作曲家？ それともピアノリスト？ オーケストラの指揮者とか？」

「そうじゃないよ。楽器の会社勤めているんだ。ドイツのデュッセルドルフっていう街にある支社に転勤になったんだよ」

「へえ。すごいわね。直人くんは一緒に行かなかったの？」

「うん。ぼくは日本の学校で勉強した方がいいということになって、一人でおばあちゃんの家に来たんだ。だけど、いつかぼくも父さんたちのいるドイツに行つて、音楽の勉強をしたいって思ってる。それが、今の僕の夢なんだ」

恵理子は、はつきりとした言葉で話す直人が、ますます素敵に思えました。

「もしかして直人くん、桜の丘小学校へ転校してくるの？」

「そうだよ。四年二組に入るんだ」

「私のクラス！」

恵理子は驚いた声で言いました。

「恵理子ちゃん、四年二組なの？」

「うん」

「本当？ よかった。ぼく、転校して友達が出来なかったらどうしようって心配してたんだ」

直人の顔がぱっと明るくなりました。直人は、恵理子にむかって右手をさし出しました。

「よろしく、恵理子ちゃん」

恵理子は少しとまどいましたが、自分の右手をのばしました。

「こちらこそ、よろしく。直人くん」

ふたりは笑顔で握手しました。

「恵理子ちゃん、素敵なお友達ができてよかったわね」

白バラが、ほほえみながらふたりを見つめています。

「直人ちゃん、何してるの。ホットケーキと紅茶が冷めてしまっわよ」

すみえおばあさんの声がしました。

「はい、おばあちゃん。今行くよ。恵理子ちゃん、またね。学校であつたらまたお話ししよう」

直人はそう言うのと、握手していた右手をそつとはなしました。

「直人くん。明日、学校に来るの？」

恵理子があわてて聞きました。

「うん、行くよ」

風が吹きました。白バラのほかに甘い香りが、恵理子と直人を優しく包みこみました。

恵理子は直人の後ろ姿を見つめながら、心の中に白いバラの花が咲いたような不思議な気持ちになりました。

その日の夜、恵理子はなかなか眠れませんでした。布団の中で、直人の話していたことを思い出します。

（直人くんには素敵な夢があるのね。でも、私には……。私の夢ってなにかしら？）

月曜日の朝になりました。空の上のおひさまは、雲の中に隠れていました。恵理子は曇り空の日が苦手です。こんな日は、恵理子の心の中にまで灰色の雲がかかったみたいで、頭が痛くなって、学校へ行きたくなくなってしまふのです。でも、今日は違いました。

（学校に行けば、また直人君に会える）

恵理子は洋服ダンスの中から、お気に入りの白いワンピースを選んで着ました。それから、長い髪を紺色のリボンですっきりと一つに束ねると、鏡にむかってにつこりと笑ってみました。

（教室で直人くんに会ったら、最初に何て話そうかな）

朝食のテーブルについても、恵理子は直人のことが頭からはなれません。

（でも、直人くん、ほんとに学校にくるかしら？　もしかして、昨日のことは夢だったのかもしれない）

惠理子は、レースのカーテン越しに見たピアノを弾く少年の姿をほんやりと思いい浮かべます。

「惠理ちゃん、急がないと学校に遅れてしまうわよ」
お母さんがあきれた声で言いました。

「はい」
あわてて朝食をすますと、惠理子は椅子からたちあがりました。

「変なお天気だけど惠理子、頭痛くないかい？」
お父さんが心配して聞きました。

「今日は大丈夫みたい。行ってきます」

惠理子は、赤いランドセルをせおって、家をでました。庭を通りすぎるとき、昨日と同じようにバラの花の甘い香りがしました。

（いつてらっしゃい、惠理ちゃん。きつといい日になるわよ）
と、白バラが見送ってくれました。

学校へ着くと、惠理子はドキドキしながら、教室にはいりました。

「おはようございます」

教室の中では、クラスメートがざわざわと何か話していました。

「惠理ちゃん、おはよう」
幸子がかけよってきました。

「今日、私たちのクラスに転校生が来るそうよ」
とつさに惠理子は、昨日直人に会ったことは内緒にしておこうと思いました。

「へえ、そうなの」

「どんな子が来るのか楽しみね」

「え？　うん」

はじまりのチャイムが鳴って、みんな席につきました。しーんと静まりかえった教室へ先生がはいってきました。

「おはようございます」

あいさつをしたみんなは、いっせいに先生のとりに立っている少年を見つめました。

「今日から、私たちのクラスに新しいお友達がいることになりました」

先生は黒板に白いチョークで、『河原直人』と書きました。

「直人くん、みんなに自己紹介してちょうだい」

直人が、まっすぐに背筋を伸ばして言いました。

「ぼく、河原直人です。東京から引っ越してきました。よろしく願います」

しっかりとした大きな声です。

惠理子の胸が、ドキンドキンと大きくなっています。直人は窓際の一番後ろの席にすわりました。惠理子は一番前の席から、直人を見つめます。

（昨日はあんなに自然に話せたのに……）
どういうわけか、直人と話す勇氣も自信もまったくなくな

つていたのです。一時間目の国語の授業中も、先生の言葉がまったく頭にはいらずに上の空でした。

休み時間になりました。直人のまわりにクラスメートが集まってきました。恵理子は離れた席から見ていましたが、うつむいてしまいました。

（せっかくお気に入りの白いワンピースを着てきたのだから、駆け寄っていつて、おはようって言えばいいのに……）

心の中では、もう一人の恵理子がささやいています。

算数も社会も理科の授業も、まったく頭にはいりません。

5時間目の体育の時間、とうとう恵理子は、曇り空の日に必ず起こるいやな頭痛になってしまいました。運動場のすみっことあるベンチから、クラスメートのサッカーの試合を見学することになりました。

直人はあつというまにクラスのみんなど仲間になって、運動場を楽しそうにかけまわっています。恵理子はそんな直人の姿を、なんだかとてもさみしい気持ちで見つめています。そのうちに悲しくなつてきて、恵理子の目には涙があられてきました。

恵理子は、昨日窓辺で見た白いバラの花のことを思い出しました。それから、静かに胸に手を当てて、心の中に咲いた白いバラの花が今も咲いているかしらと考えます。すると、空に広がっていた雲の間から、金色のおひさまが顔をだしました。灰色だった空は青空にかわりました。やわらかな光がさして、さわやかな風が吹いてきます。その風が運んできたバ

ラの花のほのかな甘い香りが、恵理子を優しく包み込みました。

「恵理子ちゃん」

と、明るい声がしました。恵理子はそつと顔をあげてみました。

「直人くん！」

恵理子はびっくりした拍子に、大きな声で直人の名前をよんでいました。

「ああよかった。ぼくのこと忘れちゃったのかと思ったよ。

ちゃんとおぼえていてくれたんだね」

直人は、うれしそうににこにこ笑っています。

「直人くん。お話に行かなくてごめんなさい。私……」

恵理子がくちごもと

「いいんだよ。ねえ恵理子ちゃん、放課後、ぼくの家遊びに来ない？」

恵理子はびっくりした顔をしました。

「おばあちゃんに恵理子ちゃんの話を話したら、家に連れておいでって言ったんだ」

「ほんと？ 私、前からずっと、おとなりの白い家へ行つてみたかったの。直人君が来るずっと前からよ」

「へえ。どうして？」

「なんとなく……。あの白い家が外国の絵本に出てくる家によく似ていて、なにが素敵なものが隠れているような気がしていたの」

「よかった。それじゃあ放課後、校門の桜の木の下で待てるからね」

「うん」

「約束だよ」

「約束ね」

直人のさしだした小指と、恵理子の小指でふたりはゆびきりげんまんをしました。

放課後になりました。幸子が恵理子のところへ駆け寄ってきて言いました。

「今日、図書室によって行きましよう。5月になって新しい本がたくさん図書室にきたでしょ」

「ごめんなさい。今日は早く家に帰らないといけないの」

「そうなの、残念。ばいばい、恵理ちゃん」

「ばいばい、幸子ちゃん」

恵理子は、幸子に手をふりました。それから急いで赤いカバンをせおうと、校庭を駆け抜けて校門のそばの桜の木の下へ走って行きました。

今年は春がゆつくりとしていて、五月になっても校庭の桜の木には、薄桃色の桜の花が少しだけ散らずに咲いています。

その桜の木の下で、直人がまっすぐに前を見て立っていました。

「恵理ちゃん、待ってたよ。さあ、行こう」

直人が歩き始めました。

「直人くん、私ね」

恵理子は、さっき幸子にうそを言ってしまったことを話しました。

「そっか。ごめん。ほんと約束したせいでうそつくことになっちゃったんだね」

「直人くんのせいじゃないわ」

「恵理子ちゃん、ほんととは図書室で本を借りたかったんじゃないの？」

「え？」

「本、好きなんですよ」

「ええ。毎日家で読んでるわ」

「どうしてそんなに本が好きなの？」

「本を読んでいると、自分がその本の主人公になったみたいのに、いつもはできないようないろんなことができるんだもの。それに、いやなことがあっても、元気になるの」

恵理子は、知らないあいだに自分の気持ちを直人に話していました。

「でも、今日は直人くんの白い家へ行ってみたいわ」

「よかった。おばあちゃんの家にも本がたくさんあるよ。気に入った本があったら、おばあちゃんに貸してもらおうといいよ」

「ほんと？」

恵理子の目が輝きました。いつもの帰り道、今日は直人とふたりで並んで歩きます。

白い家が見えてきました。

入口の門には黄緑色の葉っぱのついた細い枝がまきついていて、桃色の小さなバラの花がたくさん咲いています。

「きれい。いいにおい」

「おばあちゃん、バラの花が好きなんだ」

「私のお母さんと一緒ね」

「そういえば、恵理子ちゃんの部屋の窓のところに、白いバラの花が咲いていたね」

「あの白バラは、昔、お父さんがお母さんへ贈ったバラなんですって」

「そうなんだ」

ふたりは、桃色のバラのアーチをくぐりました。そして、芝生の道を歩いて、すみえおばあさんの待っている白い家のドアをあけました。

「おばあちゃん、ただいま」

直人の声を聞いたすみえおばあさんが玄関へでてきました。髪をおだんごのようにまるくまとめて、麻のワンピースを着ています。恵理子を見るとうれしそうに

「おかえり。まあ、恵理子ちゃん。よくきてくれたわね。どうぞ、あがつて」

と、言いました。

「こんにちは。おじゃまします」

恵理子はずかしそうにぺこりとおじぎをしました。部屋の中にはいった恵理子は、目をまんまるくして見まわしました。

部屋をぐるりと取り囲むように背の高い本棚が置いてあって、たくさんのお本がならんでいたのです。

「まあ、図書室にいるみたい」

「あとでゆっくり見るといいよ」

直人が言いました。

「うん」

「さあ、おやつよ」

すみえおばあさんが白いティーブルクロスのかかった丸いテーブルの上に、焼きたてのパウンドケーキがのったお皿を置きました。

「いいにおい」

「恵理ちゃんが来てくれると思って、ドライフルーツをたくさんいれて焼いておいたのよ。紅茶もどうぞ」

「いただきます」

恵理子と直人は椅子にこしかけると、おばあさんがナイフできりわけてくれたパウンドケーキを食べました。

「おいしい。私、こんなケーキを食べたの初めてです。イチゴののった白い生クリームのケーキなら食べたことがあるけれど」

「気に入ってもらえてよかったわ」

「おばあちゃんは料理も上手なんだよ」

すみえおばあさんはうれしそうにふたりを見て言いました。

「直人ちゃん、よかったわね。新しい学校でいいお友達がで

きて」

「うん」

「学校はどうだったの？ 楽しかった？」

「楽しかったよ。体育の授業でサッカーやったんだ」

「そうかい。今夜、ドイツに電話してみようねえ。きつと、お父さんとお母さんが心配しているだろうから」

直人がさみしそうな顔をしてうつむいたのに、恵理子は気がつきました。

（直人くん、ほんとはお父さんたちと一緒にドイツへ行ったのか？）

そんな風に思っただけで直人を見ると

「うん、そうするよ」

直人が顔をあげて、笑って見せました。

「おばあちゃん、恵理子ちゃんは本を読むのが好きなんだって」

「まあ、そうなの。この家にはごらんの通り、たくさん本のがあるのよ。私も本を読むのが好きでねえ。外国の本もあるし、日本の古い本もあるのよ。それから……」

そう言いかけたすみえおばあさんは、あわてて両手で口をふさぎました。

「さあ、どれでも好きな本を貸してあげるわ」

「いいんですか？」

「もちろんよ。恵理子ちゃんに読んでもらえれば、きつと本も喜んでくれるわ」

恵理子は、本棚の方へ近づいて行きました。それから、隅から順番にゆつくりと本を見ていきました。

「たくさんあって、どれを借りたらいいかわからないわ」

「それなら、私が選んであげましょう」

すみえおばあさんが、本棚の一番下の段から一冊取り出して、恵理子にさし出しました。

「はい」

恵理子は本を受け取りました。横長の薄い本で、紺色の布の表紙は銀色の薔薇の飾りで縁どられていて

『不思議な夢の物語』

と、金色の文字で書いてありました。

「なんだか面白そう。この本、借りてもいいですか？」

「どうぞ。そうだよ。よかったら、二階の部屋でその本を読んでいってちょうだい。直人ちゃんと一緒に」

すみえおばあさんは、本棚からもう一冊本を取り出して、直人に渡しました。

「あれ？ 恵理子ちゃんのおんなじ本だ」

恵理子は直人の本を覗き込みました。

「あらっ、ほんとね。おんなじ本がたくさんあるなんて、やつぱり図書室みたい」

「この本だけよ」

「どうして？」

恵理子が驚いて聞くと

「ふふふ。どうしてかしら。本を読んでしまったら教えて

あげるわね」

すみえおばあさんが笑いました。

(何か秘密があるのかしら……)

恵理子はますますこの本が読みたくなつて

「この本、すぐに読ませてください」

と、大きな声で言いました。

「じゃあ、ほくも一緒に読むよ。二階の部屋に行こう。ピアノのある部屋だよ」

「おばあちゃんがあとから、パウンドケーキと紅茶を持って行ってあげるわ」

ふたりは紺色の本を持って一階の部屋をでると、階段を上って行きました。階段の壁には、銀色の額にはいつた絵が飾ってありました。

水彩絵の具で描かれたきれいな絵です。大きな白いお城の前で、いろとりどりの衣装を着たピエロたちが玉乗りをしています。藍色の空には、お月さまが金色の光で輝いていて、小さな星たちがたくさんまたいたっています。

そして、金色の流れ星がひとつ、長い光の尾をひいています。

「素敵……。でも、なんだか不思議な絵ね」

「この絵はおじいちゃんが描いたんだよ」

「直人くんのおじいちゃん？」

「そう、すみえおばあちゃんはこの白い家に住んでいたんだ。もう天国へ行っちゃったけどね」

恵理子は、お母さんの話を思い出しました。

「おじいちゃんとはとても優しくったよ」

「絵描きさんだったの？」

「ううん。学校で絵を教えていたんだって」

「へえ」

恵理子はおじいさんの描いた絵を見つめました。

二階の部屋のドアをあけると、グランドピアノとソファがおいてありました。

「ここで読もうか」

「うん」

ふたりはソファにならんで座ると、持ってきた本を同時に開きました。

少しでもあいている窓から、気持ちの良い風が部屋の中へはいってきます。その風は、恵理子の庭に咲いている白いバラの花の香りがしました。バラの香りの漂う静かな部屋の中で、二人は夢中になって本を読みました。

どのくらいいたったのでしょうか。

ぽーぽーぽーぽー。

壁にかかった鳩時計が五時を知らせました。

「最後まで読めたかしら？」

すみえおばあさんが、ケーキと紅茶を持って部屋に入ってきました。恵理子は本をひざにのせたまま、顔をあげました。

「なんだか不思議な夢の世界に迷い込んだみたいです」

惠理子の瞳が輝きます。

「面白かったよ。本の中でいろんなことがおこって、ドキドキしちゃった」

直人は声をはずませました。

「そうかい。それはよかった」

すみえおばあさんはうれしそうにうなずきました。

「おばあさん、この本の秘密を教えてください。どうしてこの家にはこの本だけがたくさんあるんですか？」

惠理子がたずねました。

「本の作者の名前をみてちょうだい」

惠理子は、本の表紙をもう一度よく見てみました。

「のばらすみえ。えっ？ あっ！」

すみえおばあさんが、ふふふと楽しそうに笑いました。

「おばあちゃんがこの物語を書いたの？」

惠理子と直人が同時に声をあげました。

「そうよ。まだおじいちゃんが生きていて、直人ちゃんのお父さんが小さな子供だった頃に書いたの。本の一番最後のページを開いてごらんさない」

「まあ」

本の最後のページには、階段の壁に飾ってある、おじいさんの描いたちょっと不思議できれいなさし絵がついていました。

「これは私が書いた物語に、おじいちゃんが絵を描いてくれた本なの。私の大切な宝物よ」

すみえおばあさんはそう言って、窓のむこうを見つめました。

「この部屋の窓からは、青い空と白い雲、それからおひさまがよく見えるわ。夜になるとお月様が金色に輝いて、小さな星たちがきらきらとまたたくの」

「おじいちゃんはある空の上にいるんだね」

直人が言いました。

「そうよ。だから、おばあちゃんはさみしくないのよ。惠理子ちゃん、この本を一冊あげるわね」

すみえおばあさんは、本の最後のページに『惠理子ちゃんへ のばらすみえ』と、サインペンで書いて惠理子に差し出しました。

「ありがとうございます。大切にします」

惠理子は、すみえおばあさんから本を受け取ると、こんな風に言いました。

「私もいつかこんな物語を書いてみたいな。でも、書けるかしら？」

「きつと書けるわよ、素敵な物語が」

すみえおばあさんがほほ笑みました。

「よく、惠理子ちゃんの書いた物語、一番最初に読んであげるよ」

そう言うと直人は、ピアノにむかって「野バラ」を弾き始めました。

「私、書いてみよう」

恵理子は、ピアノの音に耳をかたむけながら、こんな風に思いました。

（直人くんみたいに、私にも素敵な夢ができたのね）

これから始まる物語を思うと、恵理子は、今までに感じたことのない、心がわくわくと湧き立つような気持ちになるのです。その瞬間、恵理子の心の中では、昨日咲いた白いバラの花が、今また花びらを大きく広げて、ひととききれいに咲いたようでした。

（中区）

児童文学選評

那須田 稔

近年、浜松市の児童文学のレベルは、確実に上ってきています。

この背景の一つには、株式会社「遠鉄ストア」が市民、児童、学生を対象に実に二十年間にわたって遠州地域に展開してきた「童話大賞」文化事業があることを指摘しておきます。

さらに歴史をさかのぼれば、大正年間からはじまった浜松子供文化協会の飯尾哲爾先生たちの、半世紀にも及ぶ子どもにすぐれた文化を贈る「土のいろ」運動があったことを、今、あらためて思いおこしているところです。こうした子ども文化の伝統に支えられて生きていることの幸せをかみしめているところなのです。

そして今回、例年より数多く寄せられたすぐれた作品を拝見し、この地域の児童文学の伝統がみごとに息づいていることを確かめることができて、たいへんうれしく思いました。

市民文芸賞

「ぼく、いま日本晴れ！」

なにかの事情で飼い主をなくした犬たちと触れ合うことのできるアジサイ広場に、「ぼく」は、お父さんたちと行くこととなります。その広場で「ぼく」が大好きになった犬のランは、じつは東日本大震災で、犬小屋とともに流されたいたところを救いだされたのでした。ランを引き取ることができて大喜びの「ぼく」。ところが、ランがとつぜん、いなくな

ります。必死に探す「ぼく」――。

大震災のなかでけなげに生きぬいた犬のランと少年との友情物語です。

市民文芸賞

「夕焼け島のツオイ」

転校してきて友人のいないひとりぼっちの「ぼく」が、とつぜん、夕焼けの光のなかの島に墜落します。そこにいたのは、うすいオレンジ色の肌と、金色の大きな目をしたツオイという少年と、きこりの老人でした。ツオイとの夕焼けの島ですごしたほんのひと時の体験、不思議な異次元の世界をかいまみた少年の物語です。

入選

「カサブランカのかおり」

カサブランカの花をめぐる家族愛が、ほのぼのと全編をつつみます。作者のやさしい心情が文章のはしはしににじみでて、読者を感動させます。

入選

「白バラが咲いた日」

四年生の恵理子は、隣のすみえおばあさんのところにきた直人少年の弾くピアノに心ときめきます。

抒情性豊かな作品です。

入選にはとどきませんでしたが、「アツシのおまけの一日」は、神さまたちのユーモラスな事件を描いて、楽しく読めました。また、絵をとおして友情をそだてた「健太と絵と本田くん」。ふしぎなミミズクの床屋さんなどが登場する「奥山の仲間たち」も、とてもユニークな作品だったことを付記しておきます。

評論

「市民文芸賞」

畢山とキーン氏

遺書（自決）

天保十二年（一八四一）―老中・水野忠邦（後述）による天保の改革が始まった年―十月十日、畢山（渡辺登）は三河国田原の幽居先で、仕上げ途中で氣になっていた中国の故事に由来する「黄梁一炊図」（国の官吏登用試験に失敗した盧生が邯鄲に旅して宿った時見た夢の話、「盧生炊夢図」ともいう）をやつと書き終えた。（漱石の『こころ』最終章に「渡辺畢山は邯鄲という画を描くために、死期を一週間繰り延べたという話をつい先だつて聞きました」と先生の遺書に載っている）登にとつては絶筆となつたこの一枚の絵に、過ぎ去つた四十九年の生涯を托して「人生けつきよく盧生の夢かな」とつぶやいた。彼は今夜、自決するつもりであつた。吾亡きあと、母（七十才）、妻（三十九才）、長女（十五才）、長男（十才）、次男（七才）たちの困苦を思うと暗然として、

最後の夕食の膳に向つた。

部屋に戻り、しばらく目に涙をいっばいたためて端座していたが、やがてゆつくりと行灯を引きよせて、五通の遺書をしたため始めた。

最初に書いた椿椿山宛の遺書によつて畢山自決の概略が判明する。（現代文に直す）

一筆申し上げます。私は老母に少しでも良い暮しをと願うあまり誤つて、画を売りさばく義捐事業に乗つてしまいました。最近になつて根も葉もない風聞が勝手に動き廻り、これは必ず災いを招くに違いない、主君（藩主三宅候）の安否にも関ること故、今晚自決することに致しました。御政道を批判して罪を受けながら、身を慎まなかつた言行不一致の自ら招いた運命に他ありません。（中略）極秘のまま、永のお別

中谷節三

れを致します。頓首拜具。

十月十日 御手紙等は皆仕舞申候。

椿山君兄

(田原の「華山会館」所藏)

椿山は華山の最も親しい絵の同志(弟弟子)であった。

義捐事業というのは、椿山と双璧と言われた弟子の福田半香(見付(今の磐田市)の人)が幽居中の華山一家の窮状を見て、それを救うため江戸で画会を開いて華山の絵を売った。その事を知った田原藩首脳部は、華山の不謹慎を悲嘆し、その事が幕府の耳に入り、近く藩主が問責されるという噂を故意に流し、華山の親戚で、小心者の小寺大八郎に知らせた。華山はその身の四面楚歌をなげき、藩主に責任が及ぶことを恐れた。それが自決の原因である。(佐藤昌介校注『華山・長英論集』遺書解題より) 半香は、良かれとした事が意に反して師に累を及ぼした事を終生の痛恨事として、元治元年(一八六四)六十一才で死するに臨み、渡辺家の菩提寺、江戸小石川の善雄寺に自分の遺骸を葬らしめ、碑を立つことを禁じて、地下で師に謝った。

二通目は岡崎藩中山氏の養子で実弟の助右衛門で、これも今晚自決致候であったが、今宵は夜も更けて来て、最早死ぬ時期は失した。

水戸藩の門人金子武四郎と、田原藩士村上定平の二氏は今般自決仕候となった。最後の長男立への遺書は終章に述べる。やがて暁が近くなり大気が冷えて来た。

翌十一日は小春日和の暖かい秋の日であった、午前、来客があり、母親の目に隙が生じた。母と妻は、華山の様子がここ二、三日いつもと違ふので気をつけていたが、その隙をついて華山は納屋へ走った。気がついた母親がその後を追ったが一瞬の差で、既に華山は納屋で事切れていた。使った脇差は、白鞘物で表に「刀銘 東播土祐国」(一尺二寸五分)裏に「明石松平家大野夕鷗、祐国をして作らしめ以て華山先生に贈る(漢文) 文政十三年(一八三〇) 八月」とあった。倒れている華山を抱き起した母は、華山が武士の作法通り、先ず腹を切り、そのあと咽喉を突いたことを見て、「真にわが子なり」とうなづき満足したが、女の身の悲しさ、とり乱して、わっと泣き伏した。

差し紙

華山は寛政五年(一七九三) 九月十六日、江戸麹町半藏門外(今の三宅坂)の三河国田原藩主三宅家上屋敷の藩邸内で、渡辺家の長男として生れた。当時は封建制度が行き詰まり、幕府や諸藩は財政難になやんでいた。田原藩はわずかに一万二千石の小藩だったので、実収は七千石に過ぎず、渡辺家の家計も、上士階級であったが窮迫状態は変らず、弟たちは養子や寺の小僧に出されていた。後年(天保九年(一九三八) 四十六才の時) 病をわずらうての「退役願書之稿」に「私母近年迄、夜中寝候に蒲団と申すもの、夜着と申すもの引掛候と見及不候、やぶれ疊の上にござ寝仕り冬は炬燵にふせり申候」。

文政十一年（一八二八）三十五才で側用人、中小姓支配、天保七年（一八三六）四十三才、江戸留守居役となった。幼少よりの画才を、十九才の時入門した谷文晁たにぶんちやうを師として伸ばし、一家にとつては貴重な収入源となった。師より「あなたにはもう何も教えることがない。人物花鳥は私も及ばない。ただ山水が未だしと思われるが、私は友だちとして付き合おう」と言われた。

現在、国宝として東京国立博物館所蔵の「鷹見泉石像」（下総古河藩家老・蘭学者）天保八年（一八三七）作は現代絵画と見ても遜色はない。

当時の学問は儒教で、四書（大学、中庸、論語、孟子）五經（詩經、書經、礼記、易經、春秋左氏伝）の儒者三代目は文政七年（一八二四）より後日崋山の生死の助言者となる松崎慊堂であつた。朝は四時頃より起きて勉強し、睡眠時間は四、五時間であつた。また蘭書を散見して洋学に心をひかれ、洋画の研究にも意をそそぐようになった。蘭書は三宅友信候（十一代藩主康友公の庶子（母はお銀））より借りて研究した。蘭学に関心を持つ人々によって結成された「尚齒会」があつた。渡辺崋山、高野長英、小関三英、幕臣の江川担庵、川路聖謨等で西洋文物を研究、政治経済など意見を交換した「藩社の獄」で壊滅した。

天保十年（一八三九）五月十四日、崋山宅に北町奉行所より「即刻出頭セヨ」との差し紙（奉行所が被告を呼び出す召喚状）が届いた。この日、崋山は高野長英（陸中・水沢の人、

長崎でシーボルトに蘭学を学び、江戸で開業した医師。「夢物語」で開港論を唱へた）を自宅に招いて主客二人、会つても言葉が出ない。憂ふる所は身外のことに係つていた。実は数日前、老中・水野忠邦みづのただかつの家中、小田切要助（崋山の知己。儒教の師松崎慊堂の同門で、文政七年（一八二四）より交際を持っていた）より「危険が迫っている」という知らせがあつたばかりである。「藩社の獄」の始まりである。崋山は即日吟味の上「揚屋」（江戸伝馬町の牢屋敷の一つ。武士牢。御目見以下の直参、陪臣、僧侶、医師）入りとなった。この間、家宅捜査を受け、押収された書類中の「慎機論」「西洋事情御答書」など幕政事情諷刺が問題となった。

高野長英は、十八日北町奉行所へ自主して出頭、即日伝馬町の本牢へ入れられた。

キーン氏と崋山

永年日本文化を研究して来たアメリカ人のドナルド・キーン氏（九十才）が平成二十四年（二〇一二）三月、居住地の東京都北区に「鬼怒鳴門」と戸籍を登録して日本人となった。

日本に住んで約四十年になる。以下「キーン氏」とする。キーン氏はニューヨークのブルックリンに生れ育ち、コロンビア大学に入学したのは昭和十三年（一九三八）九月、十六才の時であつた。ある日、ゾッキ本専門の本屋で、英訳の「源氏物語」の二冊本を好奇心から手に入れて、やがてその本に心を奪われてしまった。日本は軍事国家だとばかり思ってい

たので、考えが變つて來た。ヨーロッパでは戦争が始まつていた。

昭和十六年（一九四一）十九才大学四年になり、角田柳作先生の「日本思想史」を受講した。生徒はキーン氏一人だった。先生は「一人いれば充分です」と言つた。その年の暮、日本海軍は眞珠湾を奇襲攻撃して第二次世界大戦が始まつた。キーン氏は、日本語を覚えようと、サンフランシスコのカルフォルニア大学バークリー校にある「海軍日本語学校」に応募して入学した。日本では英語を敵性語などと言つて使用を禁止したが、度量が狭いと言わざるを得ない。十一ヶ月の猛勉強の末、昭和十八年（一九四三）二月卒業生総代として「告別の辞」を三十分間、日本語で述べた。卒業生たちは眞珠湾で、押収された日本兵の文書を翻訳した。その後、アッツ島、沖繩、中国の青島等に勤務したが、戦後三年間の軍隊生活を終えて、大学に戻り再び角田先生の講義を聞き指導を受けた。

昭和二十三年（一九四八）イギリス・ケムブリッジ大学に留学、ロンドンに五年間在英した。在英の最後の年二十八年（一九五三）に、「源氏物語」の英訳者、アーサー・ウィーリー氏に会つた。彼は六十才だった。運の良いことに、この年、フォード財団より「日本での研究奨学金」を支給されることになり、以後日本にのめりこむことになり、最後は日本人になつてしまつた。

キーン氏が渡辺崋山を中心に徳川後期のことを書くとうと、

「牢中縮図」（部分） 重要文化財 田原町
後ろ手に縛りあげられた経験を、後日絵にした



とりかかったのは平成十五年（二〇〇三）のことである。その端緒はジョージ・B・サンソム卿（英国の外交官で日本学者）の、ヨーロッパとアジアの文化的な相互影響を研究した論文『西欧世界と日本』の中に、華山について五頁ほどの記述と共に、彼の描いた数葉のスケッチが写真版で載せられていた。

それらの絵は、藩社の獄で、牢屋敷につながれた華山が、「在所蟄居」の判決により、三河国田原にて書いた「獄庭素描」と呼ばれる一連のスケッチであった。

初めて目にした絵に印象は強く記憶に残り、『渡辺華山』を書く動機となった。

『慎機論』及『初稿西洋事情書』

華山は何が故拘束されたのであろう。三河国田原は小藩とはいへ、家老の身である。それは彼が書いた『慎機論』と『初稿西洋事情書』による。両書とも筆が過激となったため途中で止めて屑籠の中へ捨て置いたが、幕吏の家宅搜索の際、発見されてそれによって処罰されたのである。

『慎機論』は天保九年（一八三八）十月十五日、華山が「尚歯会」席上で、近く漂流民を乗せて渡来する英船「モリソン号」に対し、幕府が撃攘策をもって臨むという噂を知って、それに反対して著したものである。

我田原は三州渥美郡の南隅に在って、遠州大洋中（はうしゅう）に進出

し、荒井より伊良良（いらいら）に至る海浜、凡十三里の間、佃家（でんけ）農家のみにて、我田原の外、城地無ければ、元文四年（一七三九）の令（四隻から成るロシアの探検船が、わが国の海辺に接近したため、幕府は海防令を出した）ありしよりは、海防の制、尤（もつとも）厳ならずんば有べからず。（中略）本年七月、英吉利（イギリス）人莫利栄（モリソン）なるもの、我漂流の氏七人を護送して、江戸近海に至ると聞けり。（中略）我四周不備の所多く、一旦事ある時、鞭の短くして馬腹に及ばざるを恐るる也。儒臣（のうしん）亦望浅（のぞみ）小して大を措き小を取り、一に皆不痛不癢の世界となりし也。今夫如（そ）比（これ）なれば束手（くわくしゅ）して冠（こう）を待（まち）むか。（概略）

●封建的割拠に基づく幕藩体制の変革が不可避であるという結論に達していた。（華山）

●西洋の称賛は、鎖国をしている幕府の政治への批判と見なされた。（キン氏）

『初稿西洋事情書』は天保十年（一八三九）三月、伊豆荏山（いずじんざん）の代官江川担庵（ひでたつ）が、幕府に巡見復命書を提出するに当たり、西洋事情と説いた一文を添えることを計画し、その執筆を華山に依頼したのがこの書であるが、内容が過激だった為、江川には『再稿西洋事情書』と『外国事情書』とを送った。

『初稿』では、「西洋事情の義、御尋（か）を蒙（か）り奉（たてまつ）り畏候（おそ）ふ。不案内の事には候得（た）ども、想像（さく）仕（つかまつ）り候丈（だけ）と申上候（まをさ）候。大凡人（おほよそ）の安

んずる所、其知と不知とに係り、見聞候より治り候もの、井蛙管見国より論ずる足らず候。(幕府の体質を井の中の蛙と批判した)西洋諸藩の事情を知るは、誠に今時の急務と奉存候。委細の事は筆紙に難、儘候。最後に右之通、權を全地球に及ぼし候洋人は、実に火敲と申し余り有之候事にて候。何卒此上は、御成徳と御規模の広大を祈る所に御座候」(中略)

天保十年(一八三九)七月二十四日、崋山は口述書に書判した。というより罪狀を認めさせられたという結果で万事休した。崋山の書いた乱稿を読めるように書き直し、その部分が不屈きだと幕政側は言った。無力の被告は結局承引する他無かった。

口述書の最後の章は次の如くである。

(前略) 慎機論並に海外事情を受答候趣の書面に綴り、右の内には井蛙小鵝、或は盲瞽相象の譬を取り、其外恐多き事相認め、御政治を批判致候段、畢竟海岸御手簿にては、不慮の儀有之候節、国家の御為にも不相成義と一途に存遇ぎ候心底を以て、自問自答の心得にて、右の通認の掛け候へ共。不計不容易文勢に流れ候に付、恐入候義と相辨て、未だ稿を終え不申、下書の儘仕舞置き、他見為致義無之由は申候得共。右始末、不憚公儀不敬の至り、重役相募候身分、別而不屈の旨御吟味を受け、無申披奉誤候。

事情の如何を問はず、被告自ら無申披として口述書が出来上ってしまった以上、もう有罪は動かなかった。後は刑の裁定のみである。ここで儒教の師、松崎慊堂が七十才の老体に鞭打って立ち上がった。崋山の命運は老中・水野忠邦の手中にあったが、慊堂の上書文章は崋山を死地より救い出すと共に、老中・水野忠邦も救われた。

判決

「拜啓 白露の節、臨^{ざんよう}残陽^{のぞみ}猶驕文候。」に始まる松崎慊堂の老中・水野忠邦に上申した崋山の「赦免建白書」は巻紙一丈に三千字、二日間に旦り書き上げたのは七月二十八日であつた。慊堂は七十才の高齡で、病身であつた。が、崋山救済のために身を投げ出した。無論、崋山無罪論である。建白書は翌二十九日、用人小田切要助を通じて老中・水野忠邦へ差出された。水野は何も言わない。何の差汰も無く、上申書は小田切に戻された。だが子細に熟読されたことも事実である。上書の内容は理を履みつつ熱として伝つて来た。

(水野が何よりも心を動かされたのは、尊敬すべき高齡の人物が、一人の愛弟子を救うために我が身をすりへらして焦心苦慮している姿であつたに違いない。―キーン氏―)

水野家の本国は、崋山と同じく三河で、六代目まで岡崎城主であつた。七代目より肥前唐津に転封、忠邦は十一代目で六万石、和泉守となり、文化十四年(一八一七)九月、二十四才で(希望して)浜松城主となった。しかし西の丸、

本丸老中となり、浜松在勤は留守勝ちであつた。天保九年（一八三九）七万石となり、同十年（一八四〇）十二月、畢山判決直前、老中首席となつた。『浜松市史』通史編（二）昭和四十六年 浜松市）

判決は半年程経つたその年の暮、南町奉行、簡井紀伊守政憲の役宅で行われた（責任者だつた北町奉行が病気で死去したので）

申 渡 之 書

三宅土佐守家来

渡 辺 登

年四十九才

其方儀 主人領分三州田原者、（中略）右始末重役を相勤め候身分、別而不屈に付、主人家来へ引渡、於^{おび}在所^{にちやう}「蟄居」。

天保十己亥十二月十九日

蟄居とは「閉門の上、一室に謹慎する事」

明けて天保十一年（一八四〇）一月十三日、小雨降る中を藩士松岡次郎を差添人として、渡辺登護送の囚人籠は江戸を発し、一路東海道を西へ三州田原へと向つた。出牢した後、八ヶ月の牢生活でやつれた身体を藩宅で休めていたが、江戸を発つ前に会っておきたい人があつた。

藩主になり得なかつた巢鴨別宅の三宅友信公、上申書を書

いた老公松崎慊堂、親友椿椿山の三人であつた。出立の前日十二日に慊堂から見舞いの使いが来た。これには門弟金子健四郎を使いにお礼を述べた。以後恩師慊堂と会うことはなかつた。友信公も。椿山とも。

登は牢内でかつた悪質の湿疹と下痢に悩まされながら不自由な旅を続け、掛川では氣絶して医師を呼び一日止宿した。医師は慊堂とも昵懇^{じつこん}であつた。八日の旅を終えて二十日夜、田原へ到着した。二十四日には家族も江戸より到着して一家は、田原を去つた農学者大藏永常の御産物屋敷を賜つて、ここに蟄居して牢中の疲労を水入らずで養う事になった。

此地大洋相迫り、濤声^{とうせい}日夜トウトウ相響、一面は峨々たる山、一面は滾々たる海にて、其間田圃井に相連り、唯都の空なつかしく候。老母への不幸我身ひとつにせまり御察可^{おおせくだされ}「被^{たぐさうろう}下候」。

江戸育ちの登一家が、幽居宅で淋しい生活を強いられていた。折角、慊堂や水野の寛大な処置で助命されたにも拘わらず、その事は結局実を結ばなかつた。萱堂^{けんどう}（母）のために絵を売つて二の舞を踏み、反対派の虚言に惑わされて四面楚歌となり、残る道は自決しなかつた。（天保十二年（一八四六）十月十一日）

畢山自決の報が幕府に届けられて、十月二十六日与力中島嘉右衛門、磯貝七三郎両名は同心三名を従えて江戸を出発、十一月四日田原へ到着した。翌五日朝四ツ時（午前十時）よ

り検視を行った。兩名共、裁判のとき吟味係として華山を取調べている。殊に中島は華山の人格に大いに敬服して、入獄中の面倒を見て余り不自由を感じさせなかった。

検視の報告書にはこう書いてあった。

一、臍下左の方より右の方へ横に六寸程引き廻し候切疵一ヶ所

一、咽左の方より左耳の脇まで突貫疵一ヶ所一寸五分都合二ヶ所

一、拵付脇差 壺腰

身長、壺尺二寸五分 銘東播土祐国 但血付有之（後略）

十一月十四日

無事検視が済んだので、華山の遺骸は親戚知人数人に送られ、ひっそりと城外の城宝寺に葬られた。

この年の暮、十二月八日、十四代藩主三宅康直、奏者番に栄進した。華山自決の結果である。奏者番とは、幕府の職名で、年始、五節句などに大名、僧侶等が將軍に謁見のとき、進献の太刀、目録等を披露し、將軍の下賜品を伝達し、殿中の札式を掌り、諸侯の家へ上使となった者、大名が任せられた。

倅へ

五通目の最後の遺書は長男立に宛てたもので、立はこのとき十才であった。

倅へ

御祖母様御存中は何卒
御機嫌能孝行ヲ盡すべし其方母不幸

のものと又孝行盡すべし

餓死するとも

二君に仕ふ

べからず

月 日

不忠不孝之父

登

渡辺立どの

姉弟之事ハ存寄次第

「本文の字の大きいのは十才の息子が読みやすいようにしたのだと思われる」とキーン氏は言っている。

御祖母様以下は本文を書いた後、そで書（余白に本書と同筆で加き加えること）したもので、後書の姉弟のことも仲良く暮してと、同様である。（後述するように二人共、江戸に出て、藩主に仕えるようになる）

倅への遺書についてキーン氏は、謎めいていると①日付がぬけているが、おそらくそれは華山がまだ決めていなかったためと思われる。（予定が一日延びて十一日になった）

②自分の妻（其方母）を「不幸」と言っているのは、どういう意味なのか不明である。（父無き後は母となる自分の妻の面

二君に侍ふ
 月日
 渡宮主
 外務省に
 長子立への遺書

長子立への遺書

倒を見なければならぬ長男を「不幸」と言っているのだと思う)

③更に不可解なのは、立に二人の主君に仕えてはならないと戒めていることである。長男はまだ十才で最初の主君にも仕えていない。

④妙な追伸が書かれている。「姉弟の事はお前にまかせると」なぜこのようなよそよそしい書き方をする必要があつたのだろうか。

松崎謙堂は崋山自決を二週間後に知り、日記に「崋山は杞憂を以て罪に罹り、また杞憂を以て死す、悲しい哉」と記した。杞憂とは「心配しないでいいことを心配すること。杞の国で天がくずれ落ちないかと心配した中国の故事による」

三宅友信公は「先生自裁に迫る所以は、藩中奸邪の徒の為す所にして、先生名望ありて且政を執るの正明なるを以て、奸徒邪を逞しふする能はず、常に蹶仆(つまずく)あらんとを庶幾(望む)せり。故に先生突然拘執に遭ふの際、此輩陰かに喜色ありて恰雲霧を掃ふの思をなせり。然るに放免され国に帰り、幽蛰の際と雖ども有志の士は常に其廬を訪問し、經史を論じ事務を商義す。又近隣の邑人画を需むる者多く、門前往々外人の出入を絶たず。是に於て奸徒及頑愚の輩妬心を生じ、先生謹慎の中此の如く外人交通あるは公を畏れざるもの視なし、在府の奸党某に告ぐ(幕府の奸吏に通報した)」「(崋山先生略伝)より) 友信公は十一代藩主康友の庶子で、巢鴨の別邸に住み、崋山とは特に親交があつた。維

鎖国から二百年がたち、
島国ニッポンは、
外国の動きに敏感になっていった。
ずばけた知力で一躍、
一流の蘭学者になった小藩の家老。
出るくいは打たれた。



椿椿山「渡辺崋山像」 田原町
重要文化財 崋山の死後13年たっ
て、椿山は親友の姿を描いた

新後の明治十九年、八十一才で没した。

椿山は崋山の最も秀れた弟子で、師の没後三年目の弘化元年（一八四四）九月、田原を初めて訪れ、家族を見舞った。母はひと月違いで八月に亡くなっていた。崋山の死後十三年経った嘉永六年（一八五三）に描かれた崋山の肖像画は最高の出来で、田原の重要文化財となっている。

キーン氏は

「この画像は、見る者の心の中に、崋山の外観のみならず、崋山の個性について消すことの出来ない印象を作り出した」と言っている。

崋山—文忠院崋山伯登居士—は慶応四年（一八六八）四月十一日（九月八日明治と改元された）罪科赦免となり、次男諧^{かのう}によって「崋山先生渡辺昇之墓」と刻まれた墓碑が城宝寺の墓地に建立された。

（母）栄は、崋山の死後三年目の弘化元年（一八四四）八月、七十三才で没した。

（妻）たかは、田原藩士和田伝^{むすめ}の女で、明治四年（一八七一）六十五才で没した。母、妻共に崋山の眠る城宝寺に埋葬された。

（長男）立^たは江戸に出府して藩に出仕、十五人扶持、御使番次席、中小姓側用人となったが安政三年（一八五六）二十五才の若さで病没した。

（長女）可津^{かつ}は藩士松岡次郎（崋山、田原へ移送の時随行）に嫁したが離婚。上府し十五代藩主康保^{やすもと}（三宅友信の長子）

の世子^{やすなが}康寧の伝育係となり、明治十六年（一八八三）没。五十八才。

二人共、父母とは離れて渡辺家の菩提寺の江戸小石川の善雄寺に眠っている。

（次男）諧^{たう}。長男立没後、家督を相続。椿山に画を学び一家を成す。（椿山の姪）須摩と結婚。明治二十年（一八八九）病没。五十三才。須摩は崋山の遺墨保存に力を盡^{つく}し、明治三十年（一八九七）没。夫婦共城宝寺に葬らる。夫婦に実子が無かったので渡辺家の血統が絶えたが、養子を迎えて存続を計った。崋山は自決するとき、家族の困苦を心配したが、皆夫々自分の道を切り開いて、不忠不孝渡辺登の名を辱^{はづかし}めなかった。

キーン氏はその著の最後で「崋山が將來の世代を惹きつけるとしたら、それは何よりも一人の人間―数々の苦難にもかかわらず眞の愛国者、本物の画家としての人間性を備えた一人の人物としてではないだろうか」と。

〔完〕

（参考書）

- 『崋山渡辺登』 田原町教育委員会（昭48）
- 佐藤昌介編『日本思想大系（55）崋山他』（昭46）
- （中公文庫）『ドナルド・キーン自伝』（平成23）
- ドナルド・キーン著『渡辺崋山』新潮社（平成19）
- 石川淳著『渡辺崋山』三笠書房（昭16）

（中区）

中西美沙子

言葉を紡ぐということは、決して生半可なものではないでしょう。どんな文章であつても、自分が書いたものは自らによって試されるのだとも言えます。

今年の評論への応募は二編でした。評論という文芸のあり方と時代の変化からでしょうか、文章によつて論をなすという極めて内向的なものが失われてきているように思います。ブログやツイッターのような文章が文学の中に蔓延しているのを見ると、「書くことの困難さ」はすでに死滅しており、大量消費時代を映した「軽さとお涙ものの情緒」が世界を覆っているようにも感じるので。

華山とキーン氏

渡辺華山の自決からこの論は起こされています。ドナルド・キーン氏の「渡辺華山」を下敷きにした論でもあります。キーン氏の本を読むと「華山から見える日本人の姿」が見えてきます。日本人のもつ美質を掘り起しているようです。

筆者の論から窺えるのは「自死と人間」としての華山でした。

キーン氏に拘らず華山の「自死と家族」に絞つて論じた方

が、散漫にならずに、筆者の思いが通じたのではないかと考えました。

筆者が参考書としている石川淳の「渡辺華山」を遠い昔に読んだことがあります。彼の論調には、戦争によつて失われた廢墟のような日本に、屹然と立っている華山の姿がありました。石川は小説家ですが、華山の画家としてのあり方と自分とを重ねて論をなしているようでした。生きることの矜持を、華山から掬いとつていたと思えてなりません。

筆者の文章は鵲外の歴史小説のように無駄のない文体をもっています。石川淳が「時代の崩壊と再生」というモチーフで描いたように、筆者も「自死と人間」である華山があらわに現われる方法を取られたら、よりご自分の求めているものが明確になったのでは、と思えるのです。

私見ですが華山の絵の中では肖像画が優れており、鷹見泉石図が抜きん出ているようです。「華山の目」が鷹見という人物を、一瞬にして捉えた感がその絵にはあります。肖像画の人物を超えた普遍的な美が、その作品にはあるのです。華山の目と手がなした技ですが、彼の生き方の中にも鷹見泉石図のようなセンシブルなものがあり、それゆえ生き辛かったのではないのでしょうか。渥美半島の田原町に小説家杉浦民平がいました。場所柄か彼には「わたしの華山」など幾つかの華山論があります。彼はまた「レオナルド・ダ・ヴィンチの手記」を翻訳した人物でもありました。レオナルドと華山の絵は、時代と表現技法は違つていても、共通する感覚がある

と杉浦民平は見ていたのかもしれませんが。

筆者の崋山論の純度が増すことを期待しております。

入信とその動機

フロイスの「ヨーロッパ文化と日本文化」、神田千里の「一向一揆と戦国時代」「武功夜話」などの文献を使って、細川ガラシャと新島八重の入信の動機が論じられていました。人はなぜ神（宗教）に帰依するのかという重要なテーマが、残念ながら見えてきませんでした。その理由は文献の扱い方にあると感じます。どの文献も魅力のあるものですが、筆者の意図したことを適切に掬いあげているように思えませんでした。

マルクスが「宗教は麻薬だ」といったそうです。宗教には何時の時代も「人間の救済」と「権力への意志」という二律背反的なものが存在しています。織豊時代と幕末から維新の時代もそうでした。ガラシャと八重という女性とともに、それぞれの時代の中で懸命に「信」を見つめていました。その「信」への思いを中心に据えて論じる方が良いのではと考えます。文献の魅力に惹かれて、「信」の核がぶれてしまったようです。

二人の女性を使って論じたことの眼目は大いに買いたいと思います。私的な思いの残る文章は極力抑え、テーマの骨組みを明確にして論じると、筆者の思いはより鮮明に伝わる

のではないのでしょうか。
論を張るといふ営みへの敬意を改めて表したいと思いま
す。

随筆

〔市民文芸賞〕

も。べ。つ。と。

犬塚賢治郎

近江で就職・結婚した息子が週に一、二度飼ひ猫の近況をホームページに載せる。先日のは毛糸でつくったねずみとひよこを背中に乗つけたまま縁側で日向ぼっこをしていた。

名前はもべつとというこのネコが息子の命の恩人であることに気づく人は無いだろう。

旅行から帰った息子から「会社を三ヶ月ほど休む」と連絡がきたのは五年前。突然なことでもあり沈んだ声も気掛りで、JRと近江鉄道を乗り継いで会いに行ったが部屋に入れてくれない。指定された駅近くの居酒屋で待つ中、窓越しに歩いてきた姿を見て目を疑った。ひげは伸び、髪は伸び、雪が激しく降っているのに作務衣一枚、素足に縁の欠けた下駄

を突っつけた、いわば鬼気迫るという状態で、聞いた話は診断書の病名が『うつ状態』とのみ。帰りの駅で電車を待つ間、さらに空は暗く、湿った雪は止めどなく降りかかった。

悩む息子に仲間が子ネコを世話してくれた。動物を飼ったことがないのに大丈夫なのか心配をした。それまでも、雪が降る朝の灯火がボツンと点いた駅や、踏み切りの写真が載っていたりしてネットに飛び込み自殺の記事があると、すぐにそれはどこの踏切なのか、いつの事なのか調べた。本人自身はもっと切迫した感じがあつたようである。

途切れていたメールがぼつぼつ入ってきた。「暗い部屋に帰るとホイホイ飛びついてきて」などと頼られる嬉しさが記

されていた。京都大学の構内に捨てられていたので、いわば京大出だと昔のような軽口が添えてあつた。

再冬眠のようなこともあつたが「もべつとが何不自由なく暮らしていけるように頑張るよ」のことばに、死神の住む暗闇から抜け出しつつあることを実感した。

地元のジャズ祭に招かれて行ってきた長男が報らせてくれた。「彼女がいるつて。価値観が一緒なんだつて」妻は少し前から気が付いていたようである。首輪がこの頃きれいな花柄リボンになつてるといのである。

二年前の春に結婚して翌日にはもう二人して勤めに出かけた。その秋には中国成都に近いパンダ村にパンダのお世話ツアーで出かけた。しつかり者の嫁さん^{ともども}共々特別休暇を残してあつたのだ。

人見知りするネコの当番は動物ホテルでは無く、二人の共通の友人が引受けてくれた。

ネコは今日もうつらうつらと昼寝し、窓の外まで遊びにきたかまきりと戯れている。二人のお世話係を従えて近江の小春日和のひとつきが過ぎてゆく。(西区)

「市民文芸賞」

免許証返納

西尾 わさ

毎年七月十二日は、お寺のお施餓鬼の日である。午後二時から始まるので早めに昼食を済ませ、車を運転して環状線を南へ走った。スーパーマーケットまでお墓に供えるお花を買いに行くためだ。

しかしうっかりしていて、いつも左折する交差点を通り過ぎてしまった。まあいいか。同じ方向だから大丈夫。そう思って次の交差点を左折し、さらにもう一度左折していつもの道を探しているうちに、すっかり方向がわからなくなってしまうた。

田舎の道で人家はない。途方に暮れていると、遠くから軽自動車が走って来たので、車を降りて待つことにした。近くに来たので頭を下げると、軽自動車はゆっくり停まってくれた。運転席には四十

歳代らしき美しい女性。「S店へ行きたいのですが、この角を直進でしょうか？左折でしょうか？」と尋ねると、「私の後についていらっしゃい」と言ってくれた。

S店まで誘導してもらい、駐車場に並んで車を停めた。私は急いで車を降り「ご親切にありがとうございます」とお礼を言うと、「お母さんはいま何歳ですか？」と聞く。私が「八十二歳です」と答えると、その女性は「あのね、私の姑も車を運転していました、危ないので七十二歳の時に運転をやめてもらいました。お母さんもやめたほうがいいですよ」と言った。

ちょっと話し方が違うので「失礼ですがご実家はどちらですか」と聞くと、「私は中国から浜松へお嫁に来ました」と言った。そして「とにかくお母さん、余計なことかもしれませんが車の運転は危ないです」と心配顔だ。私が「今年の九月にやめるつもりなのですが、なかなか決心がつかなくて」と言うと、「きつとやめるのですよ」と私の手を優しく握

り、車に乗って走っていった。

買い物の用事もないのに、私のためにS店まで案内し、わざわざ車から降りてお姑さんの話をしてくれたのだ。そのご親切に感謝しながら遠くへ走り去る車を見送った。

思えば私が免許証を取得したのは五十三歳の時だった。少し郊外に家を引っ越したので何かと不便になり、車の必要性を感じたが、夫も私も運転免許を持っていなかった。いままら自動車学校に通いたくないという夫に代わり、私が免許を取るようになったのである。

二歳上の姉が亡くなり、喪があげた翌日から自動車学校に通い始めた。毎朝五時に起床し、一時間ほど学科の勉強をして朝食。義母と夫の昼食の用意をして、学校の送迎バスに乗る。私の指定席は運転席の斜め後ろだ。運転手さんがどのようになブレーキやクラッチを踏み、どのギアに変えるのか。それを見て覚えるためだ。とても参考になった。

教室は若い男女でいっぱい。五十三歳の私が最年長だ。学科は九十点以上を三

回収れば合格となるが、取れない人が多く、私もなかなか九十点に達しなかった。十日ほど経ってやっと九十五点を取ると、先生が「西尾さん九十五点」と大きな声で言ってくれた。教室内に歓声と拍手が沸いた。

実技は悪戦苦闘。坂道発進、縦列駐車、車庫入れなどは何回やってもうまくいかず、先生に叱られ通しで涙が出そうだった。しかしS字走行だけは脱輪もなく、先生に褒められたことは今も忘れられない。四カ月後に検定試験を受けた後、合格者掲示板に自分の受験番号を見つけた時は本当に嬉しかった。

やがて免許証が交付され、若葉マークを付けて運転開始。まず最初に姉の家へ行くことにした。高町の交差点で右折しようとウインカーを出し信号待ちをしていたら、前の車の男性が右手を出して「ダメダメ」の合図。慌てて上を見ると右折禁止の表示があった。冷や汗をかきながら前の車に「ありがとうございます」と頭を下げた。

そうした失敗がいくつもあり、多くの

皆様にお世話になりながら、少しずつ運転に慣れていった。バイクの免許を持っている夫は助手席に座って、やれ一時停止だ、やれ進入禁止だ、とうるさいくらいに教えてくれた。

やがて運転に自信がつくと、買い物に楽になり、子供や孫たちが帰省すれば駅まで迎えに行った。博多から友人たちが遊びに来れば浜松中をドライブして楽しい時間を過ごし、義母が四ヶ月間入院した時は毎日車で病院に通った。

そうして八十二歳まで、二十九年間一度も事故を起こすことなく安全運転を続けてきた。しかしテレビや新聞で「高齢者が車を運転して重大事故!」というニュースを見るたびに不安になっていた。そろそろ危ないか。もう運転をやめようか。

とはいえ病院や親戚、俳句の会などへ運転して行くたびに、車の便利さを改めて実感し、あと一ヶ月、あと二ヶ月と先延ばししてきた。しかもせっかく苦労して取った免許証。返してしまうなんて勿体ないという気持ちもある。やめようか

……。やっぱりもう少しだけ運転しようか……。

そんな矢先の、中国からお嫁に来たという女性のご親切である。外国人が浜松に増えたと聞いていたが、私の周りにはいなかった。それが、車でたまたま道に迷って、たまたま通りかかった方が外国人だった。しかも私と同じような年齢のお姑さんがいて、車の運転をやめてもらったという。ああこれも何かのご縁かお導きなのかもしれない。そう思い、それから一ヶ月後、私はキツパリと免許証を返納したのである。

(西区)

「市民文芸賞」

花も嵐も

坂本多恵

夜、十二時を回ると、廊下から足音が聞こえてきます。Kさんが、スー、スーと足を引き摺りながら、トイレへ向かっているところです。

八十九歳のKさんは、歩行不安定のため、歩行器を使って歩いて行きます。「一人で行けますわあ」と、柔らかな四国弁で笑顔を見せてくれる魅力的な女性です。

事務所に居て彼女の足音を聞くと、それと同時に息をひそめ、その動きを見守ります。それは急に姿を見せると集中が途切れ、途端バランスを崩して転びそうになるからです。

そこで、まるで張り込みのように、音を立てず陰から伺い、無事にベッドに入るまで見届けました。

今度は扉がガタガタする音。Tさんが

部屋から出て来るのでしよう。あらかじめ、トイレの扉を開けておきました。

「Tさん、トイレの扉は開いていますよ」と声かけして誘導してあげます。弱視で視野も狭いTさんは、距離感がなく扉にぶつかってしまう事がよくあります。

私の声にはつとしたように、うつ向き加減の顔を上げ、「あつ、ありがとう」と応えて下さるのです。

夜の廊下に響く音は、入所者一人一人の個性がよく現われています。姿が見えなくても誰が起きてきたかが分かるようになりました。

認知症のグループホームに勤めて二年が経ちました。「大変でしょう？」と聞かれる時、私は、「楽しいですよ」と答えます。この仕事をする前は幼稚園で働いていました。同じように、「大変でしょうね」と声を掛けられました。それに對して、「ええ、可愛いですが大変です」と返していたように思います。

しかし、今の仕事に就いてからは、大変と思うより、高齢の方々と関わる楽し

さを日々味わっているのです。

老いと向き合う方々。勿論、認知症の自覚はありません。しかし、何か言葉にできない不安を持って日々を送っている方も少なくありません。

Mさんが、杖をコツコツさせながら陰しい表情でやって来ました。

「夜遅く申し訳ありませんが、ここはどこですか」と尋ねます。途中で目を覚ましたMさんは、今居るところが理解できず混乱しているようです。「うちじゃないし、どこだ？ どこだ？」と、不安を募らせている様子が伝わってきました。

私の担当する方々は、少しサポートしただけであれば身の回りの事は自分でできる方。ただ、感情面では抑えがきかなくなっています。怒り、こだわり、疑い、落ち込みと、ストリートにその感情をぶつけてくるのです。特に家族ならたまりません。

「あんた、早く娘に電話してよ。親をこんな所に入れて」と、さきほどのMさんが今度は仁王立ちして怒っています。

「Mさん、血圧あがつちゃうよ」

「そんなのどうでも良いよ。わたしや家に帰りたいんだ」と、夜中の廊下到大声が響きました。Mさんをベンチに座らせ、その怒りの訴えに耳を傾けます。少しずつ気持の切り替えができるような声かけを考えながら。

ようやく娘時代や子育ての頃に話題が移っていくと、顔つきも和らぎ、笑顔を見せてくれるのです。

「花も嵐も踏みこえて、行くが男の……」と薄暗い廊下を歌いながら歩いていく、Mさんの後ろ姿を見送りました。

私はこのグループホームに勤めてから間もなく、深い喪失の悲しみを経験しました。職場に復帰した時、私の目に入所者の姿が、とても眩しく思えました。懸命に生きている姿に安らぎを覚えたのです。

老いのマイナス面が強調される社会。けれども、年老いて一日一日を愛しむように生きている方には、目に見えない人を励ますエネルギーが溢れているように思います。形に現われた生産者ではなく

なっても、その存在は光っています。そう感じるのは、生きる事ができなかった息子の分を、代わって生きてくれているような気がするからでしょうか。

九月の終り、近くの花屋でミニひまわりを見つけました。息子を天に送ってから、よく夏になると墓前に飾っていた花です。力強く太陽に向かって咲く姿に心ひかれたからです。季節のズレた花を見て嬉しくなり、少し多めに買いました。

誰もいない墓地の中、墓石に彫られた文字を、ボーと眺めていました。

「私は道であり、真理であり、命である」飾ったひまわりに、真夏のような強い日差しが当たっています。一層、力強く咲いているように見えました。

なぜか、「花も嵐も踏み越えて」と、Mさんの口ずさんでいた歌のフレーズが、浮かんできたのです。思わず、いつもの涙ではなくフッと笑いが出ていました。

(中区)

「入選」

あんときの
おばあちゃん

石橋 朝子

昭和六十二年に生まれた孫が、幼稚園の年中組になったある日、園長さんから電話があった。

「昔の遊びについて、子供たちに教えてくださいませんか……。何でも結構です」
幼稚園では、「おじいちゃん、おばあちゃんの日」があつて、そのときには、どなたかをお願いしている。

「今回は麻生さんの、おばあちゃんについてことになりました。勝手ですがぜひ……」

依頼されて戸惑う私をよそに、麻生の喜びはひとしおで、ぴよんぴよんはねていた。

さあ何を主体にしようか、屋内と外で

遊ぶことの両方欲しいだろうと考えた。所要時間は一時間以内で、子どもたちの様子を見て決めて下されば、という。幼稚園など知らなかった私は、自由気ままに遊びを作りながら過ごしたので、紹介する物を絞ることは難しかった。一緒に遊んでみなければその楽しさは分からないだろうから、せいぜい二つか三つぐらいにしようと思った。

まずはあやとりにして、あやとりひもを何本用意したらいいかと考える。外で遊ぶのは、まりつきにしよう。ゴムまり、これも幼稚園には置いてないだろう。大きなバレーボールぐらいの物でしたらあります、との返事であつた。やるからにはみんなで楽しく、だれもが参加できなくては駄目だと思ふから、準備が大変であつたがそれなりに楽しい。久し振りで遠い日に帰り、昔の遊びを思い出し、私は一足飛びにあの日のガキ大将になつていた。あやとりひもを三十本、ゴムまりを二十数個用意する。

平成三年の五月、私は五十六歳であつた。

自転車の前後に積んだ荷物までが石ころに弾み、晴天の田の道をハミングしながら青城幼稚園に着いた。

「マオのおばあちゃん……。いらしゃい」

「まつたよ。はやくあそび、あそび」
大勢に取り囲まれて、早、自転車の荷物をほどこにかかる子、まるでお祭り騒ぎであつた。

先生の言葉でまず教室へ向かう。先生は田辺先生という。みんなに荷物を取られ、私は手ぶらで先生にこれからの予定を告げる。いくら自由だと言われても、それなりの準備もあるだろうから。

まずあやとりから始めることにした。
一人一本ずつ行きたるるように配った。
青だ、黄色だとあやとりひもをてんでに振って喜ぶ。初めて見る子もいるみたいで、輪に結んでおいたものを首にかけてはしゃぐ。

予行練習をしておいた麻生に手伝ってもらい、両手の内側から親指と小指にひもをかけ、手のひらに通ったひもを互いの中指ですつてもらう。それからびん

と張ったひもの小指と親指のひもをはずして、そつと外側に引く。鼻の頭に汗をかきながら、前に立つ田辺先生、私と麻生に習って上手にできた。

「ホラ、いい？ ゆっくり引いて。おうち、まえかけ、でんきがさえたあ」

心配することなくどの子も、お家、前掛け電気が消えたあ……。

思いがけない喜び方で時間が早く過ぎた。教室での遊びを打ちきり、外で遊ぶことにする。

ゴムまりをあるだけ分け合い、私がまずまりをついて見せた。あまり高く打ちあげないで、と手本を示すと、こどもたちもじきにコツを覚えて、キャッキャツとにぎやかで、田辺先生までが、初めてよ、と言う。

様になってきた所で手まり唄を教えてみた。単純な言葉が受けて、すぐにみんな覚えてしまい、まりを上手につけない子まで大きな声で歌っている。

いちもんめのいんすけさん
いもやのおばさんいもちようだい
にもんめのにんすけさん

にんじんやのおばさんにんじんち
ようだい

こうして十文目まで歌い、切りをつけたのだが、子供たちはなかなか手放してくれなかった。特に手まり唄の中、「ちようだい」で、まりを後ろにくぐらせるのが楽しいらしい。

こんどもマオのおばあちゃんにしてと、田辺先生を困らせていた。

こんな思い出を作らせてもらって十年以上も過ぎたであろうある日、麻生の成人式の日であった。駅前のエスカレーターで、

「あれ！ マオ？」

「ゆうこ？」

「ああ。そうだ……あんときのおばあちゃん？」

(東区)

「入選」

鳥の街

三原 遥子

スズメよりちよつと大きいな思っていたが、ムクドリだそうである。鳥の群れに気がついたのは、七月の末で、日に日に数が増えていった。駅から北に真つすぐ延びる公園通りのメタセコイアの並木をぬぐらにしていって、夕暮れ時には何処から戻ってくるのか、何時の間にか大きな群れになっている。

思わず、おお、と声をあげてしまいそうな鳥の数である。群れの中の少数が、気まぐれにというふうに向かい側の樹に移動すると、どの鳥もいっせいに後を追つて飛ぶのである。群れはいびつな楕円で流れていくかと思うと、ふと端の方から崩れて千切れ雲の形になり別の方向に流れていく。十メートルはゆうに越えるだろうと思われる高木の梢近くを、鳥た

ちは我が物顔で戯れている。

せわしなく流れ膨らんでいく鳥の群れが、ピヨピヨともキュルキュルともチュツチュツとも聞こえる、複雑にからまりあう鳴き声で辺りの空気をざわめかせながら、一キロほどの並木道をすつかりおつてしまう。

夕焼けの空に、黒っぽい鳥の群れが何処までも連なつて流れ飛ぶ様は、不気味な感じで私の心を追いつめる。何だか異界に迷い込んだ気分になつて、私は立ちすくんでしまった。

遠州灘にほど近いところに広がっている、人口八十万の都市である。

この地は私の郷里で、高校卒業までここで暮らした。その後、東京の大学を出て都立高校の図書室に定年まで勤めた。

結婚はしなかったが仕事は十分にやりがいがあり、楽しかった。退職後の十五年ほど多少のアルバイトをしながら、随筆を書いたり旅行をしたりして、東京で平穏な暮らしを続けた。

それが、三年前に九十四歳で母が死ん

でから、ここに戻つて来ようかなと思うようになった。あまり幸せそうではなかった母が一生懸命に生きたところに身を置いて、母の気持ちを考えてみようと思つたのだが、本当は私自身が年を取つて東京での独り暮らしに疲れ、戻りたくなつたのかもしれない。ここには、弟と妹がそれぞれ家庭を持つて暮らしている。

公園通りのはずれで交差する大通りを渡ると、低層の民家が並ぶ区域になる。

この辺りではちよつと高さで目立つ十六階建てのマンションの十四階、一四〇二号室を借りた。七十八戸が入居している。駅から私が歩いて二十分はかかるが、下町といわれる地域である。

引越しの挨拶にタオル一本ずつの包みを持って、昼間だけ勤める管理人のところ、同じ階の四軒、真下の一三〇二号室、他にマンションの管理組合理事長のところに行った。

最後に行った理事長のところでは、いきなり訊かれた。

「今、いくつですか」

予想していなかった質問なので、どきまぎしてさばを読む余裕がなかった。

「七十五歳ですが」

「このマンションでは、七十九歳まで役員をしてもらいます。その後は辞退してもいいですよ。しかし、一四〇二号室ならあと五、六年は回つてこないなあ」

深く日焼けした顔で、身体も頑丈そうな人だ。物言いは愛想がいいとはいいがたく、私は日常生活で注意することを訊こうと思つたのだが、気後れがしてことばが出なかった。

間も置かずに、この人は私が答えたくないことをもう一つ訊いた。

「今、独り暮らしですか」

一四〇二号室の入居者名簿を管理組合あてに送つてある。一人入居であることはそれを見ればわかつてしまうのだが、私は曖昧にしたかったので声が低くなつた。

「ええ、まあ……」

「僕、消防の方もやっているから、何かあったら助けますよ。言つてください」
そう言われてようやく息をついた。

「どうぞ、よろしく」

もう一度頭を下げてから辞した。

それにしても、消防の人が助けると言うのは火事るときか病気で倒れたときかだろう。自分にそういう「何か」が起こることは予想できても、無意識に考えることを後回しにしているので、急に人から言われるとむやみに焦ってしまう。気が滅入ったが、あの人は役目として訊いただけでむしろ親切な人なのだろう、と思ひ直した。それに今日の私はすぐにも倒れそうな老人に見えたのかもしれない。引越して疲れたのだ、仕方がないと納得し、肩を落として一四〇二号室に帰って来た。

ムクドリの子は十二月に入っても、少しだが残っていた。どの鳥も群れの中で無心に戯れて楽しそうだった。来年は、あの鳥たちが朝どの方向に飛んで行くのかを確かめようと考えている。早起きしなければならない。

鳥たちがすべて去って年が暮れようとしていた師走二十五日に、妹の長女が出

産をした。二千八百グラムの女児である。知らせがあつて、私は祝い金を包み病院を訪ねた。

妹夫婦と姪の夫が面会室で待っていた。細長いテーブルが四つ、それにパイプ椅子が幾つか配されているこの部屋で、見舞客たちは新生児とその母親に会うのである。すでに四つのグループが赤子を囲んでいた。

ほどなく姪がベビーベッドを押して来た。三十歳で初めてのお産をした姪は、まだ血色の戻っていない白い顔に、ゆったりとした笑みを浮かべて言った。

「赤ちゃんはね、お母さんのお腹の中で四回転しながら出口に向かって下りてくるのよ。骨盤を通るときには自分で頭を細くしながら出てくるんだって。本当にえらいわねえ」

ただし、姪の子は出口がわからなかったらしく、かなりの難産だったという。

名前は、冬に生まれたから「冬」と付けるそうだ。「ふゆ」には「ふえる」という意味もあつて、冬は生命力を殖やして蓄える時期なのです、と赤子の父親が

力を込めて言った。この人は私立高校の国語の教師である。

「おばちゃん、抱っこしてみて」

姪は私に赤子を抱かせてくれた。思いがけなく重いものを受け取った、という感じだった。ぎこちない抱き方だったのだろうか、生まれて三日目の赤子は、伸びを繰り返して体をくねらせよく動いた。赤い顔にさらに赤みがさした。それから、ベそをかきそうな顔になったかと思うと、声をあげて泣き出した。顔の半分くらいかと思われるほどに大きく口をあけ、全身の力を振り絞るようにして泣いている。私はたいそう慌てた。

「おお、よしよし」

「お腹がすきましたか」

「おむつかもしれない」

「いい子、いい子」

周りの大人たちが私の腕の中をいっせいに覗き込んで、口々に赤子に話しかけた。

(中区)

「入選」

お疲れさま

久野悦郎

定年退職後、その余暇を利用して、私は趣味の写真と山登りにかまけた暮らしを続けてきた。その「つけ」がきた。妻から次の言葉をかけられた。「あなた、料理が作れるように習ったら。今後、きつと役立つよ」

それを契機に、私は料理の包丁を手にするようになったのである。

今にして思えば、妻の、私が一人暮らしになった時を案じての気づかいに感謝している日々である。

そのお陰で妻が外出して留守でも、外食はしないで、自分ひとり分の賄い口は作ることができるようになっていた。

私は、「男子厨房に入らず」の言葉は、最早死語であることを知っていた。

男子の料理教室は中区西伊場にあった。

私の住む地から遠いので、まず最寄のバス停からバスに乗り駅前のバスターミナルに出て、バス通学することにした。

新年度、四月の爽やかな風の吹く日、バスに乗って教室のあるバス停を目指していた。

最初の日の料理は「オムライス」だった。

教室には学校と同様に黒板があった。その黒板に、今日の料理の献立、つまりレシピが白いチョークで書かれていた。調味料は目立つように赤いチョークで書かれていて、いかにも料理教室らしい雰囲気があった。オムライスを口にして帰宅する。

私の「ただいま」の声に、妻から「お帰り、今日はどうだった」と、感想を聞かれた。

私は「どうにかできたよ」と返事する。

本当は調理するのに「四苦八苦」し、二人の仲間に迷惑をかけたことを、妻には見せまいとする自分がいた。その時は、この先料理を作る自信がなかったからだ。

料理教室通いも二年目に入ると、当初戸惑っていた調理の仕方にも馴れてきた。

まさに「習うより慣れよ」である。

いつしか料理を作るのが少し楽しくなってきた。持ち帰ったレシピで復習すること心がけた。それにより「肉じゃが」や「チャーハン」などを作れるようになった。今後は「試行錯誤」して、料理の品数を多くしたいと思うようになった。

教室では、学校同様に三人一組の席替えが三ヶ月毎にあった。

そこで何人もの人との出会いがあった。

多様な仕事を経験した人と話合う機会があった。その時にその人達のもの考え方聞くことで、これからの暮らしの参考になるヒントを手にすることができた。

帰り支度をしている生徒たちに、先生が「お疲れさま」と声をかけてくれたので、私たちは「ありがとうございます」と言って教室を後にした。私はナイスバスを手にしてバスの人となった。

教室はいつも和やかである。これは先生のお人柄のせいだと私は思っている。

小柄な先生は、いつも優しい眼差しで私たちを見守っている。そのことが、生徒たちから慕われている所以である。

教室では、調理する前に先生が料理の材

料の切り方のお手本を見せてから、先生の「では始めます」の声を合図にして、生徒たちが調理にかかることにしていた。

調味料については、特にさじ加減や手順を間違えるとお叱りの言葉がしばしばあった。そこで料理の味付けの基本である調味料を使う順番の、砂糖のサで始まる「サシスセソ」を教えられたのである。

登下校時のバスに乗っていると多くのバスと出会う。その時、ふと、お互いのバスの運転手が、白い手袋をした右手を少し上げて挨拶しているのに気づいた。「何だろう、理由は後で確かめよう」と思った。

席替で親しくなった先輩のNさんが、「先生は一週間に十課目を教えているよ。土曜日も授業があるからお休みは日曜日だけだよ。よく身体がもつね」と言われた。

私は、先生はさぞかしくたびれているに違いないとつくづく思った。

先生の、それをおくびにも出さず平然としている姿を見るにつけ、女性の強いところを見る思いがした。

先生は江戸っ子のような気質で、お洒落心を合わせ持っていてお茶目である。

ある時、席替えを「あみだくじ」できめようと言ったので、教室はざわめいた。

調理用のガスコンロは五ヶ所にあった。

先生がいる黒板の前のガスコンロの席は、誰もが敬遠している。緊張して調理を失敗することを恐れたからで、私も同じ気持ちだった。

ある帰り、バスの運転手さんが女性だった。降車時に、私は「白い手袋をした右手の仕草はなんですか」と尋ねてみた。彼女から「お疲れさま」ではないでしょうか、と返事があった。

職業柄、終日安全運転することに徹する運転手たちにとって、一日の労を労う言葉として相應しいと私は思った。その仕草は屹度「一日安全運転で行こう」と言うメッセージだと確信した。

教室で先生が話された忘れられない教訓めいた言葉がある。それは「お掃除上手は、お料理上手」である。料理教師としての調理場は、即ち仕事場である。その場所が常に清潔であることは、料理人として当然のあるべき姿なのだと私は思う。私たちは、いつも身奇麗にして、何事も禺かにしない

暮らしの大切さを教えられた思いがした。五年間の料理教室通いの最終日。

帰りのバスの中で、様々な想いが私の胸を去来する。「生きていることは食べることなり」で通い始めた料理教室で、どれだけのことを習得したかと自問自答してみる。

折りしも車窓から見ると、淡いピンク色のコスモスの花が風に揺れている。秋の深まりを感じるとともに一抹の寂しさが胸をよぎる。

やがて、片田舎のバス停「東之越^{とうのこし}」で降りる。家路を辿りながら、何故か教室の先生と、バスの運転手の「お疲れさま」の声の頭の中でオーバーラップしていた。

否、愛すべき先生こそ「お疲れさまでした」と、心の中で私はひとり呟いていた。

(北区)

「入選」

念書

中津川久子

今から六年前のことである。母は特養老人ホームに入って四年目を迎えていた。

入所当時は意識も口も達者で、家を離れることをひどく嫌ったものだ。そんな母も、間もなく軽い脳梗塞を起こし、誤嚥性肺炎や物が飲み込めない状態が続くようになった。

容体の悪化に伴い、ホームから念書作成の件で呼び出される。私たちきょうだい五人は指示どおり、各自、印鑑を持参して出向いたのだった。

二階の小会議室におされた。早春のやわらかい日差しが、部屋の此処彼処でじゃれ合っている。中庭の硬い薔が、一瞬緩んだように見えたのは私の錯覚であろうか。

定刻の午後二時になった。ホーム側からは、代表者、ケアマネージャー、母の担当のヘルパーさんが顔を揃えた。職員に促されて、私たちも四角に配置された席につく。前から長兄、長女と順に座った。末っ子の私は末席に浅くかけた。

各氏のあいさつが終わると、ケアマネージャーから詳しい説明が始まった。

「では確認いたします、うちは病院とちがつて医療は出来ません。但し、週に二回ほどドクターが巡回してきます」

短髪で化粧つ気のない五十がらみの女マネージャーは、よく透る声できばきと切り出した。こうした場面を幾度も踏んで来られただろうと、安易に察しがつく。

「あつ、はい」

私たちは一言たりとも聞き逃すまいと、身をのり出していくなずいた。

「夜は駐在していませんので、何かのときには朝まで待っていたくことになりませんが、よろしいですね」

とたん、返事に詰まる。迫りくる容体に朝まで待てというのか。

「いえね、もちろん私もはドクターの指示を仰ぎながらですがね」

いち早く我々の顔色を読んで、口元をゆるめた。微妙な問題だけに、慎重にことばを選んでるのが分かる。

重い空気の中、まだあけなさが残る顔を上気させながら、ヘルパーさんが口をはさんだ。

「おばあちゃんには出来る限りのことをして上げたいと思います。三月のお誕生日には、ご家族のご希望があれば喜んでお手伝いさせていただきます」

「はあ」

「それから、桜を見せて上げたいとか、食事会を開きたいとか、なんなりと」

また、しばらく静まり返った。

「最後に、万が一のときでも救急車を呼ばなくても良い、ということでご合意していただけますね」

ひとときわ高くマネージャーの声が響いた。

「はい、すべて自然体でお任せします。なっ、みんないいんだよな」

私よりひと回り上の長兄は、きょうだ

私たちの顔をのぞき込むようにして代弁した。

自然体。ことばは穏かだが、果してこれで良いのだろうか。救急車を呼ばないということは見捨てるということになるのでは。たとえ九十九パーセント助からない命だとしてもだ。子どもとしての務めが、こんな薄っぺらなもので良いのか。

「いいだぞ、意見があれば言えよ」

長兄がしびれを切らして語気を強めた。絶叫したくも出来ないもどかしさに口びるを噛む。

「ごめんなさいねえ、まだご存命のうちからこんな話をして。ここで約束したからといって、そのとき救急車を呼べないわけじゃないですからね」

先生になだめられた園児のように、一層感情が膨らむ。私の鳴咽にふたりの姉もつられる。

三時を過ぎた。暖冬とはいえ、この時間ともなると足元から冷気が這い上がってくる。

「ではみなさん、サインと印をお願いします」

マネージャーは、しかと仕事の顔にもどってビシヤリと言った。彼女も、感情と業務の狭間にあって苦しい線引きにちがいない。

部屋は少しの間ざわざわとした。この時間で退出する職員や、私たちの資料を畳む音などが入り交る。片すみのヒーターが賛同をあおるかのように唸り始めた。

人さし指に

朱肉がかすかに染まった

とおい昔

母さんが塗ってくれた赤チンのよう

だね

ふーふー息かけてくれて

真っ赤なお花畑がどんどん広がったね

いま

朱色に染まった指をふーふーして

なんども詫びた

(南区)

「入選」

本音

石山 武

平成二十五年七月六日の朝七時前、車で帰る途中で信号待ちをしていると。

「お父さん、見てみな。あそこに居るの亀じゃないの?」

妻が指差した右折方向に「ヨタヨタ」と歩いて行く亀の姿にビックリし、早い時間のせいか車は私たちだけ。右折をして車を脇に止め、亀の居る道路中央に行く。

「こんなところを歩いてたじゃあー車に轢かれちゃうじゃん」

「そうだよな、まだ車が少ないで良かったけど、もっと遅い時間ならお前はとっくにお陀仏様になっていたぞ」

老夫婦の心配もどこ吹く風で歩く亀君? に話しかけながら私が持ち上げたと同時に、甲羅の中へ部品? が一気に

納まつてしまふ。

亀を片手に改めて周囲を見ると、ガードレールの向こう側に薄汚れた小さな川が流れているのが目に入った。

「道路からこんなに低い川から、おまけに急な土手を上って来たんだな」

「そうだよな。だけど道路まではガンコ高いし、よく登ってこれたと思うよ」

「俺もさつきからそう思っていた。川からの位の位あるかな、五メートルはあるかな？」

亀を片手にウロウロしていると、

「お父さん、そう言やあ、五月にも亀を助けたつきねー」

それは二カ月ほど前の五月二十五日の昼下がり、浜松市内の公園を散歩中のこと、このときも妻が、

「お父さん、あれて亀じゃないの？
その石みたいに見えるの亀ズラッ」

「ありやー違うぞ、あんなに石みたいな亀なんていないぞ。それに水のある所からガンコ離れてるし、こんな所まで来れるわけが無い」

そこは貯水池から人間が歩いてもかな

りの距離。しかも急な坂道の端ではホカリをかぶった石としか見えない。

私は石と思いつつ近づいてみると、何んとそれはホコリまみれの大きな亀。

長いこと同じ場所に居たせいか、亀はカリカリに乾いて微動だにしない。

「本当だ！ 亀だよ、よくわかったなー、これを亀だと思ふ人はまず居ないぞ」

「もしかして死んでやせんらねえ？」

私もそれを心配しながらそつと持ち上げたと同時に、「ニユー」と体の部品が現れておもわず落とすところだった。

亀がいた跡はほんの僅かに湿っている。

「もうちょつとで乾いちゃうところじゃないか、お前は本当に運が良かったな」

迷惑そうな表情の亀に私は話かける。亀を手にとると、消えかけていたヒューマニズムに火がついた。何とか助けてやらねばの思いがふつふつと湧いてくる。

「それでもよくこんな場所まで来たよな」

「誰かが持つて来て捨てたんじゃない、だって人間が歩いたって何分もかかる

よ」

二人で勝手に想像を巡しながら貯水池まで行くが、池に下りるまで草がからむやら、足が滑るやらの大変な思いをしたあげく、やつと亀を池に戻した。

久しぶりに戻ったせいだろう、暫くは沈んだままで動こうとしないのが気になって「ボン」と叩いてやると、亀は勢いよく泳ぎ出して岸を離れた。

暫く行くと浮き上がって周囲をキョロ、キョロしている姿に、

「助けてくれてありがとう、ありがとう」と言ってるのではと勝手に想像を巡らした。

此の日の日記にはこう書いてある。

都田公園を散歩中に女房が亀を見つけた。水辺からはずいぶん離れた場所まで乾ききった亀の姿にビックリだよ。

「どうするの？」

「いいよ俺が水辺まで連れて行くから」

二人で貯水池まで行き、その後は一

人で急坂を草をかきわけて降りる。水に入れたが動かないので叩いたら勢いよく水中を泳いで行った。その姿に、俺は平成の浦島太郎を味わった好日だった。

その公園から一ヵ月も過ぎないうちに、再び亀との出会いに、

「お父さん、二度も亀を助けたんだからさ、きっと何か良いことがあるかも知れんよ。宝クジが当るかね？」

二回目のヒューマニスト気分浸っている私は、妻の戯れ言を無視して川に向かう。

ガードレールは越したが、川までは五メートルはありそうなそれも急傾斜地。加えて夏草がうっそうとして道筋もわからない。

「お父さん、あつちのほうが草が少なくて降りて行きやすいじゃない？」

ガードレールを背にした妻の指示が次から次と飛んでくる。

亀を片手に持って、妻の「あつち、こち」の指示の下、ヨタヨタと降りて行

く枯尾花ロボット？ はどう見ても珍風景。

若い頃、二人は二輪車、なんて歌が。

今を盛りの夏草とはあまりに対照的な「二輪車」？ は奇異に映るのだろう、赤信号で停車した車からの視線がやけに気になる。

冷めきった「ジロジロ」に耐えながら水辺に来たときには、もう汗ビッシヨリになる。

そっと亀を放してやるが、公園の亀君とは大違いで、汚れた川に入ると同時に勢いよく泳ぎ出して「あつ」と言うまに視界から消えた。亀の見えなくなった川面に向って、

「君で二回も助けたんだからさー竜宮城、いやサマージャンボが当ると良いだがな、一等で無くても良いからさ、頼むでなー」

平成の「浦島太郎」ならぬ欲深い枯尾花からは、ヒューマンな気持は吹き飛んで、生れついでの人格である「さもしい男」の本音がポロポロ。これでは姥桜の宝クジ発言を無視する資格など皆無だ。

亀の恩返しを期待していたサマージャンボの当選番号が、八月十四日付の朝刊に発表された。

「さもしい男」のはかない願いはオール外れとなり、真夏の夢と消え失せた。

朝刊の当選番号を睨みつけながら、
「何んだー亀の野郎、俺にさんざん苦労をさせやがって恩返しはこのザマかよー」

たった三十枚の宝クジ券を手に、公園の池の水面と汚れた川の流れとが胸に交差した。

(東区)

「入選」

農業でよかった

森上不二男

平成元年の三月頃、私は目前に迫った定年後の身のふり方について、考え倦ねていた。別の勤め先に再就職するか、少しばかりの畑仕事をするかの選択であった。いつの間にか新年度になってしまった。私は腕組みをして自宅前の畑を眺めながら、最終思考をした揚句、「よし、今日から畑仕事だ」と決断した。以来二十五年間、私は単身で畑仕事に専念してきた。一人黙々と仕事をしていると、「精が出るのう、ぼちぼちやんなさいよ」と近所の古老、「やあ晴耕雨読かね、いいねえ」と嘗ての同僚。そんな然り気ない語りかけを頂戴すると、とても初々しく聞かれるようだった。

私の畑仕事には休日や労働時間等の規則はない。日の出前から日没まで、鳥

の起き伏しと同類項であった。生来ひ弱だった私の定年後は、毎日燦々たる日光に浴して、終日黒土の上での野菜いじりで、日に日に楽しみが増し、体調も少しずつ良くなって来たかなと実感できるようになった。それこそお天道様のお蔭だと思いながら、「この畑は僕の健康広場だよ」と、誰彼なく吹聴していた。

正直言つて定年までの私は、人並みに頭痛腹痛、足腰等の不具合を訴えることが多かった。特に四十歳代頃からは突発的な心臓発作に襲われることが多くなり、家内は、「爆弾を抱えているようだね」と心配してくれた。それが定年を境に発作はなくなってきた。こんな次第で私は野菜作りに一層精出すようになってきた。以下にこれまでの懐旧談の幾つかを順不同のまま記述する。

九月末頃播いた人参がなかなか発芽しないので、そつと掘り返して見たところ、クモの糸より細い灰白色の若芽が確認された。「よし、OKだ」と、そつと又土をかけておいた。十月末現在もう

十五センチ位に伸びて、秋風に揺らさされているのが何とも愛らしい。わが子同様の人参である。つい「猿蟹合戦」での「早く芽を出せ柿の種」と水かけをする子蟹の姿とその心情に思いを馳せてしまう。

私は野菜作りの初め頃、ナス苗は近所の万屋で買っていた。ある年Tさんに、「ナス苗も高くて買ひ果せないよ」と言ったら、「ナス苗？ 儂ら種から育てているよ」と。私は、「あつ、そおー！」と語尾を高めるように言った。これを切っ掛けに私は翌春までに、育苗用の苗床を自分で作り上げた。廃物になっていたアルミの窓枠と四枚のガラス戸の活用だった。Tさんの教えに感謝し、自分の着想と工作に少しく自賛だった。その後はこの苗床で育てたキャベツ・白菜等の苗を近所の方々にも差し上げている。何となく自分も少しは野菜作りの腕が上がったかなと、一層嬉しくなってきた。

野菜の露地栽培でとても困ることは、暴風雨や早魃、それに病虫害の発生である。つい先頃の台風二十号の襲来で、夜

明け方一時間程の間に、一アール余の畑に林立していたトウモロコシは、全部根元から絡み合うように倒伏してしまつた。止む無く私は一本ずつ起こして、三、四本を支え合うようにして束ねて立ち上げてやつた。

もう一方の病虫害では、ウドンコ病やアブラムシ・夜盗虫^{よとうむし}他の害虫がいつの間にか寄生して、養分を吸収したり葉を蝕んだりする。その防除に昨今では無農薬栽培が強く求められ、薬剤の選択・希釈倍率・散布量や回数が規制されている。素人者の私には大難題の一つであるが、勉強しながら何とか切り抜けているのが実状である。

野菜作りの敵は地中にも居た。その主役は土竜^{もぐもぐ}で、地中の蚯蚓^{みずず}等を漁つて縦横に移動して空洞を作つてしまう厄介者である。その駆除法をある人に、「畑に杭を打ち、トントんと叩けばいいよ」と教えられたが、私は？ だった。その後ベツトボトルの空容器で風向計式の風車を作つて畑に立てて置けば、音に敏感な土竜は風車の回転音で退散するとの話。私

は早速自作して立てたところ、何時やら何処へか退散したようだった。何と愉快なを得たアイデアだろうか、見知らぬ発案者に感服するばかりだった。

野菜作りをしていると、未栽培の野菜を作つてみたくなる。ある旅先の売店で見た自然薯を作つて見ようと思い、自然薯ならぬ畑作用の長芋の種を買い求めた。半割り状のビニールパイプに寝かせて地中に斜めに埋めて、七ヶ月後位に掘り出したところ、一メートル近い見事な長芋が出て来た。私は思わず「パンザイ」と小躍りした。夕食時は家族でイモジュル（方言）を啜りながらの長芋談義であった。

一般的に野菜作りを含めた畑仕事では、寒風猛暑の季節や日でも、土汚れや汗まみれも厭わず、大変力の要る身体活動が殆どだと想定されているようだが、私の体験ではそれ以外の知的活動や技術的工夫、対人関係の広がり及び野菜たちへの情愛の喜び等々が沢山あつたと思う。

野菜作りの最初は栽培計画の策定である。野菜の種類・場所・面積・数量・畝幅と株間時期等々を自分の構想で決定する最重要な仕事といえる。すべて頭を使い計算力も必要である。言わば野菜作りの設計図作りである。連作障害（同一場所への連年作付は不可）のナスやエンドウ等は、特に要注意である。私も散々苦労して仕上げたが、作成の成成感は格別であつたと思ひ出される。

野菜作りをしていると、あれこれと思わぬ不都合が生じ改善を迫られる。既述した苗床作りを初め、畑の地均し作業の効率化のための廃材でのトンボ具（T字形）や一センチ毎の目盛り付きの四メートルの長尺等々である。「必要は発明の母」ほどの大袈裟ごとではないが、自分の用具を自分のアイデアと技術で作り上げたことで、畑仕事にも別の張合が加速されたように思われる。

私は毎日一人で畑仕事をしているが、孤独感はいらない。困れば誰かまわす教えを受けたり、野菜ハンドブックで調べたりする。横浜の知人がヤーコン（南米

原産)の種を郵送してくれたので植えたら、背丈以上にも伸びた。私の畑も国際化してきた? ごく小規模の私の畑仕事だが、今は大勢の方との関わりが増して嬉しさいっぱいである。「吾以外皆吾師也」(吉川英治)である。

生き物の私の何よりの喜びは、同じ生き物の野菜たちと、常時寄り添っての明け暮れであると思う。今私は瞑目しても、畑のどこに、何の野菜が、どれくらい有るのか、成長の度合は、明日何をしてやれば良いのか等の説明が出来る。私は私の野菜たちにはまり込んでいるのだと思う。野菜べつたりだなと揶揄されれば、ご名答と答えるだろう。このような心情に至ったのは、私の「自由心」だと思っている。そして私は、「農業でよかった」と安堵しながら、定年直後の頃の自分を今改めて回顧している。

(北区)

「入選」

繫がれた命、

そして…

井上 盛

三階建てのコンクリート校舎は瓦礫の中に、黒く煤けて停っていた。東京深川区の東川小学校である。前夜の昭和二十年三月十日未明、B29の高空襲で多数の避難住民と共に炎に呑み込まれた。幾日か経っていた。通用門近くの瓦礫の中に一本の立札が突き刺してあった。それには其処の居住者の名が書かれてあったが、異常な情況下で見過ごしていた。

或るきっかけで六十七年も前の立札についての記憶が、おぼろげに甦ってきた。それは東京在住のOさんの手紙からで、文面によるとその立札には、家族四人東川小学校(当時国民学校)で全滅、主は出征中レイテ島で戦死と書かれてい

たという。戦死した当主はOさんの小学生当時の担任の恩師であった。

戦争末期、この家の主が軍から召集令状を受けてからも、残された家族は東川小学校通用門近くの家に住んでいた。よき先生であったことが文面より察せられる。

Oさんから手紙をいただいたのは、私の絵が昨春秋在京の或る美術団体の公募展に入選し、新国立美術館に展示されたからである。東京高空襲のテーマで私体験に基づき描いた絵で、東京高空襲災害資料センター(江東区砂町)にも絵の主旨を説明した手紙と、同展の招待状を添えて送っていた。それでOさんにも伝えられたのである。

Oさんとは面識はないが、現在東京の杉並高円寺に住み、東京高空襲遺族会が発行する会報づくりを担当している。当時十四歳、中学二年生だったOさん一家は、江東区南砂町に住んでいたが、三月十日の空襲でOさんは命拾いをしたもの、父上と姉、祖母を亡くした。父の死の報告のため三月末、浜松の元目町に住

む祖母（父方）を訪ねてから、僅か一ヶ月後の四月三十日、浜松空襲で不運にも祖母の家の傍に爆弾が直撃、防空壕にいた祖母は即死した。東照宮の崖際の住居であつたそうである。

昭和二十年、当時警察官として私は深川扇橋署に勤務していた。三月十日零時、空襲警報発令で本所厩橋の下宿を飛び出し署へ向つて駆けた。深夜の空にサイレンが鳴り渡つていても、街は暗闇の静寂の中に眠っていた。

B 29の来襲は日常化し、都民は今夜の空襲も標的外とタカをくくつていた。しかし三十分過ぎた頃は寢床から起き出した人々の、身支度を整え路上に集る姿を見かける様になつていた。まだ身に迫る危険は感じとれなかった。堅川橋を渡る時は隣組や町を守る警防団員が大勢、日頃の消火訓練の態勢で町角や道路に屯して上空を見上げていた。だがいつもの空襲と様子が違ふと人々が気付きはじめた時は非常事態となつていた。逃げ場を失い学校や川に殺到し命を失つた。

到着した署の庁舎はすでに無人で暗闇

の中に沈んでいた。三階の屋上に駆け登り見渡すと、両国上空に焼夷弾が花火の様に落下し、B 29の爆音が無気味に急迫してきた。階段を駆け降り東川小学校へ急いだ。扇橋署では非常の場合、本部を東川小学校に置くことに決めていた。校舎は避難住民で溢れていた。本部を探し回るのも困難だったので廊下に佇んでいた時、耳元に声がした。同僚だった。「本部は毛利小に移動」と知らされた。校門から一步出る。折しも上空をB 29の巨体が轟音を響かせ、超低空で通過して行った。炎色に映えた機体の窓に、投乗員の顔が一瞬見えたと思う程の間近であつた。

通り（現新大橋通り）に出ると状況は一変していた。工場民家が火を吹き烈風に煽られている。宙を飛ぶ焼トタン、大きな火の粉が通りを遮断し、その先にある公園へは突破不能となつていた。火勢の弱まるのを待つしかない数人の中に立っていた。突然背後の菊川橋方面で黒煙が湧き上り、不気味な地鳴りを轟かせ道路を押し押し迫ってきた。火災流の発

生である。恐怖感覚と体が動いたのは同時だった。焼トタンや火の粉に当たればそれまでと、火の路の彼方暗闇に向つて突進した。

辿り着いた処は公園入口の門柱で、その裏に身を伏せた。息苦しかった熱風が徐々に収まり、空が白む頃漸く生を実感できた。公園周辺はあと一步届かずに、多数の人達が斃れていた。一望千里瓦礫と果てた前夜の路筋を辿ろうと決めた。先ず東川小へ、前述の如く校舎では凄惨な光景の現出であつた。次の扇橋署は内部総て灰燼。廊下には署員数人が斃れていた。本所厩橋に住むM巡查部長もその中の一人で一度住居に訪ねたことがある。家を出るのが遅れたのであろうか。菊川橋では橋を渡るのも困難だった。遺体の山は総て人の形態が崩れ、溶解後凝固した状態で恐らく炎と川からの熱蒸気が齎したものか。川面には飛び込んだ人々が浮いていた。重い軍装の陸軍将校が迎向けに浮いていたのは、その下の川底にまで幾層にも人が重なって沈んでいるからであらう。

堅川橋は前夜通った折、大勢の住民が屯していた所だ。橋近くの道路は焼死体が散乱していた。その中に子供が交った五体があり、母親と見える膨らんだお腹の下部に、胎児の頭が……。断たれた命の数々の集約点と言える不条理であらう。厩橋の下宿跡に辿り着くまでには、私の感覚は現実と同化し、瓦礫の至る所に転がる黒焦げの屍も見馴れた光景として眼に映らなくなっていた。

三月十日以降数日間は焼死体の収容作業だった。二日目であった。瓦礫の中に、娘らしい裸身があたかもマネキン人形の様に横たわっていた。胸の上に拳を隠し目を閉じている、収容しようと手首を掴んだ瞬間、娘の口からかすかな声が聞こえた。思わず手を離し、そして呼びかけたが反応はなかった。

三月十日をいま顧みて思うのは、私の生死の岐れ目は紙一重であった。切迫した数分の中に同僚と会えた事が総てであらう。そうでなければ東川小学校に留まっていた筈であった。離脱の遅れた署員が数人いたが、その中で二人が助かつて

いる。一人は男子便所の便壺の底に、一人は屋上にそそり立つ煙突頂上に。S 巡査は東川小学校の有様を最後まで見届ける事となった。妻子三人も同校に避難させていたという。校庭の入口に親子三人の遺体があった。その母親の股間に布切れが被せてあった、恐らくその布はS 巡査の物と推測できる。

美術展会場で私の絵の前に立ち止る数人の人達がいた。解説のため近より、実体験を基に描いた主旨を話した。その中の六十半ばの婦人が、「私はこの空襲の時、母の胎内で六ヶ月でした。母は小名木川に飛び込んで助かりました」驚いた。身重の身でよくぞ助かったものだ。菊川橋・言間橋の惨状からすれば奇跡である。連れの若者達（男女）はお孫さんだという。別れ際、婦人に思わず言った。「生きて生まれてよかったですね。あなたが居なければお孫さん達もないですよね」「そうですよネ」屈託のない笑顔と笑い声を残し彼らは去った。繋かれた命がそこにあったが、断たれたあまたの命もそこにある。

〔入選〕

少年時代の追憶

角 替 昭

一月一日、学校は冬休み中であつたが全員が登校して祝賀式をあげ、新しい年の出発を祝つた。四大節（元旦・紀元節・天長節・明治節）には共通した式次第があつた。国家の「君が代」はなぜか必ず二回続けて斉唱、御真影の参拝、勅語の奉読の三つとも厳かに行われた。教育勅語は特に重視され、その教育は国民ひとり一人に徹底を期した。教科書では修身のたしか三年以上の巻頭に全文がのつていたかと思われるが、子供達はただ奉読するだけではなく、すらすらと暗唱できるように求められた。いわゆる暗記の特別が日々続いたものだ。

式典で聞く勅語はまことに厳肅莊重を極めたが、式場以外での子供個人はその内容を考えるようなことはなく、感動も

なければ疑問も感じなかつた。式次第で君が代二回の斉唱がすみ、フロックコートに身を正した校長が壇上に進むと、タイミングよく教頭が白手袋の略礼装で、勅語の収まつた白桐の細長い箱を、うやうやしく三宝にのせて式場に入つてきて、校長の前の卓上に静かに置いて退く。校長はこれに最敬礼して、やおら桐箱の中から白絹に包まれた勅語の謄本を取り出し、会場に向かつて捧げ持つと、「最敬礼」の号令がかかり参列者一同が最敬礼でかしこまる。「直れ」がかつても頭は垂れたまま、校長の奉読の声を謹んで聞くのである。

奉読の間、咳一つするにも気がひけたが、青ばな垂らしの子供達が一番苦手とするのがこの時で、垂れ下がる鼻水をズルズルと吸い上げる音が激しくなるころ「ギョメイギョジ」で奉読が終わる。もう一度最敬礼の上、やっと頭を上げて正面を見ることができた。勅語を無事読み終えた校長は、緊張から開放された安堵の表情に変わり、白絹を巻く手元のふるえはもうなかつた。

箱に収まつた勅語は、再び進み出た教頭が奉持して静々と退場。この動作を全員がジット見守り、その姿が消えるのを待って、「座れ」の号令がかかる。勅語の奉読は、どこの校長も独特のくせか節回しに近いものを持っていて、いとも厳かに格好をつけて奉読していたようだ。

たまたま校長が不在で教頭がこの奉読をやつた。普段話がうまく生徒にも人気があつた教頭は、緊張のために顔まで別人の如くで、まるで中風になつたみたい。ガタガタ震え、声もかん高く上ずつていた。万一公式の場で読み間違えるようなことがあつたら、それはもう確実に進退伺いの必要があつたと側聞している。

式が無事終ると、楽しみは紅白のまんじゅうを貰つて帰ることだ。帰り道に食べるのを我慢し、家に帰り親に見せてから口にした。元日の一日は、学校から帰つても仕事はしなくてもよかった。正月三が日は、竹馬の友とこま回し、竹馬、風揚げ、メンコ、ベーゴマ、カルタ、双六、鬼ごっこ、かくれんぼなど、空っ風の吹く中を鼻水を垂らしながら、日がな

一日夢中で遊んだものだ。

この年齢になって時々夢見るのは、懐かしい古里の山河である。田圃にはれんげ草の花が咲き乱れ、菜種の黄色が緑の麦畑にいつそう映える頃になると、小川の水が日増しに温まり、メダカの動きが活発になる。そうなると子供たちの「セツシヨウ」（魚捕り）が始まる。学校から帰り、すぐ野良へと走らなくてはならない日でも、雨あがりで大漁が期待できる時は親のほうから声がかかった。

「田圃に来る前にセツシヨウしてこいや」と。子供のわずかな手伝いよりも、どじょうの味噌汁で精をつけたほうが得策だと考えたからだ。「ウゲ」という竹で細長く編んで作った魚捕り器を小川に仕掛けておく。しばらくすると上流から大小のどじょうがぞろぞろと下へ下へと降ってくる。魚がウゲに入るのをそっと息をこらして見ている。うなぎが入るのを見て、ヤッターと心の中でこどりした。大体入り終わったところで、ウゲを引き上げると、中でキューキューとどじょうの鳴く声をする。ドジョウだけではな

く、もうこ、ふななども捕れ、バケツに一杯になった。家に帰ると、大漁の時は服はよごれても母親の機嫌はよかった。このどじょうは味噌汁に入れたが、ほかの魚は野菜と共に煮つけて夕食のおかずにした。

小川にはハヤ、フナ、モロコなど多数群れ泳いでいた。魚類の中でもハヤは最も多いせいか、餌を投げ入れると喰いつきがよく、浮きが「ググツ」と沈む瞬間に竿をあげると、キラキラと鱗を光らせて釣れてくる。釣った何匹かを笹竹に吊るしたり、バケツに入れて持ち歩いた。弱い魚なので早めに家に持ち帰り串に差し、焼いて夕食のおかずにした。

魚捕りのなかでも一番胸をときめかせたのはウナギ釣りである。魚法に「入れ針」と「穴づり」という昔からの伝統があった。入れ針はフナ針より大きな針を買ってきて、丈夫なたこ糸でしっかり結び、長さ二メートルほどの糸の先を竹や棒にくくりつける。針にはドジョウをさした。この入れ針を五、六本くらい作り、バケツに入れ川に出かける。ウナギの住

みそうな穴ぐらを見つけ、適当な間隔において仕掛けておく。帰りは夕方近くになった。夜はウナギのことが気になつてなかなか眠れない。翌朝早く仕掛けた所を見て回る。仕掛けにさわるそのドキドキした緊張感が何ともいえない。重い「アタリ」があり、太いウナギが糸に巻きついてあげる時はひと苦勞する。時にはナマズや鯉などがかかることがある。すでに死んだウナギがいたり、入れ針が穴に引き込まれてなくなっていることもあった。五本仕掛けて、二、三本くらいかればよい方である。バケツに入れて家に持ち帰れば、父親はいつにもなくほめてくれた。野良仕事はそっちのけで、早速まな板を出し料理に取りかかった。

少年時代は、勉強より遊びが主であり、上級生は下級生の面倒をよく見てやった。大自然の中で伸び伸びとくらしただ。

（北区）

〔入選〕

ソ連兵が やつて来た

水川 彰

昭和二十年八月の末、中国東北部、旧満洲での出来事である。

石炭の都と呼ばれた撫順^{フシユン}から、その郊外である蛟河^{コウガ}の地に来て、私達一家の三年目での出来事である。

当時の私は蛟河在満国民学校の三年生であった。終戦の十五日以前に一度だけ夜中にソ連の爆撃機がやつて来た。現地人の部落に焼夷弾が落とされて、対日感情が一層拡大した。駅近くの広場にも小型爆弾が投下された。

バネ入りの巻き降ろしたカーテンが一瞬间にして、その衝撃で巻き上がった。恐ろしい光景であった。十五日前に列車でソ満国境より、その進駐から逃れて来た

軍属の家族達がほんの二日程仮泊して南下して行つた。

八月初旬にソ連が侵攻してきた様子を終日、ラジオがなり立てていた。侵攻して来たソ連軍の戦車を百台単位で撃破したとも報じていた。世界最強といわれていた関東軍が撃破してくれるものと信じていた。

実際は殆どが南方戦線に出兵していたのである。残っていたのは召集されたばかりの新兵達で銃も人数分は無かつたした後で聞いた。

立ち去る軍族の家族に、母が米やら砂糖を渡していた。父は南部式拳銃の説明を聞いていた。貰うのを始めは断つていたのだが、どうしても受け取つて欲しいといわれたのである。

初めて見る拳銃は銃身が長く、弾倉には十二発もの弾が入っていた。「ずしり」と重かつた。

それ以後には父がどう処分したか知らなかつたし、聞きもしなかつた。無気味であつた。

夏休中であつたが敗戦で学校の登校日

がない。近所の上級生の新田君兄弟に相談して、学校に行つてみた。職員室の戸が開いていて、小遣いさんがいた。先生は一人もいない。

「教材でも何でも自由に持ち出してよい」と小遣いさんという。小遣いさんも二度と登校はしないので、後の連絡も出来ないという。

謄写版一式、インク、鉄筆、蠟引きの厚紙、用紙等、かなりの重さになるので、社宅の購買部からリヤカーを借りて来て運んだ。

絵の具、鉛筆、画用紙、木剣、疑似手榴弾（投擲練習用）、競技用ピストルと弾等々、各自が自宅に持ち帰つた。帳面も様々、大学ノートもあつた。図書室の本も数日で殆どなくなつていた。

生徒達は一時的ではあるが、分限者になつた気持ちになつていた。普段に欲しいと思つていたものが多量に手に入つたからだ。

宿題もしなくてよい。だが、学校が再開されないのは淋しい。明日以後の不安が残つた。

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

灯火管制の指示をしていた傷痍軍人がすっかり大人しくなつて、怒鳴らなくなつた。

青年会館によく詰めていた憲兵も姿を消した。

事態は日に日に変化をしていた。

四月に北支戦線に転戦して行つた守備隊跡にソ連兵が進駐して来るというので見に行つた。大方は片付いていたが、炊事用具の大型の鍋釜などが残っていた。海苔巻用の大型のスノコもあつた。ソ連兵進駐の時、「小旗を作るように」との通知があつたので、そのスノコも持ち帰つた。小旗の軸になるからである。誰からか色々と智恵が出るものだと思つた。大人達は日本軍の使つたものがソ連兵に使われるのは口惜しい、と炊事用具を持ち帰つた。

文房具やらこれ等のものが後になつて役立つたのである。小旗作りは高等科生と小学の高学年でする事になつた。世界の旗事典でソ連の国旗を調べて、ガリ版で原画を刷つた。それにクレオン、絵の具で色付けをした。材料は揃つていたの

で手分けをして作業をした。購買部二階の会議室を使つた。広さもあり、机もあり便利であつた。

二日程で三百本の小旗が出来た。八月の終り頃であつたと思う。ソ連兵が列車でやつて来た。駅からは馬、荷馬車、トラック、戦車などで来た。

守備隊迄の通りに面して、社宅の周りには金網と鉄柱の柵があつた。その内側で小旗を振つて待つていたのである。「情無いなあー」と誰かがいつていた。駅からは銃声が鳴つていた。それが近付いてくる。

酔つぱらつた将校が馬に縛りつけられて駆けて来た。「だらしのないな、こんな奴らに敗けたと思うと死んでも死に切れんわ」という人もいた。荷車の上でも、歩きながらでも、空に向けて銃を撃つていた。その中でも「パパーン」と乾いた音のするものがあつた。

「空砲だよ」という。殆どが実弾を撃つていたのである。日本兵なら決してしないだろうと思つた。「弾が勿体無いからな」と誰かがいつた。声を出して笑う人

もいた。

ソ連兵が怖い顔をして睨んだので、慌てて旗を振つた。身近に銃声を聞いた事もなかつたので耳の奥が、「キーン」と鳴つた。耳に詰める綿を持つて来た人がいた。貰つて耳に詰めた。怖さもあつたが、色々と教えられる事があつた。最後に近くなつて「ゴオーツ」というジーゼル音と、「キヤラ、キヤラ、キヤラ」とキヤタピラの音がしてきた。戦車である。砲身がやたら長い。それで日本の戦車より太いのである。粗末な舗装道路にはキヤタピラの跡が残つたり、剥がれたりする。

全長も長い割に背高が低い。砲弾が当り難いらしい。砲塔の装甲は五十糎もあるらしい。

ラジオでは二百台撃破とか放送していたが、全部デマであつたのだ。傷一つ無いのである。最後に無蓋車に正装した将校が通つた。アメリカ製のジープである。アメリカが貸与したものらしい。正面に大きな星のマークが付いていた。戦車の通り過ぎた後に砂ぼこりが舞つてい

た。周りが静かになって、誰もが脱力感を覚えた頃だった。

数人が金網を乗り越えて、ばらばらと道路に跳び降りて行った。葉莢を拾うのである。

「後衛の部隊が来る筈だ、早く戻りなさい」といわれて、慌てて戻った。

拾った葉莢を口に当てて、「ピーピー」吹きながら帰った。小旗は途中の溝に投げ捨ててきた。

ソ連兵が進駐して来たその日は、夜遅く迄、二キロ程離れた元守備隊の方角から、銃声が深夜迄聞えてきた。不安の増す一日であった。

(南区)

「入選」

昔ものがたり

新谷三江子

当年とつて九十一歳と八ヶ月。いよいよ待ったなしの終焉のときが目の前にきているという焦燥感と、まだ一・三年は大丈夫だろうという開き直りが交互にこの小さい身体からだの中を往来している。八十八歳の傘寿の年は、家族展という名目の日本画の個展を開催し、八十八歳の米寿には『かえりみすれば』のタイトルで画集を出版し、自分なりの目標をクリアしてきた。さあ、次はいよいよ最後の大仕事、『自分史』に取り組まねばというときになって、老の身の故障があちこちから押しよせてきて、いくつもの医院へ通う身になってしまった。

自分たちが生まれる前に亡くなってしまった祖父のことをくわしく知りたい娘たちは、私の脳が正常なうちに早く書き

残しておいてくれと何年も前からせがんでいた。私の姉妹たちは次々と鬼界に入り、唯一の頼みにしていた従弟(母の実家の世帯主)も、つい先月亡くなったばかりで、昔話ができる人は皆無という現状。肉親で唯一の生存者である末の妹は五歳で父親と死別しているとなれば、もう、自分の記憶だけを頼りとする以外方法は無い。

何としてもこの際書いておかねばという義務感をさえ持った。まず本年は父のこと、来年は祖父・母……と記憶の糸を手繰たぐっていけば、卒寿までには『自分史』らしきものが成立するだろう。幸い古い写真もかなりの数残されている……と目算をたてたが、それも命ありせば……の心細いことではある。

父、源太郎は、周知郡犬居村領家(通称中山)で、明治三十年・酉年の生まれで、両親の晩年の一粒種で(ひとりっ子)「源や」「源や」と愛情をいっぱい受

け、天衣無縫の餓鬼大將で幼少期を過したらしい。父祖伝来の山持ちで、山林の管理が正業の杣人の伴であったが、山の

番人で一生を終える気はなく、事業欲に燃えていた。学友の村長の息子のようにな級学校へと望めるわけは無く、講義録をとり寄せて、自主学習をしていたらしい。

昭和の初期、磐田郡二俣町へ出て、喇叭^{らっぱ}を鳴らして走行していた馬車の路線を買って、乗合バスの営業を始めたのが最初の事業。当時遠州鉄道会社が、浜松から乗り入れていた電車の終点の西鹿島から町中までの短い距離であったが。次は故郷の周知郡大居町への路線を拡張した。遠い戦国時代、甲斐の武田氏の一勢力としての大居城の城主だった天野氏の後裔が、大居町で医院を開業していた。その天野先生を尊敬し、一番最初の客に招待した由。昔から火伏せの神として近隣の尊崇を集めていた秋葉山・秋葉神社への参詣は、当時森町から三倉村を通じて若身へ出る徒歩のルートが主であったが、大居線が開通されたことによって名古屋・豊橋方面からの参詣者がぐんと増え、会社のドル箱路線となり収益をあげた。

三つがいの姉と私までは領家中山生まれだったが、妹達は次々と二俣で生まれ、母は大多忙となり、祖母が駆り出され同居するようになり、姉も学齡近く二俣へ、というところで祖父と私だけが残って山での生活を続けた。

ハンティングを被り、矢立を腰に差し山廻りをする祖父と共に『持ち山』回りをした。境木を誤魔化されると大損害になるから、きびしくチェックを怠らなかつた。鉄砲を打っていた祖父のおかげで、山鳥や野兎など、良質な蛋白質の食事ができた。猪を打止めた時は部落中に振舞ったほど。幼稚園へ入園するまでの私は、山猿のように野山を駆け回り、健康優良児だったようである。

昭和三年十一月、昭和天皇即位式のご大典のご盛儀を見学すべく、当時まだ珍しかった外車を父と叔父（母の弟）が交替で運転し、家族全員を乗せての大旅行であった。大津から入り、京都では祝賀の花電車を見て、奈良では若草山で鹿と遊んだりして、大阪城へも登った記憶が残っている。こんな大がかりな旅行はこ

の後もう無かったが、近まわりのお伊勢さんと養老の滝などへのドライブは度々あった。

バス会社は、程なく町内で中泉・掛川など二路線を持っていた会社と合併し、『遠州秋葉自動車会社』を打ち立て、新しく水窪・西渡方面への西川線も増え、二俣を拠点としたこの地方の交通網の要となる大会社となった。新しく車道に広大な土地を有する敷地内で、塗装も修理も全てが自社内でできる大会社となっていた。父は浜松にタクシー会社を持つなど事業は順風満帆の営業で、昭和四年には初の男児誕生で父の満足度は絶頂だったではなからうか。東京の運輸省などへの陳情でよく上京した。女学校三年頃だったろうか。すぐ下の妹と二人同行させてもらい、昼間は鳩バスで東京見物などさせてもらった。金縁眼鏡の奥からぎょろりと睨まれるとこわいこわい父親であったが、子ども達へは惜しみなく愛情を注いでくれた。懇意にしていた石油会社の社長別の別荘の空いている期間には使わせてもらって、夏休みには一家で海での

暮しを楽しんだ。たっぷり泳いだし、わたり蟹や車えびをふんだんに食した。姉も弟も六人姉妹みんな元気で真黒くなって遊んだ。

男の甲斐性ともいふべき選挙にも担がれて町会議員を二期つとめ、視察旅行には羽織袴で出張するなどお洒落だったらしい。

私が女子師範学校を受験することに決めたのは四年生の三学期、紀元節の日である。その後父は私には内密で校長や担任教師と連絡をとり、姉が学んだ東京の実践女子専門学校への入学手続きをとってくれていた。姉は感激屋で、上級学校へまで行かせてくれたことに感謝し、猛勉強したらしい。無理が祟ったのか都会暮しで体調が不良となり、一学期で病院のベッド暮しとなってしまった。次女の

私までその二の舞は踏ませたくなくて、上京は許さなかったが、受験に失敗して行く学校がなくてはと思つての親心だったようだ。幸い二つの学校の入学許可だったが、静岡の学校を選んだ。が、この女師時代に姉と小四の弟を事故死で失つ

てしまった。掌中の珠と慈しんだ跡とり息子を失つて悲嘆のどん底だったろうに、戦中であつた故か健気な父母はすぐ立ち直つた。町内会長と消防団々長の要職にあつた父は、夜中でも雨中でも制服を着て家を飛び出し、陣頭指揮をした愛国者であつた。無理が祟ったのか体調を崩し、終戦の翌年五十歳の若さで呆気なく逝つてしまつた。棺が祖父の寝所を通ると、「源や、俺をおいて逝つてしまふのか」と動哭した年老いた祖父の姿に、それまで歯を食いしばつて泳いでいた気丈な母も私達も、共に泣いた場面をはつきり覚えてゐる。

敗戦で、医者も薬も食べ物もない世の中になつてしまつていて、私は今でも父の死は一種の戦死だと思つてゐる。縁の薄さを覚悟していたのか幼い末の妹を孫のように可愛がつた。あぐらをかいた膝の中に妹を入れて新聞を読んでいた。結婚して初子に男児を出産したことが唯一の親孝行であつたか、私の。

(中区)

「入選」

梅干し

大庭 拓郎

大過なく停年を迎えて、かみさんと秋吉台を訪ねたことがある。鍾乳洞の黄金柱を背にした記念写真は永遠の宝物になった。浜松にも鍾乳洞があると聞いて、連れ立って遠出のドライブに出掛けた。

立ち寄つた井伊谷宮で宗良親王の歌碑に出会い、木陰で愛妻弁当を食べた。空揚げとデザートも然る事ながら、梅干しのおにぎりが何とも美味かつた。

帰りに見掛けた道の駅で青梅をどつきり買い込んだ。車中のかみさんは、鮮やかな梅の実に有頂天。家に着くや否や、てんやわんやの大騒ぎになった。かみさんは大バケツに梅を浸す。私は赤紫蘇を干して、瓶を洗つて日光消毒。かくして深紅の梅干しが生まれた。

かみさんは梅干しが大好きで、いつも

たつぷり漬けていた。瓶の真つ赤な粒は、私がねじり鉢巻きで手伝った梅干しだ。夜も日も明けず食べて、存分に楽しんだ。梅干しを混ぜ込んだあら煮は晩酌の肴に最高だ。焼酎に落とすと、五臓六腑に沁み渡った。

一つ目の瓶が半分ほどになった時に突然、かみさんのおぞましい病魔が見付かった。日頃の健診では、いつも「異状なし」だったので絶句した。緊急手術で九死に一生を得たが、正に奇跡だった。肝臓の七割も切除されたが、少しずつ再生したので大好きな梅干しも食べられるようになった。

入退院を繰り返しながら、懸命に励まし合って暮らした。病室の差し入れはいつも梅干しだった。主治医の許可をもらって、大粒なのを選びすぐって持つて行った。かみさんの恵比寿顔がとても可愛らしかった。胃腸も腎臓もすこぶる元気で、血圧も順調だからいくらでも食べられた。時々ドライブで食べた梅干しのおにぎりを差し入れた。足腰を鍛えようと廊下を歩き回るので、お腹が空くよう

だった。何とかそれらしくなったが、かみさんみたいな格好良いおにぎりにはならなかった。焼海苔でふんわり包んでやると、香ばしくておいしいと頬張ってくれた。

二つ目の瓶が半分ぐらいになった時に、再発と転移が告げられた。手術から二年半だった。何となくかみさんも覚悟をしていたので、涙は見せなかった。介護保険を受けて自宅療養を始めた。二人で建てた我が家で、一分一秒でも長く過ごさせてやりたかった。梅干しのおにぎりを作ると、「お父さん、ありがとう」と言った。小学五年の孫娘の成人式を見たいと頑張ったが、六十七歳をひたすら生き抜いて静かに旅立った。仲秋の名月が渡る夜だった。三年が過ぎた。

朝一番にご飯と梅干しを供えるのが、祥月命日はおにぎりの習いになった。梅干しをご飯と海苔で包み、二人で分け合って食べる。梅干しはあら煮や焼酎だけでなく、焼き飯やギョウザの具に入れても旨い。これからも梅干し料理をいろいろ開発して、かみさんに食べてもらおう

もりだ。梅干しの隙間から瓶の底が見え出したが、心配無用。かみさんが残してくれた「お父さんの料理帳」に梅干しの作り方が書いてある。

霊前の梅干しは、ふっと宇宙電話に変身する。手を合わせて耳を澄ますと、かみさんが優しく話し掛けてくれる。冥福を祈る！

(南区)

随筆選評

たかはたけいこ

今年は選定に大いに時間を費やした。応募作品の質が高く、絞り込みした後の点数つけに苦心したのだ。結果、同じ作品を何度も読み返すことになった。

読了するたびに、納得、感心、同感、気づきなどの読書の醍醐味を味わわせてもらった。

そのうち考え始めた。文字とはなにか、言葉とはなにかと。思いを言葉という文字に託すのが随筆ならこれらの作品はすべて成功している。筆者の思いがストレートに読み手にわかり易い言葉で書きつづられている。

やがて作品に点数をつけている私自身を問い始めた。最終的にリストアップしたこれらの作品の細部のアラを見つけることが選考の基準なのか。否、作品全体で何を訴えているのか、書き残したいかが鮮明なのかを基準にしてもいいのではないか。前年の入選作数に倣い、応募作品をさらに絞り込んでいいのかと。

人は誰一人、他人と同じ生き方をしていない。人生には失敗も成功もなく、一人ひとりの生き方があり、今につながっている。今回、選ばせていただいた筆者たちは今をたくましく、これからも力強く生きていく。そんなことを改めて感じた本年の選考だった。

市民文芸賞

「もぺっと」

淡々とした事実が書かれているだけの文章なのに、どうしてもこんなに残るのだろう。特別、文章が巧みなわけでもない。書かれていることは心の病に冒されそうになった息子が、仲間から贈られた猫によって、踏みとどまり、社会復帰するまでの経緯である。

何度か読み返すうちに私は文章を読みながら、筆者の親としての素早い対応と決断する力に惹かれているのだと気づいた。

「免許証返納」

筆者が自動車運転免許証を返納した経緯を軸に物語は進む。生活している場所の風景、自身の生活ぶりが淡々と書かれ、昨日と同じ今日が始まるのだが、運転途中で道に迷って知らない女性に声をかける。女性は筆者の目的地まで先導してくれて、免許証を返納した方がいいですよと勧め、筆者はいろいろ考えて、免許証を返納する。

筆者の素直さ、しなやかさに素直に感動できた。

「花も風も」

介護施設で働く筆者の仕事ぶりが描かれている。作品からは入居者の人生や価値観がみえ、筆者はそこにいる人たちの今までを尊重しながら、今に向き合っている。

大変な仕事をしているはずなのに、筆者はその大変なこと

を楽しむとしてゐる。

遅い生き方だ。こんな風に生きられたら、どれだけいいだろうと改めて感心する。これからは施設での出来事やそこで暮らす人たちを書きつづけていつて欲しい。

入選

「あんときのおばあちゃん」

孫娘の幼稚園から筆者は一時間使って、子供たちに昔の遊びを教えてくださいとの依頼を受ける。引き受けた筆者はあれこれ思い出しながら、幼稚園で園児たちと遊んでひとときを過ごす。そこには今も昔も変わらない子供たちがいた。

時は流れ、成長した孫娘とその友達と出会うと、友達が次の一言を発する。「あんときのおばあちゃん？」

筆者が園児たちと過ごした一時間がどれだけ光り輝いていたかがこの一言でわかる。

「鳥の街」

生涯独身を通した筆者は都会で暮らしていたが、ある時故郷に帰ろうと思ひ立つ。そうして暮らした始めた故郷で筆者の生活が始まる。新しい住居、新しい人間関係、姪の出産……。これからも筆者は淡々と力強く生きていくだろう。そう思わせる作品だ。文章力がとても高い人でもある。

「お疲れさま」

定年退職後、趣味三昧の暮らしをしていた筆者は妻から、料理教室に行ってみたらどうかと勧められる。

料理教室では料理はもちろん、新しい人間関係もできる。バスのなかでの光景もまた筆者の新しい刺激になる。

タイトルの『お疲れさま』は筆者からこの作品に登場する人々に発せられているが、私は筆者にこそこの言葉を贈りたい。

「念書」

母親の老いと死が子供の視点から描かれている。なによりタイトルになっている念書の内容は大きい。人の生死を決める権利は人にはない。けれど家族になると話は別だ。本人の意識がなくなると容赦なく、病院側から念書がつけつけられる。

選ぶことができないはずの生死を家族は選ばなくてはならない。その葛藤が素直に描かれている。

「本音」

車を運転中、夫婦が道端で亀を見つめる。車を停めて亀を川辺に運んで、放してやる。そしてこの行為は実は二度目だと話は続く。

絶妙な夫婦のやりとりを読んでいると、自分もその場に居合わせたような気持ちになってしまうのは、筆者の巧みな文章力による。そうして筆者は亀の恩返しをあてにして宝くじを買うのだが、当たらないというオチまでついている。

「農業でよかった」

定年後、これからどうしようかと考えていた筆者は農業をやろうと決めた。以来、筆者は畑と共に生きてきた。

「私は毎日一人で畑仕事をしているが、孤独感はない。困れば誰かまわす教えを受ける」と文中の言葉が胸に響く。

そう筆者は自然と共に生きている。日々、芽吹き、育つ生命とともにある。そう感じさせる作品だ。

「繋がれた命、そして…」

空襲で焼き払われた街の貴重な状況描写が続く。写真や動画で見るとはるかに生々しく説得力があるものだ。

そして今を生きている私たちひとり一人は人類が発生して以来、幾多の災害、事故を乗り越えてきた強い遺伝子を持っていることを知る。

「少年時代の追憶」

ひと昔前の日本社会のルールが描かれている。世の中の善悪に絶対はなく、社会情勢によって教育もまた変わることを知る。そして幼少期に刷り込まれた価値観はその人の基準のひとつとしてあり続ける。

一方、変わらぬものは自然から学ぶ子供の感性だ。それらは今も昔も変わらないのだと筆者の言葉は続く。

人間社会は自然社会の一部にすぎないのだよ。そう筆者が言っている。

「ソ連兵がやって来た」

敗戦直後、筆者は旧満州にいた。筆者と家族、そのまわりにはいる敗戦国民になってしまった人たちに起こった出来事が自然体で描かれている。大変な状況下でありながら、人間は生きていく知恵を持ち、なおかつ、当時の自分たちの生死を握っているソ連兵を客観視できている。人間の強さ、したたかさを感じる。

「昔ものがたり」

筆者と関わった人たちの躍動的な人生が描かれた作品だ。書き残したい、書き残さなければという筆者の強い意志が文章の間から伝わってきた。

そうしてこの作品にも一本の筋が通っていて、そこには繋がる命がある。

「梅干し」

夫婦ふたりでのドライブ先で購入した青梅を奥さんが梅干しにする。梅干し作りはこの家の年中行事なのだ。そして夫婦は出来上がった梅干しを一年かけて、おいしくいただく。そんな生活が奥さんの発病と死で終わりを迎える。

残された筆者は梅干しを見たり、食べたりするたびに亡き妻を想う。

夫婦は他人という考えもあるが、互いの魂の片割れともいわれる。この筆者の夫婦は後者だ。

詩

〔市民文芸賞〕

源じいさん

北野 幸子

如月に息子を亡くした源じいさん

耕運機にリヤカーをつないで妻を乗せ

桜の下をゆく

赤目檜は燃え立ち空木の蕾のふくらむ五月

満々と水の引かれた田圃に早苗が植えられた

源じいさんの田圃も少し遅れて

ようやく田植が終る

八月

稲はぐんぐん伸びてよその田圃に追いつく

穂が出て稔りを迎える寸前

隣の県の突き出た半島に大型台風が上陸して

源じいさんの温室の屋根は吹き飛ばされ

田圃の稲も薙ぎ倒された

昔の人は

日照りが続けば天に向って雨乞いをし

節分には豆を炒って一年の吉凶を占い

或る時は荒ぶる神に恐れながらも絶る思いで

手を合わせ自然や神を崇拜してきた

米は悲しみも喜びも共にして

涙の形をしていると

亡母はお流しに一粒のお米もこぼさずに

研いだことを覚えている

神様ってほんとにいるの？

子供達の素朴な疑問

目に見えそうで見えない神様

澄み切った青空に漂う浮雲

春は花 秋は紅葉を惜しみつつ

亡き人々を偲ぶ

神もきつとわれわれと同じように

天と地の空間をさ迷い押し合いて

白いパールの中に包まれているかも知れぬ

おそまきながら業者のコンバインで収穫は終り

乾びた切株の田園に夕日が照って

赤とんぼの飛ぶ頃

源じいさんは亡くなった

遺産相続 農機具 倉庫にはがらくたを山ほど残して……

年が明けて再び如月が巡る

源じいさんの奥さんは荒れはてた温室のまわりの草を

まるで内職のように

屈みながら取っている

(東区)

「市民文芸賞」

八十路

松野タダエ

晩秋の夕ぐれの光が

細長く 投げかけている佛間

八十路を歩む 私心の部屋のような

沈黙の空気の中で

さつきから 座り込んだまま

香の向うの 亡夫に縋る

硬く 融通のきかなくなった体を

病いが あちこちを突つつき

ひとり歩きの八十路に

心を折る風が 孤独を置いてゆく

寂しすぎると 心もゆがむのだろうか

描いていた八十路は

こんなはずではなかったのに――

せめて 心だけは穏やかに輝きたいと
 今日も 体中を巡るほどの深呼吸をする
 明日こそは 素直な新芽を出そうと
 心の底に溜った 凍った痛みを
 吐き出して見るのだが……
 冷えた風が 新芽を傷つけ散らしてしまう

不安と 孤独が

ゆく手を 涙で濃霧のように塞ぎ
 じっと立っていることも堪え切れず
 思わず 亡夫の杖にしがみつく
 気がつくと 濃霧が温められ
 視界の中に 光がぼんやり見えてきた

思い切って 視線を百八十度変えて見た
 そこには まじりつ気のないぬくもりが――
 幼児の はち切れそうな満面の笑みが
 身も心も 透き通った喜びに浸してくれる
 ふれ合う絆は
 足元を ほっかほかに温^{ぬく}とめてくれる

やっと見つけた そよ風の路を
 光の方角に向って歩いてゆきたい
 自分のたしかな足どりで 八十路を越えたい

そして
 となり合せの病いを
 温かい光と 融合しつつ
 いつの日か 旅立つ日
 素直な魂を 春の日ざしに浴せながら
 ひと言遺したい
 「ありがとう」と――

(東区)

〔市民文芸賞〕

ある願望の果てに

竹内としみ

上へ 上へ

私は何をしているのか
まだ仄暗い早朝の小径
突如立ち止まり
奇妙な想いにとり憑かれる

右手には

しょぼんと惨めな顔つきの
ゴミ袋を持ち

朝の冷たい風を受ける
そして

誰かの声に耳を澄ます

聞こえるか 何か

聞こえないか 何も

まだ大きく動き出す前の
静寂な世界では

去っていった人の声が

かすかに聞こえてくるだろうか

(中区)

背筋はぴしっと
微動だに動かさず

左手はまっすぐ横へ

これでもかというほど

遠くへ 遠くへ

顔はゆらがず

見えぬものに挑むがごとく

前へ 前へ

その目は厳しく

されど清々しさを匂わせ

内なる天空の高みに向い

意識だけを

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

「入選」

背中

私は背中が好き

大きな背中 優しい背中

淋しそうに少し肩を落した背中

幼い頃甘えて飛びついた父の背中

肩たたきをするとか故かほつとして

いつまでも頬を寄せていたい祖母の背中

そしていつも前を歩いていて

追い着く事が出来なかった背中

だんだん遠く小さくなつて行くのを

見ているだけ

そんな背中が無性に恋しい

貴方はいつだって私の前にいる

走っても走っても追いつかない

凜としていて何も言わない 疲れないの？

振り向いて周りの景色を見ようよ

貴方の背中を見つめ息を切らせている

麻

そんな私がいる事に気がついてるんでしょ
それでも貴方は振り返らない
けど……

時々少しの間立ち止まって深呼吸を

しているかの様に見える時がある

それは貴方の背中が小さくなつて

私が見失いそうになった時

でも決して振り向く事はない

だから 私これからもその黙った背中

いつまでも追いかけて行くんだろうな

いつか振り向いてくれる日まで

背中越しに伝わる思いが

こんなにも切ないって知りました

(中区)

「入選」

偶感・時

浅井 常義

色あせたアルバムに過去を甦らせてくれ。

静かに窓辺を照らす月の光に自然の営みへ畏敬の念を抱きながら今を語り始めている。

窓を打つ風の音を聞きながら、明日を夢見て無機質に時間を刻み過去を修復したくなる心に反発をしながら耐えている。

ふる里を偲び、父母を想い、兄弟の面影がよぎる時、月光是慈悲の温もりを黄金色に輝かせて時間の流れに委ねて窓辺を照らす。

全ての記憶を隅に押しやり、時間の歯車を軋ませながら狂おしいまでに自責の念と後悔だけが頭で反復し揺らいでいる。

仮想でしかない拾い集めた思い出の欠片を、遠き日々と故郷の匂いをそのままに真白なキャンパスに色彩を作り出し塗り替えなくてはならない。

時空を戻して立ち向かうとき、思考能力をそぎ取るように風だけが無情に涙を拭い去って行く。

父・母よ、我が肉体も年老いて行く恐怖感に慄きながら又一年が過ぎ去ろうとしている。

（中区）

「入選」

ウインドウ

石黒 實

昨日、駅前通りの人混みの中、僕はバス停に向かって歩いていった。正面から歩いて来た男が目前に立ちふさがる。すると男は僕の肩を掴むと横に押しやり、

そのまま直線方向に歩いて行った。

啞然としながらも僕はその男の姿を見送るしかなかった。

抗議したところで撥ね付けられる。あの男は僕を一人の人間として扱う必要が無いとしか見えなかったのか。

僕があまりにも小男だからからかったのだろうか。還暦を過ぎていくというのに尚も一人前の男として見てはもらえないのだろうか。

子供の時から他人よりも小さく、

「チビ」「チビ」としか呼ばれてこなかった自分。けど負けるのが悔しくて必死に相手に挑みかかってきたけれど、最後は思い切り投げ飛ばされて泣いて帰る自分だった。

そんな村に残るのが嫌で十五歳で都会に飛び出してみたけれど、一四二センチの身長は大人社会には入れてもらえなかった。

「背は子供並みだから給料も皆の半分でもいいだろう」とあしらわれ、郷里に帰ろうと駅のベンチに居ればオマワリに家出をして来たのかと問われ交番に連れて行かれ、映画館では「子供は入れないぞ」とはねられ、僕はいつも下を向くしかなかった。

成人式を迎えるというのに僕の背丈に合うスーツはどこのお店にも無かった。

皆、僕の頭の上で話をしている。

人の声は僕にはいつも上から降るようにしか聞こえてこない。四十歳になっても後ろからは「その子供さん」と言わ

れ、大人社会に入れない悔しさと哀しさだけを胸に溜め込んできた。

田舎を出る日の朝「お前を小さく産んで済まないね。許しておくれ」と言う母の涙だけが今も僕の心に残り「負けなぞ」そう思っ生きて来たけれど。

今朝、駅前ウィンドウに、他人の胸程の高さでしかない自分の姿を見た。

「この高さが僕の世界なんだ。是以上にも是以下でも無いこの位置で僕は世の中を見てきたんだ。これが僕なんだ。是からもこの位置で僕は生きていくんだ」

見上げる空に街路樹も秋の深まりを知ってか薄く黄色味を帯びていた。

「是からは自分を責めるのはやめよう。自分に優しくして上げよう」

何処からか僕にささやく声が出た。

(中区)

「入選」

ザリゴンの歌

大庭 拓郎

水槽の青暗き水をとりかえると

ザリガニがくつきり動き

自慢の腕をもたげ

ぶくぶく泡を吹いて雄叫びを上げた

メダカ採りの網に迷い込んで

居候の憂き目をかこち

メダカやフナたちとの共同生活だ

ドジョウとタニシも居る

水槽の縁をぼんぼこりと

叩くつるべ打ちがご飯の合図だ

その刹那、ザリガニは

手足をぴんと伸ばして

さつと身構える

まるで忍者のようだ

水草の天辺に這い上がり

万歳のポーズを取る

ご飯は理不尽極まりない

メダカの餌だから

有りつ丈の知恵で頑張らないと

食い逸れて飢えてしまう

見掛けによらず

ザリガニは逞しく賢い

蟻螂の斧みたいな腕を振り回して

ご馳走を手繰り寄せ

イソギンチャクみたいに

がぶがぶと吸い込む

メダカが迫ると飛び下りて

底の砂利を頬張る

こぼれ落ちたご馳走を一緒に呑み込んで

クジラみたいに口髭でこして食べる

ザリガニは砂利を食べる時と

眠る時以外は絶対に俯かない

すごく勇敢な挑戦者だ

ザリゴンと名付けた

二人の夕餉の膳に足るほどの
カレーを作ればザリゴンが覗く

(南区)

「入選」

Mへ捧げた葬送歌

白井聖郎

「一緒に死にたい」

君が囁いた あの日約束

僕は君に 夢を見せていた？

僕が君に 夢を見ていた？

ふたりで 壊れよう

この世界から 逃げよう

行きつくところまで 堕ちよう

聞えてくる嗟い声

同情の？ 好奇の？ 侮蔑の？
「かわいそう」「腐っている」

もつともつとふたり 遠くへ
誰もが届かないほど 遠くへ

「私を殺してくれますか？」

僕が頷いた あの日沈黙

僕は君に 何を見せていた？

僕は君の 何を見ていた？

ふたりで 壊れよう

この世界から 逃げよう

行きつくところまで 堕ちよう

月明かりのない凍てつく海辺で

涙を浮かべながら お互いを 切り刻んだ

笑った

もつともつと深く 傷を

朱に染まるほどの 傷を

大切な思い出も 大好きな女性も

無情に 無様に 無惨に

美しく 血に まみれた

遠のく意識と ふたり

流れる血を洗う波に流され

何も 聞こえない 何も 届かない

望んだ世界 夢の彼方へ

そして 思い出せない それから

君が消えた夜

遺された僕 残された傷痕

羨望 憎悪 不安 罪悪感

君を 堕としたまま

君だけが 逝ったまま

戻れない あの日々たちよ

「入選」

死者たちの言葉を超えて

すぎき としやす

言葉は死者たちの形見だ

死んで行った者たちが

我々に残して行った遺言だ

私たちは生きるため

ほんの少しの間だけ

借りて

息をつなぐため

恋を語るため

使わせてもらうだけだ

私たちは言葉を

すでに失ってしまっている

自らの言葉を

私たちの言葉を

すでに失ってしまっている

血のついた

温かいぬくもりのある

(中区)

言葉を

すでに失ってしまったている

自らが生み出す力を

もう昔に投げ出している

私たちの言葉は

死んで行った者たちの

形見と遺言で影を持たない

生きている証しの

呼動を持たない言葉だ

借りものの言葉だ

もう十分ではないのか

我々に

私たちに

世代の言葉は

形見を捨て

遺言を見限り

我と私たちは

そのものになることで

一つの大きな宇宙に

連ながつて行けるはずだ

本来の存在として

ブラフマンとアートマンの

言葉として

人となって

宇宙を自らと

言葉とすること

形見でない

遺言でもない

一つの大きな宇宙に

連ながり行けるはずだ

死者たちの言葉を超えて

(浜北区)

「入選」

歩いてきた

高柳龍夫

私の足取りといたら
たいていは違っていて
いろいろ

頼りないけど未来には希望

よちよち

小さいながら足早に

とことこ

素早い素早い

さっさっ

跳ねるように踊るように

ひよこひよこ

道があまりに平らであれば

ぺたぺた

わき目もふらず

すたすた

何か面白いことないかな

うろうろ

思い込んだら

どんどん

重くて苦しい

えっちらおっちら

足がもつれて

よたよた

倒れそうだよ

よろよろ

気取って見せて

しゃなりしゃなり

時には大人に見せよう

しずしず

誇大妄想

のっしのっし

元気がない時には

とぼとぼ

まわりのことなんか気にせず

のこのこ

心に衝撃受けばうろたえる

おろおろ

何のあてもなければ

ふらふら

……………

こんなふうにして

今まで歩いてきた

そして

与えられた幸運を思い知り

今日も私は歩く

ひたすら

てくてく

(西区)

「入選」

問われている

辻上 隆明

Sさん 静かに雨が降っています 心の安らぐのを覚えます
五十年も前のことになりましたが 眠りに入る前に突然 トタ
ン屋根を打つ雨の音に 安らぎを覚えたのを思い出します
太郎と次郎を眠らせた雪と同じように 大いなるものに慈し
まれ 母なるものに抱かれる あの安らぎです

お別れの時のあなたのお顔も安らかでした 静かに笑みを浮
かべ 穏やかに安らいでいらっしやいました

生前の 肉体的精神的な苦しみの多かったあなたの日々を想
った時 〈死〉は〈生〉からの解放 死ぬことを成仏する仏
に成ると言った先人の叡知に感服しました

しかしSさん 安堵すると同時に あなたの心残り 無念さ
を想っています

理想の社会 個人を大切にした社会主義 その希望を託した
国々が 国際社会に主張しつつも無惨に裏切り続けてきた
今も裏切り続けている歴史的現実 どここの国にあっても 権
力を握ったものがそれを巧妙に悪用し 既得権益を失うまい

もつと得ようと醜く策を弄する現実 一つの時代にも〈世直
し〉それ以前の〈人直し〉が必要です 仮面を被った無恥
な輩に対抗するには 彼らと異なった価値観や在り方が要り
ます 硬直した笑いに對して柔軟な笑いで向き合うように
Sさん 本音を言いますと 私の内部には悲憤の感情もうご
めいています

世間の栄達から下りてゆつくりと歩いて欲しかった 眼を家
族の一人ひとりに優しく注いで欲しかった 奥さんやお子さ
んを緊張した生活から解き放って安楽の時に憩わせて欲しか
った あなたは己正義を生き急ぎすぎました

生きている者は亡くなった人に問われています 私もまた
あなたをはじめ幾多の畏敬する先達に問われています

最近私は よく「われわれが人生の意味を問うのではなくて
われわれ自身が問われた者として体験されるのである」とい
うフランクルのことを思い起こします

(中区)

「入選」

ジーンパン

長浜フミ子

今年に入って
余りジーンパンを穿かない
だんだんずるくなつて
ゴム入りのだぼだぼ気味のズボンばかりだ
なんせ楽だから

先日

娘から宅急便でジーンパンが五着届いた
全部新品 ナイロンの袋に入ったまままだ
捨てるのもつたいないから穿いてみて
後は捨てて下さい とメモが入っていた
早速、足を通してみたら

穿けたのは二着

それは それは 細身のストレーツ
裏がついていて とてもしなやかだ
しかも 膝の辺が脱色してあり

この私の短足が 長く格好良く見えるのだ
大満足
こういうの 一度穿いてみたかった
でもわざわざお金を出してまで
買う気にはなれなかった
それが 娘のお蔭で 実現できて良かった
小さい事だけど それが嬉しい
今日も大好きなジーンパンを穿いて
シャキ シャキ動いている
ジーンパンに負けない
若々しい老人になりたいと
夢を持った

(東区)

「入選」

錨のマーク

中村 弘 枝

何年か前の夏鍛冶町通りで
白い服に黒のラインの入った帽子姿で
私は掛け寄って
兄が海軍でしたので
なつかしくつい声をかけましたと
錨のマークはつきりと見える

その方がおっしゃるのに
外出する時はこの白い服着て帽子をかぶると背筋をぴんとし
て立派でまぶしくみえた

戦後六十余年

この帽子をみても知らない人が多いだろう

その後バスターミナルで
スーツを着て海軍の帽子の二人に逢った
その方が自然に私に

今日は戦友会だ

出席者も減ってきた

ああ 今年も出席出来てよかったと

吐きだすように言った

その方の背後に戦さの姿が浮ぶ

言う言葉もなく涙がにじむ

戦争を知らない人の方が多くなりつつある

地球上に戦いや争いが起きてい

今日本は平和と思っているだろう

バスターミナルは旅行らしい若者や

中年女性のグループの笑い声がする

あっ バスが来たと立ち上り

肩越しに手を振ってかけていった

その後姿に 一歩下がって一礼をした

(中区)

胎児の目で 見つづける

の
い
り

生れたとき手があったか足があったか
体があったか皮膚があったか
覚えてるかい 犬や僕や木や星やバクテリアたち
サンカラストーン 道端に咲く花

肌ざわり 見えるもの 音 香味
感覚を分裂してしまう ことは
人というバクテリア有機体を常に攻撃する ことば

舌癌がある 再発している
癌の原因がある
癌が消える道もある

麻酔で八重洲から九重橋を渡り
三番町から四谷は捻じれが蔓延って
手術台の体は未知の意識へとワープで持って行かれる

吹く風は 船など思いもかけず
流れる水は船を知らず
吹いている 流れているは 誰の知ったことでもない
ことばに頼った舌を三分の一断ち切って
缶切りの舌の切っ先に加工
岩石の裂け目に射精する
津波が来ないうちに

ミクロの決死圏に入る
仏陀の鉢は三千世界を飛ぶのに
ここには人影さえない
トリノだけが井戸の底をかすめ影武者の旅をしている
瞬間 海底から現れたのはエメラルドブルーの巨大な発光体
胎児の一つ目で
見つづける

(中区)

「入選」

鏡

早川奈美江

ココロを映す鏡
自分から発信する言葉

優しく穏やかな言葉

きつく他人を傷つける言葉

どちらを選択するかによって変わる

優しく穏やかな言葉を発すれば

やまびこのごとく返ってくる

きつく尖った言葉を発すれば

やまびこのごとく返ってくる

言葉や表情

その時々々の感情

心の動き

言葉はそれらすべてを
映し出す鏡だ

(袋井市)

「入選」

二合瓶のうた

深田千代子

菩提寺の和尚さんのお経が終る頃
赤ん坊が泣いた

おお 赤子が 寺で飼っておる山羊の乳が出始めた
持ちにくるがよい

少女は自転車を乗り始めていた
存分に走って見たい と

親に安心をさせ早起きを決める

大人用の自転車三角乗りで

師走の町中 カチン カチンの音と走りゆく

母親が用意してくれた空の二合瓶

風呂敷にしつかりと包み

ハンドルに括られている

ペタルを強く踏み込むと

カチン カチンとハンドルに当る

穏やかな坂を越えると天竜川

川の流れに添った下り坂

カチン カチン 二合瓶は跳ねる

農道をまっしぐら

寺に着く

まだ温かい山羊の乳を受取る

一里の帰り道

天竜川の川面に朝日は煌めく

なるべく坂を登り切ろうと

ペタルを強く踏む

二合瓶は揺れる大きく揺れる

乳を待つ十歳年下 弟の顔が浮かび

ペタルを踏んだ

家の近く床屋の角を曲る

母親が外に立ち此方こっちを向いて大きく

両手を広げて待っていた 思いつ切りの笑顔

登校前の走り使い何度だったか覚えはない

或る日 今日でお終いよ と告げられた

終った淋しさ今は

思い出の音となってくる

カチン カチン

(天竜区)

「入選」

天使の贈り物

優

秘

私はキミに会えて良かった。

キミは私たちを選んでくれた。

私のお腹にキミが宿って、

少しずつ成長していく。

キミは私のお腹を蹴った。

私はキミにたくさん話しかけた。

キミの写真を見て、成長を確認。

キミは男の子？ 女の子？

私は楽しみで仕方ない。

キミは女の子だった。

お腹痛い。

私とキミとの戦い。

キミは産声をあげて産まれてきた。

私は汗ビッシヨリだったけど、

キミを見たら、疲れがふっ飛んだ。

キミに出逢えてありがとう。

(南区)

詩選評

埋田昇一

いい詩を書くためには、まず対象をしつかり見つめることです。そしてそれにふさわしい言葉を選ぶことです。さらに、その言葉が「詩」であるためには、詩でなくては書けない、なにか日常を超えた新しい発見があることです。日常を書くにしても、思ったこと、考えたことをそのまま書いても「詩」にはなりません。新しい発想がなければなりません。さらに、そしてよりよい「詩」になるためには、言葉にふくらみがなければなりません。

第一位「源じいさん」

この農にこそしむ源じいさんの暮らしを淡々と、しかし的確に描いています。「米は悲しみも喜びも共にして／涙の形をしていると」、「神もきつとわれわれと同じように／天と地の空間をさ迷い押し合ひして」の言葉にまさにまぎれもなく「詩」を感じます。一編の詩の中に、どこかにそうした言葉がほしいのです。

第二位「八十路」

八十歳を超えた老いの心情がよく書けています。この作品にも「八十路を歩む 私の心の部屋のような／沈黙の空気の中で」「心を折る風が 孤独を置いてゆく」の言葉に「詩」にしか書けない発見があります。

第三位「ある願望の果てに」

直立不動の姿勢をしながら、それぞれの動作に願望を込めている作者の声が聞こえます。しかし、そうした自分に、「私は何をしているのか」と問い、「しょぼんと惨めな顔つきの／ゴミ袋を持った」自分を見つめている。その対比が面白いです。終連の「去っていった人」は、もしかすると戦時中の出征する兵士の面影をみたのかもしれないですね。その他に、印象に残った作品をあげてみます。

胎児の目で見つめる世界の異様な風景を描く「胎児の目で見つづける」、言葉や表情、その時々の感情、心の動きを映すという「鏡」、泣いている赤んぼうのためにお寺で飼っている山羊の乳を運ぶ健気な娘を描いた「二合瓶のうた」、旧海軍の錨のマークを付けた帽子を被っている人に亡き兄の面影をみる「錨のマーク」、色あせたアルバムに父母や兄弟の面影を想う「偶感・時」、なぜか背丈が伸びず子ども扱いされた悔しさを詠った「ウインドウ」、愛する女性と心中を図ったが自分だけがひとり生き残った悲痛な思いを綴った「Mへ捧げた葬送歌」、父や祖母の懐かしい背中、そして自分より優れた所を持っている多くの人たちの背中を見つめる「背中」、社会主義の理想と希望を無残に裏切られた国々や人間の現実を見つめる「問われている」など。いずれもいいテーマや題材を見つけた作品の真摯な姿勢に共感します。しかし、初めに書いたように、それが「詩」になるための新しい発見、発想がなければなりません。そのためには、すぐれたいい詩を沢山読まれることをお勧めします。

短歌

〔市民文芸賞〕

病む母の腕に手を添えスプーンの白いひかりを口へと運ぶ

南区

赤堀 進

見たこともないほど笑ひ見たこともないほど泣きて娘が嫁ぎゆく

中区

松浦ふみ子

透析を終えて立ちたる男らは短いことば置いて別れる

中区

石渡 諭

「版画とは板の心を聴くこと」と頼すりよせて志功の彫れり（★棟方志功）

中区

石原新一郎

告げ口をしている少女の声聞こゆ金木犀の向こうがわより
夕暮れのエスカレーター上り来る冬の帽子の人のおとがい
みつちりと筋肉詰まれる双肩を尚たぎらせて力士が戻る

中区

柳 光子

夢に来る亡妻を未練^まと思うより生きる力と信じるわれは
すっきりと明日の顔を見るために目薬をさすパジャマの儀式

南区

大庭拓郎

「入選」

恐ろしきものなど無きといいつつ鏡の前に
言葉うしなう
浜北区 幸田 松江

窓の辺の三面鏡に装ふとき空いつばいに鰯雲
湧く
中区 伊熊 保子

わが夢にはつきり見たり亡き妻が風呂敷いっ
ぱい提げくる姿
西区 柴田 修

お台場の夜席に座せる観光の異国の人は大く
ましく食ふ
煌煌とレインボーブリッジの輝きて蝶ネクタ
イを結ぶがごとく
西区 近藤 茂樹

曳く手にも曳かれる手にも馴れにけりセピア
同士の黄昏の道
足萎えし妻の仕草の愛おしく肩を抱けば瞼ふ
せけり
中区 のぶ 恵

まろやかに味返りする古茶がよいきき役とな
りてしみじみ味はふ
中区 坂東 茂子

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳

浜北区

すすきとしやす

鈴の音のやまみち降るる白山の耳を超えゆく
風まぜの霧
「お日の出」の白山比咩の神社より太鼓に始
む真白き祈り

中区

寺田 久子

われもこう吾亦紅の文字愛し華やぎ遠く在るがま
まにて

中区

織田 恵子

七十五と逆さにしたき五十七歳勘三郎の逝去
を惜しむ
這ひ這ひが突如階段のぼりゆき祖父さま慌て
て二階まで追ふ

東区

鈴木 壽子

道具合せにあれこれとをり雨の日は立札卓の
漆が匂ふ

中区

浜 美乃里

今日ひと日無事で過ごせた良かったと見上ぐ
る写真やがては遺影

東区

能勢 明代

逃ぐるとき落葉に滑り尾の纏る人間臭き蜥蜴
を見たり

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳

中区 仲村 正男
 門前の店に求めし遍路笠面映くして目深に結ぶ
 同行は影と決め来し遍路旅のわれにささやく
 流れも風も
 行き暮れし遍路山里月あれば急ぐことなし野宿と決めて

西区 岡部 政治
 ビートルズ全共闘団塊と呼び名変われど皆吾が世代
 三度目の癌の告知は手術不可共存せよと医師はなぐさむ

中区 清水 紫津
 春の波ゆたりとなぎさたたいてる子を眠らせ
 る母の手のように
 なつかしき人に逢えたる心地して産衣の曾孫
 いだくその時

東区 小池 薫
 必ずや「なぜ」に答えがあるものと足掻き求めし若き日のあり

中区 中山 和
 何もかもわが手に負へぬと諦むる夕べ穏しく
 月昇り来ぬ

中区 福田 美津子
 パリパリとポップコーンの音たてて若者たちの観る「レ・ミゼラブル」

東区 北野 幸子
開拓の満州道路より望む小さな富士と馬鈴薯
の花

西区 河合 和子
貴方しか話せないこと打ち明けて流れる雲の
行方目に追う

北区 野沢 久子
夕映えの芒の原に草を食む牛逆光に黒き塊り

中区 江間 治子
花という字がよしと決め太筆でぐいと書きた
り習字のクラブ

中区 高畑 かづ子
気になることひとつ済みたる昼下がりに今日は
街まで歩いてみよう

中区 内田 一郎
聞いてる子聞いてるらしき子それぞれにわが
読み聞かせ佳境に入りぬ

北区 清水 孜郎
冷たくも平な面の動かざり謡の喉の微かに動
く

東区 宮澤 秀子
願ひ込めとげぬき地藏みがきあぐ目鼻うする
る面ざしやさし
子を通ひ嫁が通ひし我が母校孫が通ひて想ひ
深まる

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳

園芸店「雑草退治」の表示あり人間の都合の
知恵とふ凶器
中区 知久とみゑ

葬の日の窓より眺む白木蓮満開にして天仰ぎ
ある
浜北区 岩城悦子

古毛糸ちぢれたままに編み込んで五色の縞の
若向きになる
中区 長浜フミ子
知らぬ間に鼻の頭を触つて鼻柱が強くな
る時

垂れるほど稲穂の実り刈りあとに血を受け継
げと風はささやく
南区 柿澤妙子

永年をささへくれたる老友の大手術の末逝き
しこの夏
中区 新谷三江子
わかりあへる会話が魅力で楽しかった。
九十二歳呆気なく逝く

青空を丸く切り裂く燕の技も爽やか夏ぞはや
来ぬ
中区 和久田俊文

西区

柴田千賀子

九十の母のくり返す若き日のこと初めてのふりをして聞く

西区

伊藤米子

そう言えば泣くことしばし忘れてた
母が逝った日さよならした日

浜北区

青海まち

病床を見舞いし我の手の甲に話せぬ父の手トントンと合図す

北区

山口久代

女子寮の戦後の飢えを思いつつ夫丹精の紅あづま食む

東区

岡本久榮

うす暗き蔵に残れる陶枕色鮮やかな藍の文様

中区

小笠原靖子

酔うた夫迎えに行きて貸す肩に八十歳のでのひら硬し

南区

袴田雅夫

ひと休みよそ見する間の一瞬に五寸も伸びるきゆうりの仕わざ

中区

手塚みよ

老医師に目許似ている耳鼻科医の若きに替わる訳を訊ねず

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳

生かされしいのちの重みかみしめる被災者の
声静かにひびく

南区 中村 淳子

自転車に日本縦断掲げいる青年の夏走りゆく
なり

南区 太田 静子

行平の陶に馴染みて七草の後の朝あさ粥を嗜
む

東区 村木 幸子

声高に正論はいたその夜はいつもの晩酌が妙
にからまる

中区 幸田 健太郎

カレル橋歩いて渡り古の音楽聞こえる緑深き
街

中区 戸田 田鶴子

稲穂垂れ田んぼアートの「家康くん」かかし
侍らせ収穫を待つ

南区 袴田 成子

凛として家督を継ぎし八十八年兄の労苦に思
いを馳せり

中区 高橋 幸

母と娘の確執ドラマ愛憎の心理描写の五臓を
巡る

南区 井浪 マリエ

清貧で余生を送る人生を一人静かに一合の酒
中区 平野 旭

逝きし子の歳数えつつはるばると越えて来し
北区 増田 しま
かな我は老いたり

四階の病床の窓に現われしうすくれないの月
浜北区 前田 徳勇
を楽しむ
村々にいつものように灯がともりわが病床に
夕飯とどく

もう十年夫亡き後のささえなり一匹の猫に励
北区 あ ひ る
まされつつ

此の雨にやがて諸木の芽は萌えん萌えいずる
東区 内山 敏子
物我もちちたし

通院もままにはならぬ過疎の村元氣に見える
東区 しおくろう
父母も老いたり

門出^{かど}すれば夫の化身か一匹のオハグロトンボ
東区 内藤 雅子
は前に後に

竹島の領有権を主張する朝鮮朝顔泰然と咲く
中区 中村弘枝

屋久杉の丸きお盆にほんわかと盛られしそば
の味うまきかな
中区 今駒隆次

大地震ゲリラ雷雨も神の域人災のみは無き世
であれかし
中区 島井美代子

夕闇のお香匂いて早すぎし友を口々に偲ぶ初
盆
中区 荻恵子

秋深き畑に二本の唐辛子我に見よとぞ燦燦と
照る
中区 富永さか江

難病に負けじと畑に這いながら鋤振る夫を人
よ笑うな
天竜区 恩田恭子

傷つけば新しき泥鰌につけ替へる煩はしさと
指のぬるぬる
中区 宮本恵司

新聞に成りゆきを知るもどかしさ負担増すこ
と勝手に決まる
中区 鈴木和子

西 区 伊 藤 友 治
実朝の万葉ふりを称えつつ病牀六尺子規何思
ふ

東 区 森 脇 幸 子
雨降らぬ畑作に思ふ賢治の詩日照りの時は涙
を流しと

北 区 山 田 文 好
変だなあ有識者つて有色者？出てくるものは
色つきばかり

北 区 古 谷 聰 一 郎
人の手の味わいこそと親方はすし製造機に敵
意をあらわ

中 区 け い こ っ ぴ
偶然をよそおい君と帰る道雨の音さえステッ
プ踏み

北 区 半 田 恒 子
ママママと母の後追い甘えたとし経て孫も
一児の母に

中 区 高 橋 絃 一
敬老の意義が問われる年になり楽しくもあり
楽しくもなし

中 区 小 林 和 子
切れ間より光を放射させながらバツハ奏づる
夕映えの雲
電飾のひと夜開くれば街路樹はただ樹となり
て人を見下ろす

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳

中区 内山文久
ひんやりとしている木陰の夏に誘はれて道路
工夫の昼休みは過ぐ

中区 飯尾八重子
手織紬愛しつづけて五十年今日も着て行く健
康講座

中区 高山紀恵
まあうれし十年経ちて花芽付く静かに咲きぬ
やぶらの花

中区 川上とよ
秋日和大開帳の方広寺友の歩幅にゆつくり歩
く

北区 角替三枝
ここにひと群れ咲き揃ひたる彼岸花確かなる
秋広場にとどく

南区 内山智康
宇治橋を渡れば白き玉砂利に木漏れ日淡く冷
ゆる聖域

中区 畔柳晴康
初詣妻と行きしを記し置く三年日記の一の頁
へ

中区 宮地政子
人生の欲もなくして一日過ぎアートの如く鶴
を折りいぬ

路の臺摘みて朝げのみそ汁の香り豊かに微笑
む吾子よ
北区 鶴見佳子

ご飯粒つけし口もと文鳥の来てついばめりさ
も何げなく
中区 新田えいみ

小夜更けて雨戸ぴたりと立つる時臥待ちの月
雲より出で来
中区 吉野正子

夕風の恋路が浜に雨けぶり絵巻の如く寄せる
白波
西区 河合秀雄

満天の星の中から君と我めぐり会へるは神の
恩ちよう
南区 杉山勝治

桜咲き母の背丈を越す娘手を取り合つて定期
買いくる
中区 安藤圭子

あこがれし風光明媚旧跡を訪ね得ずしてテレ
ビに見入る
中区 金取ミチ子

言ひ訳をいくつか考へ備へしが使ふことなく
歳月の過ぐ
北区 大石みつ江

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

東区 松野タダエ
診察日陽光ひかりのごときひと言に岐路の風景鮮やかに舞ふ

中区 倉見藤子
初春を寿ぐごとく風花は舞ふと見せては忽ち消えぬ

南区 鈴木芳子
ふる里の梵鐘懐かし耳遠き私に届く春の調べよ

西区 脇本淳子
二十四の瞳輝く子等の像我が教え子もかくありたるか

中区 錫多健
母呟く「目から水出る嬉しくて」特養ホームに笑ひ漂ふ

中区 木下芙美子
夕されば白き綿毛を丸く開き白合歓の花風にゆれゐる

中区 江川冬子
老いの血をかき立て遠い初恋の夢揺り戻す祭り提燈

中区 前田道夫
日の暮れの窓どんよりと明るめり一生の暮れにも光あれかし

中 区 岡 本 蓉 子
顧みる子供の頃のさまざまを病む姉に聞く春
の日溜まり

東 区 北 島 は な
炎天下命の限り咲き続け夕日に散りゆく花に
なりたいたい

北 区 伊 藤 美 代
墨の香を筆先に乗せかな文字はとまどいなが
らすべりゆくなり

南 区 太 田 あ き 子
週一度若きに混じり汗流す小さき球にスマッ
シュ決めて

東 区 寺 田 陽 子
食卓に生けし紫陽花「可憐だね」「清楚だよ
ね」と朝の会話は

北 区 平 井 要 子
春を待ちもろ手を挙げて咲き誇り白木蓮はた
ちまちに散る

浜 北 区 平 野 早 苗
おはようと貴方の笑顔爽やかに励まされ行く
リハビリの朝

天 竜 区 太 田 初 恵
赤き実の光りて愛らし万両は待ちて久しき実
生にて候ふ

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳

川崎の太郎記念館入館すあのエネルギーギッシュ
どこから湧くの

中区 石川 晋

子は親に倣いて打てり鰐口を合格願いて高く
鳴らしむ

東区 森 安次

花を見てありがとうねと行く人に妻の育てし
花が手を振る

南区 白井 忠宏

快晴の元旦の朝息子から電話の挨拶スキー場
より

中区 藤田 淑子

街なかに御殿屋台の勢ぞろいお囃子の娘ら装
いて待つ

西区 水嶋 洋子

年始よりボケ防止とてパソコンの扱い方を教
授されたり

北区 森上 壽子

頭たれ稲は黄金に輝けり御殿屋台の囃子を聞
きぬ

浜北区 竹内オリエ

逆さ富士シャッターチャンスへ突としてスワ
ン着水富士山爆発

東区 飯田 裕子

両親を今日も看に行く愛妻の手にはプリンと
好きなアボガド
北 区 田 中 健 二

真夏日の満月射して涼をよび虫の音高く秋は
そこまで
西 区 渥 美 進

緑陰が良く来ましたとお出迎えひと月振りの
森林公園
東 区 寒 風 澤 毅

短歌選評

村木道彦

今年も面白い作品が多く、絞り込みには苦勞した。担当させていただく立場としては、うれしい悲鳴といふべきだろう。読者より一足先に秀作を鑑賞できるといふことが、選者の特権である。

第一席から順に、次の六名の方が今年の市民文芸賞。

赤堀 進

・病む母の腕に手を添えスプーンの白いひかりを口へと運ぶ
「御飯」や「お粥」や「スープ」やではなく「白いひかり」と言い得たとき、母のいのちを支える作者の敬虔な思いは、私たちの胸にも確かに届くのである。

松浦ふみ子

・見たこともないほど笑ひ見たこともないほど泣きて娘が嫁ぎゆく
「見たこともないほど笑ひ見たこともないほど泣き」という、かくもストリートな表現はどうして出現したか。この泣き笑いはそっくりそのまま作者自身のものであったからである。

石渡 諭

・透析を終えて立ちたる男らは短いことば置いて別れる

いわば透析仲間とでもいふべきグループがここに在る。「短いことば置いて別れる」に、仲間内での適度に保たれた距離感が、成熟したコミュニケーションを示していてもいい。

石原新一郎

・「版画とは板の心を聴くこと」と頬すりよせて志功の彫れり

「頬すりよせて」が巧み。「板の心を聴く」イメージとダブって効果的。だから作品が生きて立ち上がるのである。

柳 光子

・告げ口をしている少女の声聞こゆ金木犀の向こうがわより
夕暮れのエスカレーター上り来る冬の帽子の人のおとがい
・みつちりと筋肉詰まれる双肩を尚たぎらせて力士が戻る

一首目と二首目は、最初に作者のイメージがまず在ってそれに添って組み立てられた、まことにオシャレな作品。「最初に言葉ありき」という立場から作られているのだが、こういう作風の裏側には、三首目に發揮されているような、リアリズムのしたたかさが不可欠だろう。ベテランが創作の秘密を見せてくれている感がある。

大庭 拓郎

・夢に来る亡妻を未練と思うより生きる力と信じるわれは
・すつきりと明日の顔を見るために目薬をさすパジャマの儀式
一首目、亡き妻に対する未練を、未練と思わないという思いに私は胸打たれる。ともすればくじける自分に鞭打って「目薬をさす」作者に私は言葉を失う。短歌とは何か、多分技術を超えてたましいの救済なのだろう。

最後に入選作の中から、紙幅の許す四首を挙げる。

幸田 松江

・恐ろしきものなど無きといいいつつ鏡の前に言葉うしなう

柴田 修

・わが夢にはつきり見たり亡き妻が風呂敷いっぱい掲げくる姿
の ぶ 恵

・曳く手にも曳かれる手にも馴れにけりセピア同士の黄昏の道
・足萎えし妻の仕草の愛おしく肩を抱けば瞼ふせけり

定型俳句

〔市民文芸賞〕

風呂敷の四隅ほどけて春こぼる

中区

澤木幸子

うみたての卵の重さ鳥渡る

東区

石橋朝子

地歌舞伎の席に突然おでん売り

浜北区

松本重延

嬰の春顔中口にして笑ふ

南区

伊藤久子

夏暖簾大きな土間の広がりぬ

西区

山本ふさ子

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

菜の花へ生まれしばかりの仔牛かな

西区

野中美美子

腕高く上げて撒かるる年の豆

西区

岩崎芳子

産着より足蹴り出して小春かな

中区

大村千鶴子

沖よりの潮目ひろがる春の色

西区

森下昌彦

一冊の新刊図書や小鳥来る

南区

大田勝子

「入選」

花の種親子の間ほど空けて蒔く

中区

澤木幸子

融通のきかぬ人ゐて心太

青みかん四角四面の固さあり

養生訓らしきもの添へ敬老日

朱の扉開きて秋を送りけり

東区

石橋朝子

蓑虫を揺らし別れの予感かな

小説のモデルが歩く星月夜

野紺菊飛行機雲も色を持つ

玉虫の死して浄土の色となす

浜北区

松本重延

彷徨へるたましひの色返り花

指ほどの円空仏や冬銀河

野仏の道に色鳥来る日和

毬栗や口尖らせて反抗期

南区

伊藤久子

時鳥言ひ負かされてしまひけり

さはやかや初陣校を応援す

手間隙かけぬ男の料理残暑なほ

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

蒼天へ鶏頭すくと立ちにけり

西区

山本ふさ子

子ねずみのごとき通草の実の二つ

木曾馬のゆつくり走る村祭

金の目の黒猫がある十三夜

棒稲架の昏れて野良着の湿りかな

東区

鈴木千寿

この里に絆のありてお茶の花

父の座に座して今宵のとろろ汁

神の留守卒寿の船を漕ぎ出さむ

天地も静まりて待つ初日の出

西区

和久田りつ子

春の水奏でるやうに流れけり

青嵐我が日の本に吹き渡れ

一輪の侘助活けて今日を生く

初芝居黒子の走る舞台裏

西区

鈴木智子

白障子箴^{わざ}を飛ばして葛布織る

鶏頭花炎える花壇となりにけり

天水桶伏せし旅籠や秋暑し

東区

大切なメモをなくして春愁

堂堂と山車の横切る大通り

秋晴や三十階のハーブティー

丹田へ力を込むる霜夜かな

中区

禍も福も列島つつみ年暮るる

残菊や身に余る日を賜はりぬ

熟柿空に日本の色風のいろ

鳥渡る遠つ淡海に浪立ちて

鈴木浩子

中区

冬木立金星大きくまたたけり

冬の蝶風の深さへひとり旅

鳳仙花はじけ昔へつづく道

ラ・カンパネラ厨に流し年果つる

伊藤サト江

南区

春一番羽揚げたる孔雀かな

二番目に好きな花です藤の花

十五夜に願ひ事する一つだけ

数へ日や果たせぬ事の多かりき

白井宜子

坪井いち子

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

北区

冷奴シンプルがよし葱かつを

地球儀を廻してめぐる秋の旅

屈託のなき子らの声魂送る

朝ごとに咲きつく芙蓉数へけり

西区

花は葉に一本締め
の別れかな

玉音の記憶褪せなき終戦日

夏潮へ漁港出で行く新造船

夕闇の天守に猛る虎落笛

安間 あい子

西区

鬼百合の花びらぐつと反りかえる

気象図の縦縞模様寒波来る

歩道橋渡る人なき寒の晴

西区

就中仔牛の踏める春の土

路地裏を蟹の過ぎれる雨上がり

太鼓打つは風を打つこと浦祭

刑部 末松

中区

命名の墨書鮮やか秋澄めり

思惟仏の解かぬ頼杖日脚伸ぶ

冷まじや海津波また山津波
すさ

野中 芙美子

岩崎 芳子

大村 千鶴子

西区

森下昌彦

西区

浅井裕子

遠くより午後のサイレン寒明ける

眉月の消えなんとして消えやらず

かかとより踏み出す一步青き踏む

秋天の新型車輛旅気分

風を追ひ風に追ひつき野火走る

みせばやの咲きをりしかと思ひいず

南区

大田勝子

東区

飯田裕子

産土の箒目正し神の留守

老松を先ず金に染め初明り

春耕の足裏ふかふか潜りたり

陶狸ぼんぼこしさうな花の夜

空蟬の秘めたる力満ちにけり

鳥帰るVの形で嶺に消ゆ

南区

赤堀進

中区

池谷静子

しぐるるや海の中まで熊野川

母は子にたんぽぽのわたぷつと吹く

夕風に光りとなりて散るつばき

二才児やまたいで見詰むありの列

ずんずんと祭りの中を隅田川

しゅっぱあつ電車ごっここの盆休み

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

西区

石塚茂雄

浜北区

岩城悦子

絵馬に書く願ひ事無き願ひをば

能面やすつと涼風通りぬけ

不器用に生きて古希なり福寿草

独り居に石路の黄の眩しかり

目の前をついと横切る鬼やんま

大花野花野に在りて一人なり

西区

伊藤しずゑ

東区

岩崎陽子

七曲り下だれば石路の花明り

胎児この蹴りの強き日もあり柿を剥く

寄り添ひて蕾ふくらむ露の臺

雨戸二枚すとなと繰れば鴈日和

縁台に忘れられたる団扇かな

小春日に母となりたる子の寝顔

中区

今駒隆次

中区

右崎容子

蝸牛雨上り道ひとり旅

山鉾のクライマックス辻回し

晩学を恥づべからずと植木植う

鉾天に延び京の街人の渦

着ぶくれて自転車をこぐ幼なき子

若衆の鉾引回し佳境なり

啓蟄や崩れしままの築地塀

中区

大倉照二

水澄むや石の丸みに魚の影

道標の文字うつすらと初時雨

整ひて古刹の庭も冬を待ち

中区

大平悦子

真つ白な絵日記帳や夏休み

囀の空へライオン大あくび

どんど焼き青竹はぜて終となる

東区

岡本久榮

春うらら下校の子らの路線バス

秋の宵足音たった一つかな

梅雨入りやチェロの調べに身を任せ

中区

小楠恵津子

又一つかサブランカの香る朝

門火焚き父在すごとき夕餉かな

雛壇の刀にそつと兄二人

東区

小野一子

叢草や四枚の苞の白きこと

一株の山吹ありて寺暮るる

秋の風蔓うめもどきはじけけり

中区

小野田みさ子

落花生土に残りて新芽出す

古民家に蔦の紅葉からみつき

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

制服の肩の直角風光る

北区

梶村 初代

ふらここを漕ぐや整備士昼休み

浜競馬人馬転がり大砂塵

西区

坂田 松枝

靴紐を結ぶ旅人髪涼し

色葉散るそば降る雨の土管坂

墨の香にひたりつつ描く福寿草

中区

加茂 隆司

西区

佐藤 政晴

炎昼に火花散らして鉄を組む

大鯉のぐらり向き変ふ水の秋

読み忘れせし本持ちて日向ぼこ

艶やかに秋日を走る馬の肌

霜柱踏みて歩けばララララ

百足虫死す百の用なき脚揃へ

南区

齊藤 あい子

東区

しおくろう

烏瓜花知らずして実は朱く

麦香煎卓袱台白く汚しけり

自惚れも長寿の秘訣冬帽子

釈尊のあくびしそうな春霞

春泥の道ふり向けば己が影

灼熱の墓地に造花の揺れており

新緑の濃淡溪を埋めつくし

西区

柴田弘子

障害の手記読み了へし夜の秋

朝靄のヘッドライトの涼しかり

犇きて水仙の葉の真直なる

西区

柴田ミドリ

覚つかなき手も加はりて雛飾る

片陰は一人分なりバスを待つ

莊嚴や世界遺産の赤き富士

西区

清水よ志江

月光に煌く流れ水澄めり

懐かしきままごと遊び蓼の花

鶏頭を掠めて軍鶏の羽撃ちけり

西区

新村あや子

百匹の蠨螂生るる斧持ちて

そびえ立つ一本杉や鰯雲

秋風や手にする許六の十團子

東区

鈴木節子

仁王門蟻の行列通りぬけ

若葉して静けき水面乱れけり

異国語の追ひ抜ひて行く初しぐれ

中区

鈴木由紀子

台風圏のつしのつしと猫来たる

父とゐてはづむ子の声梅雨明けぬ

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳

西区

高橋 ひさ子

中区

竹下 勝子

浮き雲に溶け入りさうな山桜

暮れかかり暮れぬ空あり夕桜

色褪せしアルバムの父白緋

柚子売りと種の多しをこぼしけり

掌にのせてしみじみ寒卵

残る虫終ひの住処のお決まりか

南区

高林 佑治

東区

田中美保子

方言の田舎言葉や桜守り

調査書に無職と記入梅漬くる

海の潮ほのかに香る端居かな

考へる人となりゐて涼み台

組体操じつと見ている秋の雲

ちんどん屋おんぶの稚の足踊る

西区

高柳 とき子

西区

徳田 五男

短冊に叶わぬ夢を託しけり

茶の山の畝整然として萌黄色

空の青桐の花房つつみけり

一徹に生きて人並蚊に刺さる

花茨奥の奥まで咲きにけり

カーネーション茜の空に匂ひ立つ

朝刊のインクの湿り桜桃忌 南区

中津川久子

秋の夜やあらためて句の入門書 中区

二槁記久

祖母にだけ分かる片言花八つ手

居待月漆黒の海ひろがれり

鉄屑の吊り上げられし雲の峰

六階の窓をひらくや蟬時雨

学内に人影はなし赤蜻蛉 東区

名倉栄梨

秋彼岸間はず語りのやうに雨 東区

能勢亜沙里

母の日の花屋に迷ふ小半時

子規を詠む文字の薄れも露けしや

風のままなびく芒に触れし道

頂きし新米をまた振る舞へり

西区

西尾わさ

西区

野田俊枝

古本にアンダーライン頼祭忌

釣り舟を置きし浜名湖秋日和

ジーンズの破れがお洒落街薄暑

それぞれの高さを決めて藁ぼっち

枯菊を焚く陽だまりの香に酔ひて

あちこちに木の実落ちたる風の後

小
説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

先客の居し古本屋日脚伸ぶ 中区
 空店舗玄関高き燕の巢

浜美乃里

中区
 腕白の蹴飛ばしてゐる夏布団
 耕運機上がれる畑に鳥の来て
 沈みゆく冬日汲み上げ観覧車
 藤本幸子

雑念の打ち碎かれし蟬時雨

伴周子

中区
 ひとひらが舞ひてほどなき落花かな
 松江佐千子

十七の挫折の記憶青林檎 中区

伝へたき言葉弾んで吾亦紅

らふそくのしたり固く今朝の秋

子の走る先は見えねど小鳥来る

風花やまだ返信を書かぬまま

藤田節子

南区
 三舟の書を愛で月の客となる
 松村智美

職人の工房狭し江戸風鈴 南区

豆腐屋の由緒正しき冷奴

冬満月勿体無くて物言はぬ

裸虫^{らちゅう}とは人のこととや蛇の衣

なほ小さく母襟巻に顔埋む

中区
春の雷コーヒークップの小さき渦

松本 緑

時流には乗れぬ暮しや水馬

靴底の斜めに減りし師走かな

中区
永らえて白寿までもと菊枕

水谷 まさ

菅笠や稲刈る巫女の顔やさし

夜の更けていよいよ濃ゆき天の川

東区

蓮の花昏き水面に葉を重ね

宮澤 秀子

産土の矢場の灯淡し神の留守

貼り替へし障子明かりに和みたる

中区
木枯しや鳴り継ぐチェロの音温し

宮本 恵司

チェロの弦押さへて熱き冬の夜

弾き終へて松脂^{まつやに}拭ふ霜の夜

中区
潮の香や大古の湖の葉月潮

宮本 みつ

露草の露をこぼして別れけり

百姓の白寿と言へど秋耕す

中区

動くものなき水底や秋澄めり

山田 泰久

里神楽取りし面より湯気立ちぬ

火祭の幣舞ひ上る闇深し

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

踏まれても轍の傍の鼓草

西区

山本兵子

春昼の会話の弾むテラスかな

中区

和田有彦

蹄鉄のまだ履けぬ駒風光る

恋猫の憚り忘れ一途かな

ひっそりと山茶花一輪垣の奥

冬ざれや飛沫かぶりの濡標

西区

横原光草子

南区

渡辺きぬ代

亡き母の仕立て直しの白緋

一筋の風に逆らふ紋白蝶

水澄むや川底の石波に揺る

古書店の女主人の目の涼し

産土の古き白壁蔦紅葉

千の草千の名ありて草紅葉

中区

吉野民子

中区

飯尾八重子

山門の古き仁王も日向ぼこ

梅雨晴間すず風渡る佛間かな

あるがまま祝ふ喜寿なり神無月

大津波波間に無数のランドセル

警策の肩に響きて冴ゆる朝

茸狩り^{しめじぞうたけ}占地^{しめじぞうたけ}雑茸^{しめじぞうたけ}遠き日に 中区

伊熊保子

願ひごと一つ忘れし盆参り 西区

岩崎良一

秋茜ベンチに残る子等の影

北区

伊藤アツ子

手筒持ち燃える若衆心意気

隣より大ぶるまひの法師蟬 中区

梅原栄子

牛舎にてウグイス聞きて乳搾り

秋夕焼浄土の色となりたるか

東区

伊藤倭夫

西区

太田沙知子

名月の揺らぐ浜名湖鯛を待つ

椋鳥の木々膨らませ鳴き騒ぐ

陋宅に石路ばかり輝けり

稲妻や母の一生いかばかり

南区

井浪マリエ

東区

太田しげり

白壁を背に投げ入れの時鳥草

子供の日笑顔を包む柏餅

同じ名の若き看護師秋桜

つばめ待つ今日は飛来の予感がす

中區
せせらぎの音の岩間に水引草

川上とよ

万歩計三千五百歩鰯雲

中區
遷宮の新樹の森にひの香立ち

川島泰子

荒布干す鳶なく鳥の澄める海

西區
初蝶とくぐる山門過去未来

川瀬慶子

キッチンにスイッチ多し花蜜柑

西區
ヘルメット被りて粹な案山子かな

川瀬まさゑ

めぐりくる月日うるはし百日紅

東區
梔子を塗つて作りし喧嘩独楽

北野幸子

園児らの社会見学花アロエ

中區
機械化や今なつかしき田植うた

北村友秀

神父さん藁沓はいてミサに来る

東區
天高し夫の押し行く車椅子

切島正子

茄子の花脳裏をよぎる若き母

南区
短日や川面に写る街あかり

金原はるゑ

癒さるる皇帝ダリア仰ぎをり

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳

師と歩く万葉堤雁渡る

中区

倉見藤子

コスモスはヒッグス粒子を識つてゐる

西区

佐久間優子

眞弓の実爆ぜて酒蔵女杜氏

さつと洗ふひとり暮しの貝割菜

中区

畔柳晴康

中区

佐野朋旦

田圃にも夏が近付く菅の笠

一輪車追ふ三輪車夏夕べ

ドンと鳴る今日は何処か遠花火

ロボットも魔女もありけり案山子群

中区

斉藤てる

南区

佐原智洲子

抱きあげし赤子の産毛若葉風

曼珠沙華人声遠く去りゆけり

朝顔や垣根の奥の木魚の音

捨案山子風の虜になりにけり

中区

斉藤三重子

南区

小百合

葉桜に流れ行く雲雨零す

夏の恋台風のごと走り去り

草を引く手を休めては風をきく

山葵田の清き流れの水の音

西区

青空へ凜と立ちけり冬木の芽

島村やす子

西区

歳重ねそつと紅さす初鏡

新村ふみ子

虫の音の一心にして夜半の雨

更衣姉の形見のコート着る

南区

秋灯十年前の日記帖

下位満雄

北区

夕焼原風と芒が問ふ応ふ

鈴木章子

夕暮の水脈引く小舟秋深し

丹の袴翻しつつ落葉掃く

南区

運動会燕も一緒練習す

白井忠宏

中区

秋に入る雲の形の異なりて

鈴木和子

赤蜻蛉我が物顔に群れて飛ぶ

いよよ退院足踏みしめて秋に入る

中区

草刈の香りの満つる村の講

不知火

東区

竜神めきし霧のうごめく朝ぼらけ

鈴木恵子

紫陽花やオランダ坂に^{けふ}烟る雨

玉砂利の音も爽やけし綿帽子

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳

いち日を存分に咲く稲の花 中区

鈴木利江

ずつと先行列なすや花筏 中区

高山紀恵

初しぐれ手帳を選ぶ大書店

見上ぐれば尺玉火の粉覆ひきて

賜りし一書に学ぶ夜の秋 西区

平幸子

在祭でんでん太鼓をねだりし子 浜北区

竹内オリエ

吉報の客をもてなす新走り

天高し孫子まじりし草野球

中区

高橋紘一

中区

竹田たみ子

御無沙汰を言ひに盆供の墓参り

卒業歌聞こゆる道にしばし佇つ

鮎二匹暫し焼かれず皿の上

旧姓で肩叩かれし里祭

西区

高橋順子

中区

竹田道廣

なるほどと皆うなづきし時計草

啓蟄や二点鎖線を実線に

みどりにも濃淡ありし四方の山

地下道にカオス漂う虹を見る

友逝きぬ灯火のごとき白木蓮

西区

竹 平 和 枝

あやめ咲き友の快癒の近かりき

北区

鶴 見 佳 子

里帰り山の夕餉の茸飯

水無月の田に水きたり魚乗せて

春の海潮待ちしてる海女の桶

西区

田 中 安 夫

襟元を掠めてゆけり初夏の風

中区

手 塚 み よ

若葉風拭き込んだる関所廟

塗り替へしプールへ子等の走り出す

迎い合う二人静かの温みかな

北区

辻 村 栄 市

双方が礼の言葉や秋惜しむ

中区

寺 田 久 子

山々も水も色あり秋景色

大正も遠くなりたる敬老日

空高く柿赤々と燃えるごと

南区

黒葛原千恵子

朝毎の上達目ざまし春告鳥

中区

鳥 井 美 代 子

またひとつ落ちゆく柿のいとほしさ

堰越えに挑戦つづく魚の群

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳

東区
 蝉しぐれ読経の如く鳴き続け
 内藤 雅子

うれしきやオハグロトンボ生き継ぎて
 落蟬のかすかに動く朝の庭

東区
 長浜フミ子

北区
 エ¹ワックス
 A W A C S 桜並木を横切りぬ
 中村 寿

浜松の初子披露はけんか風
 彼岸花律儀いつもの田んぼ道

南区
 中山志げ

西区
 あるかなし風に吹かるる案山子佇つ
 中村 節子

雨やみて鎮守の杜の蟬しぐれ
 浜名湖や岸辺の鴨のかたまらず

北区
 西尾 淳子

中区
 猫じゃらし活けて野の風迎えたり
 中村 弘枝

中区
 天高く讃美歌響く城の跡
 錦 織 祥 山

風鈴の金魚が泳ぐ昭和の音
 亡き人の句集ひもとく夜長かな

鳥雲に平凡な日々でありしこと

西区

野嶋 薫子

鬼百合もそりくり返る昼下がり

中区

袴田 香代子

薄氷の歪みの下で鯉動く

同窓会むかしの呼び名すいちよん

巻きもどし出来ない人生年の暮

北区

野末 法子

青空に修正液と雲の峰

浜北区

橋本 まさや

遠き日の桜のはしご友いずこ

夜空へと漆螺鈿^{うるしらでん}の揚花火

卯の花を胸にかかえて友想う

北区

野末 初江

戯れにあの真知子巻き春シヨール

中区

長谷川 絹代

尺指しに母の名残りの針供養

忘却も善しとして生き桜餅

巫女舞いの衣摺れ微か春隣

中区

野又 恵子

渡り鳥伊良湖の風は揺籠だ

西区

浜名 水月

童謡の時報の聞こゆ青簾

磯笛に浜千鳥鳴く神島^{かんのしま}

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

八十の齡となりて汲む新茶

中区

林田 昭子

伸びたつる南瓜はどこだと探しをり

中区

藤田 淑子

新米の子より届くや誕生日

ミニトマト今年のできは百箇かな

中区

平野 旭

中区

星宮 伸みつ

まいまいのつのが驚く俄雨

地下道を踏みだす一步炎天下

五月空体裁事を投げすてる

文字化けのメール着信文化の日

東区

平野 道子

中区

堀口 英子

デージーや丸を小さくけんけんぱ

一本のとびきり大きな葱坊主

だうだうと冬満月の上りくる

器とは別の白さの冷奴

天竜区

深田 千代子

東区

本楳 優子

瓜揉みや味一級の曲り瓜

草も木も人も息つく虹の朝

上達のみゆるピアノや夏始め

吊し柿信濃の里に色添へて

浜北区

プランターに稲三本を植ゑにけり

前田 徳勇

東区

本堂の軋む音して梅雨入かな

松本 尚子

ビニールの袋に一つ葱坊主

花みかんの匂ひ一山包みをり

東区

玄関のじゃれし靴々夏休み

松野 タダエ

西区

友来る話は尽きぬ夜長かな

松本 みつ子

家中をつなぐ幼児の手やもみじ映ゆ

村中の風を集めて案山子立つ

西区

花入れに花野全てを活けにけり

松本 憲資郎

中区

花筏雲より早く流れをり

村井 みよ

樹上舞ふ鳶に送られ神の旅

縫初の絹糸ピシリと繕り戻す

中区

花芒頬で分け行く砦跡

松本 賢蔵

東区

輪唱を楽しむごとくちちろ鳴く

村松 津也子

億年の洞窟出れば天高し

空蟬に命の重さ教われり

さながらに田圃アートの案山子かな

西区

山下美恵子

夕闇に灯り求めてかぶと虫

振り向けば父の声する秋の風

中区

山田 知明

春昼の庭にまどろむ雀かな

蔓薔薇のアーチの香りくぐり行く

西区

山本晏規子

薄氷に金魚は色にかたまりて

ひとり居に古りたる内裏飾りけり

中区

横 田 照

つる引けばむかごポロポロ落ちにけり

荒塩の秋刀魚を焼けば火も荒ぶ

西区

和久田しづ江

朝焼けや案山子蓑笠装へり

年越しの煩惱一つ鐘鳴らし

中区

和久田俊文

曼珠沙華色深まりて道標

茜富士写して棚田緑なす

西区

渥 美 進

小鳥鳴く桜ちらちら雨の朝

北区

あ ひ る

差し入れのスイカを食べて涙出し

南区

あべこうき

裏年は環状剥皮の成木責め 北区

清水孜郎

とり鍋を家族で囲む笑顔かな 東区

時久シヅ子

昆虫の大好き少年秋日和 西区

新村八千代

浴衣着て祭り夜店の娘たち 東区

天竜子

新茶には新茶の香りありてこそ 西区

新村幸

茶碗二つ友と語らう萩の寺 中区

戸田田鶴子

石^つ路^わの花庭隅に咲く自己主張 北区

鈴木信一

風呂敷をひろげて見れば冬景色 中区

戸田幸良

秋茄子の盆栽仕立鈴生りに 中区

高山功

コスモスの咲きほこっている色模様 南区

永井真澄

花菫一枚挟み句帳閉づ 西区

田中ハツエ

おでんの具あれもこれでも溢れけり 中区

永田恵子

定型俳句選評

九鬼あきる

今回の応募者は二一九名。若干減少したものの、内容的には意欲的な作品もあり、今後の充実が期待される。最終的には、次の十句を第五十九集の浜松市民文芸賞に推薦する。

・風呂敷の四隅ほめて春こぼる

澤木 幸子

この人の作品の特徴は、日常の暮しの中での感動を詩に掬い上げているところだ。掲句も、風呂敷が解かれた一瞬を見事に切り取った。「春こぼる」が眼目。これで拵がりのある句になった。何が出て来たかは読手次第。これがまさに俳句だ。

・うみたての卵の重さ鳥渡る

石橋 朝子

「うみたての卵の重さ」は、即ち生きとし生けるものの命の重さでもある。掌にのせた時の温かさと共に。「鳥渡る」の季語を持ってきたところもこの人の手腕と言ってよい。

・地歌舞伎の席に突然おでん売り

松本 重延

地歌舞伎では掛け声や賽銭が飛ぶのはよくあることだが、突然の「おでん売り」の登場は、意外性があって面白い。あえてそれを一句に詠み込んだことにより、俳諧味溢れる作品になった。「彷徨へるたましひの色返り花」も意欲的な作品であった。

・嬰の春顔中口にして笑ふ

伊藤 久子

赤ん坊はうぶな生命力のかたまりである。まして、その笑い顔とくれば、愛らしいこと極まりない。「顔中口にして笑

ふ」の素朴な表現に大きなエネルギーを頂いた。

・夏暖簾大きな土間の広がりぬ

山本ふさ子

造酒屋などの大店であろう。昨今、土間のある商家も少なくなってきた。この句、「夏暖簾」を境に現代と近代が垣間見えるようだ。この質朴な詠みぶりに注目した。

・菜の花へ生まれしばかりの仔牛かな

野中美美子

生まれて間もない仔牛が菜の花畑の方へ歩もうとする景か。初々しい生命体である仔牛と明るい菜の花の黄は、確かな未来を象徴するかのようだ。

・腕高く上げて撒かる年の豆

岩崎 芳子

節分の夜の豆撒を詠んだ句である。家庭と言うより神社やお寺の豆撒だろう。「腕高く上げ」がポイント。年男たちの「福は内、鬼は外」の声が聞こえてくるようだ。

・産着より足蹴り出して小春かな

大村千鶴子

真っ白な産着より丸々と出た赤児の足に焦点をあてた。元氣よく宙を蹴り出すような足の動きと伸びやかな詩心に注目。

・沖よりの潮目ひろがる春の色

森下 昌彦

晴朗なる自然賛美の一句。潮境では海の色が濃いところと薄いところがある。薄い青の拡がりに春の訪れを思う作者である。こう言う自然詠はもつとあっている。

・一冊の新村図書や小鳥来る

太田 勝子

典型的な取り合わせの句である。「一冊の新村図書」を手にした喜びが、「小鳥来る」の季語を配して、互いに響き合っている。期待感あふれる一句。

最後に、継続は力です。多作多捨て俳句のリズムを確認し、推敲し、俳句を楽しんで下さい。ご健吟を祈ります。

自由律俳句

〔市民文芸賞〕

彼岸花野火放つ原風景へ立ち尽くす

浜北区

木俣史朗

くちなしはそのままそのままと雨に咲く

中区

宮司もと

夕闇に落葉焚く記憶ひとつに止どめ刺し

中区

河村かずみ

小説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳

「入選」

海に呑みこまれた月が水底に光る

東区

生田基行

黒い波濤に散らばる満月の純白

夕陽が梔子で押し上げた十三夜の月

波間をただよう三日月に星がウインク

石塔に甘酒下戸だった亡父ちちの法要

飯田邦弘

時雨れて寒く傘に残る雨の匂い

始発の電車の音が旅先の宿

北風が月を研いだ小さくなつて光が冷たい
飯田裕子

東区

青空が好き大笑いしてる花こぶし

赤トンボ皆吸取つて大夕陽落ちていった

雨空に遠花火娘夫婦等との宿酒重ねる
伊藤重雄

中区

湯上りの胸をはだけて風入れる

吊橋の揺れ腰で調子とる秋風

朝から機嫌の悪い夫を避ける猫
伊藤千代子

中区

ススキが一斉にこっち向いて笑った

孫を背負うて月に何か唄っている

中区 さ ち え
頼寄せて月待つ時ふわり降りてきた星

夜の風時おり手をのばして月の光にさわる

赤とんぼの野言い澱む言葉胸にひとつ

東区 周 東 利 信

疲れたら休め草を枕にねむたそうな月

遠い目をして心の奥の奥の方で生きている

名月に仏の影あり南無観世音

浜北区 竹 内 オ リ エ

春風ひらひら遅い花粉症預けていく

湖面に満月、秋風に酔うふたり

身も魂もはぐれてぼんやり夜半の月

中区 中 谷 則 子
つわぶきの花の光を映す伊豆の海

出合いはさりげなく銀木屋の香り

紅葉を拾い虫の音聴き押す車椅子

南区 中 津 川 久 子

コンバインごとごと秋をたたんでいく

三日月のぶらんこ漕いでななつのわたし

教室から音符とび出してきて電線の五線譜

中区 浜 美 乃 里

引越す時は連れて行つてと雑貨たち

仲秋の名月みんな見てたらしいな

姉妹で訪ふ彼岸花が迎えるふる里

中区

藤本ち江子

サイレン響き壁の遺影が頷いている今日終戦日

天竜区

岩本多津子

虹の橋渡れば竜宮城が見えてきそうな

能舞台闇に浮かび出でて偲ぶ古

今日は何の祝日かカレンダーの赤い文字

南区

太田 静子

お守りの如く玄関に置く男靴

東区

宮本 卓郎

ちいさな秘密へそつと蓋して遠雷

朝影に柿の若葉は光を散らす

能面の群れ吐きだしてる朝の地下道

南区

大庭 拓郎

行き先なんてひょいと飛び乗ったバス

春雨に芽吹く小径のふんわりふわり

アメンボを見上げる鮎の空は水色

中区

いちご

昏れて街の坂を転がる枯葉たち

南区

加藤美恵子

石路黄金に光る山道をしるす

夢で追いかける眠れぬ夜の時間

やせ細る母両手合わせ何思う

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

独り居に新米どさつと送られし

中区

香代子

早朝の光る半月黄泉の国へ

鳴き尽きたのね蟬のむくろで秋を知る

中区

畔柳晴康

五色紐御手に触わりて祈願する

中区

川上とよ

西区

柴田修

立つ羅漢の亡夫に似た顔探してる

寒空にまだ糸にしがみついて揺れているくも

一斉蜘蛛糸光る雨上がりの通り径

浜北区

木俣史朗

北区

鈴木章子

雲は空の浮き巣誰もが夢乗せてみる

銀のしづく心におちて蒼

傷心の日庭の真赤な椿散る

中区

倉見藤子

中区

鈴木好

鳴き砂小瓶にとじこめた青春

ギャラリーの一点の絵に青春蘇る

中区

花柄の傘赤い傘行く春立つ日

戸田 田鶴子

東区

虫の初音が母を迎えている盆の入り

松野 タダエ

お遍路の結願の寺は紅葉真盛り

足音も遠慮がちな図書館の午後

中区

七人の敵皆鬼籍同窓会

戸田 幸良

中区

我家の軒下風吹く毎に白萩散る

宮 司もと

夢をまだ追って今年の予定表

祝五輪開催決定真夜中乾杯

中区

ぽっかり浮かぶ満月をススキがまねく

錦 織祥山

中区

夏帽子風に取りられて振られた帽子

宮 地政子

ハロウインの日山頭火の日不思議だな

早朝の夫婦の会話一日桜歩道^{ひとひ}

浜北区

ジャズピアノ連弾のような夕立来る

橋本 まさや

湖西市

腰引いて渡る吊橋下はエメラルドグリーン

石 田 珠柳

怒りの姿に青筋立てる青桔梗

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

バラはバラとして死す
中区 石田はま子

日にち過ぎても食べれるか人生の賞味期限
中区 鈴木恭子

紅薔薇の湯にほどけ散るは妖艶ぞ
浜北区 岩城悦子

俺は杜黙生き方すべて勝手律
中区 高鳥謙三

空が狭い青崩峠団栗と梨が転がる
中区 嘉山春夫

風ほころんでくしゃみ二つ
南区 鶴市

ピアニツシモで紅葉踏む少し遅れる鳥の声
中区 河村かずみ

亡夫の声が今も聞える夕焼け雲
東区 手塚全代

年だからと言われたくもない胸の内
南区 白井忠宏

工場二階から聞えるミシンの音も師走
中区 寺澤純

紅を直しておんなの気持たしかめる
西区 鈴木あい子

牡丹に棘とげの生活す
中区 鴫多健

赤とんぼ茜の空にとけ込み舞い舞いている
東区 内藤 雅子

イヴのラウンジの風に酔うネオン
中区 山内久美子

どんぐり五つ秋のお客様座る
東区 長浜フミ子

冬の訪れの早足に心急^せく
中区 横山タカ子

背広のポケット舅のハンカチ入れたまま
南区 中村 淳子

彼岸の日父母の墓前に告ぐることあり
東区 若山 輝子

御簾越しや屈折率見せ時の行く
中区 の い り

さわやかな青いケシの花見る高原の風
西区 浜名 湖人

無職も楽し畑へ出て空を見る
北区 原川 泰弘

自由律俳句選評

鶴田育久

例年によって予選句として二〇句採りました。

○吊橋の揺れ腰で調子とる秋風

○彼岸花野火放つ原風景へ立ち尽くす

雲は空の浮き巣誰かが夢乗せてみる

黒い波濤に散らばる満月の純白

○夕陽が梃子で押し上げた十三夜の月

○コンバインごとごと秋をたたんでいく

教室から音符とび出してきて電線の五線譜

○くちなしはそのままそのまま雨に咲く

姉妹で訪ふ彼岸花が迎えるふる里

遠い目をして心の奥の奥の方で生きている

○頬寄せて月待つ時ふわり降りてきた星

○今日は何の記念日かカレンダーの赤い文字

ちいさな秘密へそっと蓋して遠雷

○時雨れて寒く傘に残る雨の匂い

出会いはさりげなく銀木犀の香り

○夕闇に落葉焚く記憶ひとつに止どめ刺し

夢で追いかける眠れぬ夜の時間

○ススキが一齐にこっち向いて笑った

春風ひらひら遅い花粉症預けていく

春風に芽吹く小径のふんわりふわり

○印は二次予選句。熟慮、次の三句を市民文芸賞に推します。

彼岸花野火放つ原風景へ立ち尽くす

この句、野火放つ原風景と言いながら、むしろそのイメー

ジには荒涼としたものを感じます。原風景とは、文学を志す心の原点であり、作者にとつて俗に死人花とも言われる彼岸花は、戦火を体験した禍々しい炎の色なのかも知れません。それとも幼児期におけるトラウマ的な出来事なのか、いずれにせよ、野火放つ原風景へ立ち尽くすという、この光景には余人を受け付けぬ強い衝撃を与えます。賞に推す所以です。

くちなしはそのままそのまま雨に咲く

ナイーブでとてもやさしい感じの句です。特にそのままのまというリフレインが利いている句です。まして花は白いくちなしです。抒情句としてすんなり読者の胸にしみ入ります。誰にも分かる言葉で表現している事にも好感がもてます。

夕闇に落葉焚く記憶ひとつに止どめ刺し

この句まさにこの一語、下句の止どめ刺すで極まっています。落葉焚きには、多分手紙の類もあったに違いありません。だからこそ想いに止どめを刺すのです。その強烈な仕打ちの演出は夕闇の白さと想いを絶つ炎の色の対比にあります。それは演出ではなく、作者をして役者を演じきっているようにも見えます。

選に漏れた作品では、実は、〈夕陽が梃子で押し上げた十三夜の月〉この句は最後の最後まで迷いました。夕陽が梃子で押し上げたという着眼には、素晴らしいものがあり、その詩的センスには疑う余地はありません。選は無記名なので推測ですが、多分この方は、前回前々回受賞された方と思われるのですが、敢えて言います。(違っていたならごめんなさい)この句の場合、果たして十三夜の月である必要があるのか、それは^{あり}見た目にすぐ分かる冬ざれの三日月とか、洒落て宵闇の三日月とした方が、梃子で押し上げたという特異なシチュエーションにはマッチしているのではないかと思っただけです。

他の作品にも触れたかったのですが、紙数が尽きました。謝々。

川
柳

〔市民文芸賞〕

言い負けてブランコゆらす昼の月

中区

小島保行

赤子ひとり大の大人を振り回す

西区

竹平和枝

点滴を見つめる日々の無菌室

中区

馬渕征稍

クマ蟬の骸枯葉と共に掃く

南区

久保静子

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳

空蟬の明日に迷う夢の影

中区

浅井常義

偏見を拭い明日へ軽い足

少し先歩く姉の背道しるべ

北区

田中恵子

かくれんぼ捜し疲れた夢芝居

母の癖なぞる自分に苦笑い

言いかけて笑い話で終わらせる

化粧とりピエロが探す万華鏡

皆様のお陰ですよと余裕みせ

中区

高橋博

南区

中田俊次

夢でな抱きしめられぬ恋淡く

身に毒と百も承知で止められぬ

急がない歩幅縮めて手を繋ぐ

現代っ子親のルールにそっぽ向き

自分史をはぐれた未練草揺らす

この足で歩きたいから靴をはき

緑陰に癒しの風を待つ手と手

回り道無駄でなかった拾い物

命ある物へためらう花鋏
中区

馬淵よし子

喜びへ胸の釦が納まらず

マンネリの暮らしさよなら髪を切る

幸せと書いてその気になってくる

包丁と格闘してる古希の夫
湖西市

石田珠柳

新品の体重計を叱る秋

子燕の大きな口へ親の愛

触れ合った温みの残る古日記
東区

内山敏子

秋夜長思い出だけの人となる

秋晴れの天まで心吸い込まれ

平凡な日記の余白一句添え
中区

畔柳晴康

まだ米寿負け惜しみする小さき夢

躰いた小石みやげに老いの旅

青空は老いにも夢を抱かせる
西区

柴田修

短冊へ皆な元気な文字ばかり

裏表見せて施設に七年目

予報士を異常気象が悩ませる
浜北区

鈴木覚

草筆り後ろを見れば次の草

真剣な顔のジョークに騙される

風船の糸の範囲に遊ばせる

南区

鈴木千代見

キャベツぱりぱりあなた好みの蝶になる

来し方を妻と繻く^{ひもと}ティータイム

西区

為永義郎

包丁を研いでトマトの試し切り

少年の枯れることない好奇心

全身耳体験談に聞き惚れる

西区

鈴木均

初場所や枳席美人大写し

北区

辻村栄市

背伸びせず等身大の満足度

年わすれ春のトレンド試着室

励ましが心の襞を濡らす妙

逃げ早し三段とびの雨蛙

ひと色を足すと広がる明日の地図

東区

竹山恵一郎

来年へ夢を繋げる手帳買う

中区

鶴見芙佐子

節くれた指から愚痴は聞こえない

病む父が床で聞いてる笛太鼓

努力とは別な軌道の絵を描く

吹く風に逆らって立つ若い輩

切り札を研いでいる間に除夜の鐘

南区

中津川久子

同情の顔して裏が透けて見え

ほめられてポケットの拳くしやみする

リタイヤは許さぬ僕の自尊心

東区

堀内まさ江

愚痴一つ吐いて納まる母の胸

正直に生きてあの世は怖くない

ささくれを解かす絆に水温み

東区

松野タダエ

かかりつけいつもひと言灯をともし

辛棒と孤独道連づれ老いの旅路^{たび}

その先に触れないでおく思いやり

北区

山口英男

御仏を拝む両手だ汚さない

いくつもの試練に耐えた笑い雛

ちよつかいを真顔で怒る倦怠期

西区

山田とく子

ペンだこが余生に花を添えている

転がった数だけ丸くなる心

もつともつと聞きたいことがあった母

中区

伊熊靖子

母の手がつい大盛りの食べざかり

小	説	児童文学	評論	随筆	詩	短歌	定型俳句	自由律俳句	川柳

中区
ダイケアで子にたよらずに生きる術^{すべ}
金取ミチ子

理不尽を認知症だと聞き流す

東区
木村民江

這いはいを覚えて地球抱きしめる

黄金田の向こうにいつも亡母の影

中区
倉見藤子

風化した噂の火付け役は誰

虎刈りのまま逃げ出す児夏休み

中区
小島保行

悔いは無いあなたと暮らすワンルーム

いつかきつと花開く種にぎりしめ

東区
小林まさを

節くれた指鍬の柄によく馴染む

三才が過ぎればやはりトンビの児

西区
佐野つとめ

すれ違う夜勤の夫へラブレター

有り余る金是要らぬと見栄を張る

中区
高山紀恵

寒気団一服してはきゅと冷え

同居人と思えば気持ち楽になり

南区
滝田玲子

案山子まで反原発の旗を振る

国訛り手振りも加え笑い合う

北区

老いの身は頑張るよりも長く耐え

角替 昭

中区

萩の寺夫婦に無情の雨が降る

中村 禎次

頭髮は妻の床屋の腕をほめ

信号に急かされ渡る杖の足

中区

大連れて浮名流した影も古い

手塚 美誉

中区

「時効」です花火の宵の秘めごとは

のぶ 恵

未使用の掃除グッズに埃付く

「好きです」と言えずに終わる老いの恋

中区

分け合ったパン遺産では縫れ込む

戸塚 忠道

中区

ハレの日に気取らぬ妻の里ことば

馬淵 征稍

缶蹴りの鬼が探しているお下げ

ゴミ出しも慣れて迎える金婚日

東区

悩みなどないふりをして輪に入り

長浜 フミ子

東区

水打って新たな風を呼び起す

宮澤 秀子

種をまき観察日記つける朝

言いすぎて纏れた糸がほどけない

人生の山越えて来し春きたり
中区 宮地 政子

夜空見る我が孤独にて月よせる

無人駅午後のひととき腰おろし
南区 赤堀 進

柿の木に名もなき鳥が食べに来る
西区 ア ト ム

親切が過ぎて相手を傷つける
東区 村松津也子

神域の裏にちゃっかり彼岸花
東区 飯田 裕子

クラス会あの日に戻り語り合う

田の中に^{はや}り流行服着たアンパンマン
中区 伊熊 保子

無駄骨じゃなかった変わりゆく潮目
東区 守屋 三千夫

肩の荷をそつと下ろして去る山案子
浜北区 岩城 悦子

幸運をつかみ取るにも上手下手

鉛勸め夫の小言黙らせる
南区 太田 静子

詳細はホームページと素っ気無い
中区 山下 宏

嫁が呉れた鏡の中で紅を引く
天竜区 太田 初恵

ストレスは自分ばかりを攻めてくる

豆腐屋のラッパ響いて時を知る
中区 岡本 蓉子

汗流し夜の眠りを引き寄せる

東区

小野 和

頭の中の迷路辿って探し物

中区

寺田 久子

人生も寄り道すれば味が出る

中区

斉藤 三重子

捨ててみる過去とおさらば新世界

中区

鴫 多 健

立ち話買い物帰り未だつづく

南区

白井 忠宏

バイキング二人そろって体重計

中区

戸田 田鶴子

立ち話聞き役のまま日が暮れる

中区

高橋 絃一

毎日が日曜今日は花吹雪

中区

戸田 幸良

おぶう子に背中蹴られる心地よさ

西区

高柳 龍夫

年金が旅行と趣味に仕分けられ

北区

豊田 由美子

漬け物に笑顔のふたり小さな幸

浜北区

竹内 オリエ

ひざ痛を言い訳にしてずるをきめ

東区

内藤 雅子

耳遠い母との会話けんかごし

西区

竹川 美智子

宝くじ当たる初夢期待する

南区

永井 真澄

文箱の底に見つけたラブレター

西区

竹平 和枝

原発の人身御供はお断り

中区

仲川 昌一

川柳選評

今田久帆

今年には昨年より応募者が三名減り、八〇名の三八五句の中から私の心を捉えた二〇句を予選句として候補に挙げ、熟考した上で、四句を市民文芸賞とさせていただきました。

川柳は五七五の十七音字に削ることにより、もっと広い世界を呈示する短詩文芸です。同じことの反復を避け、省略することにより、もっと広い世界が浮かび上ってきます。ただ省略し過ぎると他の人には思いが伝わらないひとりよがりの句になってしまいます。句を作っている時は、その世界に入り込んでいるので、当然わかつていいるだろうと思うことも、後で読み返してみると何を言っているのかわからないこともありますので、句を寝かせておいて推敲すると句が落ち着いてきます。

また、現実を詠むだけでは報告の句になってしまいますので、その情景に自分の想いや願いを詠み込むことにより読む者の心に思いが響きます。五七五のリズムや、詩の中に生まれる間が、余韻となって読む者の心を揺さぶり、共鳴していくのです。

予選句

かくれんぼ探し疲れた夢芝居

節くれた指から愚痴は聞こえない

信号に急かされ渡る杖の足

キャベツばりばりあなた好みの蝶になる

マンネリの暮らしさよなら髪を切る

秋晴れの天まで心吸い込まれ

親切が過ぎて相手を傷つける

上司には媚びない平の一本気
節くれた指鉤の柄によく馴染む
缶蹴りの鬼が探しているお下げ
病む父が床で聞いている笛太鼓
愚痴一つ吐いて納まる母の胸
リタイア後頭で指示する妻がいる
少し先歩く姉の背道しるべ
躓いた小石みやげに老いの旅
原発や蟻螂の釜振りおろし

市民文芸賞

◎言い負けてブランコゆらす昼の月

言い負けて、気持ちが悪く落ち着かないのでブランコに乗って、心を癒やしなだめていると、昼間の月が目飛び込み微笑みかけてきた。

◎赤子ひとり大人の大人を振り回す

赤ちゃんは自分では何もできないのに、その無垢で愛らしい姿は大人を放っておかず、赤ちゃんの未来を願う大人たちは、こんな小さな赤ちゃんに振り回されてしまう。

◎点滴を見つめる日々の無菌室

手術後、無菌室に入り、訪れる人も限られ、ただ横になって動くこともままならない生活では、点滴を見つめて命の重みを教えながら日々を送っている。

◎クマ蟬の骸枯葉と共に掃く

クマ蟬の抜け殻が落ち葉と混ざり合って落ちていたので、落ち葉といっしょに掃いて捨ててしまった。ほんの少し前までは、空を羽ばたき、声を出して鳴いていたのに、今は落ち葉と同じように、はかない存在に変わっていたのだ。

浜松市芸術祭

『浜松市民文芸』 第60集作品募集要項

一 趣 旨

市民の文芸活動の向上と普及を図るため、創作された文芸作品（未発表）を募集して、「浜松市民文芸」第60集を編集・発行します。

二 発 行

浜松市

三 編 集

公益財団法人浜松市文化振興財団 浜松文芸館

四 応募資格

浜松市内に在住・在勤・在学されている人（ただし、中学生以下は除く）

五 募集部門及び応募原稿

部 門		枚数等（一人）	部 門		枚数等（一人）
小説（戯曲を含む）		50枚以内（一編）	児童文学		30枚以内（一編）
評論		25枚以内（一編）	随筆		7枚以内（一編）
詩（漢詩を除く）		50行以内（一編）	短歌		5首以内
定型俳句		5句以内	自由律俳句		5句以内
川柳		5句以内			

※ 原稿用紙はB4判四〇〇字詰め、縦書き）を使用してください。

※ ワープロ・パソコン原稿（二〇字×二〇行・縦書き）A4判でも結構です。

六 選 者

七 募集期間

選者の氏名は、平成二十六年七月配布（予定）の「浜松市民文芸」第60集の作品募集要項に記載します。
平成二十六年九月二日（火）から十一月二十日（木）まで。（必着）

八 応募上の注意

- ① 応募作品は、本人の創作で**未発表**のものに限ります。他のコンクール及び同人誌・結社等へ投稿した作品は応募できません。
 - ② 部門ごとに、規定の**応募票(コピー可)**を必ず添付してください。応募票付き募集要項は、浜松文芸館、浜松市文化振興財団、市役所文化政策課、市内の協働センター・図書館等の公共施設で入手できます。浜松文芸館ホームページからも印刷できます。
 - ③ 応募原稿の書き方については、募集要項の「**応募原稿の書き方**」をご覧ください。
 - ④ 応募時に、選考結果通知のための**返信用の定形封筒に自分の住所・氏名を書き、80円切手を貼って**、作品に添えて出してください。
 - ⑤ 難読の語、特殊な語、地名・人名などの固有名詞、歴史的な事柄などにはふりがなを付けてください。
 - ⑥ 応募原稿は必ず**清書したもの**を提出してください。
 - ⑦ 作品掲載にあたって、清書原稿を活字にします。文字遣い・句読点・ルビ・符号など表記に関わることについては、「**浜松市民文芸**」として一部統一させていただくことがあります。
 - ⑧ 右記の規定や注意に反する作品・判読しにくい作品は、失格になることがあります。
 - ⑨ 応募原稿は、返却いたしません。(必要な方は事前にコピーをおとり願います)
- 選考結果は、応募時に提出された返信用封筒で平成二十七年二月初旬までにお知らせします。
- 市民文芸賞及び入選の作品は、平成二十七年三月発行予定の第60集に掲載いたします。
- 市民文芸賞の方には、平成二十七年三月の表彰式で賞状と記念品を贈ります。
- 市民文芸賞及び入選の方には、「**浜松市民文芸**」第60集を一部贈呈いたします。
- 購入される場合は、一部五〇〇円です。

九 発表

十 表彰

十一 その他

〈提出及びお問い合わせ先〉

浜松文芸館

〒433-1801 四 浜松市中区鹿谷町1-1

電話 〇五三一四七一五二二

ファックス 〇五三一四七一五二二

「浜松市民文芸」第60集応募票

(短歌・定型俳句の場合は、部門欄の《旧かな・新かな》のいずれかに◎を)

部門		小説・児童文学・評論・随筆・詩・短歌・定型俳句《旧かな・新かな》・自由律俳句・川柳 (部門に1箇所○をお付けください)		小説・児童文学・評論・随筆・詩を投稿される方は記入してください 題名は、原稿用紙1枚目の右欄外にも、同じように記入してください		原稿枚数 (ページ数) 枚	
ふりがな							
氏名				年齢		歳	
ふりがな				(平成26年11月20日現在)		男・女	
発表名 ペンネーム				名称 所在地			
住所		〒				電話番号	

文芸館使用欄	受付月日	受付番号	

編集後記

寒風の中にも少しずつ春の陽射しを感じられるこの時季、今年も多くの方々の熱意に支えられ、「浜松市民文芸」第五十九集が発刊の運びに至りましたことを、先ずもってお礼申し上げます。

第五十九集に投稿いただいた作品総数は、二、四一一点、投稿者数は延べ五六六人でした。全体的には、投稿者数・作品数ともに昨年を若干下回る数字でしたが、長年投稿を続けて下さっている方も数多く見られ、うれしく思います。併せて、新たに投稿してくださる方々の拡大に努める必要性を感じております。その一段として、数年前からインターネットで要項や応募票を取り出せるようにして、簡便化を図っておりますが、徐々に周知されてきたように思われます。浜松文芸の未来を拓くためにも、今後一層、若い年齢層を中心に応募者が増えるよう努力して参りたいと考えます。

さて、作品数は若干減少しましたが、その質においては、今年もまた読み応えのある作品が揃ったように思います。自分の思い（感情・思考・思想）を頭の中で巡らすだけでなく容易なことですが、それを文章化するとなるとかなりの労力を要するものです。その意味でも、投稿された皆様に敬意を表します。

今年は編集が大詰めを迎えた頃、ソチ五輪も佳境に入っ

た時期でした。五輪には様々な種目があり、その種目ごとにルールがあります。一定のルールの下で、持ち得る力の全てを出し切って自分を表現するという点では、文芸の創作活動とも相通するものがあるのではないのでしょうか。

今後ともこの「浜松市民文芸」が、市民の皆様、自己表現する場として活用されることを願っております。

最後に、「浜松市民文芸」の発行にあたりまして、投稿者・選者・関係機関の皆様方の御理解、御協力に厚くお礼申し上げます。

浜松文芸館 館長 増渕邦夫

浜松市民文芸 第59集

平成二十六年三月十五日 発行

発行 浜松市
編集 浜松市文化振興財団
浜松文芸館

〒432-1801-14

浜松市中区鹿谷町一―一二
☎〇五三一四七一五二二―

印刷 杉森印刷株式会社



アクトシティ浜松友の会

vivace club

アクトシティ浜松友の会「ビバーチェクラブ」
芸術をもっと身近に

会 員
募集中!!

アクトシティ浜松を中心に繰り広げられる芸術を皆さまにより身近なものとしていただけるよう発足したのが、アクトシティ浜松友の会「ビバーチェクラブ」です。

会員だけのうれしい特典がいっぱい!

世界中から集まる一流のアーティスト、エンターテナーが創り出す感動のステージをお楽しみください。



様々な公演のチケットが24時間オンラインで購入できます。

HCFオンラインショップ

<http://www.hcf.or.jp/>

= システム手数料 0 円 =

= 発券手数料 0 円 =

◎クレジット決済／送料 315 円

◎代金引換／送料 315 円＋代引手数料 315 円

◎直接、アクトシティチケットセンター窓口での購入（現金のみ）もできます。

チケットの委託販売も受付中。

お問い合わせ



公益財団法人

浜松市文化振興財団
Hamamatsu Cultural Foundation

■アクトシティ浜松友の会

電話 053-451-1115 ✉ vivace@actcity.jp まで

■HCFオンラインショップ

電話 053-451-1131 ✉ web@hcf.or.jp まで